

第Ⅲ部 2018-2019年度における各教員の活動

01 言語学

教授 西村 義樹 NISHIMURA, Yoshiki

1. 略歴

1984年3月	東京大学文学部英語英文学専修課程卒業
1984年4月	東京大学大学院人文科学研究科英語英文学専攻修士課程入学
1987年3月	東京大学大学院人文科学研究科英語英文学専攻修士課程修了
1987年4月	東京大学大学院人文科学研究科英語英文学専攻博士課程進学
1989年3月	東京大学大学院人文科学研究科英語英文学専攻博士課程退学
1989年4月	実践女子大学文学部英文学科専任講師
1992年4月	東京大学教養学部助教授
1993年4月	東京大学大学院総合文化研究科専攻助教授
2004年4月	東京大学人文社会系研究科助教授 併任
2004年9月	東京大学人文社会系研究科助教授
2007年4月	東京大学人文社会系研究科准教授
2012年4月	東京大学人文社会系研究科教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

言語学、意味論、認知文法

b 研究課題

文法の意味的基盤

認知文法の観点からさまざまな文法現象の意味的な基盤を明らかにすることを目標として研究を進めてきた。これまで分析の対象にしてきた主な現象は、日英語の使役構文、項構造の交替、文法関係などである。近年は認知言語学の分野でその遍在性、重要性が新たに注目されている換喩 (metonymy) の本質を解明し、それに基づいて従来別々に扱われてきた多くの文法現象を統一的に把握し直すことを目指している。

c 概要と自己評価

2010年から言語に関心をもつ哲学者と議論を重ね、文法の意味的基盤について考察を深めることができ、その成果を下記のような形で発表することができた。

d 主要業績

(1) 著書

編著、西村義樹、『認知文法論 I』、大修館書店、2018.4

編著、住吉誠・鈴木亨・西村義樹、『慣用表現・変則的表現から見える英語の姿』、開拓社、2019.9

編著、森雄一・西村義樹・長谷川明香（編）、『認知言語学を拓く』、くろしお出版、2019.11

編著、森雄一・西村義樹・長谷川明香（編）、『認知言語学を紡ぐ』、くろしお出版、2019.11

(2) 論文

西村義樹、「認知言語学の文法研究」、『認知文法論 I』(大修館書店)、pp. 3-23、2018.4

西村義樹、「文法の中の換喩」、『認知文法論 I』(大修館書店)、pp. 89-116、2018.4

西村義樹・長谷川明香、「認知言語学のどこが「認知的」なのだろうか?」、『認知言語学とは何か?』くろしお出版、pp. 1-20、2018.6

西村義樹、「使用基盤モデルから見た make/let 使役構文」、『慣用表現・変則的表現から見える英語の姿』、pp. 108-125、2019

住吉誠・鈴木亨・西村義樹、「慣用表現・変則的表現はどう考察されてきたか」、『慣用表現・変則的表現から見える英語の姿』、pp. 1-16、2019.9

長谷川明香・西村義樹、「再帰と受身の有標性」、森雄一・西村義樹・長谷川明香（編）『認知言語学を紡ぐ』くろしお出版、pp. 275-298、2019.11

- (3) 書評
 (古賀裕章氏との共著) 小柳智一、『文法変化の研究』、くろしお出版、『國學院雑誌』、第120巻 第3号、55-58頁、2019.3
- (4) 学会発表
 国内、西村義樹、「認知言語学Ⅰ：Langackerを読む」、東京言語研究所理春期講座、2018.4.15
 国内、西村義樹、「日本のヴォイス研究の80年：成果と展望」、日本言語学会第156回大会、東京大学（本郷キャンパス）伊藤謝恩ホール、2018.6.24
 国内、西村義樹、「ヴォイスと参与者役割を考える」、認知言語科学研究会、東京大学（本郷キャンパス）文学部2番大教室、2018.6.30
 国内、西村義樹、「文法と意味」、東京言語研究所春期講座、2019.4.20
 国内、西村義樹、「認知文法から見た日本語の受身」、文法学会 第8回集中講義、東京大学本郷キャンパス、一番大教室、2019.9.22
 国内、西村義樹、「言語学とはどういう分野か：認知言語学と生成文法の比較を通して」、言語学の教室：ろう者と学ぶ言語学の初歩、東京大学本郷キャンパス、文学部3号館、2019.11.4
- (5) 啓蒙
 西村義樹、「日常的に用いる言語表現に広く見られる「換喩」とは?」、『「夢ナビ」講義』、2019.1
 西村義樹、「「オレンジ色の猫」から言語の多様性と普遍性が見えてくる!?!」、『「夢ナビ」講義』、2019.1
 西村義樹、「サインとシンボル他」、『Top Grade 特別講座』、2019.5
- (6) 芸術・作品
 対談、西村義樹＋柴田元幸、「ホームズの言葉——「もの」が解読可能な世界」、柴田元幸責任編集 MONKEY vol.20 特集 探偵の一ダース、2020.2

3. 主な社会活動

- (1) 他機関での講義等
 特別講演、目白大学大学院言語文化研究科、「文法と意味：認知文法の視点」、2018.7
 その他、株式会社フロムページ、「文法に意味はあるのか?：認知文法の視点」、2019.7
 その他、株式会社フロムページ、「文法に意味はあるのか?：認知文法の視点」、2019.10
 特別講演、河合塾、「文法に意味はあるのか?：認知文法の考え方」、2019.11
- (2) 学会
 国内、日本エドワード・サピア協会、編集委員長、2018.11～

准教授 **小林 正人** KOBAYASHI, Masato

1. 略歴

- 1992年 3月 京都大学文学部文学科卒業（文学士）
 1992年 4月 京都大学大学院文学研究科修士課程梵語学梵文学専攻入学
 1994年 3月 京都大学大学院文学研究科修士課程梵語学梵文学専攻修了（文学修士）
 1994年 4月 京都大学大学院文学研究科博士後期課程梵語学梵文学専攻進学
 2000年 3月 京都大学大学院文学研究科梵語学梵文学専攻博士後期課程中途退学
 1996年 9月 ペンシルバニア大学文理大学院言語学科 Ph.D.課程入学
 2000年 12月 ペンシルバニア大学文理大学院言語学科 Ph.D.課程卒業（Ph.D）
 2000年 4月 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所 COE 非常勤研究員（2001年3月まで）
 2001年 4月 白鷗大学経営学部専任講師（2005年3月まで）
 2005年 4月 白鷗大学経営学部助教授（2007年3月まで）
 2007年 4月 白鷗大学教育学部准教授（2010年3月まで）
 2010年 4月 東京大学大学院人文社会系研究科准教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

歴史言語学、音韻論、インド・アーリア語、ドラヴィダ語、オーストロアジア（ムンダ）語

b 研究課題

インド・アーリア語、とくにサンスクリット文献学と、ドラヴィダ語族、オーストロアジア語族少数民族言語のフィールドワーク・歴史言語学

c 概要と自己評価

インド・アーリア語についてはサンスクリットを中心として他の印欧語族言語と比較し、音韻上の特性を記述した著書を出版し、現在は伝統文法の研究を行っている。ドラヴィダ語族では、北部の2つの少数民族言語について、現地調査を重ねて文法記述を完成させた。オーストロアジア語族では、未記述の言語エルンガ・コルワ語の調査を進めている。

d 主要業績

(1) 著書

単著、Masato Kobayashi、『Historical Phonology of Old Indo-Aryan Consonants』、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所、2004

(2) 論文

Masato Kobayashi, Viewing Proto-Dravidian from the Northeast. *Journal of the American Oriental Society*. 140: 467-481, 2020

Masato Kobayashi and Tetru Oraon, Kurux, *The Dravidian Languages, Second Edition*. London: Routledge, 2020, 469-494

Masato Kobayashi, Adnominal locatives in Classical Armenian and typological harmony. *QAZZU warrai: Anatolian and Indo-European Studies in Honor of Kazuhiko Yoshida*. Ann Arbor and New York: Beech Stave Press. 177-191. 2019

(3) 学会発表

国内、小林正人、ドラヴィダ語族クルフ語・マルト語の不定詞の史的再建、日本言語学会 159 回大会 (名古屋学院大学). 2019.11.16

国際、Osada, Toshiaki and Masato Kobayashi. 「Grouping of the three minor Kherwarian Munda languages」、8th International Conference on Austroasiatic Linguistics. Chiang Mai. 2019.8

国際、Mohan, Shailendra and Masato Kobayashi. 「Dravidian features in Nihali」40th International Conference of Linguistic Society of India. Mysore, 2018.12

国際、Masato Kobayashi, 「Panini's definition of the bahuvrihi as *śeṣa* 'remainder」、17th World Sanskrit Conference, University of British Columbia, Vancouver, 2018.7.11

3. 主な社会活動

(1) 学会

国内、日本言語学会、常任委員、2012.4～2018.3、編集委員、2018.4～

海外、Dravidian Linguistic Association, Advisory Board, 2017～

(2) 学外組織(学協会、省庁を除く)委員・役員

教育機関、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所、運営委員会委員、2013～、研修専門委員会委員、2016～

1. 略歴

2000年4月	東京大学教養学部文科三類入学
2004年3月	東京大学文学部言語文化学科言語学専修課程卒業
2004年4月	東京大学大学院人文社会系研究科言語学専門分野修士課程入学
2006年3月	東京大学大学院人文社会系研究科言語学専門分野修士課程修了
2006年4月	東京大学大学院人文社会系研究科言語学専門分野博士課程入学
2006年4月	日本学術振興会特別研究員 DC1 (東京大学大学院) (～2006年8月)
2006年8月	アメリカ合衆国ライス大学 (Rice University) 言語学科博士課程入学
2009年9月	東京大学大学院人文社会系研究科言語学専門分野博士課程退学
2011年9月	国立国語研究所言語対照研究系 PD フェロー (～2012年3月)
2011年12月	アメリカ合衆国ライス大学 (Rice University) 言語学科博士課程修了 (Ph.D)
2012年4月	日本学術振興会特別研究員 SPD (国立国語研究所) (～2013年3月)
2013年4月	東京外国語大学総合国際学研究院 専任講師
2018年4月	東京外国語大学総合国際学研究院 准教授
2019年4月	東京大学大学院人文社会系研究科 准教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

言語学、言語類型論、フィールド言語学

b 研究課題

オーストロネシア諸語、特に、フィリピン・インドネシアで話される諸言語を中心に、言語類型論の観点から、その文法構造について研究している。具体的には、タガログ語とラマホロット語 (東インドネシア、フローレス島) について、その文法関係やヴォイス現象、情報構造、空間表現を研究し、言語類型論についての貢献を目指している。言語調査においては、フィールドワーク・実験を重視し、実際の談話や会話を撮影・録音することで、経験的事実に基づく記述・一般化を試みている。

c 概要と自己評価

言語調査にもとづく一次的データを用いてタガログ語の情報構造ならびに意図性にかかわる現象について論文を発表した。さらに、名詞修飾表現や dyad、移動表現についても国際学会で発表を行い、研究を進めている。

d 主要業績

(1) 論文

Naonori Nagaya & Hyun Kyung Hwang. 2018. Focus and prosody in Tagalog. In Sonja Riesberg, Asako Shiohara & Atsuko Utsumi (eds.), *Perspectives on information structure in Austronesian languages*, 375–388. Berlin: Language Science Press

Nagaya, Naonori. 2019. The thematic/categorical distinction in Tagalog revisited: A contrastive perspective. *Gengo Kenkyu* 156: 47–66

長屋尚典、2019、「意図と知識—タガログ語の ma-動詞の分析—」、森雄一、西村義樹、長谷川明香 (編) 『認知言語学を拓く』、23-43、東京: くろしお出版

長屋尚典、2020、「ラマホロット語の方向詞と空間参照性」、文化交流研究: 東京大学文学部次世代人文学開発センター研究紀要 33、31-41

(2) 解説

長屋尚典、2019、「フィリピン語・タガログ語」、信田敏宏 (編) 『東南アジア文化事典』、192-195、東京: 丸善出版

長屋尚典、2019、「言語研究の新しい視点」 窪園晴夫 (編著) 『よくわかる言語学』、10-11、京都: ミネルヴァ書房

長屋尚典、2019、「言語類型論」 窪園晴夫 (編著) 『よくわかる言語学』、182-191、京都: ミネルヴァ書房

(3) 学会発表

Nagaya, Naonori. Sentence-final particle e in Tagalog. Southeast Asian Linguistics Society 28, Wenzao Ursuline University of Languages, Kaohsiung, Taiwan, May 17-19, 2018

長屋尚典、コメンテーター、80周年記念シンポジウム「日本のヴォイス研究の80年: 成果と展望」、日本言語学会第156回大会、東京大学、東京、2018.6.24

Nagaya, Naonori. Nominalization in Tagalog conversation. 13th Philippine Linguistics Congress, National Institute for Science and Mathematics Education Development, University of the Philippines, Diliman, November 14-16, 2018

長屋尚典、「タガログ語移動表現の経路表示」、日本言語学会第157回大会、京都大学、京都、2018.11.17-18

Nagaya, Naonori. Motion event descriptions in Tagalog, Motion Event Descriptions across Languages (MEDAL). National Institute for Japanese Language and Linguistics, Tachikawa, Tokyo, January 26-27, 2019

長屋尚典、天野友亜、榎本恵実、大久保圭夏、鈴木唯、高橋梓、高橋舜、田中克典、谷川みづき、福原百那、山田あかり、「経路の種類と経路表示 —東京外国語大学における通言語的実験の成果—」、Prosody & Grammar Festa 3、国立国語研究所、東京、2019.2.16-17

Matsumoto, Yo, Anna Bordilovskaya, Kiyoko Eguchi, Kazuhiro Kawachi, Miho Mano, Takahiro Morita, Naonori Nagaya, Kiyoko Takahashi, and Yuko Yoshinari. A crosslinguistic experimental study of fourteen different Paths: Toward a scale-based typology of motion-event descriptions. Presented at the 13th conference of the Association for Linguistic Typology, University of Pavia, Italy, September 4-6, 2019

Nagaya, Naonori. Relativization in Tagalog conversation: A typological perspective. Presented at the 13th conference of the Association for Linguistic Typology, University of Pavia, Italy, 4-6 September 4-6, 2019

長屋尚典、「言語類型論からみた受身とその周辺」、文法学研究会 第8回集中講義「受身とその周辺 —日本語の受身は特殊か—」、東京大学、東京、2019.9.21-22

Nagaya, Naonori. Reciprocity in Tagalog dyad constructions. Workshop on Cross-Linguistic Semantics of Reciprocals. Utrecht University, Utrecht, Netherlands, October 7-8, 2019

Hwang, Hyun Kyung, Julian Villegas, Naonori Nagaya. Cue weighting in the perception of Tagalog stress. Presented at the 178th Meeting of the Acoustical Society of America, San Diego, California, December 2-6, 2019

長屋尚典、内原洋人、「タガログ語の言葉遊びと音韻論」、第17回文法研究ワークショップ:「言葉遊びと音韻論(2)」、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所、東京、2020.1.24

松本曜、吉成祐子、長屋尚典、鈴木唯、高橋舜、谷川みづき、「複数局面経路の言語表示類型：日本語と他言語の比較から」Prosody & Grammar Festa 4、神戸大学、神戸、2020.2.15-16

(4) 啓蒙

長屋尚典、2018、「日本語学会と私」、日本語学会(編)『日本語学会80年の歩み』、12-14、日本語学会

長屋尚典、2020、「はやりことばの文法」、『FIELDPLUS』23、16-17、東京: 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所

(5) 会議主催

The 29th meeting of Southeast Asian Linguistics Society (SEALS29), 2019.5.27-29

長屋尚典、「構文形態論の新地平: 複合語・繰り返し・「語」の境界」、ワークショップ企画、日本語学会第159回大会、名古屋学院大学、名古屋、2019.11.17

(6) 共同研究

大学共同利用機関法人・人間文化研究機構・国立国語研究所 機関拠点型基幹研究プロジェクト「対照言語学の観点から見た日本語の音声と文法」(プロジェクトリーダー: 窪田晴夫国立国語研究所教授)

東京外国語大学共同利用・共同研究拠点アジア・アフリカ言語文化研究所 共同利用・共同研究課題「マレー語方言の変異の研究」(代表: 内海敦子明星大学准教授)

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

東京言語研究所・2018年度理論言語学講座・春期講座「フィールド言語学: 右も左もない言語と言語相対論の現在」

東京言語研究所・2018年度理論言語学講座「フィールド言語学」

東京言語研究所・2019年度理論言語学講座・春期講座「歴史言語学入門の入門」

東京言語研究所・2019年度理論言語学講座「歴史言語学入門」

(2) 学会

日本語学会、評議員

日本語学会、夏期講座2018 実行委員

SEALS29 Organizing Committee

SEALS Executive Committee

02 考古学

教授 佐藤 宏之 SATOU, Hiroyuki

1. 略歴

1982年3月	東京大学文学部考古学専修課程卒業
1982年4月	財団法人東京都埋蔵文化財センター調査員
1988年4月	法政大学大学院人文科学研究科日本史学専攻修士課程入学
1991年3月	法政大学大学院人文科学研究科日本史学専攻修士課程修了
1991年4月	法政大学大学院人文科学研究科日本史学専攻博士後期課程入学
1994年3月	法政大学大学院人文科学研究科日本史学専攻博士後期課程修了、博士(文学)取得
1994年4月	財団法人東京都埋蔵文化財センター副主任調査研究員
1997年4月	東京大学大学院人文社会系研究科助教授
1997年5月	東京大学文学部附属北海文化研究常呂実習施設助教授
1999年4月	東京大学大学院新領域創成科学研究科助教授
2003年4月	東京大学大学院人文社会系研究科助教授 (新領域創成科学研究科助教授併任、2004年3月まで)
2007年4月	東京大学大学院人文社会系研究科教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

先史考古学、民族考古学、人類環境史

b 研究課題

- (1) 日本列島および東アジアの旧石器時代における石器技術論、行動論、遺跡形成論、石材論的研究。
- (2) 生業・居住形態等に関する民族考古学的研究。
- (3) 民俗知の環境論的研究。

c 概要と自己評価

上記の研究課題(1)では、科研費基盤研究 (B)「現生人類の出現と拡散に果たしたアジア南回りルートの意義に関する考古学的研究」(15～18年度)プロジェクトを実施し、さらに同課題を発展させた科研費基盤研究 (B)「現生人類ホモ・サピエンスのアジア早期拡散プロセスに関する考古学的研究」(19年度～)プロジェクトを実施している。関連して、主宰した国際シンポジウム (11.6) の研究成果を『Quaternary International』535号に特集としてまとめた。さらにこれまでの研究成果を取りまとめた単著『旧石器時代: 日本文化のはじまり』を上梓した。また科研費国際共同研究強化

(B)「カザフスタンにおける現生人類北回り拡散ルートの解明に関する国際共同研究の基盤強化」(2018～)および科研費基盤研究 (B)「中央アジア 天山-パミール地域における後期旧石器文化成立過程の研究」(2019～)プロジェクトに分担者として参画し、中央アジアにおける現生人類拡散プロセスの研究を開始した。

研究課題(2)および(3)については、科研費基盤研究 (A)「ホモ・サピエンス躍進の初源史: 東アジアにおける海洋進出のはじまりを探る総合的研究」(2018～)プロジェクトに分担者として参画し、東北日本における現代の丸木舟漁労の調査を行っている。いずれも当初の研究計画をおおむね遂行できたと考えている。

上記研究課題とは別に、科研費基盤研究 (B) (海外学術)「先住民考古遺産の管理・保管・所有権に関する国際比較研究」プロジェクト (17～19年度) に研究分担者として参加し、オーストラリア・イギリスにおける現状調査を行った。

また放送大学の授業科目『考古学』の分担講師として、2回の授業を担当した。

d 主要業績

(1) 著書

- 共著、佐藤宏之、『考古学』(早乙女雅博・設楽博己編)、執筆分担:「第6章 自然科学とのかかわり」、109-126頁、
「第7章 狩猟採集民の生活技術」、127-142頁、放送大学教育振興会、2018.3
単著、佐藤宏之、『旧石器時代: 日本文化のはじまり』ヒスカルセレクション考古1、敬文舎、2019.12

編著、Izuho, M., Morisaki, K., and Sato, H., Guest Editorial: Recent progress of the Paleolithic research in Asia: Cultural diversities and paleoenvironmental changes, 『Quaternary International』 535、1-2 頁、2020.2

(2) 論文

Natsuki, D. and Sato, H., 「Different special activity in the Late Glacial microblade site: a case study based on the Yoshiizawa site of northern Japan」, 『Proceedings of the 23rd Suyanggae International Symposium in Malaysia “Suyanggae and Lenggong: Prehistory Adaptation”』、34-42 頁、2018.7

Sato, H., 「Three Paleolithic cultures in the Japanese Archipelago」, 『Proceedings of the 23rd Suyanggae International Symposium in Malaysia “Suyanggae and Lenggong: Prehistory Adaptation”』、23-33 頁、2018.7

佐藤宏之、「神子柴遺跡はなぜ残されたか?」、『シンポジウム神子柴系石器群: その存在と影響』、5-8 頁、2018.9

佐藤宏之、「旧石器時代における境界と地域性の形成」、『日本考古学協会 2018 年度静岡大会研究発表資料集』、3-12 頁、2018.10

佐藤宏之、「日本列島からみた朝鮮半島湖南地域の旧石器文化」、『湖南地域における旧石器研究の現状と成果』、第 18 回韓国旧石器学会定期学術大会発表要旨集、7-28 頁、2018.10

佐藤宏之、「現生人類のアジア拡散研究から見たスヤング遺跡第 6 地点第 3・4 文化層石器群の位置付けについて」、『丹陽垂楊介旧石器遺跡 (I・VI地区) —自然科学分析—』、213-232 頁、2018.10

Sato, H., 「Pleistocene burials and cemetery: new discovery at the Shiraho-saonetabaru Cave Site, Ishigaki Island in the southmost Japan」, 『Decades in Deserts: Essays on Near Western Archaeology in Honor of Sumio Fujii』、2019.2

佐藤宏之、「北海道の旧石器文化」、『札幌学院大学総合研究所 Booklet』、11、3-24 頁、2019.2

佐藤宏之、「森吉山とマタギの秋」、『山と溪谷』、2019 年 10 月号、61 頁、2019.10

Morisaki, K., Oda, N., Kunikita, D., Sasaki, Y., Kuronuma, Y., Iwase, A., Yamazaki, T., Ichida, N., Sato, H., 「Sedentism, pottery and inland fishing in Late Glacial Japan: a reassessment of the Maedakouchi site」, 『Antiquity』、93(372)、1442-1459 頁、2019.11

佐藤宏之、「鈴木遺跡の黒曜石産地同定分析にみる人類の行動戦略の変化」、『鈴木遺跡発掘調査総括報告書』、165-174 頁、2020.2

根岸洋・池谷信之・佐藤宏之、「上北・八戸地域から出土した縄文早期の黒曜石製石器群の産地推定と考察」、『東京大学考古学研究室紀要』、33、23-35 頁、2020.3

(3) 書評

東北日本の旧石器文化を語る会編、『東北日本の旧石器時代』、六一書房ウェブサイト『書評』欄、2018.9

(4) 学会発表

国内、佐藤宏之、「セッション: 文化財保護法改正と遺跡の保存活用 (企画: 佐藤宏之・福永伸哉) (日本学術会議史学委員会文化財の保存と活用分科会との共催) 「討論司会」、第 84 回日本考古学協会総会、明治大学、2018.5.27

国際、Natsuki, D. and Sato, H., 「Different spatial activity in the Late Glacial microblade site: a case study based on the Yoshiizawa site of northern Japan」, The 23rd Suyanggae International Symposium in Malaysia, “Suyanggae and Lenggong: Prehistory Adaptation”, Flamingo Hotel, Penang, Malaysia、2018.7.2

国際、Sato, H., 「Three Paleolithic cultures in the Japanese Archipelago」, The 23rd Suyanggae International Symposium in Malaysia, “Suyanggae and Lenggong: Prehistory Adaptation”, Flamingo Hotel, Penang, Malaysia、2018.7.2

国際、Sato, H., 「New discovery of Pleistocene cemetery at the Shiraho-Saonetabaru Cave Site in Japan」, The 9th Meeting of the Asian Paleolithic Association, Denisova Cave Field Research Center, Altai, Russia、2018.8.1

国際、Vasilevsky, A.A., Grishenko, V.A., Sato, H., Fukuda, M., 「The stages of settlement of islands of the Far-Eastern seas」, International Conference “Historical and recent developments of Russian-Japanese relations. Celebrating 160 years of consular relations”, ロシア極東連邦大学、2018.9.10

国内、佐藤宏之、「神子柴遺跡はなぜ残されたか?」、神子柴遺跡発掘 60 周年記念シンポジウム『神子柴系石器群 その存在と影響』、伊那市創造館、2018.9.30

国内、佐藤宏之、「旧石器時代における境界と地域性の形成」、日本考古学協会 2018 年度大会、静岡大学、2018.10.20

国際、佐藤宏之、「日本列島からみた朝鮮半島湖南地域の旧石器文化」、韓国旧石器学会定期学術大会、朝鮮大学校、2018.10.27

国内、佐藤宏之、「北海道の旧石器文化」、札幌学院大学総合研究所シンポジウム『文化遺産と地域振興』、札幌学院大学、2018.11.10

国内、夏木大吾・太田圭・青木要祐・張恩恵・佐藤宏之・熊木俊朗、「遠軽町タチカルシュナイ遺跡 M-1 地点」、北海道考古学会 2018 年度遺跡調査報告会、北海道大学、2018.12.8

- 国内、夏木大吾・太田圭・西村広経・山田貴博・渡邊怜・佐藤宏之・熊木俊朗、「北見市吉井沢遺跡」、北海道考古学会 2018 年度遺跡調査報告会、北海道大学、2018.12.8
- 国内、加藤博文・佐藤宏之・石田肇・太田好信、「研究倫理検討委員会の進捗と課題」、第 2 回先住民考古学 WG ワークショップ、北海道大学、2019.2.3
- 国内、国武貞克・ベフィート ガリムジャン・佐藤宏之、「ユーラシア旧石器時代における 3 つの文化圏—中期旧石器時代のモヴィウス・ライン再考—」、第 20 回北アジア調査研究報告会、愛媛大学愛大ミュージズ、2019.2.23
- 国内、国武貞克・ベフィート ガリムジャン・佐藤宏之、「カザフスタン南部天山北麓の新発見遺跡クズルアウス 2 遺跡第 1 次発掘調査速報」、第 20 回北アジア調査研究報告会、愛媛大学愛大ミュージズ、2019.2.23
- 国内、夏木大吾・太田圭・西村広経・山田貴博・渡邊怜・佐藤宏之・熊木俊朗、「北海道北見市吉井沢遺跡の調査成果 (第 12 次)」、第 20 回北アジア調査研究報告会、愛媛大学愛大ミュージズ、2019.2.23
- 国際、Tzedanova, N., Onuki, S., Sato, H., Kunikita, D., Natsuki, D., 「Environmental conditions of early ceramics appearance in Late Pleistocene-Holocene (Transbaikalia, South Siberia)」, INQUA-2019, Dublin, 2019.7.31
- 国際、Sato, H., 「Conservation and utilization of Tokoro Site as a cultural heritage in northern Japan」、International Archaeological Conference 2019 “Promoting Archaeology Towards Heritage and Tourism”、Miri, Malaysia, 2019.9.27
- 国内、佐藤宏之、「日本列島先史時代の陥し穴猟」、シンポジウム「Hunting: 狩猟相解明のためのアプローチ」、浅間縄文ミュージアム、2019.11.17
- 国際、Oda, N., and Sato, H., 「A new archaeological evidence of Musashidai site and its implications for the study of the Early Upper Paleolithic in the Japanese Archipelago」、International Symposium on Paleoanthropology in Commemoration of the 90th Anniversary of the Discovery of the First Skullcap of Peking Man、北京、2019.12.4
- 国内、夏木大吾・太田圭・青木要祐・張恩恵・萩野はな・國木田大・福田正宏・佐藤宏之・熊木俊朗、「遠軽町タチカルシュナイ遺跡 M- I 地点」、北海道考古学会 2019 年度遺跡調査報告会、北海道大学、2019.12.14
- 国内、夏木大吾・太田圭・青木要祐・張恩恵・萩野はな・國木田大・福田正宏・佐藤宏之・熊木俊朗、「北海道遠軽町タチカルシュナイ遺跡 M-1 地点 2019 年度調査」、第 33 回東北日本の旧石器文化を語る会、秋田市中央市民サービスセンター、2019.12.22
- 国内、佐藤宏之、「台湾八仙洞遺跡群における更新世石器群の調査」、第 21 回北アジア調査研究報告会、九州大学伊都キャンパス、2020.2.15
- 国内、国武貞克、フジャグリディエフ・トゥーラ、佐藤宏之、「タジキスタン南部ザラフシャン山脈南麓のフッジ遺跡発掘調査速報」、第 21 回北アジア調査研究報告会、九州大学伊都キャンパス、2020.2.15
- 国内、萩野はな・福田正宏・熊木俊朗・齊藤謙一・夏木大吾・張恩恵・西村広経・太田圭・國木田大・佐藤宏之、「北海道宗谷地方における縄文遺跡群の実態調査 (2019 年)」、第 21 回北アジア調査研究報告会、九州大学伊都キャンパス、2020.2.15
- (5) 受賞
- 国際、Sato, H., 12th Suyangae Academic Award, Suyangae International Symposium, 2018.7.1
- (6) 共同研究・受託研究
- 文部科学省科学研究費補助金、基盤研究 (B) (海外学術)、佐藤宏之、分担者 (代表者は東大外)「先住民考古遺産の管理・保管・所有権に関する国際比較研究」、2017~2019
- 文部科学省科学研究費補助金、基盤研究 (A)、佐藤宏之、分担者 (代表者は東大外)、「ホモ・サピエンス躍進の初源史: 東アジアにおける海洋進出のはじまりを探る総合的研究」、2018~
- 文部科学省科学研究費補助金、国際共同研究強化 (B)、佐藤宏之、分担者 (代表者は東大外)、「カザフスタンにおける現生人類北回り拡散ルートの解明に関する国際共同研究の基盤強化」、2018~
- 文部科学省科学研究費補助金、基盤研究 (B)、佐藤宏之、研究代表者、「現生人類ホモ・サピエンスのアジア早期拡散プロセスに関する考古学的研究」、2019~
- 文部科学省科学研究費補助金、基盤研究 (B)、佐藤宏之、分担者 (代表者は東大外)、「中央アジア 天山—パミール地域における後期旧石器文化成立過程の研究」、2019~

3. 主な社会活動

(1) 学外組織(学協会、省庁を除く)委員・役員

- 国内、群馬県みどり市、岩宿文化賞選考委員会、委員、2008.7~
- 国内、東京都小平市、鈴木遺跡発掘調査総括報告作成委員会、座長、2013.7~2020.3
- 国内、沖縄県立埋蔵文化財センター、白保竿根田原洞穴遺跡調査指導委員会、委員、2014.4~2019.3

国内、三菱財団、人文科学部門選考委員会、委員、2014.10～2019.9
国内、北海道北見市、常呂遺跡史跡整備専門委員会、委員長、2015.9～
国内、考古調査士資格認定機構、資格審査委員会、委員長、2016.4～
国内、神奈川県教育委員会、神奈川県文化財保護審議会、会長、2016.4～
国内、千葉県酒々井町、墨古沢南1遺跡調査指導委員会、委員長、2016.6～2019.7
国内、山形県高島町、日向洞窟遺跡範囲確認調査検討委員会、委員長、2016.9～
国内、明治大学黒曜石研究センター、運営委員会、委員、2019.6～
国内、千葉県酒々井町、墨古沢遺跡保存活用計画策定委員会、委員長、2019.11～

(2) 他機関での講義等

放送大学、「考古学」、分担講師、2015.4～
招待講演、佐藤宏之、「Pleistocene to Holocene Archaeology in the Japanese Archipelago」、国立カザフスタン大学歴史学・民族学部、カザフスタン共和国アルマトイ市、2018.4.2
セミナー、佐藤宏之、「北方アジアの旧石器文化: シベリア・モンゴル・中国北部・韓国」、「朝日カルチャーセンター新宿教室」、2018.4.13
セミナー、佐藤宏之、「南方アジアの旧石器文化: 南中国・台湾・東南アジア」、朝日カルチャーセンター新宿教室、2018.6.8
セミナー、佐藤宏之、「ヨーロッパの旧石器文化と日本」、朝日カルチャーセンター新宿教室、2018.6.22
セミナー、佐藤宏之、「ユーラシア東西の旧石器文化」、朝日カルチャーセンター新宿教室、2018.7.13
招待講演、佐藤宏之、「日本列島の旧石器文化」、パロータ大学、2018.7.17
セミナー、佐藤宏之、「ユーラシア東西文化の出現と展開」、朝日カルチャーセンター新宿教室、2018.7.27
セミナー、佐藤宏之、「東は東、西は西: 文化と文明の歴史とは何か」、朝日カルチャーセンター新宿教室、2018.9.14
セミナー、佐藤宏之、「もう二つの日本文化」論と氷期の日本列島、朝日カルチャーセンター新宿教室、2018.10.12
セミナー、佐藤宏之、「北海道と本州の旧石器文化」、朝日カルチャーセンター新宿教室、2018.11.9
セミナー、佐藤宏之、「琉球の旧石器文化と文化の歴史」、朝日カルチャーセンター新宿教室、2018.12.14
セミナー、佐藤宏之、「東アジアと日本の土器文化」、朝日カルチャーセンター新宿教室、2019.1.25
セミナー、佐藤宏之、「晩氷期の中で: 環境変動と人々の適応」、朝日カルチャーセンター新宿教室、2019.2.22
特別講演、佐藤宏之、「男鹿の丸木舟」、「3万年前の航海 徹底再現プロジェクト」研究会「丸木舟について考える」、国立科学博物館、2019.3.13
セミナー、佐藤宏之、「本格的な縄文文化の成立: 縄文早期の文化と生活」、朝日カルチャーセンター新宿教室、2019.3.22
セミナー、佐藤宏之、「環状集落の研究と墨古沢遺跡」、朝日カルチャーセンター新宿教室、2019.4.12
セミナー、佐藤宏之、「日本列島の3つの旧石器文化」、かもん講演会、「かもん」、2019.4.13
セミナー、佐藤宏之、「墨古沢遺跡の環状集落に暮らした人々の生活」、朝日カルチャーセンター新宿教室、2019.5.24
セミナー、佐藤宏之、「環状集落はなぜ作られたか?」、朝日カルチャーセンター新宿教室、2019.6.28
セミナー、佐藤宏之、「古本州島の地域社会(1): 東日本」、朝日カルチャーセンター新宿教室、2019.7.19
セミナー、佐藤宏之、「古本州島の地域社会(2): 西日本」、朝日カルチャーセンター新宿教室、2019.8.30
セミナー、佐藤宏之、「古北海道半島の社会と集団」、朝日カルチャーセンター新宿教室、2019.9.13
特別講演、佐藤宏之、「旧石器時代から縄文時代への移行期はどのような時代か」、令和元年度多摩の歴史講座、多摩信用金庫府中支店、2019.10.11
セミナー、佐藤宏之、「完新世の自然環境と縄文文化の範囲」、朝日カルチャーセンター新宿教室、2019.11.8
特別講演、佐藤宏之、「墨古沢遺跡の環状集落とは何か?」、墨古沢遺跡国指定記念講演会、酒々井町中央公民館、2019.11.16
セミナー、佐藤宏之、「縄文時代の生業: 狩猟・漁撈・採集」、朝日カルチャーセンター新宿教室、2019.11.22
セミナー、佐藤宏之、「資源の開発と流通・交易」、朝日カルチャーセンター新宿教室、2019.12.20
セミナー、佐藤宏之、「人類化に与えた狩猟の意義」、朝日カルチャーセンター新宿教室、2020.1.31
セミナー、佐藤宏之、「狩猟の民族考古学調査1: ロシア極東」、朝日カルチャーセンター新宿教室、2020.2.21
セミナー、佐藤宏之、「狩猟の民族考古学調査2: マタギ」、朝日カルチャーセンター新宿教室、2020.3.27

(3) 学会

国内、法政史学会、評議員、2008.6～
国際、Asia Palaeolithic Association、副会長、2012.7～2018.12

国内、日本考古学協会、理事、2014.5～2018.5
 国内、日本旧石器学会、会長、2014.6～2018.7
 国内、日本学術会議、第23・24期史学委員会、連携会員、2014.10～
 国内、文化庁文化審議会文化財分科会、第三専門調査会、委員、2016.3～
 国内、文化庁文化財部文化財第二課、埋蔵文化財発掘調査体制等の整備充実に関する調査研究委員会、委員、2016.4～
 国内、日本学術振興会、科学研究費委員会、専門委員、2017.12～2018.11
 国際、Suyangae International Symposium Executive Committee、副会長、2018.7～
 国内、日本学術振興会、新学術領域研究「パレオアジア」専門委員会、委員、2018.10～2019.3
 国内、日本学術振興会、新学術領域研究（研究領域提案型）、審査委員、2019.4～2020.3
 国内、日本第四紀学会、名誉会員候補者選考委員会、委員、2018.2～7

教授 **設楽 博己** SHITARA, Hiromi

1. 略歴

1974年3月	群馬県立前橋高等学校卒業
1974年4月	静岡大学人文学部人文学科入学
1978年3月	静岡大学人文学部人文学科卒業
1978年4月	静岡大学人文学部人文学科研究生
1979年3月	静岡大学人文学部人文学科研究生修了
1979年4月	筑波大学大学院歴史人類学研究科文化人類学専攻博士課程入学
1986年3月	筑波大学大学院歴史人類学研究科文化人類学専攻単位取得退学
1986年4月	筑波大学大学院歴史人類学研究科文化人類学専攻研究生
1987年12月	筑波大学大学院歴史人類学研究科文化人類学専攻研究生修了
1988年1月	国立歴史民俗博物館考古研究部助手
1996年4月	国立歴史民俗博物館考古研究部助教授
2004年4月	駒澤大学文学部歴史学科助教授
2006年12月	博士（文学）取得（筑波大学）
2007年4月	駒澤大学文学部歴史学科教授
2010年4月	東京大学大学院人文社会系研究科教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

日本考古学

b 研究課題

- (1) 縄文時代から弥生時代への移行問題の研究
- (2) 縄文・弥生時代の葬墓制の研究
- (3) 縄文・弥生時代の通過儀礼の研究

c 概要と自己評価

上記の(1)に関して、2016年度より科学研究費基盤研究（A）「東日本における食糧生産の開始と展開の研究—レプリカ法を中心として—」のテーマで、植物種子圧痕の研究を基軸に、東日本を中心とした農耕文化複合の形成の特質を東アジア的な視野から分析することを目指した。2018年度は最終年度であり、総括をおこなった。(2)に関して、愛知県田原市保美貝塚の発掘調査を行い、盤状集骨という特異な埋葬を検出し、調査し縄文晩期の葬墓制の特質を明らかにする手掛かりを得たが、その結果をまとめつつある。(3)に関して、2019年度より科学研究費基盤研究（C）「土製耳飾りの集成と分析による縄文時代の社会組織と儀礼へのアプローチ」のテーマで、縄文時代の土製耳飾りから当時の社会にせまる研究を開始した。

d 主要業績

(1) 著書

- 編著、早乙女雅博・設楽博己編著（佐藤宏之・西秋宏秋・藤尾慎一郎と共著）、『新訂 考古学』、一般財団法人放送大学教育振興会、2018.3
- 編著、設楽博己、『農耕文化複合形成の考古学 上―農耕のはじまり―』、雄山閣、2019.5
- 編著、設楽博己、『農耕文化複合形成の考古学 下―農耕がもたらしたもの―』、雄山閣、2019.10
- 単著、設楽博己、『弥生時代 邪馬台国への道 ヒスカルセクション考古3』、敬文舎、2019.12

(2) 論文

- 設楽博己、「年代決定論①―相対年代と編年―」、『新訂 考古学』、43-64 頁、2018.3
- 設楽博己、「考古資料による空間分析」、『新訂 考古学』、86-108 頁、2018.3
- 設楽博己、「精神文化」、『新訂 考古学』、179-198 頁、2018.3
- 設楽博己、「日本の考古学①―旧石器・縄文・弥生時代―」、『新訂 考古学』、199-226 頁、2018.3
- 早乙女雅博・設楽博己、「考古学と文化財の保護」、『新訂 考古学』、281-293 頁、2018.3
- 山城安生・設楽博己、「北谷町平安山原B遺跡出土の大洞系土器」、『古代文化』、第 69 巻第 4 号、565-569 頁、2018.3
- 設楽博己、「南西諸島の大洞系土器とその周辺」、『東京大学考古学研究室紀要』、第 31 号、47-60 頁、2018.3
- 山下優介・太田敬・佐藤由紀男・佐々木由香・那須浩郎・百原新・井上雅孝・笠見智慧・木之内忍・設楽博己、「2017 年度のレプリカ法による種子圧痕の調査」、『SEEDS CONTACT 科学研究費補助金平成 28 年度基盤研究 (A) 課題番号 16H01956「東日本における食糧生産の開始と展開の研究―レプリカ法を中心として―」ニュースレター』、第 5 号、4-9 頁、2018.6
- 設楽博己、「土偶あれこれ」、『群馬県立歴史博物館第 100 回企画展 ハート形土偶大集合!!―縄文のかたち・美、そして岡本太郎―』、群馬県立歴史博物館、106-110 頁、2019
- 設楽博己、「弥生時代の世界観」、『考古学講義 ちくま新書 1406』、123-145 頁、2019.5
- 設楽博己、「序」、『農耕文化複合形成の考古学 上―農耕のはじまり―』、雄山閣、1-31 頁、2019.5
- 設楽博己・守屋亮・佐々木由香・百原新・那須浩郎、「日本列島における穀物栽培の起源を求めて―レプリカ法による期圧痕調査結果報告―（表・図版を含む）」、『農耕文化複合形成の考古学 上―農耕のはじまり―』、雄山閣、191-346 頁、2019.5
- 設楽博己、「はじめに」、『SEEDS CONTACT 科学研究費補助金平成 28 年度基盤研究 (A) 課題番号 16H01965「東日本における食糧生産の開始と展開の研究―レプリカ法を中心として―」ニュースレター』、第 6 号、1-2 頁、2019.5
- 太田圭・笠見智慧・佐藤由紀男・佐藤祐輔・轟直行・佐々木由香・那須浩郎・百原新・山下優介・西村広経・木之内忍・雨宮健祥・田邊えり・設楽博己、「レプリカ法による種子圧痕の調査―3 カ年の調査成果概要報告―」、『農耕文化複合形成の考古学 上―農耕のはじまり―』、第 6 号、7-11 頁、2019.5
- 國木田大・百瀬長秀・米田穰・設楽博己、「土器付着物を用いた縄文時代晩期～弥生時代の食性分析―長野県松本市における事例―」、『農耕文化複合形成の考古学 上―農耕のはじまり―』、第 6 号、37-42 頁、2019.5
- 設楽博己、「弥生時代における人面付土器の分類をめぐって」、『季刊考古学』、別冊 29 泉坂下遺跡と再葬墓研究の最前線、雄山閣、75-82 頁、2019.7
- 設楽博己、「序」、『農耕文化複合形成の考古学 下―農耕がもたらしたもの―』、雄山閣、1-14 頁、2019.10
- 設楽博己・守屋亮・佐々木由香、「総論 縄文時代後期～弥生時代の植物利用と土器組成」、『農耕文化複合形成の考古学 下―農耕がもたらしたもの―』、雄山閣、245-258 頁、2019.10
- 設楽博己、「アヨアヨ考―日本最古の妖怪画の考古学的解釈―」、『古墳と国家形成期の諸問題』、山川出版社、285-290 頁、2019.10

(3) 書評

- 小林青樹、『倭人の祭祀考古学』、塙書房、『季刊考古学』、第 144 号、108 頁、2018.8
- 沖縄考古学会、『南島考古入門』、『季刊考古学』、第 146 号、100 頁、2019.2
- 森岡秀人・公益財団法人古代学協会、『初期農耕活動と近畿の弥生社会』、雄山閣、『季刊考古学』、第 148 号、106 頁、2019.8
- 谷口康浩、『入門 縄文時代の考古学』、『考古学研究』、第 66 巻第 2 号、89-91 頁、2019.9

(4) 予稿・会議録

- 国内会議、設楽博己、「日本列島における戦争のはじまり」、平成 29 年度研究プロジェクト推進経費（戦略的研究推進経費）平和構築プロジェクト第 3 回公開セミナー、琉球大学文総会議室 B、2018.1.26

- 国内会議、設楽博己、「江藤千萬樹の人と学問」、歴史講演会、沼津市明治史料館講座室、2018.2.4
- 国内会議、國木田大・百瀬長秀・米田穰・設楽博己、「長野県松本市弥生時代遺跡の土器付着物にみられる C4 植物の影響」、日本文化財科学会第 35 回大会、奈良、2018.7.8
- 国内会議、設楽博己、「弥生文化地域研究の黎明—江藤千萬樹の人と学問を通じて—」、一般社団法人日本考古学協会 2018 年度大会、静岡大学、2018.11.20
- 『境界の考古学』日本考古学協会 2018 年度静岡大会研究発表資料集、13-20 頁、2018.11
- 国内会議、佐々木由香・國木田大・設楽博己、「炭化種実からみた本州東半部における弥生時代の穀類利用」、『ここまでわかった！ 東日本における農耕文化の展開』JSPS 科研費 16H01956 基盤研究 (A)「東本における食糧生産の開始と展開の研究—レプリカ法を中心として—」&JSPS 科研費 16H03503 基盤研究 (B)「例温帯地域における稲作の歴史的展開」ジョイント科研総括シンポジウム、弘前大学、2018.11.24
- 国内会議、西村広経・山下優介・太田圭・笠見智慧・木之内忍・田邊えり・佐藤由紀男・佐々木由香・那須浩郎・百原新・設楽博己、「レプリカ法からみた東北地方北部における弥生時代前期から中期初頭の穀類利用」、JSPS 科研費 16H01956 基盤研究 (A)「東本における食糧生産の開始と展開の研究—レプリカ法を中心として—」&JSPS 科研費 16H03503 基盤研究 (B)「例温帯地域における稲作の歴史的展開」ジョイント科研総括シンポジウム、弘前大学、2018.11.24
- 『ここまでわかった！ 東日本における農耕文化の展開』JSPS 科研費 16H01956 基盤研究 (A)「東本における食糧生産の開始と展開の研究—レプリカ法を中心として—」&JSPS 科研費 16H03503 基盤研究 (B)「例温帯地域における稲作の歴史的展開」ジョイント科研総括シンポジウム要旨集、34-37 頁、2018.11
- 国内会議、國木田大・百瀬長秀・米田穰・設楽博己、「土器付着物を用いた長野県松本市縄文時代晩期～弥生時代中期の食性分析」、JSPS 科研費 16H01956 基盤研究 (A)「東本における食糧生産の開始と展開の研究—レプリカ法を中心として—」&JSPS 科研費 16H03503 基盤研究 (B)「例温帯地域における稲作の歴史的展開」ジョイント科研総括シンポジウム、弘前大学、2018.11.24
- 『ここまでわかった！ 東日本における農耕文化の展開』JSPS 科研費 16H01956 基盤研究 (A)「東本における食糧生産の開始と展開の研究—レプリカ法を中心として—」&JSPS 科研費 16H03503 基盤研究 (B)「例温帯地域における稲作の歴史的展開」ジョイント科研総括シンポジウム要旨集、44-45 頁、2018.11
- 国内会議、國木田大・佐々木由香・設楽博己、「東北北部における弥生時代の穀類利用の年代研究」、2019.6.1
- 国内会議、國木田大・井上雅孝・千葉啓蔵・設楽博己、「土器付着物を用いた古代東北北部の食性分析」、日本文化財科学会第 36 回大会、東京、2019.6.1

(5) 共同研究・受託研究

- 共同研究、設楽博己、国立歴史民俗博物館研究、「考古学・人類学・文化財科学の学際的研究による縄文社会論の再構築」、2018～
- 共同研究、設楽博己、国立歴史民俗博物館共同研究「人骨出土例による縄文社会論の考古学・人類学・年代学的再検討」2017～2018

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

- 朝日カルチャーセンター新宿、「弥生のマツリの実像と変貌」『「纏向学」を考える 弥生の「祭り」から古墳の「祭祀」へ』、2018.10
- 特別講演、放送大学群馬学習センター、「邪馬台国はどこか—考古学からさぐる—放送大学群馬学習センター公開講座「土曜フォーラム」」、2019.1
- セミナー、朝日カルチャーセンター新宿、「干支になったイノシシの考古学」、2019.1
- セミナー、朝日カルチャーセンター横浜、「弥生文化を再考する 農耕の始まりを問う」、2019.2～2019.3
- セミナー、朝日カルチャーセンター横浜、「縄文人と弥生人—顔立ちの違いの謎に迫る—」「受け継がれる縄文文化 (1) —祖先のまつり—」「受け継がれる縄文文化 (2) —土器・土製品・銅鐸—」「分銅形土製品の役割はなにか」「なぜ銅鐸は埋められたのか」「縄文時代は平等社会だったのか」『最新研究・縄文と弥生』、2019.4～2019.9
- セミナー、朝日カルチャーセンター横浜、「考古学が挑む「邪馬台国」10の問い」、2019.4
- セミナー、かもん土曜カレッジ、「「倭国乱」と邪馬台国」、2019.5
- セミナー、明治大学博物館・友の会、「弥生文化を再考する—農耕の始まりを問う—」、2019.8
- 特別講演、群馬県立歴史博物館、「土偶とはなにか 群馬県立歴史博物館第 100 回企画展「ハート形土偶大集合!!—縄文のかたち・美、そして岡本太郎—」連続講演会第 1 回」、2019.9

セミナー、朝日カルチャーセンター横浜、「原の辻遺跡」「板付遺跡」「青谷上寺地遺跡・田和山遺跡」『弥生時代の遺跡 最新の発掘情報とその意義』、2019.10～2019.12

特別講演、北海道立埋蔵文化財センター、「日本原始絵画研究の動向」『平成31年度連続考古学講座・講演会秋季講演会 アートな考古学を知る・学ぶ』、2019.11

特別講演、神奈川県立博物館、「弥生文化三題話―神奈川から中国まで―」『令和元年度かながわの遺跡展 縄文と弥生―時代と文化の転機を生きた人々―』、2019.12

(2) 学外組織(学協会、省庁を除く)委員・役員

独立行政法人、科学研究費委員会専門委員、2018.12～2019.11

任意団体、日本考古学協会機関誌『日本考古学』査読委員、2019.4～

国立歴史民俗博物館：総合展示第1室リニューアル委員会委員、2018.4～

早稲田大学：考古調査士資格認定機構資格審査専門委員会委員、2013.4～

群馬県：群馬県文化財保護審査委員、2018.8～

群馬県：群馬県立歴史博物館第100回企画展展示プロジェクト委員会委員、2019.4～2019.12

千葉市：史跡保存整備委員会加曾利貝塚調査研究会臨時委員、2018.6～

長野県茅野市：尖石縄文文化賞選考委員、2018.7～

准教授 **福田 正宏** FUKUDA, Masahiro

1. 略歴

1997年3月	筑波大学第一学群人文学類考古学・民俗学専攻卒業
1997年4月	筑波大学大学院博士課程歴史・人類学研究科文化人類学専攻入学
2003年3月	筑波大学大学院博士課程歴史・人類学研究科文化人類学専攻単位取得退学
2003年4月	日本学術振興会特別研究員(PD)(東京大学大学院人文社会系研究科)
2006年2月	東京大学大学院人文社会系研究科・博士(文学)授与
2006年4月	東京大学大学院人文社会系研究科助手(～2007年3月)
2007年10月	東北芸術工科大学東北文化研究センター博士研究員
2008年4月	東北芸術工科大学芸術学部歴史遺産学科専任講師
2012年4月	東京大学大学院新領域創成科学研究科准教授
2015年4月	東京大学大学院新領域創成科学研究科特任准教授
2015年12月	九州大学大学院人文科学研究院助教
2017年4月	九州大学大学院人文科学研究院准教授
2018年4月	東京大学大学院人文社会系研究科准教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

東北アジア考古学、先史考古学、人類環境適応史

b 研究課題

- (1) 東北アジア新石器時代の環境適応形態に関する構造論的研究
- (2) 日露国境地帯の考古学
- (3) 環日本海北部地域における完新世先史文化変遷の通時的解明

c 概要と自己評価

上記の研究課題(1)・(2)に関連して、2018年度から科研費・基盤研究(B)「東北アジアにおける温帯性新石器文化の北方拡大と適応の限界」(2018～2021年度)プロジェクトを開始した。研究課題(1)では、ロシア国内の教育・研究機関(サハリン国立大学・ハバロフスク地方郷土誌博物館・ハバロフスク地方歴史文化遺産保護センター等)と連携し、アムール流域・サハリン島の新石器時代遺跡群における国際共同発掘調査を実施した。研究課題(2)では、2019年度から稚内市教育委員会・人文社会系研究科附属北海文化研究常呂実習施設・サハリン国立大学考古学教育博物館と連携し、北海道宗谷地方における縄文時代遺跡群の実態調査を開始した。なお、サハリン国立大学との共同研究の成

果に関しては、2018年に第4回東方経済フォーラム（ウラジオストク）のロシア史学会シンポジウム Historical and recent developments of Russian-Japanese relations: Celebrating 160 years of consular relations にて共同発表を行った。研究課題(3)では、土器出現期～中世の環日本海北部地域における通史を叙述すべく、未解明であった完新世初頭（新石器時代前期）と紀元前2千年紀（新石器時代古金属器時代移行期）の中国東北部ーロシア極東ー東シベリアにおける広域編年構築と域外交流メカニズムの解明に取り組んだ。

d 主要業績

(1) 著書

共著、福田正宏、『日本考古学・最前線』（日本考古学協会編）、執筆分担：「北アジア」189-196頁、雄山閣、2018.11

共著、福田正宏、『農耕文化複合形成の考古学 上—農耕のはじまり—』（設楽博己編）、執筆分担：「ポリツェ文化の穀物利用と食生活」、71-90頁、雄山閣、2019.5

共著、福田正宏、『土器のはじまり』市民の考古学16（小林謙一編）、執筆分担：「東北アジアにおける土器のはじまり」、23-47頁、同成社、2019.6

共著、福田正宏、『世界と日本の考古学—オリーブの林と赤い大地—』（常木晃先生退職記念論集編集委員会）、執筆分担：「アムール下流域における土器出現期と完新世初頭の適応形態」、187-201頁、六一書房、2020.3

(2) 論文

Габрильчук, М.А., Фукуда, М., Горшков, М.В., 「Исследования поселения и могильника на острове Змеином в 2016 году.», 『Мультидисциплинарные исследования в археологии.』、2018-1、107-113頁、2018.11

福田正宏、「日露の考古学について思うこと」、『文化交流研究』、32、17-23頁、2019.3

Masahiro Fukuda, 「Neolithic settlement and pottery in East Asia's northern environment: From the Russian Far East to the Japanese Archipelago.」, 『Development of Neolithic cultures and diversity of pottery.』、Amsadong Site Research Series, Vol.3.、157-165頁、2019.10

福田正宏、「北方—日本考古学と「北方」—」、『季刊考古学』、150、121-124頁、2020.1

(3) 解説

福田正宏、「デレン満洲仮府はどこにあるのか」、『史学雑誌』、128-1、36-38頁、2019.1

(4) 学会発表

国際、Kunikita, D., Fukuda, M., Gorshkov, M., Gabrilchuk, M., Endo, E., Matsuzaki, H., 「Dating charred remains on pottery and analyzing food habits in the Paleometal period in the Lower Amur basin, Russia.」, 23rd International Radiocarbon Conference 2018, Scandic Lerkendal, Trondheim, Norway, 2018.6.17-22

国際、Fukuda, M., 「Early Holocene human adaptations in the Northern boundary of temperate environment (Russian Far East and Japanese Archipelago).」, 23rd Suyanggae International Symposium in Malaysia for the Memory of Late Chairman Joe-ho Kim "Suyanggae & Lenggong: Prehistory Adaptation", Flamingo Hotel, Penang, Malaysia, 2018.7.2

国内、福田正宏、「東北アジア新石器文化集団の北方拡大と適応の限界」、中央大学人文科学研究 国際シンポジウム『東アジア先史社会の物質文化の拡散と環境変動からみた文化史』、中央大学、2018.7.21

国際、Vasilevskii, A., Grishchenko, V., Sato, H., Fukuda, M., 「The stages of settlement of islands of the Far-Eastern Seas.」, International conference "Historical and recent developments of Russian-Japanese relations: Celebrating 160 years of consular relations", Far Eastern Federal University, Venue of the Eastern Economic Forum, Vladivostok, Russia, 2018.9.10

国内、福田正宏・Gabrilchuk, M.・國木田大・Gorshkov, M.・田尻義了・江田真毅・木山克彦・張恩恵・Malyavin, A.・夏木大吾・足立達朗・太田圭・田邊えり・熊木俊朗、「ロシア・ユダヤ自治州における考古学的調査（2017・2018年度）」、第20回北アジア調査研究報告会、愛媛大学、2019.2.23

国内、福田正宏、「サハリン・アムール流域における東シベリア系遺物について」、ヤクーチヤ考古学の最前線、東京大学、2019.3.21

国際、Fukuda, M., 「Neolithic Adaptation History and Neolithization Process in the Lower Amur: Based on results of our Japan-Russia Joint Researches (2001-).」, International workshop "Investigating Neolithic trajectories in Northeast Asia", Hokkaido University, 2019.11.04

国内、福田正宏・Gabrilchuk, M.・國木田大・Golshchukov, M.・張恩恵、「アムール中流域（松花江河口域）における新石器時代の文化動態—ロシア極東ユダヤ自治州における発掘調査成果にもとづいて—」、2019年度九州史学会大会、九州大学、2019.12.15

国内、萩野はな・福田正宏・熊木俊朗・斉藤謙一・夏木大吾・張恩恵・西村広経・太田圭・國木田大・佐藤宏之「北海道宗谷地方における縄文遺跡群の実態調査（2019年度）」、第21回北アジア調査研究報告会、九州大学、2020.2.15

(5) 予稿・会議録

国際会議、Fukuda, M., 「Early Holocene Human Adaptations in the Northern Boundary of Temperate Environment (Russian Far East and Japanese Archipelago)」, 23rd Suyanggae International Symposium in Malaysia, Flamingo Hotel, Penang, Malaysia, 2018.7

『3rd Suyanggae International Symposium in Malaysia for the Memory of Late Chairman Joe-ho Kim “Suyanggae & Lenggong: Prehistory Adaptation”』, 34-35 頁, 2018.7

国際会議、Fukuda, M., 「Neolithic Settlement and Pottery in East Asian’s Northern Environment: From the Russian Far East to Japanese Archipelago」, International Symposium on Amsa Site, 2018., Seoul Museum of History, Seoul, Korea, 2018.10

『International Symposium on Amsa Site, 2018. “Development of Neolithic Cultures and Diversity of Pottery”』, 83-88 頁, 2018.10

国内会議、福田正宏・Gablirchuk, M.・國木田大・Gorshkov, M.・田尻義了・江田真毅・木山克彦・張恩恵・Malyavin, A.・夏木大吾・足立達朗・太田圭・田邊えり・熊木俊朗、「ロシア・ユダヤ自治州における考古学的調査 (2017・2018 年度)」, 第 20 回北アジア調査研究報告会、愛媛大学、2019.2

『第 20 回北アジア調査研究報告会 発表要旨』, 9-14 頁, 2019.2

国内会議、福田正宏・ガブリルチュク, M.・國木田大・ゴルシュコフ, M.・張恩恵、「アムール中流域 (松花江河口域) における新石器時代の文化動態—ロシア極東ユダヤ自治州における発掘調査成果にもとづいて—」, 2019 年度九州史学会大会、九州大学、2019.12

『2019 年度九州史学会大会シンポジウム・研究発表要旨』, 43 頁, 2019.12

国内会議、萩野はな・福田正宏・熊木俊朗・齊藤謙一・夏木大吾・張恩恵・西村広経・太田圭・國木田大・佐藤宏之、「北海道宗谷地方における縄文遺跡群の実態調査 (2019 年度)」, 第 21 回北アジア調査研究報告会、九州大学、2020.2

『第 21 回北アジア調査研究報告会 発表要旨』, 13-16 頁, 2020.2

(6) 会議主催(チェア他)

国内、「ヤクーチヤ考古学の最前線」、主催、東京大学、2019.3.21

(7) 研究テーマ

文部科学省科学研究費補助金、基盤研究 (B) (一般)、福田正宏、研究代表者、「東北アジアにおける温帯性新石器文化の北方拡大と適応の限界」、2018～

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

非常勤講師、九州大学大学院人文科学府・文学部、2019.12

(2) 学会

国際、Институт истории, археологии и этнографии народов Дальнего Востока ДВО РАН、学術雑誌編集委員、2018.11～

国内、日本シベリア学会、幹事、2019.10～

(3) 学外組織(学協会、省庁を除く)委員・役員

国内、西東京市国史跡下野谷遺跡整備基本計画策定懇談会、委員、2018.7～2019.3

国内、西東京市下野谷遺跡整備指導委員会、委員、2020.3～

03 美術史学

教授 佐藤 康宏 SATO, Yasuhiro

1. 略歴

1978年3月	東京大学文学部美術史学専修課程卒業
1978年4月	東京大学大学院人文科学研究科修士課程（美術史学専攻）入学
1980年3月	東京大学大学院人文科学研究科修士課程（美術史学専攻）修了
1980年4月	東京国立博物館学芸部資料課に勤務（文部技官）
1981年4月	文化庁文化財保護部美術工芸課に出向
1989年10月	同上 絵画部門文化財調査官
1994年10月	東京大学文学部に出向（助教授）
1995年4月	東京大学大学院人文社会系研究科助教授（美術史学）
2000年4月	東京大学大学院人文社会系研究科教授（美術史学）
2020年3月	定年退職

2. 主な研究活動

a 専門分野

日本美術史を専攻する。主たる分野は江戸時代の絵画・版画の歴史。

b 研究課題

室町時代末期から江戸時代初期にかけての風俗画、江戸中期の若冲・蕭白と浮世絵、中後期の南画を主な研究領域としている。近年は平安・鎌倉時代の絵巻や近代の洋画も論文の主題にするなど、論及の対象は拡大し、日本美術史全体を概観するようになった。本来は記号論、社会史、精神分析などの観点を日本絵画の解釈に生かすとともに、作品と文献史料の双方で絵画史研究のための基礎資料を整備することに努めていた。

c 概要と自己評価

伊藤若冲研究に基づくワシントンでのシンポジウム発表（2012年）の英文報告書は、ようやく刊行された。著書のうちの共著がそれに当たる。30年の間に書いた論文、批評、翻訳などを選んだ著書『絵は語り始めるだろうか』も、長らく版元のところで停滞していたが、2018年4月の論文まで加えて刊行することができた。著書『若冲伝』は、若冲に関する最も新しく最も詳しい評伝である。2019年度の芸術選奨文部科学大臣賞（評論等部門）を受賞したのは幸いに思うが、著者としてはむしろ前著の方をより高く評価する。英文の単著は、かつて一般向けに書いた小著の翻訳だが、現在の見解に従い部分的に改訂した。英語読者を若冲、まだ江戸時代中期の文化に案内する役割を果たすことを期待する。もう1冊、18世紀の日本絵画・版画に関する論文をすべて増補改訂した上で論文集に編む計画があり、最終年度には半分ほど作業を進めたが、定年の締切には間に合わせられず続行中である。

ほかに、2018年4月から5月にかけて東京国立博物館で開催された特別展「名作誕生——つながる日本美術」のために、『國華』編集委員としてカタログを分担執筆し、展覧会のさまざまな広報活動をした。

美術史学会事務局長を2019年5月まで務め、常任委員の任期を終えた。

d 主要業績

(1) 著書

共著、Yukio Lippit (ed.), *The Artist in Edo*, Yale University Press, 2018.6

単著、佐藤康宏、『絵は語り始めるだろうか——日本美術史を創る』、羽鳥書店、2018.12

単著、佐藤康宏、『若冲伝』、河出書房新社、2019.2

単著、Yasuhiro Sato, *The World of Ito Jakuchu: Classic Japanese Painter of All Things Great and Small in Nature*, Japan Publishing Industry Foundation for Culture, 2020.3

(2) 論文

佐藤康宏、「つなげて見る——『名作誕生』展案内」、東京国立博物館『名作誕生』（展覧会カタログ）、21-25頁、2018.4

(3) 解説

佐藤康宏、「狩野探幽筆『波濤飛鶴図』など14点」、東京国立博物館『名作誕生』、271-272頁、279頁、284頁、286-288頁、2018.4

佐藤康宏、「池大雅筆密林草堂図」、『國華』、1470号、18-22頁、2018.4

佐藤康宏、「伊藤若冲筆雪柳雄鶏図」、『國華』、1472号、19-23頁、2018.6

(4) 学会発表

国内、佐藤康宏、「知識人の絵画——南画とその享受者」、藝術学関連学会連合第13回公開シンポジウム 藝術と教養、慶應義塾大学日吉キャンパス 来往舎シンポジウムスペース、2018.6.2

国内、佐藤康宏、「美術が捨てられるとき」、シンポジウム「宇佐美圭司《きずな》から出発して」、東京大学安田講堂、2018.9.28

国際、佐藤康宏、「長澤蘆雪における〈反動〉——應擧の氷を破る」、Rethinking the Life and Work of Nagasawa Rosetsu、チューリッヒ大学、2018.10.20

(5) 啓蒙

佐藤康宏、「日本美術史不案内 107 煙が目にしみる」、『UP』、546号、56-57頁、2018.4

佐藤康宏、「日本美術史不案内 108 東大教師が新入生にすすめない本 その二」、『UP』、547号、56-57頁、2018.5

佐藤康宏、「『名作誕生』の誕生」、『國華清話会会報』、31号、7-8頁、2018.5

佐藤康宏、「日本美術史不案内 109 快盗日本美術史」、『UP』、548号、50-51頁、2018.6

佐藤康宏、「日本美術史不案内 110 大雅展雑感」、『UP』、549号、48-49頁、2018.7

佐藤康宏、「日本美術史不案内 111 エトランジェ省」、『UP』、550号、54-55頁、2018.8

佐藤康宏、「日本美術史不案内 112 三つの絞首刑」、『UP』、551号、52-53頁、2018.9

佐藤康宏、「日本美術史不案内 113 最後の誘惑」、『UP』、552号、50-51頁、2018.10

佐藤康宏、「日本美術史不案内 114 剽窃指南」、『UP』、553号、48-49頁、2018.11

佐藤康宏、「日本美術史不案内 115 パリの若冲、チューリッヒの蘆雪」、『UP』、554号、52-53頁、2018.12

佐藤康宏、「私なるものをめぐって」、『華山会報』、41号、1頁、2018.12

佐藤康宏、「日本美術史不案内 116 これは論文集ではない」、『UP』、555号、52-53頁、2019.1

佐藤康宏、「日本美術史不案内 117 中学校の社会科の時間に」、『UP』、556号、40-41頁、2019.2

佐藤康宏、「日本美術史不案内 118 大震災の後で」、『UP』、557号、28-29頁、2019.3

佐藤康宏、「日本美術史不案内 119 Noblesse oblige」、『UP』、558号、60-61頁、2019.4

佐藤康宏、「日本美術史不案内 120 東大教師が新入生にすすめない本 その三」、『UP』、559号、52-53頁、2019.5

佐藤康宏、「日本美術史不案内 121 トナリのビガク」、『UP』、560号、62-63頁、2019.6

佐藤康宏、「日本美術史不案内 122 馬が合わない」、『UP』、561号、50-51頁、2019.7

佐藤康宏、「日本美術史不案内 123 消毒、そして歴史からの引きはがし」、『UP』、562号、50-51頁、2019.8

佐藤康宏、「日本美術史不案内 124 博物館資料論閉講」、『UP』、563号、48-49頁、2019.9

佐藤康宏、「日本美術史不案内 125 不自由、じゅうぶん不自由」、『UP』、564号、54-55頁、2019.10

佐藤康宏、「日本美術史不案内 126 文学部の将来 その一」、『UP』、565号、60-61頁、2019.11

佐藤康宏、「日本美術史不案内 127 文学部の将来 その二」、『UP』、566号、50-51頁、2019.12

佐藤康宏、「日本美術史不案内 128 贖物喪志」、『UP』、567号、46-47頁、2020.1

佐藤康宏、「日本美術史不案内 129 立て看板のある風景」、『UP』、568号、52-53頁、2020.2

佐藤康宏、「日本美術史不案内 130 さらば」、『UP』、569号、12-13頁、2020.3

(6) マスコミ

「傑作は継承され変奏される」、『サライ』、小学館、2018.4.10

「モチーフやイメージのつながりで、名作が生まれた経緯を追体験!」、『クロワッサン』、マガジンハウス、2018.4.25

「漂泊の天才画家 池大雅」、『日曜美術館』、NHK、2018.4.29

「模倣、継承、剽窃からの「創造」——日本美術「名作誕生物語」」、『フォーサイト』、新潮社、2018.5.2

「東京国立博物館「名作誕生」——日本美術の家系図! 雪舟・等伯・若冲の傑作誕生の秘密に迫る」、『ぶらぶら美術・博物館』、BS日テレ、2018.5.8

「若冲は「天才じゃない」!?!」、『週刊朝日』、朝日新聞社、2018.5.18

「鷲田清一「折々のことば」1293回」、『朝日新聞』11月21日朝刊1面、2018.11.21

「好きなのは阪神ですが、研究はサッカーにたとえてみます」、『淡青38号』、21頁、東京大学広報室、2019.3.8

「「つながり」に焦点 新解釈」、『讀賣新聞』夕刊9面、讀賣新聞社、2019.3.9

「奇跡は一度きり」、『山陽新聞』、山陽新聞社、2019.3.14

「著者は語る 佐藤康宏『若冲伝』」、『週刊文春』5月16日号、115頁、文藝春秋、2019.5.16

(7) 展示

「名作誕生——つながる日本美術」(東京国立博物館)、瀬谷愛、田沢裕賀、猪熊兼樹、板倉聖哲、小松大秀、島尾新、
2018.4.13～2018.5.27

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

非常勤講師、朝日カルチャーセンター・新宿、「模倣は創造——若冲の絵画」、2018.4
特別講演、東京国立博物館、「つながる雪舟、つながる若冲」、2018.4
特別講演、京都国立博物館、「池大雅の絵画——あるいは卵の殻と黄身との関係」、2018.4
非常勤講師、朝日カルチャーセンター・新宿、「若冲——『奇想の系譜』から50年」、2019.2
特別講演、岡山県立美術館、「18世紀京都画壇で起こったこと」、2019.4
特別講演、神奈川県立近代美術館、「岸田劉生——古美術との対話」、2019.11
特別講演、東京大学大学院人文社会系研究科、「画面について考えるということ」、2020.2

(2) 行政

自治体、鎌倉市、鎌倉市美術工芸品等収集選定委員会委員、2018.3～2020.3
省庁、文化庁、文化審議会専門委員(文化財分科会)、2018.3～2019.3
自治体、練馬区、練馬区立美術館運営協議会委員、2018.4～2020.3
省庁、文化庁、登録美術品調査研究協力者、2018.4～2020.3

教授 秋山 聡 AKIYAMA, Akira

1. 略歴

1986年3月 東京大学文学部美術史学専修課程卒業(文学士)
1989年3月 東京大学大学院人文科学研究科修士課程修了(文学修士)
1997年2月 フライブルク大学哲学部 Ph.D
1997年4月 電気通信大学電気通信学部助教授(～1999年3月)
1999年4月 東京学芸大学教育学部助教授(～2006年3月)
2006年4月 東京大学大学院人文社会系研究科助教授
2007年4月 同上准教授
2011年3月 同上教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

西洋美術史

b 研究課題

デューラーを中心とした中近世ドイツ美術、聖遺物と美術との相関性、イメージ(像)の生動性、比較宗教美術史、造形物の記述に関する文化史的研究

c 概要と自己評価

2018年度から副研究科長・教育研究評議員を務めたため、研究に割ける時間は激減したが、引き続き、宗教的な宝物や宮廷宝物についての比較美術史的研究を、美術と宝物との相関性および宮廷における宗教文化を意識しつつ展開した。また聖地形象や造形物および風景等の記述等についても比較宗教美術史的考察をも展開した。

2018年度には、フィレンツェ、マックス＝プランク研究財団美術史研究所長 G.ヴォルフが春に来日し、熊野の聖地を共に回り、新宮市と本郷キャンパスにおいて研究会を開催した。聖地や宝物の形成の根幹に人間と自然との「対話」がある、との氏の指摘は反響を呼び、引き続き調査・検討を行なうこととなった。6月にはハーバード大・名古屋大共催「像内納入ワークショップ」に参加、さらに新宮市で国際熊野学会との共催による地中海学会大会を企画・運営するといった活動を通じて、積極的な研究交流を推進した。

2019年度には、ジュネーヴ大学の D.ガンボニー教授と共に熊野を訪れ、現地と本郷キャンパスにおいてアニコニズムをめぐる研究会を開催するとともに、コロナ禍のために実現には至っていないがジュネーヴにおける絵解きと修験に関わる比較美術史的セミナーを企画することとなった。9月にはフィレンツェにおける国際美術史学会第35回大会で、宗教的ヴィジョンについての比較美術史的研究に関わるセクションの共同座長を務め、11月には早稲田、12月には青山学院大学における比較宗教美術史のセミナーで発表を行なった。

なお、立ち上げから関わってきた全学の教育プログラム、体験活動プログラムには引き続き協力を続けてきたが、2017年度より新宮市および国際熊野学会の協力の下に、熊野における体験活動プロジェクトを開始するに至り、2018、2019年度も催行した。また、2019年度からは人文社会系研究科主催事業として総長裁量経費を得て「東大人文・熊野プログラム」を開始し、2020年1月に本郷キャンパス、3月に新宮市においてフォーラムを開催した。2015年から引き続き日本学術会議の連携会員として美術館・博物館委員会に所属し幹事を務め、学芸員の科研費取得資格の拡大に向けて作業を重ねている。

d 主要業績

(1) 著書

単著、秋山聰、『聖遺物崇敬の心性史—西洋中世の聖性と造形』、講談社学術文庫、2018.10、312pp
分担執筆、秋山聰、「聖遺物と美術」、『美学の事典』、丸善、pp.186-187、近刊

(2) 論文

秋山聰、「デューラーにおける「測定」重視の背景について：「聖なる測定に関するノート」、『美術史論叢』36、2020.3、pp.55-66

(3) 学会発表等

秋山聰、「世界の中の熊野」、地中海学会第42回大会地中海トーキング、2018.6.21、新宮市福祉センター、和歌山県、2018.6.9

秋山聰、「コメント：像なのか、容器なのか」、国際ワークショップ「像内納入品研究の地平」、神奈川県立金沢文庫、神奈川県、2018.6.23

秋山聰、「アルプス以北における『古代』の再生と『古典』」、シンポジウム「西洋美術史における『古典』と『古典主義』」、名古屋大学、愛知県、2018.7.15

Akira Akiyama/Giuseppe Capriotti/Valentina Zivkovic, "The Mystical Mind as a Divine Artist: Visions, Artistic Production, Creation of Images through Empathy, 35th CIHA Congress, Firenze, Italy, 2019.9.2

Akira Akiyama, "On Vestments for Statues, from Comparative Perspectives" International Workshop: Modern Sacred Images in Europe and Japan: Contact, Comparison, Conflict, Waseda University, Tokyo, 2019.11.22

秋山聰、「聖像と聖なるモノのエージェンシー：比較宗教美術史の試み」、シンポジウム「東西の聖なるもの：比較文化論を拓く」、青山学院大学総合研究所・人文科学研究所、東京都、2019.12.21

(4) 翻訳

秋山聰/太田泉フロランス共訳、マデリン・キャヴィネス、「ザクセンシュピーゲル彩飾写本における女性とマイノリティ」『日本学芸院紀要』、72巻特別号、7-48頁、2018.3

(5) 研究テーマ

科学研究費補助金、挑戦的萌芽研究、秋山聰、研究代表者、「造形作品の記述についての文化史的観点からの萌芽的研究」、2018～2019

科学研究費補助金、基盤研究(B) 秋山聰、研究代表者、「中世宝物の贈与・寄進に関する比較美術史学的研究」、2018～2020

3. 主な社会活動

(1) 学会等

美術史学会、常任委員、2018.4～、事務局長、2019.5～

地中海学会、常任委員、2018.4～

国際美術史学会(CIHA)日本委員会、事務局長、2018.4～

日本学術会議、連携会員、博物館・美術館委員会幹事、2018.4～
Art in Translation 誌 (英国)、Advisory Board、2018.4～
Iconographica 誌 (イタリア)、Advisory Board 2018.4～

准教授 **高岸 輝** TAKAGISHI, Akira

1. 略歴

1990年4月 東京藝術大学美術学部芸術学科入学
1994年3月 東京藝術大学美術学部芸術学科卒業
1994年4月 東京藝術大学大学院美術研究科日本・東洋美術史専攻修士課程入学
1996年3月 東京藝術大学大学院美術研究科日本・東洋美術史専攻修士課程修了
1996年4月 東京藝術大学大学院美術研究科美術専攻博士後期課程入学
2000年3月 東京藝術大学大学院美術研究科美術専攻博士後期課程修了、博士(美術)の学位取得
2000年4月 日本学術振興会特別研究員(PD)(2003年3月まで)
2004年4月 財団法人大和文華館学芸部部員(2005年9月まで)
2005年10月 東京工業大学大学院社会理工学研究科価値システム専攻助教授(2007年3月まで)
2007年4月 同 准教授(2012年3月まで)
2012年4月 東京大学大学院人文社会系研究科准教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

日本美術史、主として中世絵画史

b 研究課題

中世やまと絵の研究、絵巻および絵師組織の研究

c 概要と自己評価

最近10年の研究論文を総括した『中世やまと絵史論』を刊行した。本書は、「中世絵巻論」「初期土佐派論」「土佐光信論」「戦国時代やまと絵論」の4部23章からなり、絵巻の制作と享受の実態、土佐派をはじめとする室町時代の画派の形成過程、室町後期に活躍した絵師・土佐光信の画業の検討、戦国時代における多流派によるやまと絵制作と大画面様式の変容を追究した。また、『「月次祭礼図屏風」の復元と研究』は愛知県立芸術大学の日本画研究室を中心とするプロジェクトの成果で、近世の模本に日本画・日本史・風俗史・美術史の諸分野から検討を加え、室町時代の屏風の復元を試みた。このほか、各種展覧会への協力・寄稿や、国際学会での発表を行った。今後も、科研等の外部資金によって実施中の14世紀絵画に関する検討を中心に、引き続き研究を推進する予定である。

d 主要業績

(1) 著書

共著、高岸輝ほか、『西湖憧憬—西湖梅をめぐる禅僧の交流と十五世紀の東国文化—』、神奈川県立金沢文庫、2018.9
共著、高岸輝ほか、『室町將軍—戦乱と美の足利十五代—』、九州国立博物館、2019.7
単著、高岸輝、『中世やまと絵史論』、吉川弘文館、2020.3
編著、岩永てるみ・阪野智啓・高岸輝・小島道裕編、『「月次祭礼図屏風」の復元と研究—よみがえる室町京都のかげやき—』、思文閣出版、2020.6

(2) 論文

高岸輝、「やまと絵屏風の変容—室町から桃山へ」、『聚美』、26、48-65頁、2018.1
高岸輝、「蒙古的衝撃—花園天皇与十四世紀的日本絵画」、『美術史研究集刊』、44、93-98頁、2018.4
Akira Takagishi、「The Development of International Research on Japanese Art History: With a Focus on Yashiro Yukio's Study of Illustrated Handscrolls」、『Acta Asiatica』、117、51-61頁、2019.8

(3) 書評

黒田日出男、『岩佐又兵衛と松平忠直』、『日本歴史』、836、149頁、2018.1

並木誠士、『日本絵画の転換点 酒飯論絵巻』、『日本歴史』、838、119 頁、2018.3
林温、『日本美術がワカル本』、『日本歴史』、840、119 頁、2018.5
古田亮、『日本画とは何だったのか』、『日本歴史』、842、116 頁、2018.7
西山克編、『地獄への招待』、『日本歴史』、844、119 頁、2018.9
古田亮、『横山大観』、『日本歴史』、846、118 頁、2018.11
小峯和明、『遣唐使と外交神話』、『日本歴史』、848、145 頁、2019.1
加須屋誠、『記憶の図像学』、吉川弘文館、『週刊読書人』、3292、6 頁、2019
松島仁、『権力の肖像』、『日本歴史』、850、117 頁、2019.3
菅原真弓、『月岡芳年伝』、『日本歴史』、852、119 頁、2019.5
稲本万里子、『源氏絵の系譜』、『日本歴史』、854、116 頁、2019.7
佐藤康宏、『若冲伝』、『日本歴史』、856、116 頁、2019.9
太田昌子、『志度寺縁起絵』、『日本歴史』、858、118 頁、2019.11

(4) 解説

高岸輝、「遊行上人縁起絵巻」、『日本歴史』、848、口絵頁、2019.1

(5) 学会発表

国内、高岸輝、「戦国時代における霊場歴覧と縁起・勧進・絵画」、第71回 美術史学会全国大会 シンポジウム「聖地巡礼」、東北大学、2018.5.19

国内、高岸輝、「室町將軍の身体観—画像と彫像の比較分析—」、シンポジウム「京都・等持院 歴代足利將軍像の謎に迫る」、九州国立博物館、2019.8.12

国際、高岸輝、Medieval Art, Patronage, and Inter-Contextuality、International Symposium/Workshop in Japanese Literary and Visual Studies、Columbia University、2020.2.28

(6) 啓蒙

高岸輝・三浦篤・加治屋健司、「東京大学 美術作品展」、『淡青』、38、8-16 頁、2019.3

高岸輝ほか、「シンポジウム抄録 宇佐美圭司《きずな》から出発して」、『淡青』、38、4-7 頁、2019.3

(7) マスコミ

「勅撰和歌集に匹敵する絵巻」、『京都新聞』、2019.11.22

(8) 研究テーマ

文部科学省科学研究費補助金、基盤研究 B、高岸輝、研究代表者、「十四世紀を中心とする縁起・絵伝の制作組織および様式系統の総合的研究」、2018～

寄附金、三菱財団法人人文科学研究助成、高岸輝、研究代表者、「戦国時代の絵画制作にみる都鄙間交流と文化の全国波及」、2018～

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

特別講演、神奈川県立金沢文庫、「室町・戦国時代における西湖イメージのひろがり—土佐派の絵画を中心に—」、2018.10

特別講演、群馬県立土屋文明記念文学館、「「やまと絵」のなかの中国—室町時代の画文交響の一断面—土佐光信と《西湖放鶴図》を中心に」、2019.1

特別講演、フリーア美術館（米国ワシントン D.C.）、「フリーア美術館所蔵「槻峯寺建立修行縁起絵巻」とともに歩んだ20年の旅（1998～2019）」、2019.3

特別講演、海の見える杜美術館、「17世紀における中世絵巻の再生」、2019.4

非常勤講師、東北大学大学院文学研究科・文学部、「日本中世の天皇と美術」、2020.1

(2) 学会

国内、日本歴史学会、評議員、2018.7～

国内、美術史学会、常任委員、2019.6～

04 哲学

教授 **榊原 哲也** SAKAKIBARA, Tetsuya

1. 略歴

1983年3月	東京大学文学部第1類哲学専修課程卒業
1986年3月	東京大学大学院人文科学研究科哲学専門課程修士課程修了
1988年3月	東京大学大学院人文科学研究科哲学専攻博士課程退学
1988年4月	東京大学文学部助手
1992年4月	立命館大学文学部助教授
2001年4月	立命館大学文学部教授
2003年4月	東京大学大学院人文社会系研究科助教授
2007年4月	東京大学大学院人文社会系研究科准教授
2009年9月	東京大学より博士（文学）の学位を取得
2010年4月	東京大学大学院人文社会系研究科教授
2020年3月	退職

2. 主な研究活動

a 専門分野

ドイツ現代哲学、ケアの哲学

b 研究課題

ドイツ現代哲学のなかでも、とりわけフッサール、デヒルタイ、ハイデガー等によって展開された現象学・解釈学に関する歴史的・体系的的研究を行っている。またこれらの文献的研究と並行して、哲学と社会的実践とを繋ぎ、結ぶ試みとして、看護を中心とするケアの具体的営みから、「ケアの現象学」「医療現象学」として、現象学の精神に基づく「ケアの哲学」を立ち上げる研究を行っている。この研究は、看護・医療に現象学という哲学の立場から寄与することを目指すとともに、臨床の具体的実践から学んで「事象そのものの方から」現象学を新たに立ち上げることを目指すものである。この試みによって現象学という哲学に新たな光を当て、既存の学説を見直すことも可能になるのではないかと期待している。

c 概要と自己評価

フッサールを中心とする現象学の歴史的・体系的的研究に関しては、学部と大学院の授業を中心にして地道に研究を続け、その成果の一部を所属研究室紀要および精神病理学の専門家の研究会において公にした。また、「ケアの現象学」「医療現象学」として「ケアの哲学」を立ち上げる試みに関しては、十数年にわたるこれまでの研究成果を踏まえ、医療者を主な対象とした入門的な書物『医療ケアを問いなおす——患者をトータルにみることの現象学——』を公にするとともに、主として看護教員を対象として『看護教育』誌に、12回にわたって現象学に基づくベナー看護論についての連載を行った。さらに、ベナーがハイデガーから何をどう学んだのかを、哲学的に追跡する考察も行い、哲学と看護学との間文化的な交流の可能性を示すことができた。さらに海外の哲学系学会や、国内の医療・看護系の学会、研究会で数々の講演を行い、総じて相当程度の成果をあげることができたと判断される。

d 主要業績

(1) 著書

単著、榊原哲也、『医療ケアを問いなおす——患者をトータルにみることの現象学』、筑摩書房、2018.7

(2) 論文

榊原哲也、「哲学者とベナーを読む」、『看護教育』、第59巻第5号、398-403頁、2018.5

榊原哲也、「現象学的人間観（1）——身体化した知性」、『看護教育』、第59巻第6号、494-499頁、2018.6

榊原哲也、「現象学的人間観（1）——身体化した知性（つづき）」、『看護教育』、第59巻第7号、588-593頁、2018.7

榊原哲也、「現象学的人間観（2）——背景の意味」、『看護教育』、第59巻第8号、746-751頁、2018.8

榊原哲也、「現象学的人間観（3）——気づかい／関心」、『看護教育』、第59巻第9号、830-835頁、2018.9

榊原哲也、「現象学的人間観（3）——気づかい／関心（つづき）」、『看護教育』、第59巻第10号、920-925頁、2018.10

榊原哲也、「現象学的人間観（4）——状況」、『看護教育』、第59巻第11号、1000-1005頁、2018.11

榊原哲也、「現象学的人間観 (5) ——時間性」、『看護教育』、第 59 巻第 12 号、1076-1081 頁、2018.12
榊原哲也、「「安らぎ」としての健康」、『看護教育』、第 60 巻第 1 号、68-74 頁、2019.1
榊原哲也、「『ベナー看護論』の方法論」、『看護教育』、第 60 巻第 2 号、158-163 頁、2019.2
榊原哲也、「看護技能の 5 段階の理論」、『看護教育』、第 60 巻第 3 号、240-246 頁、2019.3
榊原哲也、「巻き込まれつつかわる看護」、『看護教育』、第 60 巻第 4 号、334-341 頁、2019.4
榊原哲也、「ベナーはハイデガーから何をどう学んだのか」、『立命館文学』、第 665 号、122-135 頁、2020.2
榊原哲也、「看護の成り立ちを言葉にする——現象学からのアプローチ——」、『看護診断』、第 25 巻第 1 号、41-49 頁、2020.3

(3) 解説

榊原哲也 (事例提供: 西村ユミ)、連載「現象学のキーワードで捉える看護事例」第 3 回「身体の志向性」、日本看護協会出版会 HP「教養と看護」、2020.1

榊原哲也、「フッサール『デカルト的省察』第五省察注解 (1)」、『論集』、第 38 号、1-12 頁、2020.3

(4) 学会発表

国内、榊原哲也、「哲学と医療をつなぐ現象学的研究」、臨床ケア哲学・倫理学セミナー「哲学と医療実践のあいだ」(日本医学哲学・倫理学会研究委員会・上智大学生命倫理研究所共催)、上智大学四谷キャンパス、東京都千代田区、2018.6.24

国際、Tetsuya Sakakibara, “Nursing and philosophy: A study on the interrelationship between nursing and phenomenology”, The 8th International Conference of PEACE (Phenomenology in East Asian Circle), Seoul National University, Seoul, Korea, 2018.12.2

国内、榊原哲也、「疾患と病いの現象学—ある医師の語りから—」、第 11 回「医療現象学」研究会・シンポジウム、東京大学本郷キャンパス、東京都文京区、2018.12.23

国内、榊原哲也、「医療ケアの現象学——患者をトータルにみるとはどういうことか」、宇都宮大学 異分野融合研究講演会「医療における「ケア」とは——医学と哲学から考える——」、宇都宮大学峰キャンパス、栃木県宇都宮市、2019.3.30

国内、榊原哲也、「「気遣い」を問いなおす——看護の事象に即して」、実存思想協会第 35 回大会 講演会「実存とケア」、立正大学品川キャンパス、東京都品川区、2019.6.22

国内、榊原哲也、「看護の成り立ちを言葉にする——現象学からのアプローチ」、第 25 回日本看護診断学会学術大会、名古屋国際会議場、愛知県名古屋市、2019.7.6

国内、榊原哲也、「ケアを問いなおす」、ケアの哲学学会第 4 回年次大会、白百合女子大学 (東京都調布市)、2019.8.31

国際、榊原哲也、「若いと老いのケアの現象学」、第二屆東亞臨床哲學會議「現象學、人文臨床與倫理學」、國立政治大學 (台湾・台北市)、2019.10.20

国内、榊原哲也、「フッサールにおける生き生きした現在の謎」、精神病理コロク 2019/2020、東京大学山上会館 (東京都文京区)、2020.2.1

国内、榊原哲也、「腎不全患者を理解するために—現象学からのアプローチ」(特別企画「腎不全患者の心理を考える!」、第 10 回日本腎臓リハビリテーション学会学術集会、ベルサール新宿グランド (東京都新宿区)、2020.2.22

(5) 予稿・会議録

国際会議、Tetsuya Sakakibara, “Nursing and philosophy: A study on the interrelationship between nursing and phenomenology”, The 8th International Conference of PEACE (Phenomenology in East Asian Circle), Seoul National University, Seoul, Korea, 2018.12.2

『Proceedings of The 8th International Conference of PEACE (Phenomenology in East Asian Circle)』、2018.11

(6) 会議主催(チェア他)

国内、「臨床実践の現象学会第 3 回大会」、東京大学本郷キャンパス (東京都文京区)、2018.8.6

国内、「第 39 回日本看護科学学会学術集会」、チェア、交流集会「医療/生活経験を融合させる新たな看護学の創造——高度な医療技術と共に暮らす病者と看護師の対話から」、ホテル金沢 (石川県金沢市)、2019.12.1

(7) 総説・総合報告

Tetsuya Sakakibara, 『Phenomenology: Five Questions』、Felipe León & Joon Taipale (eds.), pp. 135-140, 2018

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

- 非常勤講師、首都大学東京大学院人間健康科学研究科「看護哲学Ⅰ」「看護哲学Ⅱ」2018.4～2020.3
非常勤講師、横浜創英大学大学院看護学研究科「看護教育学」2018.10～2019.3、2019.10～2020.3
非常勤講師、日本赤十字看護大学「哲学と倫理」「生命倫理」2018.4～2020.3
非常勤講師、東京慈恵会教務主任養成講習会「哲学」2018.6～2028.7、2019.6～2019.7
非常勤講師 埼玉県看護協会専任教員養成講習会「哲学」2018.8、2019.8
非常勤講師 愛知県教務主任養成講習会「現象学」2018.9
平成30年度静岡県自治体立看護学校協議会教務担当者研修会、「講義「現象学的人間観を学生指導に活かすために」
および事例検討のコーディネータ」、2018.8
特別講演、人間看護専門学校、「看護に恋した哲学者が語る看護の魅力」、2019.9

(2) 学会

- 哲学会、理事 2003.4～
日本哲学会、理事 2015.6～2019.5、評議員 2011.6～、会計監査 2019.6～
日本現象学会、委員 2000.11～
実存思想協会、理事 2001.6～

教授 **納富 信留** NOTOMI, Noburu

1. 略歴

- | | |
|----------|---|
| 1987年3月 | 東京大学文学部第1類哲学専修課程卒業 |
| 1990年3月 | 東京大学大学院人文科学研究科哲学専攻修士課程修了 |
| 1990年4月 | 同 博士課程進学 (1994年9月 退学) |
| 1991年10月 | ケンブリッジ大学大学院古典学部 Ph.D. コース入学 |
| 1995年10月 | 同大にて Ph.D. 取得 |
| 1996年10月 | 九州大学文学部講師 (哲学・哲学史) |
| 1998年4月 | 九州大学文学部、大学院人文科学研究院助教授 (哲学・哲学史) |
| 2002年4月 | 慶應義塾大学文学部助教授 (哲学) |
| 2006年3月 | オランダ・ユトレヒト大学訪問研究員 (慶應義塾大学塾派遣留学：2007年9月まで) |
| 2007年4月 | 慶應義塾大学文学部准教授 (哲学) |
| 2008年4月 | 慶應義塾大学文学部教授 (哲学) |
| 2016年4月 | 東京大学大学院人文社会系研究科 教授 |

2. 主な研究活動

a 専門分野

西洋古代哲学、西洋古典学

b 研究課題

西洋における哲学の成立を、古代ギリシア哲学の初期から後期にかけて、哲学史と古典文献学の手法を用いながら多角的に検討することを課題とする。主なテーマとして、(1) 紀元前5～4世紀の古典期アテナイの知的状況、具体的には、ソフィスト思潮、ソクラテス、ソクラテス文学、プラトン、イソクラテスら、(2) 初期のイオニアとイタリアの知的状況、および、(3) ヘレニズム期から古代後期にかけての継承と展開、を扱っている。それらの分析をつうじて、現代における「哲学」のあり方を根源から見直し、新たな視野を得ることを目的としている。

また、古代ギリシア哲学が、19世紀以降の日本や東アジアにどのように導入され、翻訳や研究をつうじて社会や思想に影響を与えてきたかという受容史、もテーマにしている。

c 概要と自己評価

これまで、(1) の古典期アテナイ哲学を研究の中心に据えて、複数の研究書など成果をまとめ、プラトン『ポリテイア』を中心とする「イデア論」の解明をより詳細に進めた。近年は研究の重点を(2)によりおき、ギリシア哲学史の枠組みを作るべく、その方法論を確保した上で、まずは初期イオニアの哲学、および、イタリアの哲学に研究の焦点をあててその範囲で研究をまとめている。これらの作業をつうじて、ギリシアで哲学が誕生した前6世紀初めからヘレニズムに入る以前の前4世紀後半までのもっとも重要な3世紀ほどを全体として視野に入れつつ、それを「ギリシア哲学史」としてまとめている(2021年2月刊行予定)。

また、哲学をより広く展開する「世界哲学・世界哲学史」のプロジェクトを国内外の研究者と共同で進めている。その成果は『世界哲学史』(ちくま新書、全8巻+別巻、2020年)として編集・執筆し出版を開始した。

d 主要業績

(1) 著書

共編著、納富信留・檜垣立哉・柏端達也、『よくわかる哲学・思想』、ミネルヴァ書房、2019.4

単著、納富信留、プラトン『パイドン』訳・解説、光文社古典新訳文庫、2019.5

単著、納富信留、『プラトン哲学への旅 —エロースとは何者か—』、NHK出版新書、2019.10

共編著、伊藤邦武・山内史朗・中島隆博・納富信留、『世界哲学史1 —古代I 知恵から愛知へ—』、ちくま新書、2020.1

共編著、伊藤邦武・山内史朗・中島隆博・納富信留、『世界哲学史2 —古代II 世界哲学の成立と展開—』、ちくま新書、2020.2

共編著、伊藤邦武・山内史朗・中島隆博・納富信留、『世界哲学史3 —中世I 超越と普遍に向けて—』、ちくま新書、2020.3

(2) 論文

Noburu Notomi, “Epistemology in the Sophists”, *Knowledge in Ancient Philosophy, The Philosophy of Knowledge: A History, Volume I*, Nicholas D. Smith (ed.), Bloomsbury Academic, 49-66 頁、2018.9

Noburu Notomi, “The Soul and Forms in Plato’s *Phaedo*”, *Plato’s Phaedo: Selected Papers from the Eleventh Symposium Platonicum*, Gabriele Cornelli, Thomas M. Robinson, and Francisco Bravo (eds.), Academia Verlag, 288-293 頁、2018.12

Noburu Notomi, “Imagination for Philosophical Exercise in Plato’s *Republic*: The Story of Gyges’ Ring and the Simile of the Sun”, *Psychology and Ontology in Plato*, Luca Pitteloud and Evan Keeling (eds.), Springer, 1-13 頁、2019.1

「哲学の普遍性」、東京大学大学院人文社会系研究科・文学部哲学研究室『論集』37、2019.3.31、1-17 頁

納富信留、「アリストテレスのプラトン「イデア論」規定 —『形而上学』A6, 987b7-10 再考—」、『フィロロギカ —古典文献学のために—』14号、古典文献学研究会、1-17 頁、2019.6

納富信留、「ハイデガーとプラトンの対決」、『Heidegger-Forum』第13号(電子ジャーナル)、ハイデガー・フォーラム、77-93 頁、2019.8 : <http://heideggerforum.main.jp/ej.htm>

納富信留、「古典文献学の可能性」、『書物学』17「特集、編集文献学への誘い」、勉誠出版、16-20 頁、2019.9

納富信留、「「ある」の愛求としてのプラトン哲学」、土橋茂樹編『存在論の再検討』、月曜社、22-44 頁、2020.2

納富信留、「タレス、あるいは自然哲学の誕生」、神崎忠昭・野元晋編『自然を前にした人間の哲学 —古代から近代にかけての12の問いかけ—』、慶應義塾大学出版会、3-20 頁、2020.2

(3) 書評

納富信留、「現象学の語りとその問題：田口茂『現象学という思考(自明なもの)の知へ』(筑摩選書、2014年)を読む」、『フッサール研究』14、113-127 頁、2017.3

Noburu Notomi, “Book Review: Why we write in Japanese: A brief introduction to recent Plato studies in Japan” (co-authored with Satoshi Ogihara), *Plato Journal* 19, International Plato Society, 101-106 頁、2019.7

(4) 学会発表

国際、Noburu Notomi, “Why Soul Matters: Reconsidering the Philosophical Contexts of Plato’s *On Soul*”, Forming the Soul: Plato and his Opponents – 2nd Asia Regional Meeting of the IPS, Chinese Culture University, Taipei, Taiwan, 2018.4.22

国際、Noburu Notomi, “Thinking of the Ideas from the East”, International Conference: Plato’s Philosophy in Interdisciplinary Context, Ivane Javkhisvili Tbilisi State University, Tbilisi, Georgia, 2018.5.29

国際、Noburu Notomi, “How Modern Japanese People Read Plato’s *Politeia*”, International Symposium: Plato, his Dialogues and Legacy, Bar Ilan University, Ramat-Gan, Israel, 2018.6.5

国際、Noburu Notomi, “Thinking of the Ideas from the East”, 4th Conference on Contemporary Philosophy in East Asia (CCPEA2018), National Chengchi University, Taipei, Taiwan, 2018.8.10

国内、納富信留、「ハイデガーとプラトンの対決」、ハイデガー・フォーラム第13回大会、早稲田大学、2018.9.16

- 国内、納富信留、「アリストテレスのプラトン『イデア論』規定再考 — 『形而上学』A6,987b7-10—」、第17回フィロソフィカ研究集会、成城大学、2018.10.13
- 国際、納富信留、「哲学の普遍性 철학의 보편성」、第5回東京大学・全南大学哲学科学術交流シンポジウム、韓国・光州市、全南大学、2019.2.22
- 国内、納富信留、「大西祝の批評主義から見る『哲学雑誌』」、第36回日本哲学史フォーラム、座談会「日本におけるアカデミズムの哲学史—『哲学雑誌』と『哲學研究』の比較研究—」、京都大学、2019.4.13
- 国際、Noburu Notomi, “Protagoras and the Sophists on Truth”, Conferece: Truth and Relativism in Ancient Philosophy, Faculty of Philosophy, University of Groningen, Groningen, the Netherlands, 2019.6.19
- 国際、Noburu Notomi, “Homonymy and Likeness in Plato’s *Parmenides*”, The 11th Symposium Platonicum: Plato’s *Parmenides*, International Plato Society, INHA, Paris, France, 2019.7.18
- 国際、Noburu Notomi, Greek Philosophy in the context of World Philosophy: on universality、第6回中日哲学フォーラム、中国・広州、中山大学哲学系、2019.9.22
- 国際、Noburu Notomi, 「明治思想と西洋哲学」(日本語・英語要約)、中國文化大學「東亞人文社會科學研究的地平線—人物、文化、思想、海洋與經濟的交匯」國際學術論壇、台湾・台北、中國文化大學、2019.10.5
- 国際、Noburu Notomi, “Speaking in the First Person: Plato, Isocrates, and Epistolary Literature”, The 3rd International Conference on Classics: Texts, Thoughts, and the Self in the Ancient World, Department of Philosophy, Peking University, Beijing, China, 2019.11.23
- 国際、Noburu Notomi, “Protagoras’ *On Gods*: its context and an open tradition”, Princeton Classical Philosophy Conference, Princeton University, USA, 2019.12.7
- 国際、Noburu Notomi, ““Likeness” in Plato’s *Sophist* and *Parmenides*”, Relooking at Plato on Images, TORCH ‘Image and Thought’ Network Seminar, Worcester College, Oxford, 2020.2.21

(5) 解説・総合報告

- 納富信留, “Translations of Aristotle in Modern Japan”, *Tetsugaku: International Journal of the Philosophical Association of Japan*, vol. 2, The Philosophical Association of Japan, 7-8 頁、2018.4
- 納富信留, 「文庫版解説」、浅野檜英『論証のレトリック—古代ギリシアの言論の技術—』、ちくま学芸文庫、228-234 頁、2018.4
- 納富信留, 「解説」、井筒俊彦『神秘哲学—ギリシアの部』、岩波文庫、635-648 頁、2019.2
- 納富信留, 「書物逍遙—古代に向き合う喜び」、『ミネルヴァ通信「究」』第101号、ミネルヴァ書房、2019.8
- 納富信留, 「世界哲学から考える、世界哲学史を描く」、『ちくま』第587号、4-5 頁、2020.2
- 納富信留, 「世界哲学としての日本哲学—その可能性と問題点—」、比較思想学会『比較 思想研究』46号「特集2 世界哲学をリードする日本哲学 コメント」、44-47 頁、2020.3

(6) 翻訳

- Noburu Notomi (trans.), KANZAKI Shigeru, “Can We Translate Thinking? On the Translated Word “*Koufuku*””, *Tetsugaku: International Journal of the Philosophical Association of Japan*, vol. 2, The Philosophical Association of Japan, 9-28 頁、2018.4

(7) 研究テーマ

- 文部科学省科学研究費補助金、基盤研究 (B)、納富信留、Noburu Notomi、研究代表者、「古代ギリシア文明における超越と人間の価値—欧文総合研究—」、2016～

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

- 納富信留、ワークショップ提題“*What is an author?: Greek Case*”, Textual Scholarship Workshop: *What is an author?*, JSPS Research Project, Hongo Campus, The University of Tokyo, 2018.6.19
- 納富信留、提題「世界哲学の理念と追求：課題の提案」、第1回京都フォーラム「世界哲学を構想する会」、リーガロイヤルホテル京都、2018.7.28
- 納富信留、コメンテータ “Documentary Projection “*Shaking the Cradle*” (2014) & Roundtable Discussion: an assessment about actual world and philosophical studies situation five years after the World Congress of Philosophy in Athens”, The XXIV World Congress of Philosophy, China Natinal Convention Center Beijing, P. R. China, 2018.8.19
- 納富信留、講演「古代ギリシア・ローマにおける老年の哲学」、東大「長寿社会のあり方を考える会主催」研究会、「*若い*」の哲学、東京大学 EMP ラウンジ、2018.10.10
- 納富信留、模擬講義「ギリシア哲学への誘い」、模擬授業「学問の面白さを学ぶ」、東京都立小山台高等学校、2018.12.21

納富信留、研究報告「出隆をめぐる」、科研費プロジェクト研究会、東京大学文学部哲学研究室、2018.12.25

納富信留、コメンテータ「トマス・カスリス（オハイオ州立大学特別名誉教授）講演へのコメント」、東文研・GJS 共催ワークショップ「東京学派の研究（第3回）：日本哲学と東京大学の哲学」、東京大学東洋文化研究所、2019.1.22

納富信留、研究報告“Sustainability and Humanities: From a Philosophical Point of View”, The 4th University of Cambridge - The University of Tokyo Joint Symposium, “Sustainability and Innovation for Society”, The University of Tokyo, 2019.3.27

納富信留、コメンテータ「世界哲学としての日本哲学」、パネルディスカッション「世界哲学をリードする日本哲学」コメンテータ、比較思想学会第46回大会、西田幾多郎哲学記念館、2019.6.15

納富信留、コメンテータ「シンポジウム：世界哲学としての中国哲学」、中国社会文化学会2019年度大会、東京大学文学部、2019.7.7

納富信留、提題「世界哲学の展開／普遍性の再考」、第5回京都フォーラム「世界哲学を構想する会」、リーガロイヤルホテル大阪、2019.7.13

納富信留、研究報告“Promoting World Philosophy”、EAAフォーラム「東アジアから考える世界文学と世界哲学」、東京大学本郷キャンパス、東洋文化研究所、2019.7.23

納富信留、研究報告「西洋古典文献学とデジタル」、科研基盤A「仏教学デジタル知識基盤の継承と発展」第1回研究会、東京大学文学部、2019.7.27

納富信留、提題「古代哲学に遡る形而上学」、アンリ・ベルクソン『コレージュ・ド・フランス講義1902-1903年度時間観念の歴史』書評会、学習院大学、2019.9.6

納富信留、提題「ことばのあり方—哲学からの考察—」、第18回東京大学ホームカミングデイ・文学部シンポジウム「ことばの危機」、東京大学文学部、2019.10.19

納富信留、司会・趣旨説明「世界哲学とは何か」、日本学術会議公開シンポジウム「世界哲学の可能性」、日本学術会議講堂、2019.11.30

納富信留、模擬講義「ギリシア哲学への誘い」、模擬授業「学問の面白さを学ぶ」、東京都立小山台高等学校、2019.12.20

(2) 学会

International Federation of Philosophical Societies (FISP), Steering Committee Member, 2018.8

International Plato Society, Advisory Board, 2013.7～

日本学術会議・連携会員、2014.10～

日本西洋古典学会・委員、2001.6～、常任委員、2016.6～

日本哲学会・評議員、2011.6～、理事、2015.5～2018.5、欧文誌編集委員長、2016.5～2018.5

新プラトン主義協会・理事、2018.9～

フィロロギカ [古典文献学研究会]・編集委員、2005.10～

ギリシャ哲学セミナー・運営委員、2005.9～、幹事、2015.9～

The Korean Society of Greco-Roman Studies, Editorial Board, 2008.8～

Korean Philosophical Association, Editorial Board, 2013.3～

教授 **鈴木 泉** SUZUKI, Izumi

1. 略歴

1986年3月 東京大学文学部哲学専修課程学士・文学士

1989年3月 東京大学大学院人文科学研究科哲学専攻修士・文学修士

1990年10月 東京大学教養学部助手（～1993年3月）

1993年4月 神戸大学文学部助教授（～2006年3月）

2006年4月 東京大学大学院人文社会系研究科准教授

2018年4月 東京大学大学院人文社会系研究科教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

哲学、特に西欧近世哲学と現代フランス哲学

b 研究課題

<内在性の哲学>の体系化の作業として次の三つが現在の研究課題である。

- 1/西洋形而上学の形成史の探求とそれを背景とした<存在の一義性>の哲学の系譜学の作業。
- 2/現代フランスにおける差異哲学の検討。
- 3/非人間主義 (inhumanisme) の哲学の展開。

c 概要と自己評価

上記三つの研究課題をより具体的には次のように遂行している。

1/ドゥッソ・スコトゥスからスピノザに至る中世後期から近世にかけての<存在の一義性>の系譜学の意義を、とりわけスピノザ哲学に焦点をあてて解明すること。

2/現代における<内在性の哲学>の範型=差異哲学としてのドゥルーズ哲学を解凍し、その意義を現代分析的形而上学や日本語の哲学と突き合わせながら展開すること。

3/限定された存在としての人間とは異なる他のありようへと変容していくことの可能性を肯定する思考としての非人間主義の哲学を、具体的な主題において展開すること。

この二年間においては、1に関して、とりわけスピノザ哲学の特異な位置づけを、ライプニッツ哲学との関連、ならびにその受容史をもとに解明する作業を行い、単著『スピノザライプニッツ問題』として刊行する準備を集中的に進めてきた。ごく近い時期の脱稿を目指している。さらに、岩波書店から刊行予定の『スピノザ全集』編集委員として、全集刊行の準備を進め、幾つかの著作の翻訳を終え、2021年度の刊行に向けて、全体の最終的な調整を行っている段階である。また、2に関しドゥルーズとドゥルーズ&ガタリの思索に関する単著二冊を刊行する準備を進めてきた。こちらに関しても2021年に公刊予定である。さらに、3に関しても単著『非人間主義の哲学』の刊行に向けての執筆を進めてきた。脱稿が遅れていることには不満が残るが、これまでの研究の集大成となる大部の著作の刊行を期したい。

d 主要業績

(1) 論文

鈴木泉、「祈りについて」『ひとおもい』創刊号、東信堂、214-219頁、2019.7

鈴木泉、「経験の構造を論じることについて——松永哲学をめぐるシンポジウムの余白に——」『経験の構造』哲学雑誌第133巻第806号、哲学会編、67-84頁、2019.10

(2) 学会発表

鈴木泉、コメンテーター「Mathias Girel “Reception and Development of Pragmatist Thought in France: Just a Beginning?”に対する特定質問」、アメリカ哲学フォーラム第5回大会、神戸大学、2018.6.23

鈴木泉、「《きずな》について私が知っている二、三の事柄」、シンポジウム「宇佐美圭司《きずな》から出発して」提題、東京大学、2018.9.28

鈴木泉、コメンテーター「トマス・カスリス（オハイオ州立大学特別名誉教授）講演へのコメント」、東文研・GJS 共催ワークショップ「東京学派の研究（第3回）：日本哲学と東京大学の哲学」、東京大学東洋文化研究所、2019.1.22

鈴木泉、「『哲学雑誌』のアーカイブ化を基礎とした近代日本哲学の成立と展開に関する分析的研究」の課題と研究成果 第36回日本哲学史フォーラム座談会「日本におけるアカデミズムの哲学史—『哲学雑誌』と『哲学研究』の比較分析」提題、京都大学、2019.4.13

鈴木泉、提題「一つの読解」、アンリ・ベルクソン『コレージュ・ド・フランス講義 1902-1903 年度 時間観念の歴史』書評会、学習院大学、2019.9.6

(3) 啓蒙

鈴木泉、「“活動”する哲学者——哲学者としての井上円了」（吉田善一氏との対談）『井上円了「哲学する心」の軌跡とこれから』講談社、22-25頁、2019

(4) 予稿・会議録

国内、鈴木泉、「《きずな》について私が知っている二、三の事柄」『シンポジウム「宇佐美圭司《きずな》から出発して」全記録』国立大学法人東京大学、18-24頁、2019.5

(5) 研究テーマ

文部科学省科学研究費補助金、基盤研究 (B)、鈴木泉、Izumi Suzuki、研究代表者、「『哲学雑誌』のアーカイブ化を基礎とした近代日本哲学の成立と展開に関する分析的研究」、2018～

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

非常勤講師、東京芸術大学、「哲学」、2019.4～2020.3

非常勤講師、東洋大学、「近世哲学演習IIA・IIB」・「哲学特殊研究VA・VB」、2019.4～2020.3

講演、「北の岬から非人間主義の哲学について考える」、第22回東京大学文学部公開講座・常呂公開講座、2018.10.5

講演、「スピノザ／ライプニッツ問題」、第10回東京大学文学部公開講座、東京大学文学部、2019.6.15

(2) 学会

哲学会、理事長、2018.4～

日本哲学会、評議員、2017.5～、理事、2019.5～

スピノザ協会、運営委員、2018.4～

日本ライプニッツ協会、理事、2018.4～2020.3

准教授 **准立 雄輝** NORITATE, Yuki

1. 略歴

1987年4月 東京大学教養学部文科三類入学
1989年4月 東京大学文学部第一類（哲学専修課程）進学
1992年3月 東京大学文学部第一類（哲学専修課程）卒業
1992年4月 東京大学大学院人文科学研究科哲学専攻修士課程入学
1994年3月 東京大学大学院人文科学研究科哲学専攻修士課程修了
1994年4月 東京大学大学院人文科学研究科哲学専攻博士課程進学
1996年3月 東京大学大学院人文社会系研究科基礎文化研究専攻哲学専門分野博士課程退学
1996年4月 四国学院大学文学部人文学科 専任講師
1999年4月 四国学院大学文学部 助教授（～2007年3月）
2003年8月 トロント大学哲学部[Department of Philosophy, University of Toronto]訪問教授[Visiting Professor]
（～2004年7月）
2007年4月 四国学院大学文学部 准教授
2010年4月 四国学院大学文学部 教授
2014年4月 東京女子大学現代教養学部人文学科哲学専攻 教授（～2019年3月）
2017年4月 東京女子大学比較文化研究所副所長、兼丸山眞男記念比較思想研究センター副所長（～2019年3月）
2019年4月 東京大学大学院人文社会系研究科 准教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

哲学、特に近世・近代から現代に至る英語圏の哲学と形而上学

b 研究課題

近世・近代から現代に至る英語圏の哲学に基盤を置きながら、哲学的なコスモロジー（宇宙論）の可能性を探求している。具体的なテーマとしては、

- (1) 19世紀後半から20世紀前半にかけての北米の哲学者、特にパース、W.ジェイムズ、ホワイトヘッドにおける形而上学についての考察
- (2) D.ルイスやレッシュャーら、現代の哲学者の形而上学についての考察
- (3) 哲学的なコスモロジーについての歴史的研究

を課題としている。

c 概要と自己評価

先述の具体的なテーマの(1)については、次項の「経験と反復」において、ホワイトヘッドと松永澄夫を手がかりに、近代の形而上学(特にヒューム)への批判を試みる中で、(経験)そのものに内在する反復構造を解き明かすとともに、その構造がヒュームらによって見逃されることが〈因果〉という重要な概念の誤解につながっているのかということ論じた。ただ、上記のところまでは記述が進んだものの、ホワイトヘッド並びに松永の考える、既成の因果概念とは異なる〈因果〉の姿をわかりやすく提示するまでには至らなかったことが、今後の課題として見えてきた。

(2)については、次項の「起源を問う思考をめぐって」において、一ノ瀬正樹の考察と照らし合わせながら論じた。ここでは一ノ瀬に特徴的な概念である「因果的超越」という概念の解明に努め、それがD.ルイスらの因果分析を凌ぐものであることを明らかにした。ここまでの記述には納得しているが、これを哲学的なコスモロジーの可能性へ結びつける道はまだ半ばであり、これからの課題としていきたい。

(3)については、次項の「始まりがないことについて」「〈なぜ、何もないのではなく、何かがあるのか?〉を哲学が問うことの意味について」において簡単に触れたが、哲学的なコスモロジーの可能性を探究するには、歴史的研究が重要であると同時に、現代科学の成果とどのように関連付けられるのかが焦点になることは明らかである。これについても、鋭意、探求を進めていきたい。

d 主要業績

(1) 論文

「始まりがないことについて」、雑誌『ひとおもい 創刊号』、東信堂、2019.8、p.237-277

「経験と反復」、哲学会編『哲学雑誌』第133巻、第806号、2019.10、p.85-105

「起源を問う思考をめぐって」、宮園健吾、大谷弘、乗立雄輝編『因果・動物・所有 一ノ瀬哲学をめぐる対話』、武蔵野大学出版会、2020.1、p.139-158

「〈なぜ、何もないのではなく、何かがあるのか?〉を哲学が問うことの意味について」、東京大学文学部次世代人文学開発センター研究紀要『文化交流研究』第33号、2020.3、p.1-10

(2) 学会発表

「起源を問う思考をめぐって」、ワークショップ「因果、規範、そして自由」、武蔵野大学有明キャンパス、2018.12.22

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

非常勤講師、東京女子大学「4年次演習」、2019.4~2020.3

非常勤講師、聖心女子大学「哲学・倫理学特講XIII、XIV」、2018.4~2020.3

非常勤講師、東京大学教養学部「哲学II」、2018.9~2019.3

(2) 学会

哲学会、理事、2019.4~

日本感性工学会、理事、2018.4~

日本ホワイトヘッド・プロセス学会、理事、2019.10~

アメリカ哲学フォーラム、企画・運営委員、2018.4~

05 倫理学

教授 **熊野 純彦** KUMANO, Sumihiko

1. 略歴

1981年3月	東京大学文学部第1類（文化学類・倫理学専修）卒業（文学士）
1983年3月	東京大学大学院人文科学研究科倫理学専攻修士課程終了（文学修士）
1983年4月	東京大学大学院人文科学研究科倫理学専攻博士課程進学
1986年3月	東京大学大学院人文科学研究科倫理学専攻博士課程単位取得退学
1986年4月	跡見学園女子大学文学部非常勤講師 ～1989年3月
1987年4月	日本学術振興会特別研究員 ～1989年3月
1989年4月	専修大学文学部非常勤講師 ～1990年3月
1990年4月	北海道大学文学部哲学科倫理学講座助教授
1995年4月	北海道大学文学部人文科学科倫理学講座助教授（学部改組による）
1996年10月	東北大学文学部哲学科倫理学講座助教授
1997年4月	東北大学文学部人文社会学科哲学講座助教授（学部改組による）
2000年4月	東北大学大学院文学研究科哲学講座助教授（大学院重点化による）
2000年10月	東京大学大学院人文社会系研究科助教授
2007年10月	東京大学大学院人文社会系研究科教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

倫理学原理論・近現代西欧倫理思想

b 研究課題

倫理学的諸概念の哲学的考察

c 概要と自己評価

主たる研究は、一方ではドイツ観念論から現代の現象学的・解釈学的哲学をはじめとする思想史的研究をふまえながら、倫理学的諸問題を「人のあいだ」に根ざし、「人のあいだ」にかかわる問題群として思考することである。この数年は、現在の共同的な生を枠づけている資本制の問題にあらためて関心をいだき、かつて発表した『マルクス 資本論の思考』に引きつづき、考察を継続している。

d 主要業績

(1) 著書

単著、熊野純彦、『カント 美と倫理とのほざまで』、講談社、2017.1

単著、熊野純彦、『マルクス 資本論の哲学』、岩波書店、2018.1

単著、熊野純彦、『本居宣長』、作品社、2018.9

単著、熊野純彦、『三島由紀夫』、清水書院、2020.2

単著、熊野純彦、『源氏物語＝反復と模倣』、作品社、2020.3

3. 主な社会活動

(1) 学会

国内、日本倫理学会、評議員、2016.4～

(2) 行政

国内、東京大学大学院人文社会系研究科長・文学部長・東京大学評議員、2015.4～2017.3

国内、東京大学大学執行役・副学長・附属図書館長、2018.4～

1. 略歴

1984年3月	お茶の水女子大学文教育学部哲学科 卒業（倫理学専攻）
1984年4月	東京大学大学院人文科学研究科修士課程入学（倫理学専門課程）
1986年3月	同 修了
1986年4月	東京大学大学院人文科学研究科博士課程進学（倫理学専門課程）
1991年3月	同 単位取得退学
1991年4月	山口大学人文学部日本思想史学講座専任講師
1994年3月	東京大学大学院人文科学研究科において博士号（文学）を取得
1995年7月	山口大学人文学部日本思想史学助教授
1996年4月	お茶の水女子大学文教育学部哲学助教授（倫理学専攻）
2007年4月	お茶の水女子大学大学院人間文化創成科学研究科准教授（比較社会文化学専攻思想文化学コース） （改組に伴う配置換え）
2011年1月	同 教授
2013年4月	東京大学大学院人文社会系研究科教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

倫理学原理論・日本倫理思想史・比較思想

b 研究課題

日本思想の倫理的考察

c 概要と自己評価

倫理学の中心問題である「何をなすべきか」という行為に対する問いを、その基盤となる「人は何であるのか」「世界は何であるのか」という存在の問いにまで遡って考えることを目指す。研究方法としては、日本語で書かれたテキストの思想構造を解明することを通じて、その世界観、人間観を検討するとともに、背後にあるコンテキストも探る。具体的には、道元、法然、親鸞、日蓮、盤珪、白隠などの日本仏教の思想を中心として、日本思想を幅広く扱っている。特に、和辻哲郎の倫理学、倫理思想史の方法について検討し、「間柄の倫理学」には取まらない超越との関係という側面から、新たな日本倫理思想史の構築を目指す。なお、和辻倫理学の対抗軸として、現在、日本民俗学の諸思想家（柳田國男、折口信夫など）を検討中である。これまでの研究は、個別思想家についてを中心としてきたが、今後は、それらを踏まえて新たな日本倫理思想史の構築に関する研究の比重を増やす予定である。

d 主要業績

(1) 論文

頼住光子、「倫理・道德教育の目指すもの—倫理学・日本倫理思想史研究の立場からの一考察」、『倫理道德研究』第二号 日本倫理道德教育学会、2019.3

頼住光子、「和辻哲郎の思想形成と宗教—初期の作品を手がかりとして—」、『倫理学紀要』第26輯 東京大学文学部倫理学研究室、2019.3

(2) 学会発表

国際、頼住光子、「道元の思想構造」、道元研究国際シンポジウム「世界の道元研究の現在」、2018.7.21

国際、頼住光子、「道元の時間論」、時間学国際シンポジウム2018「中世日本の時間意識」（通称TIMEJ）、2018.8.2

国内、頼住光子、「中世から近世へ——道元の時間論から見た円山道白における「復古」について」、日本思想史学会創立50周年記念第2回シンポジウム、2018.10.13

国内、頼住光子、「倫理・道德教育の目指すもの—倫理学・日本倫理思想史研究の立場からの一考察—」、第3回日本倫理道德教育学会研究大会公開シンポジウム：テーマ「これからの日本社会における倫理教育・道德教育の正当性の基盤について考える」、2018.10.20

国際、頼住光子、「日本思想における共生」、中國文化大学日本研究中心発足記念国際シンポジウム、2019.3.14

国内、頼住光子、「道元における瞑想」、大正大学学術助成研究会：「科学における意識の問題への現象学的・唯識思想的アプローチとその現代的課題について」、2019.3.16

国際、頼住光子、「道元の自然観」、International Conference “Does Nature Think?”「自然は考えるのか?」、2019.6.7

(3) 啓蒙

頼住光子、「和」について、『中等教育資料』令和元年5月号、No.996、文部科学省教育課程課編集、学事出版株式会社、2019.5

(4) 会議主催(チェア他)

国内、「日本仏教総合研究学会研究例会」、2019.7.28

(5) 教科書

『改訂版 現代の倫理』、頼住光子、編集委員、山川出版、2018

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

非常勤講師、お茶の水女子大学、「倫理思想史特殊講義 B I」、2019.4~2019.8

非常勤講師、慶應義塾大学、「哲学倫理学特殊 I E」、2019.4~

非常勤講師、慶應義塾大学、「日本倫理思想」、2019.4~

(2) 行政

省庁、文部科学省、教育政策、科学官、2018.4~

准教授 **古田 徹也** FURUTA, Tetsuya

1. 略歴

1998年4月 東京大学教養学部 文科三類入学
2002年3月 東京大学文学部思想文化学科 倫理学専修課程卒業
2002年4月 東京大学大学院人文社会系研究科基礎文化研究専攻 倫理学専門分野修士課程入学
2005年3月 同 修了
2005年4月 東京大学大学院人文社会系研究科基礎文化研究専攻 倫理学専門分野博士課程進学
2008年3月 同 単位取得退学
2008年4月 日本学術振興会特別研究員 (PD) (~2011年3月)
2011年2月 博士号 (文学) 取得 (東京大学)
2013年4月 新潟大学人文社会・教育科学系 准教授 (~2017年3月)
2015年4月 放送大学 客員准教授
2017年4月 専修大学文学部 准教授 (~2019年3月)
2019年4月 東京大学大学院人文社会系研究科 准教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

倫理学原理論・近現代西欧倫理思想

b 研究課題

言語、心、行為をめぐる諸概念の倫理学的考察

c 概要と自己評価

英語圏とドイツ語圏における近現代の哲学・倫理学全般を研究しているが、特に重点を置いて取り組んでいるのはルートウィヒ・ウィトゲンシュタインである。彼の思考の全体像を把握する試みを中心軸に据えつつ、主に倫理学的関心の下で、関連する言語論や心の哲学、行為論といった分野に関する研究も展開している。その方向性は大きく分けて、ウィトゲンシュタインの「以後」と「以前」に分かれる。「以後」に関しては、主にドナルド・デイヴィッドソン、スタンリー・カヴェル、バーナード・ウィリアムズといった、ウィトゲンシュタインの影響を受けた英語圏の哲学者・

倫理学者の思考を検討している。「以前」に関しては、ゲーテ、ショーペンハウアー、カール・クラウスといった人物がウィトゲンシュタインに与えた影響および相違と、そこから見えてくる視角を追っている。

また近年では、運と道徳の相克、また、懐疑論と実在論の相克という大枠の問題圏をめぐって、古代から現代に至る倫理思想史全体を振り返る作業も進めている。

d 主要業績

(1) 著書

単著、古田徹也、『言葉の魂の哲学』、2018.4

単著、古田徹也、『ウィトゲンシュタイン 論理哲学論考』、KADOKAWA、2019.4

単著、古田徹也、『不道徳的倫理学講義：人生にとって運とは何か』、筑摩書房、2019.5

(2) 論文

古田徹也、「共同行為論の射程：分析系の議論を中心に」、『現象学年報』、34、3-14 頁、2018.11

古田徹也、「また説明は終わっていない：意志の自由をめぐるウィトゲンシュタインの思考」、『実存思想論集』、34、63-83 頁、2019.6

(3) 学会発表

国内、古田徹也、「分析系の人生の意味論とウィトゲンシュタイン」、哲学会第 57 回研究発表大会・ワークショップ「ウィトゲンシュタインの現在」、東京大学本郷キャンパス、2018.11.3

国内、古田徹也、「「シューベルトという名前はシューベルトにぴったり合っている」：ウィトゲンシュタインの言語論と翻訳の問題」、シンポジウム「批評と文学の他者：固有名と翻訳をめぐる」、神戸大学、2018.11.18

国内、古田徹也・宮崎裕助・渡邊京一郎、「「運」とともに／「運」に抗して——古田徹也著『不道徳的倫理学講義』を読む」、第 35 回新潟哲学思想セミナー、新潟大学五十嵐キャンパス、2019.9.13

国内、古田徹也、「〈言葉がしっくりくる〉とはどういうことか——言語・懐疑・プロパガンダ」、第 44 回明治大学人文科学研究所公開文化講座「ことばと政治——いま、哲学は人間をどう問うているのか」、明治大学駿河台キャンパス、2019.10.19

(4) 会議主催(チェア他)

国内、「実存思想協会第 34 回大会講演会」、チェア、ウィトゲンシュタインと実存思想、立教大学、2018.6.23

国際、「The 11th BESETO Conference of Philosophy」、チェア、東京大学本郷キャンパス、2019.6.28～2019.6.30

国際、「2nd International Conference on Philosophy and Meaning in Life」、チェア、早稲田大学早稲田キャンパス、2019.10.7～2019.10.9

(5) マスコミ

「知の巨人たち「ウィトゲンシュタイン」」、『αシノドス、vol.239』、2018.3.1

書評：『4歳の僕はこうしてアウシュヴィッツから生還した』、『共同通信配信記事』、『新潟日報』ほか全国 12 紙に掲載、共同通信社、2018.6

「誠に遺憾に存じます」、『朝日新聞』、2018.10.26

「ウィトゲンシュタイン『青色本』と哲学の愉しみ」、『アカデミスト』vol.1、16-17 頁、アカデミスト、2019.6.1

「多士オ々」、『共同通信配信記事』、共同通信社、2019.6

「古典をもっと、ずっと開かれたものに」、『カドブン』、KADOKAWA、2019.6.21

「言葉の主題化：広告コピーが豊かな表情を宿すのはなぜか」、『販促会議』2019 年 8 月号 (256号)、67-70 頁、2019.7.1

「もろさ認め、言葉に責任を」、『共同通信配信記事』、共同通信社、2019.8

「運に向き合い、倫理を問いなおす——『不道徳的倫理学講義』(ちくま新書) 刊行を機に」、『週刊読書人』2019 年 9 月 6 日号 (第 3305 号)、2019.9.6

「感謝することの意味を考える。」、『アンドプレミアム』2020 年 1 月号 (&Premium No.73)、53 頁、マガジンハウス、2019.11.20

「ほんとうの言葉／それぞれの踏み跡」、『週刊読書人』第 3328 号、1-2 面、2020.2.21

(6) 受賞

国内、古田徹也、第 41 回サントリー学芸賞 (思想・歴史部門)、サントリー文化財団、2019.12.9

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

セミナー、朝日カルチャーセンター、「ウィトゲンシュタインの哲学問題：「言語」篇」、2018.7～2018.9

非常勤講師、専修大学、「倫理学概論」、2019.4～2020.3

非常勤講師、専修大学、「ゼミナール (1, 2, 3)」、2019.4～2020.3

放送大学、「経験論から言語哲学へ」、2019.4～

セミナー、朝日カルチャーセンター、「ウイトゲンシュタインの哲学問題：「倫理」篇」、2019.7～2019.9

非常勤講師、新潟大学、「倫理学」、2019.8

(2) 学会

国内、哲学会、一般会員、2018.11～

国内、日本倫理学会、評議員、2019.4～、年報編集委員・和辻賞選考委員、2019.9～

国内、実存思想協会、幹事会メンバー、2019.8～

06 宗教学宗教史学

教授 市川 裕 ICHIKAWA, Hiroshi

1. 略歴

- 1976年3月 東京大学法学部卒業（法学士）
- 1978年3月 東京大学大学院人文科学研究科修士課程修了（宗教学・宗教史学）
- 1982年7月 ヘブライ大学（エルサレム）人文学部タルムード学科特別生等（1985.7.）
- 1986年3月 東京大学大学院人文科学研究科博士課程単位取得退学
- 1986年5月 筑波大学哲学・思想系文部技官（～1990.8.）同講師（～1991.3.）
- 1991年4月 東京大学文学部助教授
- 2004年4月 東京大学大学院人文社会系研究科・文学部教授
- 1998年10月～11月 ポストン大学人文学部客員研究員
- 2019年3月 定年退職

2. 主な研究活動

a 専門分野

宗教史学・ユダヤ教

b 研究課題

継続して以下の3つの主要な課題に取り組み、成果は講義、講演、論文において主として反映させているが、とりわけ、2016年にイスラエルの発掘調査で、日本隊がイエス時代のシナゴグ遺構を発見したことにより、1番と2番に関する課題が2017年に科学研究費の課題として採択されて、研究を継続し、2019年度も研究科長の配慮によって定年による身分の喪失を免れて科研費使用が認められたのは大変ありがたいことであった。

- (1) 宗教的想像力の比較宗教学の構想：聖書とタルムードの宗教を基盤とするユダヤ教の宗教思想の特徴を、自由の精神の意義に重点を置いて宗教と法の基礎理論を構築し、これをモデルにして、他の古典的宗教との比較考察を行う。
- (2) イエス時代のユダヤ人社会に関する宗教史的研究：「旧約時代・中間時代・新約時代」という歴史分割をせずに、ヘレニズム・ローマの影響下における古代地中海世界の宗教として、ユダヤ宗教文化の特徴を把握する試みを行う。
- (3) 宗教学の観点から近現代を見直す作業：近代に遭遇したユダヤ教の葛藤と変容を研究の出発点として、近代の人間観、世界観を形成した啓蒙主義とロマン主義の今日的意義を考察し、現代世界の喫緊の課題の淵源とその解決のための枠組みを提示し、もって日本の近代の理念を再検討する。

c 概要と自己評価

- (1) 2017年度から始まった科学研究費基盤研究A「イスラエル国ガリラヤ地方の新出土シナゴグ資料に基づく一神教の宗教史再構築」では、本シナゴグの意義について、2018年7月のヨーロッパ・ユダヤ学会クラクフ大会において研究発表を行い、成果を国際的に発信することができた。
- (2) 2015（平成27）年8月に国際宗教史学会（於エアフルト大学）で行ったパネル発表「Change of Religious Consciousness under the Roman Empire: Animal Sacrifice and its Substitution」を通して、同学会の実行委員長でエアフルト大学教授のJ・リュプケ氏と交流が実現し、2018年9月に、東京大学へ招へいし、2日間にわたるシンポジウムを開催できた。ここでは、主として、リュプケ氏が提唱している「生きられた古代宗教 Lived Ancient Religion」の概念と構想を学ぶとともに、そこに伏在する問題点を指摘して、今後の私たちの科研費課題の推進を促すことを目的として行われた。本招聘期間中に、日本宗教学会学術大会で開催校主宰の英語パネルでリュプケ氏を交えて「環地中海世界の宗教理解」をテーマに議論し、また、氏は、京都の同志社大学で「都市の宗教をめぐる講演」を行った。
- (3) 2018年度中に、古代から現代にわたるユダヤ人とユダヤ教に関する一貫向けの学術書を執筆して、2019年1月に、『ユダヤ人とユダヤ教』岩波新書としての出版した。これは、自身初となるユダヤ教概説書であり、定年の機会に出版できたことは、研究の一つのけじめとして幸運であった。

d 主要業績

(1) 著書

市川裕、『ユダヤ人とユダヤ教』、岩波新書、2019.1

市川裕、「ユダヤ教正統主義におけるコスモスとアンチコスモス」、澤井義次・鎌田繁編『井筒俊彦の東洋哲学』、慶応大学出版会、2018.9、(分担執筆) 53-78 頁
市川裕、「タルムードと日本文化」、東大EMP・中島隆博編『心と存在』(世界の語り方1)、東京大学出版会、2018.9、(分担執筆) 203-239 頁

(2) 学会発表

国際、Hiroshi Ichikawa, “The Historical Significance of a Newly Discovered Synagogue in Galilee, Israel,” The XIth Congress of the European Association for Jewish Studies, Krakow, 2018.7
国内、市川裕、「近代ユダヤ教正統主義におけるコスモスとアンチコスモス」、日本宗教学会第77回学術大会パネル「井筒「東洋哲学」の地平と宗教研究」、大谷大学、2018.9、(『宗教研究』92別冊(2019年)、45-46頁)
国内、市川裕、講演「古代ユダヤ教の贖罪と悔い改め一心の内と儀礼」、日本聖書学研究所公開講座「『贖罪』とは何か?」、日本聖書神学校、2018.11

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

非常勤講師、聖心女子大学、「キリスト教学特講IV」、2018.1~2019.12
非常勤講師、東京藝術大学、「宗教学」、2018.7~9、2019.7~9
兼任講師、立教大学大学院、「古代イスラエル史」、2018.4~9

(2) 学外組織(学協会、省庁を除く)委員・役員

三菱財団、人文科学部門評価委員、2018.1~2018.9
ラボ国際交流センター、評議員、2018.1~2019.12
日本宗教学会、常務理事、2018.1~2019.12
日本聖書学研究所、役員、2018.1~2019.12
日本ユダヤ学会、理事長、2018.1~2019.12
京都ユダヤ思想学会、日本オリエント学会、会員、2018.1~2019.12

教授 **池澤 優** IKEZAWA, Masaru

1. 略歴

1982年3月	東京大学文学部I類宗教学宗教史学専門課程卒業
1982年4月	東京大学大学院人文科学研究科宗教学宗教史学専攻修士課程入学
1984年3月	東京大学大学院人文科学研究科宗教学宗教史学専攻修士課程修了
1984年4月	東京大学大学院人文科学研究科宗教学宗教史学専攻博士課程進学
1987年9月	ブリティッシュ・コロンビア大学アジア学科大学院博士課程(カナダ・ヴァンクーバー)入学
1990年8月	東京大学大学院人文科学研究科宗教学宗教史学専攻博士課程退学
1990年8月	筑波大学地域研究研究科文部技官、哲学思想学系準研究員就任
1993年4月	筑波大学地域研究研究科(哲学思想学系)助手昇進
1994年5月	ブリティッシュ・コロンビア大学アジア学科大学院博士課程修了
1995年4月	東京大学大学院人文社会系大学院宗教学宗教史学研究室助教授転任
2007年4月	同准教授(名称変更)
2009年4月	同教授
2011年4月	東京大学大学院人文社会系研究科死生学・応用倫理センター長(兼任)

2. 主な研究活動

a 専門分野

中国古代宗教研究、祖先崇拜研究、死生学研究、生命倫理研究、応用倫理研究

死者にかかわる思想、表象、儀礼を比較文化的視点から考察することを中心的な目的とし、その目的の下に具体的な研究テーマを以下のように設定する。(A)「死者性」という概念(我々が死者をどのような存在として認識しているのか、また我々が死者とどのような関係を持っているのか、死者に対するイメージと記憶)をキーワードとして、宗教/世俗の枠を越えた死生学を構築することを目指した上で、具体的研究対象として、(B)古代中国における死ならびに死者に対する観念と儀礼の背後にある宗教的宇宙観と救済論、歴史を明らかにすること、(C)現代の生命倫理をめぐる言説の中に、死と死者に関わる考え方がどのように反映しているかを明らかにすること、という二つを設定し、その上で(D)伝統的な宗教的な価値観や感覚が、宗教という形態をとらずに現代社会に浸透している様を考えることを目指している。

b 研究課題

具体的な研究課題は以下のように区分できる。

まず、「死者性」概念に基づく死生学研究(上記(A))にかかわる分野として

- (1) 死生学の研究史とその理論構築、および死生学の比較文化論的研究。
- (2) 祖先崇拜の理論研究ならびに比較文化的研究。

次に、中国古代における死ならびに死者に関する研究(上記(B))にかかわる分野として

- (3) 殷・周・春秋時代の出土文字資料(甲骨・金文)を用いた中国古代宗教研究。
- (4) 戦国・秦・漢時代の出土文字資料(簡牘・帛書)を用いた中国古代宗教研究。
- (5) 戦国・秦・漢時代の儒家の「孝」文献に関する研究。
- (6) 戦国・秦・漢時代の儒家文献を用いた葬送儀礼、祖先祭祀研究。
- (7) 漢代の墓葬文書(告地策・鎮墓文・画像石・墓碑)に関する研究。
- (8) 殷周～隋唐時代における「死者性」の変化をあとづける宗教史学的研究。

現代の生命倫理に関する研究(上記(C))として

- (9) 生命倫理言説の文化性に関する研究。
- (10) 現代中国における生命倫理・医療倫理言説に関する研究。
- (11) 伝統的中国医学(漢方)の医療倫理に関する研究。

伝統的価値観の現代における浸透の研究(上記(D))として

- (12) 応用倫理という領域に宗教が与えている影響に関する研究。

c 概要と自己評価

この内、(2)(3)(5)は2001年度発刊の著書の中で系統的に見解を述べることができた。(1)(4)(6)(7)(8)(9)(10)についても、既に相当程度、体系的に研究を発表してきている。現在は(1)(9)(10)(12)が最も関心を持っている分野になっている。一方、(11)は未だに萌芽的な研究にとどまっており、なかなか進展していない。中国の生命倫理、医療倫理に関する専門家は日本には殆どいないのが現状であり、その研究の意味は大きいと考えるので、その分野の研究に積極的に取り組んでいきたい。

d 主要業績

(1) 著書

編著、池澤優、『政治化する宗教、宗教化する政治(いま宗教に向きあう4)』、岩波書店、2018.12

(2) 論文

池澤優、「『儀礼』少牢饋食の祖先祭祀」、『東京大学宗教学年報』、2017、1-24頁、2018.3

池澤優、「中国文化における生命倫理」、『東洋学術研究』、第57巻第1号、88-116頁、2018.5

共著、池澤優、「井筒「東洋哲学」の現代的意義—兼ねて郭店『老子』と『太一生水』を論ず」、澤井義次・鎌田繁編『井筒俊彦の東洋哲学』、慶応大学出版会、2018.9

池澤優、国際シンポジウム「東アジアの死生学—超高齢化と死にゆくこと」趣旨説明、『死生学・応用倫理研究』、第24号、10-16頁、2019.3

IKEZAWA, Masaru “The Development of Thanatology in Japan and its Position in East Asia, with a Focus on Thanatology’s Relationship to Religion,” *Numen* 66, p.114-138, 2019.4

池澤優「井筒俊彦は宋代儒学のテキストをどのように読んだのか」、澤井義次編『井筒・東洋哲学の展開に関する比較宗教学的検討』(平成29年度～令和元年度科学研究費助成事業・基盤研究(B)研究活動報告書、課題番号17H02278)、191-206頁、2020.3

池澤優「死生学再考—フランクフルトとベッカーを軸にして」、『死生学・応用倫理研究』第25号、9-40頁、2020.3

(3) 学会発表

国内、池澤優、「死生学とは何か?—フランクフルトとベッカーを軸にサナトロジーを再考する」、東京大学文学部上廣死生学・応用倫理講座主催「医療・介護従事者のための死生学夏季セミナー」、2018.8.19

(4) 会議主催(チェア他)

国際、「東アジアの死生学—超高齢化と死にゆくこと」、主催、東京大学文学部三番大教室、2018.11.23

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

國學院大學非常勤講師、2004.4～

(2) 学会

日本生命倫理学会、評議員

日本宗教学会、理事

中國出土資料學會、理事

東方学会、評議員

(3) 行政

東京大学認定臨床研究審査委員会委員

東京大学医学部附属病院法的脳死判定委員会委員

教授 藤原 聖子 FUJIWARA, Satoko

1. 略歴

1986年3月	東京大学文学部宗教学宗教史学専門課程 卒業
1986年4月	東京大学大学院人文科学研究科宗教学宗教史学専攻修士課程 入学
1988年3月	東京大学大学院人文科学研究科宗教学宗教史学専攻修士課程 修了
1988年4月	東京大学大学院人文科学研究科宗教学宗教史学専攻博士課程 進学
1991年9月	シカゴ大学大学院ディヴィニティ・スクール宗教史専攻留学(至1994年6月)
1995年12月	東京大学大学院人文科学研究科宗教学宗教史学専攻博士課程単位取得退学
1996年1月	日本学術振興会特別研究員(至1998年12月)
2001年4月	大正大学文学部国際文化学科助教授
2006年4月	大正大学文学部表現文化学科教授
2010年4月	大正大学文学部人文学科教授
2011年4月	東京大学大学院人文社会系研究科基礎文化研究専攻宗教学宗教史学専門分野准教授
2017年4月	同教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

宗教学(理論研究・比較研究)、宗教と教育の関係、アメリカの宗教

宗教学の基礎でありながら、20世紀後半以降、方法として成立し難くなった「比較」に注目し、その観点から理論研究を行うとともに、ケーススタディでは宗教と教育の関係、世界宗教史記述の問題を対象としている。

b 研究課題

宗教比較の方法、宗教史の記述について、学界ならびに一般社会に見られる問題とその背景・原因を洗い出し、具体的対案を提示することを課題とする。個々の課題設定は以下の通りである。

- (1) 比較理論の検討として、①欧米宗教学の変遷、②宗教分類概念の問題、③宗教に対する代替概念の問題をとりあげる。
 - ①「比較宗教学 comparative religion」から出発した欧米の宗教学とその基礎前提が、その後通時的・実証的研究を重視することによってどのように変化したかを調べる。人文的宗教学と社会科学的宗教学の制度的位置関係についても、その歴史的変遷過程を明らかにする。
 - ②「世界宗教」「民族宗教」の対概念をはじめ、宗教学で伝統的に用いられてきた宗教分類概念の妥当性を、昨今の批判理論に照らして検討する。
 - ③2000年代以降の宗教現象を分析するために、ポスト・セキュラー論・概念がしばしば用いられるようになったが、それは日本の現状をとらえるのにどこまで有効かを検討する。
- (2) 近現代社会の公教育において宗教がどう扱われてきたかに関する歴史的研究を行う。
ある国の公教育では宗教が排除される、他の国では宗教が取り込まれるという現象を、単に「宗教教育の有無」や「政教分離の有無」として見るのではなく、排除・吸収どちらの場合でもその前提として公権力により「宗教」が定義されているということに注目し、各国の教育制度と法令・教科書の中にその表れを探る。一般概念としての「宗教」のみならず、キリスト教、仏教といった各宗教に関する記述と、教育方法・思想や当該国の宗教・社会情勢の関係を調べる。
- (3) (2)の研究成果を踏まえ、国内の公教育における宗教の描き方・教え方に関する問題点を指摘し、改善のための具体的方策を示す。対象は中等教育から高等教育、社会人教育を含む。

c 概要と自己評価

上記の(1)(2)(3)の課題にはほぼ同時進行で取り組み、全てに関して書籍ないし論文によりまとめた成果を発表した (d 参照)。(1)の①②については国際ジャーナルに2本の英語論文を寄稿し、国内・海外で研究発表を行った。また、20世紀の比較宗教研究の代名詞であった、宗教現象学の受容と変容について10カ国の研究者の協力を得て調査を進めた。さらに、国際哲学・人文学会議(CIPSH)のGlobal History of the Humankindプロジェクト委員会に加わり、学際的な視野から世界宗教史記述を再検討するためのプラットフォームづくりに取り組んだ。③についてはライプチヒ大学をハブとするMultiple Secularitiesプロジェクトのワークショップに参加し、その成果として国際ジャーナルに英語論文を寄稿した。また、21世紀の宗教情勢を俯瞰するシリーズ(全4巻)の編集に携わり、その第3巻を編集・執筆した。(2)の宗教と公教育のテーマについては国際学会での口頭発表の他、イギリスとアジア諸国の状況についてモノグラフを2本、論文集と国際ジャーナルに寄稿した。(3)については上述の編著をまとめたほか、国際学会で口頭発表を行った。

d 主要業績

(1) 著書

編著、藤原聖子、『世俗化後のグローバル宗教事情(いま宗教に向きあう3)』、岩波書店、2018.11

(2) 論文

Satoko Fujiwara, "Buddhism in RE Textbooks in England: Before Shap and After the Call for Community Cohesion," *Religion & Education*, 46/2, pp.234-251, 2019 (published online 2018.6)

藤原聖子、「公共宗教論を規定していたもの—「法律—権利問題化」と「経済—市場原理化」に翻弄される宗教と宗教言説—」、『思想』、no.1139、2019.3

Satoko Fujiwara, "Introduction: What Are the Issues in the 2010s?: An Overview of the Current Study of Religions in Japan," *Numen*, 66/2-3, pp.107-113, 2019.4

Satoko Fujiwara, "The current Conflict of the Faculties and the future of the study of religion/s," *Religion*, 50/1, pp.53-59, 2019.10

Satoko Fujiwara, "How Religious Diversity Is Represented and Taught in Asian School Textbooks," in *Religious Diversity in Asia*, ed. by Jom Borup, Marianne Qvortrup Fibiger, and Lene Kuhle, Leiden: Brill, pp.193-220, 2019.10

Satoko Fujiwara, "Practicing Belonging?: Non-religiousness in Twenty-First Century Japan," *Journal of Religion in Japan*, 8/1-3, pp.123-150, 2019.12

(3) 学会発表

国際、Satoko Fujiwara, "'Religious Secularities' in Recent Japanese Youth Culture," Workshop on Secularities in Japan, U of Leipzig, Germany, 2018.7.19

国際、Satoko Fujiwara, "Between the North and the South: The History of the Study of African Religions in Japan," 8th Conference of the African Association for the Study of Religions, Lusaka, Zambia, 2018.8.2

国内、藤原聖子、「宗教学会の状況—他分野学会と比較して—」、日本宗教学会、京都 大谷大学、2018.9.9

国内、Satoko Fujiwara, "Comments and Feedbacks," U-PAR 後援シンポジウム Secular Religiosity and Religious Secularity: Rethinking the Asian Agency in the Shaping of Modernity, U of Tokyo, 2018.3.9

国際、Satoko Fujiwara, “How Religious Diversity Is Represented and Taught in Asian School Textbooks,” 8th Conference of the South and Southeast Asian Association for the Study of Religions, Dhaka, Bangladesh, 2019.6.13

国内、藤原聖子、「世界宗教」と宗教学」、東京カレッジシンポジウム、東京大学、2019.7.10

国際、Satoko Fujiwara, “The Problem of Another World Religions Paradigm: Only in Japan, or?,” 33. Jahrestagung der Deutsche Vereinigung für Religionswissenschaft, Hannover, Germany, 2019.9.4

国内、Satoko Fujiwara, participation in the wrap-up session/chair of German-Japanese Joint Symposium “Cultures in Translation: World History – World Literature – World Society: Japan, Germany and the World in a Transcultural Comparison” co-hosted by German Research Foundation (Deutsche Forschungsgemeinschaft, DFG) and Section I, Humanities and Social Sciences, Science Council of Japan (SCJ). 東京大学、2019.10.10-11

国際、Satoko Fujiwara, “Humanities Futures 2: Diversity & Equity,” International Humanities Summit, hosted by Australian Academy of the Humanities, Brisbane, Australia, 2019.11.12

(4) 会議主催、チェア他

国際、IAHR Extended Executive Committee Meeting (host & chair), Delphi, Greece, 2019.9.11-17

国内、F・W・グラーフ教授特別講演会（司会）、東京大学、2019.10.14

国際、”Making the Most of International Collaboration: 2020 IAHR Otago and Beyond” (cochair), American Academy of Religion, San Diego, USA, 2019.11.2

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

セミナー、国際学生会議、「Thinking Critically of “Religious Violence”」、2018.8

セミナー、かわさき市民アカデミー、「AIは天国・地獄を信じるか?」、2018.10

(2) 学会

国内、日本宗教学会、常務理事、2019.9～

日本宗教研究諸学会連合、幹事、2014.12～

国際、International Association for the History of Religions, Publications Officer, 2015.8～2020.8, Acting Secretary General, 2017.7～2020.8

国際、American Academy of Religion, steering committee member of the program unit, Religion and Public Schools: International Perspective Group, 2015.11～

国際、American Academy of Religion, International Connections Committee member, 2017.11～

学術誌編集委員

British Journal of Religious Education (2006～)

Numen (2010～)

Religion and Education (2011～)

Journal of Religion in Japan (2012～)

(3) 学外組織(学協会、省庁を除く)委員・役員

日本学術会議、第一部副部長、2017.10

サイエンスアゴラ (科学技術振興機構)、審査委員、2017.4～2019.3

民間企業、一般財団法人公正研究推進協会、教材査読委員、2019.3～

1. 略歴

1997年3月	東京大学文学部思想文化学科宗教学宗教史学専修課程 卒業
1997年4月	東京大学大学院人文社会系研究科基礎文化研究専攻宗教学宗教史学専門分野修士課程 入学
1999年3月	東京大学大学院人文社会系研究科基礎文化研究専攻宗教学宗教史学専門分野修士課程 修了
1999年4月	東京大学大学院人文社会系研究科基礎文化研究専攻宗教学宗教史学専門分野博士課程 進学
2001年4月	日本学術振興会特別研究員DC2（東京大学、至2003年3月）
2002年3月	東京大学大学院人文社会系研究科基礎文化研究専攻宗教学宗教史学専門分野博士課程 単位取得退学
2003年4月	日本学術振興会特別研究員PD（九州大学、至2004年3月）
2004年4月	鹿児島大学法文学部人文学科助教授
2007年4月	鹿児島大学法文学部人文学科准教授
2012年9月	ハワイ大学マノア校歴史学科客員研究員・米国防務省東西センター太平洋諸島開発プログラム 客員研究員（フルブライト奨学金研究員プログラム、至2013年2月）
2013年4月	東京大学大学院人文社会系研究科基礎文化研究専攻宗教学宗教史学専門分野准教授
2019年4月	東京大学大学院人文社会系研究科文化資源学専攻兼担

2. 主な研究活動

a 専門分野

宗教史学・宗教学・宗教人類学・宗教民俗学・慰霊・死者儀礼の継承、日本と太平洋域の宗教文化

主な研究活動は大きく以下の3つのテーマ群についてである。

(A)戦争や災害による犠牲者に対する態度、(B)現代の地域社会における宗教生活と日常生活の関係性、(C)島嶼と半島におけるダイナミックな人的交流と宗教接触、(D)世俗的空間における宗教性の表出

b 研究課題

具体的な研究課題は以下のとおりである。

(1) 「(A) 戦争や災害による犠牲者に対する態度」に関わる研究

遺骨収集・戦地慰霊において、遺族や戦友といった戦死者を取り巻く直接的関係者ばかりではなく、宗教者・旅行業者・行政といった第三者がどのように関与するかをめぐる問題と、次世代へどのように継承されようとしているかをめぐる問題について調査・考察を行っている。その際、日本人による遺骨収集や戦地慰霊の状況と米豪や太平洋諸島の状況との国際比較、次世代継承に関する宗教体験の伝承や宗教組織の継承などとの比較、戦地慰霊に関する聖地巡礼との比較を行っている。

(2) 「(B) 近現代の地域社会における宗教生活と日常生活の関係性」に関わる研究

九州をおもなフィールドとして、近現代の地域社会のなかで人びとがどのような信仰実践や宗教的行為を行ったかについて、そうした実践を支える日常生活とともに調査・考察している。とりわけ、民俗社会を基盤とした地域が、戦争や公害、自然災害などの歴史的経験からのレジリエンス（回復力）をどのように発揮しているかということについて、博士論文で取り上げた長崎の原爆慰霊を視野に入れながら考察しようとしている。

(3) 「(C) 島嶼と半島におけるダイナミックな人的交流と宗教接触」に関わる研究

奄美群島とマイクロネシア地域を主な対象としながら、大航海時代以降のヨーロッパ人のグローバルな移動に端を発する人的な交流の活発化のなかで宗教的接触状況が地域の宗教性のあり方にどのような影響を及ぼしているのかについて比較宗教的な理解を目指している。

(4) 「(D) 世俗的空間における宗教性の表出」に関わる研究

博物館・美術館における宗教的文物の展示をめぐる社会関係と、世俗的な戦争博物館・平和資料館等における慰霊・追悼の側面の考察を通して、ミュージアムという世俗的空間において、現代人の宗教性がどのように表出しているのか（あるいはしていないのか）を考察しようとしている。

c 概要と自己評価

(1)は博士論文の研究課題の延長上にあるものだが、対象地域の拡大と継承という宗教学的テーマへの深化を図りつつある状況である。2010～12年度に代表を務めた科研費基盤研究と、2012年度に滞在したハワイ大学での研究によって研究内容も研究ネットワークもさらなる展望が開けつつある。2018年度中に単著としてまとめる予定である。

(2)(3)はさまざまな研究プロジェクトへの関わりから徐々に輪郭が浮かびつつある、ポスト博士論文の研究テーマであるが、現状としては単発のモノグラフや翻訳の作業にとどまっている。しかし将来的には九州を窓口としてアジア・太平洋域を視野に入れた日本宗教史の構想につながる研究であるという認識で進めている。

(4)は近年着手したもので、共著の論文集におけるモノグラフを数本刊行予定であるが、2019年度から兼担となった文化資源学との連携によって、今後の積極的な進展をめざしたい。

d 主要業績

(1) 著書

- 共著、菅豊・北條勝貴編、『パブリック・ヒストリー入門—開かれた歴史学への挑戦』、勉誠出版、2019.11
共著、堀江宗正編、『宗教と社会の戦後史』東京大学出版会、2019.2
共著、大谷栄一・菊地暁・永岡崇編著、『日本宗教史のキーワード—近代主義を超えて』、慶應義塾大学出版会、2018.8
編著、西村明、『いま宗教に向きあう2 隠される宗教、顕れる宗教』、岩波書店、2018.10
共著、田中雅一・松嶋健編、『トラウマ研究1 ト라우マを生きる』、京都大学学術出版会、2018.11

(2) 論文

- Akira Nishimura, "The Commemoration of the War Dead in Modern Japan," *NUMEN*, 66(2-3), 2019.4
西村明「ローカルな信念世界への接近—宗像巖の水俣論とフィールドワーク」『東京大学宗教学年報』36、2019.3

(3) 解説

- 西村明、「宗教からみる戦争」特集企画について『戦争社会学研究』、3、2019.6
西村明、「日戦地に残されたもの—特集のねらいと補助線」、『戦争社会学研究』、2、156-160頁、2018.6

3. 主な社会活動

(1) 学会

- 国内、日本宗教学会、理事
国内、戦争社会学研究会、会長、2018.4～2020.4

准教授 **渡辺 優** WATANABE, Yu

1. 略歴

- 2000年4月 東京大学教養学部文科Ⅲ類 入学
2002年4月 東京大学文学部思想文化学科宗教学宗教史学専修課程 進学
2004年3月 東京大学文学部思想文化学科宗教学宗教史学専修課程 卒業
2004年4月 東京大学大学院人文社会系研究科宗教学宗教史学専門分野修士課程 入学
2007年3月 東京大学大学院人文社会系研究科宗教学宗教史学専門分野修士課程 修了
2007年4月 東京大学大学院人文社会系研究科宗教学宗教史学専門分野博士課程 進学
2009年4月 日本学術振興会特別研究員 (DC2) (東京大学、～2011年3月)
2010年6月 サントル・セーヴルーパリ・イエズス会神学部 (日本学術振興会優秀若手研究者海外派遣事業 (第二回) による海外派遣、～2011年3月)
2011年9月 フランス国立社会科学高等研究院 (EHESS) 博士課程 入学
2011年9月 フランス政府給費留学生 (フランス国立社会科学高等研究院、～2013年7月)
2012年7月 東京大学大学院人文社会系研究科宗教学宗教史学専門分野博士課程 単位取得退学
2012年8月 東京大学大学院次世代人文学開発センター研究員 (～2013年3月)
2014年4月 天理大学人間学部宗教学科 専任講師
2014年11月 博士 (文学)、東京大学
2015年4月 フランス国立社会科学高等研究院 (EHESS) 博士課程 退学
2019年4月 東京大学大学院人文社会系研究科 准教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

西洋近世神秘主義、神秘主義概念の系譜学的研究、現代宗教思想・宗教哲学

17世紀フランスを中心に、近世西欧カトリック圏に興隆した「神秘主義 (la mystique)」と呼ばれる思想潮流を研究している。近世神秘主義文献に沈潜するとともに、「神秘主義」概念を思想史上に再定位し、さらには神秘主義と現代「宗教」思想とを関連させつつ新しく捉えなおす可能性を探求している。

b 研究課題

(1) 近世西欧神秘主義思想史に関わる研究

博士論文以来の研究課題である17世紀フランス神秘主義、ジャン＝ジョゼフ・スュラン研究を軸としながら、中世後期の北方(ライン、フランドル)神秘思想、また16世紀スペイン神秘主義との接続を図り、連続性と断絶性を明らかにすること、それによって西洋近代という時代の特徴を宗教史の観点から問うこと。また、16世紀スペインの神秘家十字架のヨハネをはじめとする神秘主義の信仰論を焦点に、近世近代における解釈の諸相を追うことによって、近代以降の西洋における神秘主義のゆくえを見通すこと。

(2) 「神秘主義」概念の再定位

19世紀以降宗教学の重要概念となった「神秘主義 (mysticism)」の歴史性を、近現代の宗教をめぐる学知の全体的構造のなかに位置づけるとともに、とくに近世神秘主義との連続と断絶という視点から明確化すること。また、広く「神秘」をめぐる思想や実践の変遷を西洋古代から辿り、重要な局面を検討することで、神秘をめぐる知のありかたを系譜学的に理解すること。

(3) 現代宗教思想と神秘主義、現代世界における信仰の条件の再検討

現代に宗教や信仰の条件をラディカルに問いなおす思想や哲学がしばしば神秘主義と接点をもつことを論点化し、(2)とも関連させて神秘主義を「他なるもの」を語ろうとするラディカルな知として捉えなおすこと。また、脱宗教化する西洋世界で信仰の条件がいかなる変化を遂げているかを明らかにすること。より具体的には、現代的な神秘主義研究に新境地を開いたミシェル・ド・セルトーの神学を、ポスト世俗主義の宗教論として解釈すること。さらには、近代日本に発生した民衆宗教思想(天理教)の再検討を通じて、近現代社会の宗教や信仰への眼差しを反省的に吟味すること。

c 概要と自己評価

(1)については、4つの研究発表を行い、論文1本にまとめた。科学研究費若手研究B「近世西欧神秘主義の信仰論をめぐる系譜学的・宗教哲学的研究」で焦点化した信仰論を起点に、近世から近現代へと研究の領域を連続的に広げる見直しをつけることができた。(2)については、まだ着手したばかりの段階で、具体的な成果を出していくのはこれからだが、思想史や哲学研究との交錯も視野に入れた神秘主義研究の基盤整備のためにも今後注力すべき課題と考えている。神秘主義の系譜を概観する単著(入門書)を1、2年間にまとめる予定である。(3)については、3つの研究発表を行い、論文3本を刊行した。長年取り組んでいるセルトーの翻訳書の完成を急ぎたい。(1)~(3)のいずれにも言えるが、外国語による研究成果の発表にも力を入れたいと考えている。

d 主要業績

(1) 論文

Yu WATANABE, 「The Joy of the Beginning: A Study on the 'Eight Verses of the Yorozuyo」, 『Tenri Journal of Religion』、46、1-24頁、2018.3

渡辺優, 「「パロール」とそのゆくえーミシェル・ド・セルトーにおける宗教言語論の輪郭」, 『天理大学学報』、249、1-28頁、2018.10

渡辺優, 「魂の根底の溶解?ー中世北方神秘思想と近世フランス神秘主義のあいだ (1)」, 『東京大学宗教学年報』、36、17-32頁、2019.3

渡辺優, 「教学と宗教学の幸福な結婚?ー天理教二代真柱・中山正善における教祖論めぐって」, 『天理大学学報』、71、1-23頁、2019.10

(2) 学会発表

国内、渡辺優, 「来るべき天理教学のためにー現代教学・神学の条件」, 天理大学附属おやさと研究所第308回研究報告会、2018.1.31

国内、渡辺優, 「「暗夜の信仰」の知の系譜学」, 平成30年度土井道子記念京都哲学基金シンポジウム「信と知ー今日における」, 2018.9.3

国内、渡辺優, 「17世紀フランス神秘主義における十字架のヨハネ」, 日本宗教学会第77回学術大会、2018.9.8

国内、渡辺優, 「神秘主義の知のありか」, 第54回文化交流茶話会、2019.7.4

国内、渡辺優、「17世紀フランスにおける神秘主義的信仰論の諸相—十字架のヨハネの「暗夜」の教説をめぐって」、
フランス近世の〈知脈〉第4回研究会、2019.8.1

国内、渡辺優、「ギュイヨン夫人と信仰の間」、日本宗教学会第78回学術大会、2019.9.15

国際、渡辺優、「キリスト教の破碎／燦めき—現代カトリックの危機とミシェル・ド・セルトー」、危機の時代のスピリチュアリティ（日仏文化講座）、2019.10.19

(3) 受賞

国内、渡辺優、2018年度天理大学学長褒賞、天理大学、2018.4.23

(4) 翻訳

共訳、Régine Azria, Danièle Hervieu-Léger eds., "Dictionnaire des faits religieux", 増田一夫・伊達聖伸・鶴岡賀雄・杉村靖彦・長井伸二（編訳）、『宗教事象事典』（渡辺担当箇所：「回心・改宗」「伝統、伝統主義、新・伝統主義」）、2019.5

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

特別講演、天理日仏文化協会、「信仰の闇の彼方—17世紀フランスのイエズス会士ジャン=ジョゼフ・スユランの神秘主義」、2018.3

特別講演、大阪市阿倍野市民センター、「暗夜の信仰—キリスト教神秘主義の隠れた主題とその現代的可能性」、2018.5

特別講演、宇都宮美術館、「Rouault mystique? —世俗化と神秘主義の時代のキリスト教画家」、2018.8

特別講演、東京天理文化会議、「教祖論の可能性」、2019.6

天理大学大学院宗教文化研究科非常勤講師、2019.4～2020.3

(2) 学会

国内、日本宗教学会、評議員、2019.9～

07 美学芸術学

教授 渡辺 裕 WATANABE, Hiroshi

1. 略歴

1972年3月	千葉県立千葉高校卒業
1977年3月	東京大学文学部第1類（美学芸術学専修課程）卒業
1980年3月	東京大学大学院人文科学研究科修士課程（美学芸術学）修了
1983年7月	東京大学大学院人文科学研究科博士課程（美学芸術学）単位取得退学
1983年7月	東京大学文学部助手（美学芸術学）
1986年4月	玉川大学文学部専任講師（芸術学科）
1991年4月	玉川大学文学部助教授
1992年4月	大阪大学文学部助教授（音楽学）
1996年4月	東京大学大学院人文社会系研究科助教授（美学芸術学）
2001年7月	博士（文学）学位取得（東京大学）
2002年1月	東京大学大学院人文社会系研究科教授
2019年3月	定年退職

2. 主な研究活動

a 専門分野

聴覚文化論, 音楽社会史

b 研究課題

1. 音の文化の伝承, 受容, 流用にかかわるプロセスとメカニズムの歴史研究による解明。これまで, 音楽を「文化」として捉えるという観点から, 西洋芸術音楽の「近代化」とテクノロジー, 西洋芸術音楽における演奏伝統の形成とその伝承メカニズム, 日本近代の音楽文化におけるメディアや言説といったテーマでの研究を進めてきたが, 最近では「音楽」という枠をこえて, 「音楽」以外の音も含めた様々な音が形作る「音の文化」の研究を軸に, 「感性文化」という観点から, 人々の形作ってきた歴史を描き直す試みを行っている。
2. 「聴覚文化」という観点からの日本戦後史の再検討。上記の問題意識をふまえた一種の応用問題として, 現在は「1968年」を中心とした日本戦後史を「感性文化」の変化の歴史として捉え直す研究に取り組んでいる。「1968年」は近年, 戦後史の転換点となった年として注目されているが, この前後の時期は, 政治的な意味での転換点にとどまらず, 人々の感性のあり方や志向が大きく変化した時期でもあったのではないだろうか。そのような問題意識をふまえつつ, 同時代のドキュメンタリー音源, ドキュメンタリー映像やそれに関わる様々な言説などを主要な題材として, その変化についての分析を進めている。
3. 場所の表象, 記憶の生成・変容のメカニズムやそれに関わる多様な文化的コンテクストの相互作用の解明および芸術作品や感性的体験がその過程で果たす役割の考察。作品体験と現実の都市の表象とを媒介する場としての文学散歩, 映画のロケ地巡りといった営みの考察, 廃墟趣味や路上観察の見直し等の試みを起点に, 主に写真や映像による表象の分析を通して, 様々な立場や観点がぶつかり合い, また離合集散しつつ変容してゆく場としての文化のありようを捉えることを目指している。

c 概要と自己評価

上記研究課題の2にあたる日本戦後史研究の成果は, 2017年4月に『感性文化論—〈終わり〉と〈はじまり〉の戦後昭和史』として上梓することができた。2013年度から2016年度まで行ってきた共同研究（科学研究費基盤研究（B）（「聴覚文化・視覚文化の歴史からみた『1968年』: 日本戦後史再考」, 課題番号25284036, 研究代表者: 渡辺裕）の中で私自身が進めてきた仕事を中心に, 新たな知見として提示し得たことで, とりあえずほっとしている。今回まとめたものを出発点に, 感性文化論的な枠組みで文化史全体を見直すというより大きなプロジェクトとして, 今後さらに本格的に展開してゆくことが必要だと考えている。さらに, 上記の3.に関するこれまでの研究も『まちあるき文化考—交差する〈都市〉と〈物語〉』としてまとめ, 2019年3月の定年退職に間に合うタイミングで刊行することができた。本学在職時の研究の主要なものについては, これで一通り活字化を終え, その総括を果たすことができたと考えている。

d 主要業績

(1) 著書 (単著)

『まちあるき文化考—交差する〈都市〉と〈物語〉』, 春秋社, 2019.3, 384p.

(2) 著書 (共著)

『大正=歴史の踊り場とは何か—現代の起点を探る』 (鷺田清一編著, 佐々木幹郎・山室信一・渡辺裕著), 講談社, 2018.5, 268p. *執筆部分は, 「趣味・娯楽」(pp.80-106), 「校歌」(pp.162-183), 「正調」(pp.116-119), 「公園」(pp.243-246)

(3) 小論

「『空耳』文化のすすめ」, 『アステイオン』第88号, CCCメディアハウス, 2018.5, pp.132-135

「『校歌』以前の校歌?」, 『アステイオン』第89号, CCCメディアハウス, 2018.11, pp.146-149

3. 主な社会活動

(1) 非常勤講師

お茶の水女子大学大学院人間文化創成科学研究科, 2018.10~2019.3

明治学院大学文学部, 2018.4~2018.9

(2) 学会

日本音楽学会, 会長, 2018.4~2019.3

美学会, 委員, 2018.4~2019.3

文化資源学会, 会員, 2018.4~2019.3

(3) 学外組織 (学協会, 省庁を除く) 委員・役員

サントリ文化財団, サントリ学芸賞選考委員, 2018.4~2019.3

明治学院大学図書館付属遠山一行記念日本近代音楽館, 収書委員, 2018.4~2019.3

文化庁, 芸術選奨選考審査員, 2018.4~2019.3

日本学術会議, 連携会員, 2018.4~2019.3

教授 小田部 胤久 OTABE, Tanehisa

1. 略歴

1977年3月 東京教育大学附属高等学校卒業

1977年4月 東京大学教養学部文科3類入学

1981年3月 東京大学文学部第一類 (美学芸術学専修課程) 卒業

1981年4月 東京大学大学院人文科学研究科 (美学芸術学専門課程) 修士課程入学

1984年3月 東京大学大学院人文科学研究科 (美学芸術学専門課程) 修士課程修了

1984年4月 東京大学大学院人文科学研究科 (美学芸術学専門課程) 博士課程進学

1988年9月 東京大学大学院人文科学研究科 (美学芸術学専門課程) 博士課程単位取得退学

(その間 1987年10月~1988年9月 DAAD (ドイツ学術交流会) 奨学生としてハンブルク大学に留学)

1992年10月 東京大学大学院人文科学研究科において博士 (文学) 取得

1988年10月 神戸大学助教授, 文学部 (哲学科芸術学専攻課程)

(その間 1990年10月~1991年8月 ハンブルク大学で研究)

1993年10月~ 神戸大学大学院文化学 (博士課程) 兼任

1996年4月 東京大学大学院人文社会系研究科 (美学芸術学専門課程) 助教授

2007年4月 東京大学大学院人文科学研究科 (美学芸術学専門課程) 教授

(その間 2008年10月~2009年9月 ドイツ連邦政府の招聘によりドイツにて研究)

2. 主な研究活動

a 専門分野

美学・芸術学の基本概念の研究、「感性の学」としての美学の歴史的再構成、18世紀から19世紀にかけてのドイツ語圏を中心とする美学理論の研究、20世紀前半におけるドイツと日本の美学交渉史の研究、および間文化的視点からの美学理論の構築

b 研究課題

第一に、2001年に公刊した『芸術の逆説——近代美学の成立』以来の研究の一環として、美学・芸術学の基本概念の研究に従事している。その一端は2009年に公刊した『西洋美学史』（東京大学出版会）において示した。この書物は、学説史研究の持ちうる現代的な意味を問う試みでもあり、この研究をその後も継続して行っている。

第二に、「感性の学」としての美学を歴史的に再構成し、現代の美学を刷新する作業に携わっている。これは数年後に『西洋美学史』第二巻として結実するはずのものである。この2年間はとりわけカントとヘルダーに即してこの主題を検討した。

第一、第二の研究課題とも関連するが、第三に、近代美学を基礎づけた書物と一般に見なされているカント『判断力批判』への新たな接近の試みに基づく美学の教科書の公刊に向けて、準備を進めた。これは2、3年以内に完成させたいと考えている。

第四に、昨今の「間文化性」への関心の増大に応じつつ、19世紀末から20世紀前半における日本の西洋美学の受容を「間文化性」の問題として扱う可能性を探る作業を継続している。

c 概要と自己評価

上記四つの課題に関して、この2年間はとりわけ第三の課題に多くの時間を割いた。本来ならばこの作業により集中すべきとも思ったが、国内外からいくつかの共同研究の誘いを引き受けたため、第三の課題に関しては前半部をどうにか完成させるにとどまった。だが、共同研究の誘いは研究上の視野を広げる意味もあるため、今後も可能な限り引き受けたいと考えている。

d 主要業績

(1) 論文

Tanehisa Otabe, 「The "Aesthetic Life": a Leitmotif in Modern Japanese Aesthetics」、『Contemporary Aesthetics』、Special V、2018

Tanehisa Otabe, 「Die "Einbildungskraft" und der "innere Sinn". Kants Kritik der Urteilskraft aus der Sicht der Aisthetik」、『Aesthetics』、2018.3

小田部胤久、「近代日本における「古典」概念の成立」、『美学芸術学研究』、36、171-90頁、2018.3

Tanehisa Otabe, 「Three Aspects of Being Aesthetic in Kant's CPJ: Becoming Aesthetically Conscious, Aesthetic Magnitude, and Aesthetic Ideas」、『JTLA』、42/43、61-67頁、2018.3

Tanehisa Otabe, 「Alexander Baumgarten, "Psychologia empirica" (§§ 504-623) aus der "Metaphysica", mit kritischem Apparat」、『JTLA』、42/43、69-94頁、2018.3

Tanehisa Otabe, 「An Iroquois in Paris and a Crusoe on a Desert Island: Kant's Aesthetics and the Process of Civilization」、『Culture and Dialogue』、6、35-50頁、2018.8

小田部胤久、「「生の技術」の行使される場としての「美的生」について——シラーの「美的教育」論への新たな接近——」、『美学芸術学研究』、37、123-138頁、2019.3

Tanehisa Otabe, 「The Significance of the Classics (koten) in Modern Japanese Aesthetics」、『JTLA』、44、2019.3

小田部胤久、「シェリング『芸術の哲学』における「範例性」と「独創性」——その歴史的文脈の体系的再構成の試み」、『シェリング年報』、27、60-70頁、2019.7

Tanehisa Otabe, 「"The Unconsciousness": Editor's Introduction」、『Journal of Aesthetics and Phenomenology』、Special Issue、2019.11

(2) 学会発表

国際、Tanehisa Otabe, 「"The I Think" and "the I Feel" in Kant's critique of the Power of Judgment」、Workshop: Feelings and Emotion in Philosophy、ユトレヒト大学、2018.3.17

国際、Tanehisa Otabe, 「Zur Genese einer am westlichen Klassik-Ideal orientierten Kunstgeschichtsschreibung in Japan」、Konzepte des Klassischen in Ostasiatischen Kulturen、ワイマール古典財団、2018.3.23

国内、小田部胤久、「近代日本における「古典」概念の成立——1880年から1920年まで——」、日本ヘルダー協会春期研究発表会、2018.5.12

- 国際、Tanehisa Otabe、『Minute Perceptions: Aesthetics in the Century of Empirical Psychology』、Neuronale Geisteswissenschaften und empirische Ästhetik、2019.5.18
- 国際、Tanehisa Otabe、「Das „Exemplarische“ und die „Originalität“ in der frühromantischen Ästhetik」、Wie theoriefähig ist die Frühromantik heute? Internationale germanistische Tagung、2019.6.28
- 国際、Tanehisa Otabe、「(Practical) Disinterestedness and (Aesthetic) Involvement: Kant's Aesthetic Theory Revisited」、International Congress of Aesthetics、Belgrade、2019.7.24
- 国際、Tanehisa Otabe、「Kunst und Leben in Schillers ästhetischer Theorie」、Das Unendliche endlich dargestellt. Schellings Philosophie der Kunst im Kontext der Ästhetik und Kunst um 1800、2019.10.9
- 国際、Tanehisa Otabe、「Zur Historiographie der ostasiatischen Kunstgeschichte unter den globalen Bedingungen」、Reflection on Culture and Art in the Age of Globalization、釜山 東亜大学、2019.11.28

(3) マスコミ

「人形を通して視線が重なる」、『みんなとプーク』、2018.4.15

3. 主な社会活動

(1) 学会

- 国内、日本シェリング協会、会長、2018.4～2020.3
- 国内、日本18世紀学会、代表幹事、2018.4～2019.7
- 国際、Culture and Dialogue、編集委員、2018.4～2020.3
- 国際、国際美学連盟、副事務局長、2018.4～2019.7
- 国際、国際シェリング協会、委員、2018.4～2020.3
- 国際、美學藝術學研究（韓国）、編集委員、2018.4～2020.3

(2) 学外組織 委員・役員

- 日本学術会議連携会員・哲学委員会幹事、2018.4～2020.3
- NPO アートセラピー研究所DAM 役員、2018.4～2019.3

教授 **三浦 俊彦** MIURA, Toshihiko

1. 略歴

- | | |
|---------|-------------------------------|
| 1983年3月 | 東京大学文学部美学芸術学専修課程卒業 |
| 1983年4月 | 同大学院総合文化研究科比較文学比較文化専門課程修士課程入学 |
| 1985年3月 | 同修士課程修了 |
| 1985年4月 | 同博士課程進学 |
| 1989年3月 | 同博士課程単位取得退学 |
| 1989年4月 | 和洋女子大学文家政学部英文学科専任講師 |
| 1994年4月 | 和洋女子大学文家政学部英文学科助教授 |
| 1998年4月 | 和洋女子大学人文学部国際社会学科助教授 |
| 2003年4月 | 和洋女子大学人文学部国際社会学科教授 |
| 2008年4月 | 和洋女子大学人文学部日本文学・文化学類教授 |
| 2015年4月 | 東京大学大学院人文社会系研究科教授 |

2. 主な研究活動

a 専門分野

分析哲学、美学

b 研究課題

フィクションの存在論の研究から出発し、虚構文の論理構造の解明から論理学の「可能世界」概念の応用へ、そして「可能世界」概念そのものの論理の研究へと進んだ。その過程で、自然科学の「多世界」「多宇宙」の概念と「可能世界」との関係の考察を迫られ、それらの概念に立脚した「人間原理」を方法的基盤とした諸議論の中で哲学問題を再構成する仕事を進めた。現在は、芸術の現状に対して人間原理的（進化論的）な説明を与え、見かけの法則性を観測選択効果へ還元する論理を追求しつつ、多分野を横断する「諸理論のネットワーク」の中に芸術定義論を位置付けるプロジェクトを進めている。

c 概要と自己評価

哲学問題を人間原理の観点から考察し直す仕事については、心の哲学、ロボット科学、人文死生学といった分野の研究者と研究会を重ねる中で、着実に思索が進みつつある。人間原理の観測選択効果の論理構造を多くの領域に見出す作業とともに、長年の研究テーマであるフィクション論の人間原理的再構成を進めつつある。それでも、いくつかの下位カテゴリについては試論的な論考を発表できており、現在、サブカルチャーにおける例外的な実験芸術的試み（具体的には、アニメにおけるコンセプチュアルアートの実験）の事例を分析することから、人間原理的フィクション論の端緒を掴みつつあるところである。

新しい研究課題として、分析哲学的美学の中で中心問題となっている「芸術の定義」を、広くカテゴリ論の中で捉えなおす仕事に着手した。そのケーススタディとして、上記アニメの実験的事例の中から、人間原理を直接扱ったアニメ作品『涼宮ハルヒの憂鬱』の特異な演出を、カテゴリ変換のもとで再解釈する仕事を上梓した。その延長上において、「カテゴリ違和」という概念装置を提唱し、コンセプチュアルアート（非芸術から芸術への越境）、死生学（生から死への越境）、トランスジェンダリズム（性別の越境）を成立させる必要十分条件の構造的対応を探る試みを進めている。この「芸術の定義」と「ジェンダーの定義」の比較論は、「諸分野間の同型対応」の議論へと敷衍する予定であり、「芸術の定義」の諸理論を、「心身問題」「規範倫理学」の諸理論とそれぞれ対応させる試論を準備している。また、トランスジェンダリズムにおける「性自認」の諸解釈を、心身問題の諸理論と対応付けてその認知的基盤を探った英語論文を、現在執筆中である。

なお、クリティカルシンキングの啓蒙的発信に継続的に力を注いできたが、近年、ジェンダーをめぐるポリティカルコレクトネスにおいて新しい動きが活発化しており、その動向に関する所見をウェブメディアで平均月一度、発表しているが、そこには適宜、学術的成果を反映させるよう留意している。

d 主要業績

(1) 著書

- 単著、三浦俊彦、『論理パラドクス・心のワナ編——人はどう考えるかを考える 77 問』、二見書房、2019.3、218p。
単著、三浦俊彦、『バートランド・ラッセル 反核の論理学者——私は如何にして水爆を愛するのをやめたか』、学芸みらい社、2019.7、294p。

(2) 論文

- 三浦俊彦、「芸術的錯誤の諸相——ジェラルド・レヴィンソンの芸術定義論を手掛かりに」、『美学芸術学研究』、第 36 号、pp.137-170、2018.7
三浦俊彦、「コンセプチュアルアート視のための諸条件——「エンドレスエイト」のカテゴリ違和」、『哲学雑誌』、第 132 巻、第 804・805 号合冊、pp.79-101、2018.10
三浦俊彦、「思考実験と虚構世界、仮想世界、可能世界」、中村靖子編『非在の場を拓く』、春風社、pp.553-574、2019.2
三浦俊彦、「芸術の美的定義：その形式化からわかること——M. ピアズリーの枠組みで」、『美学芸術学研究』第 37 号、pp.95-121、2019.7

(3) 小論

- 三浦俊彦、遠藤侑、山本茉輝、「「エンドレスエイト」理解へのループのメタレポート」、『こころの科学とエピステモロジー』創刊号 (Vol.1) 映像メディア時評：特集『涼宮ハルヒの憂鬱』、2019.3、pp.88-96
<https://sites.google.com/site/epistemologymindscience/issues/issue1>

(4) 学会発表

- 国際、Shoji Nagataki, Masayoshi Shibata, Takashi Hashimoto, Tatsuya Kashiwabata, Takeshi Konno, Hideki Ohira, Toshihiko Miura, and Shin'ichi Kubota “On the robot as a moral agent”2018.9.14 Palma de Mallorca, Cristina Manresa-Yee and Ramon Mas Sansó (Eds.) *Interacción 2018 Proceedings of the XLIX International Conference on Human Computer Interaction, Article No.: 24* (5 pages), ACM, New York, NY. doi:10.1145/3233824.3233832 <https://dl.acm.org/citation.cfm?id=3233832>

国内、橋本敬、金野武司、長滝祥司、大平英樹、入江諒、河上章太郎、佐藤拓磨、加藤樹里、柏端達也、三浦俊彦、久保田進一、柴田正良、「ロボットは道徳的な行為主体になり得るか、〈個性〉を持ち得るか」、2018.9.1、立命館大学 日本認知科学会第35回大会発表論文集、pp.958-960

国内、三浦俊彦、「人間原理芸術学の観測点としての『涼宮ハルヒの憂鬱』」、第69回美学会全国大会（関西大学）、2018.10.7

国内、新山喜嗣・三浦俊彦・浦田悠・小島康次・やまだようこ・渡辺恒夫、「生死に関するカテゴリ違和の諸相」、シンポジウム「精神医学と現象学的心理学から死と他者の形而上学へ（第2報）：『人文死生学宣言』の誕生」、質的心理学会第15回大会、名城大学、2018.11.24

3. 主な社会活動

(1) 学会

国内、日本科学哲学会『科学哲学』、編集委員、2016.4～

国内、美学会、委員、2016.10～、副会長、東部会代表、2019.10～

国内、科学基礎論学会、応用哲学会、東大比較文学会、会員、2016.4～

准教授 **吉田 寛** YOSHIDA, Hiroshi

1. 略歴

1992年4月	東京大学教養学部文科Ⅲ類入学
1996年3月	同教養学部教養学科第一（表象文化論）卒業
1996年4月	同大学院人文社会系研究科（美学芸術学専門分野）修士課程入学
1998年3月	同修士課程修了、修士（文学）取得
1998年4月	同博士課程進学
2005年10月	同博士課程修了、博士（文学）取得
2006年4月	東京大学大学院人文社会系研究科 助手
2007年4月	東京大学大学院人文社会系研究科 助教
2008年4月	立命館大学大学院先端総合学術研究科 准教授
2015年4月	立命館大学大学院先端総合学術研究科 教授
2015年4月	ロンドン大学ゴールドスミス校客員研究員（～2016年3月）
2019年4月	東京大学大学院人文社会系研究科 准教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

感性学、ゲーム研究

b 研究課題

1. 「感性学」の（再）構築。これまで基本的に「美と芸術の学」として展開されてきたエステティクス（aesthetics）を「感性の学」として再起動する。その際には、現在「感性」の研究に取り組んでいる他の学問分野の成果と蓄積を参照しなければならないと考えている。例えば人間工学や認知科学、脳科学、人工知能研究などがそこに含まれる。それらを架橋しながら人間の感性を探究する総合的な学として「感性学」を構想している。
2. 遊びとゲームの研究。われわれの感性が、つねに技術やメディアとの相互作用のもとで触発され、変化していることは言うまでもない。そして現代的な感性のあり方を理解するうえで最良の手がかりとなるのが「ゲーム」（コンピュータゲーム、ビデオゲーム）である。ゲームプレイヤーの経験——空間、時間、運動、物語、虚構、ルール、競争、楽しさなど——を解明することで、感性の現代的条件が理解できる。その際には、最先端技術の結晶であるゲームを、「遊び」という、人類のより原初的で普遍的な活動の一種として理解する視点も必要になる。

3. メディアとデザインの研究。感性学はデザインの実践に学び、また再度そこに知見を差し戻す。デザインは、人と技術と社会の交わるところに成立する。文房具や食器のような「道具」から、自動車やコンピュータなどの「機械」、さらにはプロセスやサービスといった「実体のない」ものまで、あらゆるデザインは、われわれの内部（思考、感覚）と外部（物質世界、社会）を媒介するメディアである。そしてまたあらゆるメディアは、デザインされる。メディアとデザインをつなぐ、さまざまな理論と実践の探究を通して、感性学としてのエスティクスの現代的課題を検討し、来たるべき時代の技術と社会のあり方を構想したい。

c 概要と自己評価

上記研究課題の2にあたる遊びとゲームの研究に、この二年間はとりわけ注力した。文学理論における転説法（メタレプシス）概念のゲームへの応用、賭博やギャンブルとゲームの境界問題、コンピュータ（計算機）の起源としてのゲームプレイヤーの自動機械、プレイヤーが楽しんで創作するコンテンツが産業側に収奪される「プレイバー」という新たな労働問題など、さまざまな視角と主題からゲームと遊びにアプローチすることができた。そのうちの多くは、2017年度から2019年度まで研究代表者として遂行してきた「没入（イマージョン）概念の美学的再検討」（科学研究費基盤研究（C）、課題番号17K02301）、2016年度から2018年度まで研究分担者として参加してきた「ポピュラーカルチャー・ワールド概念を用いたポップカルチャー美学の構築に関わる基盤研究」（研究代表者：室井尚（横浜国立大学）、科学研究費基盤研究（A）、課題番号16H01912）およびそれを2019年度から後継した「脱マスメディア時代のポップカルチャー美学に関する基盤研究」（研究代表者：室井尚（横浜国立大学）、科学研究費基盤研究（A）、課題番号19H00517）の成果である。後二者の共同研究では「ポップカルチャー美学」の総合的研究に、ゲーム研究者として貢献することができた。また前者の「没入研究」は、没入とゲームとの関係により焦点を合わせて、2020年度以降も継続する。

d 主要業績

(1) 論文

- 吉田寛、「メタゲーム的リアリズム——批評的プラットフォームとしてのデジタルゲーム」、『ゲンロン8——ゲームの時代』、ゲンロン、pp.76-98、2018.5.25
- 吉田寛、「ギャンブルに賭けられるものは何か——ゲーム研究からの考察」、日本記号学会編『賭博の記号論——賭ける・読む・考える』（叢書セミオトポス13）、新曜社、pp.79-96、2018.8.31
- 土居伸彰、吉田寛、東浩紀、「反復性と追体験——触視的メディアとしてのゲーム／アニメーション（前）」、『ゲンロンβ』第32号、ゲンロン、pp.87-149、2018.12.28
- 土居伸彰、吉田寛、東浩紀、「反復性と追体験——触視的メディアとしてのゲーム／アニメーション（後）」、『ゲンロンβ』第33号、ゲンロン、pp.136-183、2019.1.25
- 吉田寛、「プレイバー論の射程」、『ポピュラーカルチャー・ワールド概念を用いたポップカルチャー美学の構築に関わる基盤研究 研究成果報告書 2016-2018年度』（科学研究費助成事業 基盤研究（A）研究課題番号16H01912）、pp.25-30、2019.3.25
- 吉田寛、「混合趣味あるいは忘却されたマルチリンガリズム」、山下範久編著『教養としての世界史の学び方』、東洋経済新報社、pp.408-414、2019.4.3
- 吉田寛、「ゲーム研究をめぐる困難」、松井広志、井口貴紀、大石真澄、秦美香子編『多元化するゲーム文化と社会』、合同会社ニューゲームズオーダー、pp.343-346、2019.5.18
- 吉田寛、「機械にゲームができるのか？——タークからコンピュータへ」、『こころの未来』第21号、京都大学こころの未来研究センター、pp.18-21、2019.8.10
- 吉田寛、「ゲームと思想」、松永伸司編『メディア芸術・研究マッピング ゲーム研究の手引きⅡ』、文化庁、pp.64-69、2020.2.16
- 吉田寛、「デジタルゲーム研究は美学にとってなぜ重要か」、東京大学文学部次世代人文学開発センター研究紀要『文化交流研究』第33号、東京大学文学部次世代人文学開発センター、pp.71-81、2020.3.11

(2) 小論

- 吉田寛、「編集後記」、日本音楽学会編『音楽学』第64巻1号、p.86、2018.10.15
- 松永伸司、吉田寛、「「遊び」をめぐる、ゲームスタディーズの新潮流——『プレイ・マターズ 遊び心の哲学』刊行記念第1弾・「深まる」編」、『かみのたね』、フィルムアート社、2019.7.22
(URL=<http://www.kaminotane.com/2019/07/22/6084/>)
- 吉田寛、「游戏论:现实的媒介 | 媒体内外: 重新认识“电视游戏”时代 (『テレビゲームの時代』再考——メディアの内と外での遊戯の二重化)」、『随筆新聞』、2019.9.21 (URL=https://www.thepaper.cn/newsDetail_forward_4464335)
- 吉田寛、「第61回定例研究会報告」、日本音楽学会『東日本支部通信』第61号、pp.1-2、2019.10.10

室井尚、ラモン・ロバト、ファビアン・カルパントラ、吉岡洋、秋庭史典、佐藤守弘、吉田寛、「ディスカッション」、『研究集会「ストーリーミングの美学——“Netflix Nations”の Ramon Lobato 氏を迎えて』』（科学研究費助成事業基盤研究 (A) 研究課題番号 19H00517「脱マスメディア時代のポップカルチャー美学に関する基盤研究」研究成果報告書 2019 年度）、pp. 18-25、2020.3.10

(3) 書評・解説等

吉田寛、「コンピュータで世界を再多義化せよ！——ミゲル・シカール『プレイ・マターズ』（フィルムアート社）」、『フィルカル』Vol. 4, No. 3、pp. 346-357、2019.11.30

(4) 学会発表・講演等

国際、Hiroshi Yoshida, “Thematic Gaming: Epistemic Sounds in Video Games,” Bonus Levels, Ludomusicology 2018: The Seventh European Conference on Video Game Music and Sound, Leipzig University, Germany, 2018.4.14

国際、Hiroshi Yoshida, “Ritsumeikan University as a Site for Play,” Games and Playful Interventions Session, Workshop: Doing Digital Methods: Interdisciplinary Interventions, Kinugasa Campus, Ritsumeikan University, Kyoto, 2018.6.9

国際、Hiroshi Yoshida, “Forced Play? Gameplay as Immaterial Labour,” Workshop: On Playbour: Laborization of Affect and Play in Participatory Culture, Kinugasa Campus, Ritsumeikan University, Kyoto, 2018.6.25

国際、Hiroshi Yoshida, “The Case of Japan,” Panel “Next Level: Creating Larger Research Units in Game Studies,” DiGRA 2018: The 11th Conference of the Digital Games Research Association, Campus Luigi Einaudi, Università di Torino, Turin, Italy, 2018.7.27

国際、Hiroshi Yoshida, “Early History of Epistemic Sounds in Digital Games,” Replaying Japan 2018, the National Videogame Arcade, Nottingham, United Kingdom, 2018.8.21

国内、吉田寛、土居伸彰、東浩紀、「ゲーム的リアリズムとアニメーション」、ゲンロンカフェ、東京、2018.9.11

国際、Eric Haurbruge, Hiroshi Yoshida & Fanny Barnabé, “From Liège to Kyoto and Back: Creation of an International Network in Game Studies,” The Symposium of Belgium Studies 2018: Ongoing Exchanges Between Belgium and Japan, Sophia University, Tokyo, 2018.12.8

国内、吉田寛、「デジタルゲームにおける認識的音」、「音響と聴覚の文化史」2018 年度第 4 回共同研究会、国際日本文化研究センター、京都、2018.12.9

国内、室井尚、松蔭浩之、佐藤守弘、前川修、増田展大、吉岡洋、秋庭史典、吉田寛、「ディスカッション」、研究集会「インスタ映えの美学——溶解する「写真」と「現実」」（科学研究費補助金基盤研究 (A) 「ポピュラーカルチャー・ワールド概念を用いたポップカルチャー美学の構築に関わる基盤研究」）、グランベル横浜ビル、横浜、2019.2.24

国内、吉田寛、「メタゲーミングとトイフィケーション——〈ゲーム〉はどこにあるか?」、立命館大学ゲーム研究センター (RCGS) 2018 年度第 7 回定例研究会、立命館大学衣笠キャンパス、京都、2019.3.8

国際、Hiroshi Yoshida, “Metagaming and Ecologies of Video Games,” NII Shonan Meeting, No. 132: Modelling Cultural Processes, Shonan Village Center, Zushi, Kanagawa, 2019.3.11

国際、Hiroshi Yoshida, “The Aesthetics of Retrogaming: Nostalgia for the Future,” Pixel-Art und Chiptunes: Interdisziplinäre Tagung, Hochschule für Musik und Theater »Felix Mendelssohn Bartholdy« Leipzig, Leipzig, Germany, 2019.6.22

国際、Hiroshi Yoshida, “Conditions and Effects of “Games in Games” in Video Games,” the 21st International Congress of Aesthetics, University of Belgrade, Belgrade, Serbia, 2019.7.23

国際、Hiroshi Yoshida, “Emulation at Play: From the Universal Turing Machine to the Modern “Demake” Porting,” the 9th International Conference on Eastern Aesthetics, Hubei University, Wuhan, China, 2019.10.19

国内、吉田寛、「デジタルゲーム研究は美学にとってなぜ重要か」、第 55 回文化交流茶話会、東京大学、東京、2019.10.31

国際、吉田寛、「再媒介化的遊戯——後人類時代の新批評形態（再媒介するゲーム——ポストヒューマン時代における批評の新形態）」、2019 台湾人文學社年會「人文之「後」國際研討會」、國立中興大學、台中、台湾、2019.11.23

国内、室井尚、木村建哉、森功次、加須屋明子、吉田寛、岡田温司、開催校企画シンポジウム「あしたはどっちだ——美学会に未来はあるか?」、美学会シンポジウム、成城大学、東京、2020.1.12

国内、室井尚、ラモン・ロバト、ファビアン・カルパントラ、吉岡洋、秋庭史典、佐藤守弘、吉田寛、「ディスカッション」、研究集会「ストーリーミングの美学——“Netflix Nations”の Ramon Lobato 氏を迎えて」（科学研究費助成事業基盤研究 (A) 「脱マスメディア時代のポップカルチャー美学に関する基盤研究」）、YCC ヨコハマ創造都市センター、横浜、2020.1.26

- 国内、吉田寛、「ケンダル・ウォルトン『フィクションとは何か (Mimesis as Make-Believe)』」、ホラーメディア研究会、立命館大学衣笠キャンパス、京都、2020.1.31
- 国内、吉田寛、「仮想環境についての記号理論の最新研究動向——ゲーム研究を中心に」、R-GIRO「次世代人工知能と記号学の国際融合研究拠点」プロジェクト2019年度中間報告シンポジウム「人とAIの調和が導く未来社会に向けたアプローチ」、立命館大学大阪いばらきキャンパス、2020.2.19

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

- 国内、非常勤講師、立命館大学、「表象論史」、2019.8.1～2019.9.25
- 国内、非常勤講師、九州大学、「感性哲学」、2019.4.1～9.30
- 国内、非常勤講師、放送大学、「西洋音楽史」、2019.1.29～2020.3.31
- 国内、招聘講師、跡見学園女子大学、「観光コンテンツ・観光資源論」、2019.5.14
- 国際、客員教授、ライプツィヒ大学、歴史・芸術・オリエント学部、2018～2019
- 国内、対談、松永伸司、吉田寛、「「遊び」をめぐる、ゲームスタディーズの新潮流」、ジュンク堂書店池袋本店、東京、2019.6.11
- 国内、講演、吉田寛、ワーグナー「ニーベルングの指環」オリエンテーション、アサコムホール、大阪、2019.7.31
- 国内、講演、吉田寛、「〈音楽の国ドイツ〉を考える」、高橋舞の新音楽セミナー“聞けば、聴くほど”、Vol. 8、第2回、クラブヒルサイドサロン、代官山ヒルサイドテラス、2019.10.5
- 国際、講演、吉田寛、「日本的電子ゲーム和玩具的传统（日本のデジタルゲームとおもちゃの伝統）」、人文讲坛第319期、湖北大学、武漢、中国、2019.10.19
- 国内、対談、池谷勇人、木村祥朗、吉田寛、中川大地、ゲーム・オブ・ザ・ラウンド第2回「moon」復刻とメタフィクション・ゲームの系譜」、株式会社PLANETS、東京、2019.10.31
- 国際、ワークショップ、吉田寛、陳任軒、張恆、「遊戯的科技應用與文化想像」、「後人類人文與科幻」學術工作坊、國立中興大學、台中、台湾、2019.11.22
- 国内、コメンテーター、吉田寛、立命館大学「音楽と社会」研究会研究フォーラム、キャンパスプラザ京都、京都、2020.2.1

(2) 学会

- 国内、日本音楽学会、西部会支部委員（機関誌担当）、2018.4.1～2019.3.31
- 国内、美学会、委員（ホームページ担当）、2018.4.1～2020.3.31
- 国内、表象文化論学会、日本デジタルゲーム学会、会員、2018.4.1～2020.3.31
- 国際、Royal Musical Association Music and Philosophy Study Group (United Kingdom)、Advisory Board、2018.4.1～2020.3.31
- 国際、International Association for Aesthetics (IAA)、International Association for Semiotic Studies (IASS)、Replaying Japan、Digital Games Research Association (DiGRA)、会員、2018.4.1～2020.3.31

(3) 行政

- 国内、文化庁、文化庁芸術祭執行委員会審査委員、第73回～第74回、2018～2019

08 心理学

教授 横澤 一彦 YOKOSAWA, Kazuhiko

<http://www.l.u-tokyo.ac.jp/~yokosawa/index-j.html>

1. 略歴

1979年3月	東京工業大学工学部情報工学科卒
1981年3月	東京工業大学大学院総合理工学研究科電子システム専攻修士課程了
1981年4月	日本電信電話公社（現NTT）入社
1986年9月	ATR 視聴覚機構研究所（出向）（～1990年2月）
1990年9月	東京工業大学より工学博士号授与
1991年11月	東京大学生産技術研究所 客員助教授（～1992年12月）
1995年6月	南カリフォルニア大学 客員研究員（～1996年6月）
1998年10月	東京大学大学院人文社会系研究科 助教授
2006年4月	東京大学大学院人文社会系研究科 教授
2009年12月	カリフォルニア大学バークレイ校 客員研究員（～2010年3月）
2010年4月	東京大学文学部 行動文化学科長（～2011年3月）
2013年4月	東京大学大学院人文社会系研究科 基礎文化研究専攻長（～2014年3月）
2014年4月	東京大学文学部 行動文化学科長（～2015年3月）
2017年4月	東京大学文学部 行動文化学科長（～2018年3月）
2018年2月	東京大学バーチャルリアリティ教育研究センター 運営委員
2018年4月	東京大学大学院人文社会系研究科 基礎文化研究専攻長（～2019年3月）

2. 主な研究活動

a 専門分野

統合的認知の心理学

b 研究課題

統合的認知について、認知心理学的研究を行っている。統合的認知とは、知覚された特徴がどのように記憶や言語や概念と関わりあって、認知に至るのかを解明しようとする広範囲の研究を指している。特に、視覚的注意やオブジェクト認知の問題を中心に研究している。さらに、感覚融合認知や共感覚に関する研究にも取り組んでおり、研究分野は視覚だけに限らず、扱っている研究課題は多岐に渡っている。

c 概要と自己評価

統合的認知に関する、多岐に渡る研究を行い、注意、感覚融合認知、美感、共感覚の研究成果を学術誌に学術論文として発表することができた。特に、画面を複数の領域に小分けにするだけで、数量判断が効率的になることを発見し、『Scientific Reports』誌に掲載された研究成果は、プレスリリースし、大きな注目を集め、『心理学研究』誌に掲載された共感覚に関する研究成果は、日本心理学会から優秀論文賞として表彰された。また、東京大学に設立されたバーチャルリアリティ教育研究センターの運営委員の1人として参画し、同センターが監修した、『トコトンやさしいVRの本』を分担執筆するとともに、シリーズ統合的認知の1冊として、『美感 感と知の統合』を出版した。経済学と実験心理学の協働する研究プロジェクトにも参画している。このように、学際的な研究活動を幅広く行なっている点が特徴的だと考えている。

d 主要業績

(1) 著書

共著、三浦佳世、川畑秀明、横澤一彦、『美感 感と知の統合』、勁草書房、2018.12

共著、廣瀬通孝 監修、『トコトンやさしいVRの本』、日刊工業新聞社、2019.2

(2) 論文

Q. Li, R. Nakashima, & K. Yokosawa, 「Task-irrelevant spatial dividers facilitate counting and numerosity estimation」、『Scientific Reports』、8:15620、2018.10

E. Matsuda, Y. Okazaki, M. Asano, & K. Yokosawa, 「Developmental Changes in Number Personification by Elementary School Children」、『Frontiers in Psychology』、9:2214、2018.11

中島亮一、横澤一彦、「視覚的注意の時空間的維持による変化検出の促進」、『心理学研究』、89,5、527-532 頁、2018.12

宇野野人、浅野倫子、横澤一彦、「漢字の形態情報が共感覚色の数に与える影響」、『心理学研究』、89,6、571-579 頁、2019.2

熊倉恵梨香、信田拓也、浅野倫子、横澤一彦、「文化的な構えが色嗜好に与える影響」、『基礎心理学研究』、38,1、26-32 頁、2019.9

M. Asano, S. Takahashi, T. Tsushiro, & K. Yokosawa, 「Synaesthetic colour associations for Japanese Kanji characters: From the perspective of grapheme learning」、『Philosophical Transaction of The Royal Society B』、374: 20180349、2019.10

E. Kumakura, K. Schmid, K. Yokosawa, & A. Werner, 「Subjective evaluation of natural high-saturated images on a wide gamut display」、『Color Research and Application』、44,6、886-893 頁、2019.12

永井淳一、横澤一彦、浅野倫子、「非共感覚者が示すかな文字と色の対応付けとその規則性」、『認知科学』、26,4、426-439 頁、2019.12

(3) 受賞

国内、宇野野人、浅野倫子、横澤一彦、優秀論文賞、日本心理学会、2019.9.10

(4) 研究テーマ

文部科学省科学研究費補助金、基盤研究 (B)、横澤一彦、研究代表者、「共感覚に関する認知心理学的研究の深化と展開」、2019～

文部科学省科学研究費補助金、基盤研究 (B)、横澤一彦、分担者 (代表者は東大外)、「経済学と実験心理学の協働による景観の経済的価値に関する研究」、2019～

3. 主な社会活動

(1) 学会

国内、日本心理学会、理事、2019.6～

国内、日本認知神経科学学会、理事、2019.7～

教授 今水 寛 IMAMIZU, Hiroshi

1. 略歴

1987年3月	東京大学文学部第四類心理学専修課程 卒業
1987年4月	東京大学大学院人文科学研究科心理学修士課程 進学
1989年3月	東京大学大学院人文科学研究科心理学修士課程 修了
1989年4月	東京大学大学院人文科学研究科心理学博士課程 進学
1992年3月	東京大学大学院人文社会系研究科心理学博士課程 単位取得退学
1992年4月	国際電気通信基礎技術研究所 (ATR) 奨励研究員
1995年2月	東京大学大学院人文社会系研究科心理学博士課程 博士 (心理学) 取得
1996年10月	科学技術振興事業団・川人学習動態脳プロジェクト 計算心理グループリーダー
2001年10月	ATR 人間情報科学研究所 主任研究員
2002年4月	大阪大学大学院生命機能研究科 客員准教授
2003年5月	ATR 脳情報研究所・認知神経科学研究室 室長
2008年8月	情報通信研究機構 バイオICT グループリーダー
2010年4月	ATR 認知機構研究所 所長
2011年4月	情報通信研究機構 脳情報通信融合研究室 副室長
2011年4月	大阪大学大学院生命機能研究科 客員教授
2015年9月	東京大学大学院人文社会系研究科 教授
2019年4月	東京大学大学院工学系研究科 教授 (兼任)

2. 主な研究活動

a 専門分野

運動の学習と制御, 認知機能を支える脳のネットワーク解析

b 研究課題

人間は新たな生活環境に置かれたとき, さまざまなことを学習し, 行動パターンを変え, 環境に適応する. 自分の脳や身体もケガ・病気・加齢などで変化することがあり, そのような場合にも新たな学習・適応を迫られる. このような学習と適応のメカニズムを調べ, それに関わる脳の仕組みを解明するとともに, 学習や適応を支援する技術の開発を行う.

c 概要と自己評価

運動の学習と制御に関して, 時間適応の脳内メカニズムを解明することに成功した. 運動とその結果の間に時間差があるとき, 最初は時間差をはっきり認識することができるが, それが何回も繰り返されると, 主観的な時間差は減少することが知られている. 脳活動を高い時間分解能で調べる脳磁図と, 高い空間分解能で調べる機能的磁気共鳴画像法の両方を用いて, この心理現象に対応する脳活動の変化を調べた. その結果, 時間適応が生じるとき, 運動の準備に関わる脳活動と, 運動の結果を知覚する脳活動のそれぞれのタイミングが, 互いに引き合うようにシフトすることで, 心理的な時間が短くなることを発見した(NeuroImage 誌に論文掲載). また, 高機能自閉スペクトラム症の手指運動に見られる薬指優位を発見し, 単純な運動に現れる特徴が, 社会性を評価する指標と関連することを示した(Scientific Reports 誌に論文掲載).

言語・思考・意思決定などの認知機能は, 脳という巨大な情報ネットワークに支えられている. 脳のネットワークを読み解き, その機能を適切に維持することは, 認知機能を理解するために重要であるだけでなく, 加齢や脳疾患による認知機能の低下を防ぐことに役立つ. 健常者と複数の精神疾患に共通する, 脳のネットワークと記憶力のモデルを構築した. この研究により, 健常者の個人差に関与する脳回路の特徴と作業記憶力の対応関係が, 複数の精神疾患にも共通して存在することを示した(eLife 誌に論文掲載). また, 脳のネットワーク解析には, 大量の脳画像データを必要とするが, 撮像装置や撮像施設が異なると, 脳画像に違いが生じる. この違いは, 脳画像データを収集するときの大きな障壁になっていた. 装置や施設の違いを補正する方法を新たに開発し, この障壁を取り除く道を拓いた(PLoS Biology 誌に論文掲載).

以上のように, 運動の制御と学習, 脳のネットワークという2つのテーマに関して, 基礎(脳の仕組みの解明)と応用(学習機能の支援)を織り交ぜながら研究を展開した. 民間企業との共同研究も積極的に進めた. 新学術領域「身体性システム」および「超適応」の計画研究として, 運動を基礎とする自己意識の解明に従事し, 学会・招待講演などで精力的に成果を発表・議論した. 東京大学の広報サイト UTokyo Research, リハビリテーション関係者向けの講習会を中心に, 研究成果を広く一般に伝えるアウトリーチ活動に努めた.

d 主要業績

(1) 著書

共著, 今水寛, 日本基礎心理学会 (監修) 『基礎心理学実験法ハンドブック』, 第5部 学習と行動 5.5.2 知覚—運動学習, 朝倉書店, 2018.6

共著, 今水寛, 村田哲, 大木紫, 浅井智久, 大畑龍, 望月圭, (近藤・今水・森岡 編) 『身体性システムとリハビリテーションの科学2 身体認知』, 第2章 身体意識の脳科学, 東京大学出版会, 2018.12

共著, 今水寛, 大木紫, 前田貴記, 村田哲, 日本学術協力財団 (編) 『社会脳から心を探る—自己と他者をつなぐ社会適応の脳内メカニズム』, 第6章 社会脳から見た自己と身体意識, 日本学術協力財団, 2020.2

(2) 論文

Imaizumi, S., Asai, T., Hiromitsu, K., and Imamizu, H., 「Voluntarily controlled but not merely observed visual feedback affects postural sway」, 『PeerJ』, Vol. 6, e4643, 2018.4

Cai, C., Ogawa, K., Kochiyama, T., Tanaka, H., and Imamizu, H., 「Temporal recalibration of motor and visual potentials in lag adaptation in voluntary movement」, 『NeuroImage』, Vol. 172, pp. 654-662, 2018.5

Yamashita, M., Yoshihara, Y., Hashimoto, R., Yahata, N., Ichikawa, N., Sakai, Y., Yamada, T., Matsukawa, N., Okada, G., Tanaka, S.C., Kasai, K., Kato, N., Okamoto, Y., Seymour, B., Takahashi, H., Kawato, M., and Imamizu, H., 「A prediction model of working memory across health and psychiatric disease using whole-brain functional connectivity」, 『eLife』, Vol. 7, e38844, 2018.12

Togo, S., Itahashi, T., Hashimoto, R., Cai, C., Kanai, C., Kato, N., and Imamizu, H., 「Fourth finger dependence of high-functioning autism spectrum disorder in multi-digit force coordination」, 『Scientific Reports』, Vol. 9, e1737, 2019.2

Yamashita, A., Yahata, N., Itahashi, T., Lisi, G., Yamada, T., Ichikawa, N., Takamura, M., Yoshihara, Y., Kunimatsu, A., Okada, N., Yamagata, H., Matsuo, K., Hashimoto, R., Okada, G., Sakai, Y., Morimoto, J., Narumoto, J., Shimada, Y., Kasai, K., Kato, N., Takahashi, H., Okamoto, Y., Tanaka, S.C., Kawato, M., Yamashita, O., and Imamizu, H., 「Harmonization of resting-state

functional MRI data across multiple imaging sites via the separation of site differences into sampling bias and measurement bias」、『PLoS Biology』、Vol. 17, No. 6、e3000042、2019.4

Imaizumi, S., Tanno, Y., and Imamizu, H., 「Compress global, dilate local: Intentional binding in action-outcome alternations」、『Consciousness and Cognition』、Vol. 73、e102768[Epub ahead of print]、2019.6

(3) 学会発表

国際、Imaizumi, S., and Imamizu, H., 「Intentional binding in action-effect alternations」、22nd Annual Meeting of the Association for the Scientific Study of Consciousness (ASSC22)、Jagiellonian University, Krakow (Poland)、2018.6.28

国際、Ohata, R., Asai, T., Kadota, H., Shigemasa, H., Ogawa, K., and Imamizu, H., 「Decoding self-other action attribution in the sensorimotor and the parietal cortices」、11th Federation of European Neuroscience Societies (FENS) Forum of Neuroscience、CityCube, Berlin (Germany)、2018.7.9

国内、大畑龍、濱口剛、井上聡、今水寛、「運転環境に応じた適応的な運転行動を可能にする脳内メカニズム」、第12回 Motor Control 研究会、上智大学四ツ谷キャンパス（東京都千代田区紀尾井町）、2018.8.18

国内、横山了、大畑龍、今水寛、「回答運動の不随意的な変化によって自信判断は妨害されるか」、第12回 Motor Control 研究会、上智大学四ツ谷キャンパス（東京都千代田区紀尾井町）、2018.8.18

国内、松本理器、小林環、下竹昭寛、吉田和道、矢野史朗、前田貴記、池田昭夫、今水寛、「島皮質障害による運動主体感の動的変容: 脳外科手術症例からの知見」、第36回日本ロボット学会学術講演会、中部大学春日井キャンパス（愛知県春日井市松本町）、2018.9.4

国内、今水寛、ケンボ・ツルティム・ロドゥ、「マインドフルネスとは何か」、認知神経科学者と止観瞑想者との対話、東京大学文学部2番大教室（東京都文京区本郷）、2018.12.11

国内、田中大、浅井智久、大畑龍、田中宏和、今水寛、「予測誤差から運動主体感に至るメカニズムのモデル化」、第7回身体性システム領域全体会議、ホテル千秋閣（岩手県花巻市湯本）、2019.2.28

国内、大畑龍、温文、田中大、山下淳、浅間一、今水寛、「操作性の変化を知覚する神経基盤」、第7回身体性システム領域全体会議、ホテル千秋閣（岩手県花巻市湯本）、2019.2.28

国内、若林実奈、稲邑哲也、今水寛、「系列動作の学習における手本に合わせた言語的指導の効果」、第7回身体性システム領域全体会議、ホテル千秋閣（岩手県花巻市湯本）、2019.2.28

国内、今水寛、浅井智久、弘光健太郎、門田宏、今泉修、田中大、濱本孝仁、大畑龍、「感覚予測誤差と運動の自他帰属を結びつける右下頭頂小葉」、第7回身体性システム領域全体会議、ホテル千秋閣（岩手県花巻市湯本）、2019.2.28

国内、今水寛、「脳科学が探求する脳と心の未来」、是心会10周年記念大会「止観・マインドフルネス研究最前線」、奈良春日野国際フォーラム 能楽堂（奈良市春日野町）、2019.3.30

国内、今水寛、「人間の主体性と人工物・社会システム」、東京大学人工物工学研究センター（新）発足記念シンポジウム「人工物工学の新たな挑戦と新しい展開」、東京大学山上会館（東京都文京区本郷）、2019.4.1

国内、今水寛、「運動主体感の成立に関わる脳のネットワーク」、日本学術会議 心理学・教育学委員会 脳と意識分科会（第24期・第6回）、日本学術会議（東京都港区六本木）、2019.4.25

国内、今水寛、「短期と長期の運動記憶」、東京大学 知の創造的摩擦プロジェクト 第15回講演会「脳科学×心理学」、東京大学駒場キャンパス 11号館 1106教室（東京都目黒区駒場）、2019.7.13

国内、今水寛、「認知機能と脳のネットワーク」、第23回東京大学文学部常呂公開講座、常呂町公民館大講堂（北海道北見市常呂町）、2019.10.4

国内、今水寛、「感覚-運動学習のメカニズム」、日本ボバース研究会 関東甲信越神ブロック成人部門合同症例発表会 特別講演、TKP 西新宿カンファレンスセンター（東京都新宿区西新宿）、2020.2.15

(4) 予稿・会議録

国内会議、山下真寛、浅井智久、今水寛、「脳結合と作業記憶のニューロフィードバック訓練」、第41回日本神経科学大会、神戸コンベンションセンター（兵庫県神戸市中央区港島中町）、2018.7.27

『オンライン演題検索システム』、2P-261、2018.7

国内会議、今泉修、丹野義彦、今水寛、「能動的運動における心的時間の域的短縮と局所的伸長」、日本認知心理学会第16回大会、立命館大学大阪いばらきキャンパス（大阪府茨木市岩倉町）、2018.9.1

『日本認知心理学会第16回大会論文集』、pO1-005、2018.9

国内会議、今水寛、「fMRI から知る機能的脳結合と認知機能」、日本行動計量学会第46回大会・特別セッション「脳科学とデータサイエンス」、慶應義塾大学三田キャンパス（東京都港区三田）、2018.9.3

『日本行動計量学会第46回大会抄録集』、p.24、2018.9

- 国内会議、今水寛、「身体運動と脳の学習・適応メカニズム —連転行動を支える脳のネットワーク—」、日本交通医学工学研究会 第27回学術総会「身体能力維持向上に貢献するモビリティ」特別講演、名古屋大学東山キャンパス（名古屋市千種区不老町）、2018.9.17
- 『日本交通医学工学研究会 第27回学術総会講演集』「18 医学と工学からみた交通安全対策 —身体能力維持向上に貢献するモビリティ」、pp.40-47、2018.9
- 国内会議、濱本孝仁，浅井智久，今水寛、「脳内機能ネットワークによる安静・瞑想状態の検討」、日本心理学会第82回大会、仙台国際センター（宮城県仙台市青葉区青葉山）、2018.9.25
- 『オンライン演題検索システム』、3AM-062、2018.9
- 国内会議、Takai, A., Rivela, D., Lisi, G., Noda, T., Teramae, T., Imamizu, H., and Morimoto, J., 「Investigation on the neural correlates of haptic training」、2018 IEEE International Conference on Systems, Man, and Cybernetics (SMC2018)、宮崎県シーガイアコンベンションセンター、2018.10.7
- 『Proceedings』、pp. 519-523、2018.10
- 国内会議、Asai, T. and Imamizu, H., 「Normal aging in resting-state functional brain networks」、The 2nd International Symposium on Embodied-Brain Systems Science (EmBoss 2018)、Senri Life Science Center, Shinsenrihigashimachi, Toyonaka-city, Osaka, Japan、2018.12.5
- 『EmBoss 2018 Poster Proceedings』、P3、2018.12
- 国内会議、Hamamoto, T., Imamizu, H., and Asai, T., 「Resting and Meditating states in Functional Brain Connectivity」、The 2nd International Symposium on Embodied-Brain Systems Science (EmBoss 2018)、Senri Life Science Center, Shinsenrihigashimachi, Toyonaka-city, Osaka, Japan、2018.12.5
- 『EmBoss 2018 Poster Proceedings』、P4、2018.12
- 国内会議、Kobayashi, T., Matsumoto, R., Shimotake, A., Togo, M., Arakawa, Y., Yamao, Y., Kikuchi, T., Yoshida, K., Ikeda, A., Yano, S., Maeda, T., Imamizu, H., and Miyamoto, S., 「The role of the insula in Sense of Agency -supportive data from neurosurgical cases-」、The 2nd International Symposium on Embodied-Brain Systems Science (EmBoss 2018)、Senri Life Science Center, Shinsenrihigashimachi, Toyonaka-city, Osaka, Japan、2018.12.5
- 『EmBoss 2018 Poster Proceedings』、P27、2018.12
- 国内会議、Murata, Y., Yano, S., Kondo, T., Imamizu, H., and Maeda, T., 「Estimation of the human learning algorithm under the time-delay adaptation task」、The 2nd International Symposium on Embodied-Brain Systems Science (EmBoss 2018)、Senri Life Science Center, Shinsenrihigashimachi, Toyonaka-city, Osaka, Japan、2018.12.5
- 『EmBoss 2018 Poster Proceedings』、P29、2018.12
- 国内会議、Tanaka, M., Asai, T., Imamizu, H., and Ohata, R., 「Biased Sense of Agency Changes Feedback Control」、The 2nd International Symposium on Embodied-Brain Systems Science (EmBoss 2018)、Senri Life Science Center, Shinsenrihigashimachi, Toyonaka-city, Osaka, Japan、2018.12.5
- 『EmBoss 2018 Poster Proceedings』、P56、2018.12
- 国内会議、Hiromitsu, K., Asai, T., Imaizumi, S., Tanaka, M., Kadota, H., and Imamizu, H., 「Right Inferior Parietal Lobe Mediates the Relation Between the Prediction Error and the Sense of Agency—tDCS and TMS Study—」、The 2nd International Symposium on Embodied-Brain Systems Science (EmBoss 2018)、Senri Life Science Center, Shinsenrihigashimachi, Toyonaka-city, Osaka, Japan、2018.12.5
- 『EmBoss 2018 Poster Proceedings』、P14、2018.12
- 国内会議、Ohata, R., Wen, W., Yamashita, A., Asama, H., and Imamizu, H., 「Dissociative processes for detecting change in control」、The 2nd International Symposium on Embodied-Brain Systems Science (EmBoss 2018)、Senri Life Science Center, Shinsenrihigashimachi, Toyonaka-city, Osaka, Japan、2018.12.5
- 『EmBoss 2018 Poster Proceedings』、P44、2018.12
- 国内会議、Imamizu, H., 「Brain networks building up sense of agency」、The 2nd International Symposium on Embodied-Brain Systems Science (EmBoss 2018)、Senri Life Science Center, Shinsenrihigashimachi, Toyonaka-city, Osaka, Japan、2018.12.5
- 『EmBoss 2018 Digest Book』、p. 5、2018.12
- 国際会議、Lisi, G., Yamashita, A., Yahata, N., Itahashi, T., Yamada, T., Ichikawa, N., Takamura, M., Yoshihara, Y., Kunimatsu, A., Okada, N., Yamagata, H., Matsuo, K., Hashimoto, R., Okada, G., Sakai, Y., Narumoto, J., Shimada, Y., Kasai, K., Kato, N., Takahashi, H., Okamoto, Y., Tanaka, S., Yamashita, O., Imamizu, H., Kawato, M., and Morimoto, J., 「Assessing multisite reproducibility of parcellation methods using traveling subjects」、Organization for Human Brain Mapping 2019 Annual Meeting (OHBM 2019)、Auditorium Parco Della Musica, Roma (Italy)、2019.6.12

- 『OHBM E-Poster』、W566 (ポスター番号)、2019.6
- 国内会議、今水寛、「認知神経科学とリハビリテーション医学：運動学習・運動主体感・外骨格ロボット」、第56回日本リハビリテーション医学会学術集会 (JARM2019)・特別講演、神戸コンベンションセンター (兵庫県神戸市中央区港島中町)、2019.6.13
- 『第56回日本リハビリテーション医学会学術集会プログラム・抄録集』、S232、2019.6
- 国際会議、Ohata, R., Ogawa, K., and Imamizu, H., 「Neural mechanisms for adaptive change of behaviors while car-driving」、Organization for Human Brain Mapping 2019 Annual Meeting (OHBM 2019)、Auditorium Parco Della Musica, Roma (Italy)、2019.6.13
- 『OHBM E-Poster』、Th648 (ポスター番号)、2019.6
- 国際会議、Wen, W., Ohata, R., Tanaka, M., Yamashita, A., Asama, H., and Imamizu, H., 「Two dissociable processes for detecting gaining and losing control in human brain」、23rd Annual Meeting of the Association for the Scientific Study of Consciousness (ASSC23)、Western University, London, Ontario (Canada)、2019.6.27
- 『ASSC23 Abstract』、2.57 (ポスター番号)、2019.6
- 国内会議、山下真寛、浅井智久、今水寛、「結合ニューロフィードバックの作業記憶成績への長期効果」、第42回日本神経科学大会、朱鷺メッセ (新潟市中央区万代島)、2019.7.27
- 『オンライン演題検索システム』、PB-298、2019.7
- 国内会議、Imamizu, H., Wen, W., Ohata, R., Tanaka, M., Yamashita, A., and Asama, H., 「Response to gaining and losing control in human brain」、日本心理学会第83回大会 公募シンポジウム 38 「The role of sense of agency in explorative and exploitative actions」、立命館大学 大阪いばらきキャンパス (大阪府茨木市岩倉町)、2019.9.11
- 『オンライン演題検索システム』、SS-038、2019.9
- 国内会議、田中大、中島亮一、弘光健太郎、今水寛、「短時間の集中瞑想と洞察瞑想が注意機能に与える効果の個人差」、日本心理学会第83回大会、立命館大学 大阪いばらきキャンパス (大阪府茨木市岩倉町)、2019.9.11
- 『オンライン演題検索システム』、1C-048、2019.9
- 国内会議、濱本孝仁、今水寛、浅井智久、「EEG microstates 及び脳機能結合から見る高齢者脳活動」、日本心理学会第83回大会、立命館大学 大阪いばらきキャンパス (大阪府茨木市岩倉町)、2019.9.11
- 『オンライン演題検索システム』、1A-052、2019.9
- 国内会議、今水寛、「運動主体感の成立に関わる脳のネットワーク」、日本心理学会第83回大会 公募シンポジウム 63 「融合社会脳研究—自己の主体性を考える」、立命館大学 大阪いばらきキャンパス (大阪府茨木市岩倉町)、2019.9.12
- 『オンライン演題検索システム』、SS-063、2019.9
- 国内会議、田中大、中島亮一、弘光健太郎、今水寛、「短時間の集中瞑想と洞察瞑想が注意機能に与える効果と個人のマインドフルネス傾向の関連性の検討」、第11回多感覚研究会、立教大学池袋キャンパス (東京都豊島区西池袋)、2019.12.14
- 『第11回多感覚研究会プログラム』、p. 6、2019.12
- 国内会議、今水寛、「操作感の脳科学」、東京大学オープンイノベーションフォーラム「ロボティクスの新展開」、ベルサール八重洲 (東京都中央区八重洲)、2020.2.7
- 『東京大学オープンイノベーションフォーラムパンフレット』、p. 3、2020.2
- (5) 総説・総合報告
- 今水寛、「運動学習における記憶と忘却—時間スケールの異なる運動記憶」、『BRAIN and NERVE 特集「記憶と忘却に関わる脳のしくみ—分子機構から忘却の症候まで」』、Vol. 70, No. 7, pp. 723-731、2018.7
- 今泉修、浅井智久、高橋英彦、今水寛、「主体感の認知神経機構」、『精神医学—特集「精神医学における主観と主体」』、第61巻 5号、pp.541-549、2019.5
- (6) 研究テーマ
- 文部科学省科学研究費補助金、新学術領域「身体—脳の機能不全を克服する潜在的適応力のシステム論的理解」、今水寛、Hiroshi Imamizu、研究代表者、「超適応を促す身体認知・情動機構の解明」、「Mechanisms of body cognition and emotion inducing hyper-adaptability」、2019～
- 文部科学省科学研究費補助金、基盤研究 (B) 「予測誤差と運動主体感をつなぐ神経機構の解明」今水寛、研究代表者、2018～
- 文部科学省科学研究費補助金、挑戦的研究 (開拓) 「仏教学・心理学・脳科学の協同による止観とマインドフルネスに関する実証的研究」今水寛、研究分担者、2018～

文部科学省科学研究費補助金、基盤研究 (B) 「予測誤差の可視化による自己感への貢献：行動・計算論・脳機能計測の統合」今水寛、研究分担者、2019～

文部科学省科学研究費補助金、挑戦的研究 (萌芽) 「実験動物の運動主体感を計測する」今水寛、研究分担者、2019～

3. 主な社会活動

(1) 学外組織(学協会、省庁を除く)委員・役員

民間企業、NTT コミュニケーション科学基礎研究所、研究倫理委員会委員、2016.10～

国立大学法人、東京工業大学、MRI 安全委員会委員、2019.4～

(2) 行政

省庁、日本学術会議、科学技術政策、連携会員、2017.10～

教授 村上 郁也

MURAKAMI, Ikuya

1. 略歴

1991年3月	東京大学文学部第四類心理学専修課程 卒業
1991年4月	東京大学大学院人文科学研究科心理学修士課程 進学
1993年3月	東京大学大学院人文科学研究科心理学修士課程 修了
1993年4月	東京大学大学院人文科学研究科心理学博士課程 進学
1996年3月	東京大学大学院人文社会系研究科心理学博士課程 修了 博士(心理学)取得
1996年4月	岡崎国立共同研究機構生理学研究所 研究員(COE ポスドク)
1997年4月	岡崎国立共同研究機構生理学研究所 研究員(日本学術振興会特別研究員PD)
1997年9月	米国ハーバード大学心理学部視覚科学研究所 研究員(日本学術振興会特別研究員PD)
1999年4月	NTT コミュニケーション科学基礎研究所 社員
2000年4月	NTT コミュニケーション科学基礎研究所 研究主任
2004年4月	NTT コミュニケーション科学基礎研究所 主任研究員
2005年4月	東京大学大学院総合文化研究科 助教授
2007年4月	東京大学大学院総合文化研究科 准教授
2013年4月	東京大学大学院人文社会系研究科 准教授
2018年4月	東京大学大学院人文社会系研究科 教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

知覚心理学、認知神経科学

b 研究課題

知覚や行動に伴う心的時間の脳内機構とその操作。周辺視野での事物の定位に動的信号がおよぼす影響に関する視覚心理学的研究。視空間的・時空間的な注意機能と認知発達：非言語刺激と言語刺激による検討。錯視の多面的研究—実験心理学・脳機能画像・数理解析・生物学の手法を用いて—。

c 概要と自己評価

紙面の限りにより、特に周辺視での視覚心理学の進捗に重点をおいて述べる。周辺視においては、視覚刺激の物理的呈示位置を示す入力情報の空間分解能や感覚証拠が乏しいため、他の手がかりと組み合わせて事物の位置推定がなされなければならない。しかし、それらの推定作業の詳細は未知である側面が多い。そこで、局所的な視覚刺激位置とそこに含まれる運動信号を入力情報として、大局的な形状知覚の成立への計算がなされる過程を明らかにし、視覚システムにおいて運動と位置の相互作用に関わる階層的情報処理の構造についてモデル化することを目的として、健康成人の実験参加者において数々の視覚心理物理学的実験を実施した。そのひとつとして、局所的にコントラスト変調窓を空間的に固定し、輝度の搬送波をその空間窓内部で一方向に流動させるという視覚刺激要素を使用し、多数のそう

した視覚刺激要素を整列配置してできる大局的形狀が運動信号の存在によってどのような影響を受けるかに関して実証研究を行った。具体的には、運動信号の存在によって局所的視覚刺激要素の見かけの位置がずれて感じられるように設定し、多数の視覚刺激要素においてそれらの見かけの位置が系統的にずれて感じられるような刺激布置にした結果、見かけ上の大局的形狀が物理的配置に対して例えば縦長にゆがんで感じられるようにした。この図形を視野周辺に配置して長時間観察することにより、陰性残効が頑健に観察された。このことから、動的な信号の存在下で視野周辺の局所的位置と大局的位置との不整合が生じる状況を実験的に作り出した結果、運動による知覚的位置ずれの処理過程が大局的図形形状の処理過程に対して入力信号を送っている心理物理学的証拠が得られた。今年度までに、さまざまな環境整備の結果として、上記の研究実績概要のほかにも多数の並列的な実験作業を遂行することができた。例えば、秒未満の時間知覚について心理物理実験を行い、高精度で知覚時刻を実測する方法を開発して錯視を用いて注意の移動に伴う時間知覚の変化を調べたところ、復帰抑制によって標的への反応が遅れる効果によって標的の見かけの持続時間が短縮して感じられ、また標的の知覚的オンセット時刻が遅れることを発見した。突然瞬間提示されるフラッシュ刺激が運動刺激に対して時間的に遅れて感じられるフラッシュ・ラグ効果がバー方位、顔方位、顔アイデンティティといったさまざまな属性に対して一般に見られること、視覚フラッシュと視覚変化との結びつけと、聴覚クリックと視覚変化との結びつけとは処理特性が定性的に異なることを見出した。運動する対象は知覚的に持続時間が伸長して感じられるが、運動刺激と静止刺激を重畳させて提示すると、そのうち運動刺激に注意をかけている条件でのみ運動による持続時間伸長効果が認められた。ほかにも静止図形に運動印象が感じられる効果の空間特性や明るさの同時対比効果の時間特性などに進歩があった。時間知覚研究、注意研究、錯視研究のいずれに関しても、高インパクトの国際専門誌への掲載などをはじめ順調な研究成果の出力をしており、おおむね順調に進展している。

d 主要業績

(1) 著書

繁樹算男 編、『公認心理師の基礎と実践 2 心理学概論』、村上郁也、「第3章 感覚・知覚」、2018.4
村上郁也、『Progress & Application 知覚心理学』、2019.10

(2) 論文

Saito, M., Miyamoto, K., Uchiyama, Y. & Murakami, I., 「Invisible light inside the natural blind spot alters brightness at a remote location」、『Scientific Reports』、2018.5
Lavrenteva, S. & Murakami, I., 「The Ebbinghaus illusion in contrast-defined and orientation-defined stimuli」、『Vision Research』、148、26-36 頁、2018.7
Kaneko, S., Murakami, I., Kuriki, I. & Peterzell, D., 「Individual variability in simultaneous contrast for color and brightness: small-sample factor analyses reveal separate induction processes for short and long flashes」、『i-Perception』、2018.9
Hisakata, R. & Murakami, I., 「Spatial scaling of illusory motion perceived in a static figure」、『Journal of Vision』、2018.12
Hayashi, D., Iwasawa, H., Osugi, T. & Murakami, I., 「Feature-based attentional selection affects the perceived duration of a stimulus having two superposed patterns」、『Vision Research』、2019.3
Osugi, T. & Murakami, I., 「Preview benefit survives a three-dimensional rotation of the rigid configuration of search items」、『Vision Research』、2019.3
Hayashi, R. & Murakami, I., 「Distinct mechanisms of temporal binding in generalized and cross-modal flash-lag effects」、『Scientific Reports』、2019.3
Hayashi, D., Sawa, T., Lavrenteva, S. & Murakami, I., 「Inhibition of return modulates the flash-lag effect」、『Journal of Vision』、2019.5

(3) 予稿・会議録

国際会議、Nakada, H., & Murakami, I., 「Search inefficiency in a directionally consistent target among directionally switching distractors」、『Vision Sciences Society, St. Petersburg, Florida, USA, 2018.5.19
国際会議、Chen, Z., Murakami, I., & Whitney, D., 「Interhemispheric visual temporal order adaptation」、『Vision Sciences Society, St. Petersburg, Florida, USA, 2018.5.21
国内会議、齋藤真里菜・宮本健太郎・村上郁也、「盲点内部と盲点周辺への青色光刺激が明るさ知覚に与える影響は異なる」、『日本神経科学大会、神戸、2018.7.26
国際会議、Lavrenteva, S. & Murakami, I., 「Interactions across luminance, contrast and orientation defined elements in the Ebbinghaus illusion」、『European Conference on Visual Perception, Trieste, Italy, 2018.8.28
国内会議、仲田穂子・村上郁也、「運動方向切替および色切替が視覚探索に与える影響」、『日本視覚学会、横浜、2019.1.31
国際会議、Lavrenteva, S. & Murakami, I., 「Perceiving and grasping the equiluminant Ebbinghaus illusion」、『Vision Sciences Society, St. Petersburg, Florida, USA, 2019.5.19

国際会議、Nakamura, T., Lavrenteva, S. & Murakami, I., 「Object substitution occurs when a masker and a target are presented to different eyes」、Vision Sciences Society、St. Petersburg, Florida, USA、2019.5.19

国際会議、Nakada, H., Kiyonaga, M. & Murakami, I., 「Adaptation to an illusory aspect ratio distorted by motion induced position shift」、Vision Sciences Society、St. Petersburg, Florida, USA、2019.5.21

国際会議、Nakada, H., Yamamoto, K. & Murakami, I., 「The disappearance of global apparent rotational motion with local drifting sinusoidal gratings」、Asia-Pacific Conference on Vision、Osaka, Japan、2019.7.29

国際会議、Lavrenteva, S., Miura, T. & Murakami, I., 「Temporal judgements under conditions with and without conscious perception」、Asia-Pacific Conference on Vision、Osaka, Japan、2019.7.31

国際会議、Sugawara, G. & Murakami, I., 「Manual reproduction of visual and auditory pulse sequences」、Asia-Pacific Conference on Vision、Osaka, Japan、2019.7.31

国内会議、Lavrenteva, S.・村上郁也、「クラウディング刺激における持続時間の知覚」、日本基礎心理学会、神戸、2019.12.1

(4) 翻訳

個人訳、Dean Buonomano、"Your Brain Is a Time Machine: The Neuroscience and Physics of Time"、村上郁也、『脳と時間: 神経科学と物理学で解き明かす〈時間〉の謎』、2018.10

3. 主な社会活動

(1) 学会

国内、日本視覚学会、幹事、2018.4～2020.3

国内、日本心理学会、代議員、2018.4～2020.3

国内、日本基礎心理学会、編集委員長、2018.4～2020.3、常務理事、2018.4～2020.3

国際、Frontiers in Perception Science、Review Editor、2018.4～2020.3

国際、Scientific Reports、Editorial Board Member、2019.10～2020.3

(2) 行政

省庁、日本学術会議、科学技術政策、連携会員、2018.4～2020.3

准教授 **鈴木 敦命** SUZUKI, Atsunobu

1. 略歴

2001年3月	東京大学教養学部生命・認知科学科 卒業
2001年4月	東京大学大学院総合文化研究科広域科学専攻修士課程 入学
2003年3月	東京大学大学院総合文化研究科広域科学専攻修士課程 修了
2003年4月	東京大学大学院総合文化研究科広域科学専攻博士課程 進学
2006年3月	東京大学大学院総合文化研究科広域科学専攻博士課程 修了 博士(学術)取得
2006年4月	東京大学大学院総合文化研究科 日本学術振興会特別研究員 (PD)
2007年4月	東京大学総括プロジェクト機構ジェロントロジー寄附研究部門 日本学術振興会特別研究員 (PD)
2006年9月	イリノイ大学アーバナ・シャンペーン校ベックマン研究所 客員研究員
2009年4月	名古屋大学大学院環境学研究科 講師
2012年10月	名古屋大学大学院環境学研究科 准教授
2017年4月	名古屋大学大学院情報学研究科 准教授
2017年9月	東京大学大学院人文社会系研究科 准教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

実験心理学、認知心理学

b 研究課題

社会的認知とエイジングを主な研究課題としている。社会的認知とは人間の社会行動を支える心の働きの総称であり、他者の感情・思考や性格の推測、自己の行為のコストベネフィット評価や道徳性の判断、相手を信頼して協力するか否かの意思決定など、多様な心理過程が含まれる。一方、エイジングはagingのカタカナ表記で、「年をとること」である。「近頃、年のせいで…」というぼやきもあれば、「年の功」という言葉もあるように、心の働きには年齢とともに低下する側面も向上する側面もある。中でも社会的認知のエイジングについて検討することで、世代間の交流・理解を促進するヒントが得られないかと考えて研究を進めている。

c 概要と自己評価

人間は他者の顔つきを手がかりとしてその性格や能力などの特性を推論する傾向があるが、そうした顔特性判断への依存度には個人差が存在する。例えば、顔特性推論の妥当性を信じる程度や顔特性推論を実際に極端に行う程度には個人差があり、両者は正の相関を示す。顔特性推論への高い依存が他者への偏見・差別や自身の対人問題（詐欺被害など）につながる可能性を踏まえると、それがなぜ生じ、どのような作用を持つかの解明は重要な研究課題である。そこで、顔特性推論の個人差がどのような特徴をもち、その背後にどのようなメカニズムがあるかを明らかにすることを目指して研究を進めている。最近の研究では、顔画像の印象を Semantic Differential 尺度上で評価したデータから顔特性推論の極端さを定量化する方法の妥当性を検証する調査を実施し、この測定法が社会的望ましさや極端反応傾向などのバイアスに対して頑健であることを明らかにした。また、顔から種々の特性を判断できると信じる人は実際にそうした判断に長けているのかを問う研究も実施し、結果として、そうした信念の高い人による顔特性推論は正確であるというよりもステレオタイプ的であることが示唆された。以上に関連する研究成果は既に国内外の学会で発表され、国際誌に論文も掲載されており、研究は順調に進んでいる。

d 主要業績

(1) 著書

共著、鈴木敦命、(日本感情心理学会 企画、内山伊知郎 監修)『感情心理学ハンドブック』、13章2節 感情認知の神経基盤、2019.9

共著、鈴木敦命、(山口真美・金沢創・河原純一郎 編)『公認心理師の基礎と実践 6: 心理学実験』、第2章 実験計画、遠見書房、2019.10

(2) 論文

Suzuki, A., 「Persistent reliance on facial appearance among older adults when judging someone's trustworthiness」, 『Journals of Gerontology Series B: Psychological Sciences and Social Sciences』, 73 (4), 573-583 頁、2018.5

Tu, Y.-Z., Lin, D.-W., Suzuki, A., & Goh, J. O. S., 「East Asian young and older adult perceptions of emotional faces from an age- and sex-fair East Asian facial expression database」, 『Frontiers in Psychology』, 9, Article no. 2358 頁、2018.11

Suzuki, A., Tsukamoto, S., & Takahashi, Y., 「Faces tell everything in a just and biologically determined world: Lay theories behind face reading」, 『Social Psychological and Personality Science』, 10 (1), 62-72 頁、2019.1

Suzuki, A., Ueno, M., Ishikawa, K., Kobayashi, A., Okubo, M., & Nakai, T., 「Age-related differences in the activation of the mentalizing- and reward-related brain regions during the learning of others' true trustworthiness」, 『Neurobiology of Aging』, 73 (1), 1-8 頁、2019.1

鈴木敦命、「人相を観る人の心理」, 『文化交流研究』, 32, 45-52 頁、2019.3

服部友里, 渡邊伸行, 鈴木敦命, 「魅力度の類似した顔のグループに対するチャリーダー効果—観察者の性別と顔の性別の影響」, 『基礎心理学研究』, 38 (1), 13-25, 2019.9

(3) 学会発表

国際、Suzuki, A., Ueno, M., Ishikawa, K., Kobayashi, A., Okubo, M., & Nakai, T., 「Age-related decline in neural responses to expectancy violation about someone's trustworthiness」, Cognitive Aging Conference 2018, Atlanta, GA, 2018.5.5

国内、鈴木敦命, 「他者の信頼性の知覚と学習: 高齢者と若年者の比較」, 玉川大学 脳科学研究所 社会神経科学共同研究拠点研究会「世界や社会と相互作用して生きるヒトや動物の視覚—生理学、心理物理学、計算論」, 玉川大学, 2018.9.14

国内、鈴木敦命, 上野美果, 石川健太, 小林晃洋, 大久保街亜, 中井敏晴, 「信頼性の第一印象に反する情報への神経応答の年齢関連差」, 日本心理学会第82回大会, 仙台国際センター, 2018.9.26

国内、鈴木敦命, 「顔から特性を判断する傾向の個人差」, 日本感情心理学会第26回大会, 東洋大学, 2018.11.10

- 国際、Suzuki, A., Ueno, M., Ishikawa, K., Kobayashi, A., Okubo, M., & Nakai, T., 「Dampening of reward-related brain activity in older adults while processing impression-incongruent information regarding the trustworthiness of others」、The 3rd Annual Scientific Meeting of the Japanese Chapter of ISMRM、Nagoya, Japan、2018.12.22
- 国内、Suzuki, A., 「Cross-age similarities and differences in trustworthiness judgment」、3rd International Smart Aging and Brain Seminar、Tohoku University、2019.2.12
- 国際、Suzuki, A., Tsukamoto, S., & Takahashi, Y., 「Evidence for a general tendency to make extreme face-based judgments across traits」、International Convention of Psychological Science 2019、Paris, France、2019.3.8
- 国内、鈴木敦命、「科学的知識と説明責任は顔にもとづく信頼性判断を抑制できるか」、日本感情心理学会第27回大会、東海学園大学、2019.6.30
- 国際、Suzuki, A., Ueno, M., Ishikawa, K., Kobayashi, A., Okubo, M., & Nakai, T., 「Limited metacognitive awareness to the accuracy of face-based trait inference」、60th Annual Meeting of the Psychonomic Society、Montréal, Québec, Canada、2019.11.16

3. 主な社会活動

(1) 学会

- 国内、日本心理学会、『Japanese Psychological Research』編集委員、2019.11～
- 国内、日本基礎心理学会、『基礎心理学研究』編集委員、2018.4～
- 国内、日本感情心理学会、『感情心理学研究』副編集委員長、2018.4～2019.6

09a 日本語日本文学（国語学）

教授 月本 雅幸 TSUKIMOTO, Masayuki

1. 略歴

- 1977年3月 東京大学文学部国語学専修課程卒業
- 1980年3月 東京大学院人文科学研究科国語国文学専門課程修士課程修了
- 1981年3月 東京大学院人文科学研究科国語国文学専門課程博士課程退学
- 1981年4月 茨城大学人文学部専任講師（～1985年3月）
- 1985年4月 白百合女子大学文学部専任講師（～1987年3月）
- 1987年4月 白百合女子大学文学部助教授（～1992年3月）
- 1992年4月 東京大学文学部助教授（～1995年3月）
- 1995年3月 ドイツ連邦共和国ルール大学ボッフム交換助教授（～1996年1月）
- 1995年4月 東京大学大学院人文社会系研究科助教授
- 2006年1月 東京大学大学院人文社会系研究科教授
- 2020年3月 定年退職

2. 主な研究活動

a 専門分野

日本語史

b 研究課題

漢文に日本語としての読みを記入した訓点資料の研究を課題としている。関心の中心は平安時代から鎌倉時代にかけての訓点にあり、学界未紹介の資料を公表し、また既に知られている資料も含め、その資料的性格を再検討して言語の特質や年代性を吟味することにより、国語史料としての訓点資料の新たな利用の方法を模索している。

c 概要と自己評価

この2年間、引き続き平安時代の古訓点資料のうち、真言宗関係のものを中心に考察を行った。特に「大日経疏」（大毘盧遮那成仏経疏）の古訓点に注目し、主要な伝本の調査と訓読文作成を実施した。これはこの書が真言宗において最も重要な訓点資料であるとの認識に基づくものである。まだ本格的な考察を開始したばかりであるが、今後これに関する研究成果を公表して行きたいと考えている。

d 主要業績

(1) 編集主任

日本語学会編、『日本語学大辞典』、東京堂出版、2018.10

(2) 講演

月本雅幸、「現代日本人の外国・外国語との向き合い方～言語学の研究から日本の翻訳文化を辿り、世界の中の日本を考える～」、国際委員会・組織内会計士協議会共催研修会、公認会計士協会、2019.12.3

3. 主な社会活動

(1) 学会

国内、日本語学会、評議員、2018.4～2020.3

国内、訓点語学会、会長、2018.4～2020.3

1. 略歴

1982年3月	東京大学文学部国語学専修課程卒業
1984年3月	東京大学大学院人文科学研究科国語国文学専門課程修士課程修了
1984年4月	東京大学大学院人文科学研究科研究生
1985年10月	防衛大学校人文科学研究室助手
1989年4月	山梨大学教育学部専任講師
1991年4月	山梨大学教育学部助教授
1992年4月	成蹊大学文学部日本文学科助教授
1998年4月	東京大学大学院人文社会系研究科助教授（日本語・日本文学）
2007年4月	東京大学大学院人文社会系研究科准教授（日本語・日本文学）
2012年4月	東京大学大学院人文社会系研究科教授（日本語・日本文学）

2. 主な研究活動

a 専門分野

日本語学 日本語文法・日本語文法学史および言語理論

b 研究課題

現代語・古典語の日本語文法あるいは日本語文法学史および言語理論の研究をテーマとしている。なかでも現代語日本語文法に関する研究を一貫して続けており、これまでに、格構造（受身文、使役文、可能文、授受動詞構文）、テンス・アスペクト構造、言語行為構造（推量文、疑問文）、談話構造、中でも情報構造・視点構造（テンス、授受動詞構文）・期待構造（否定文、数量詞、限定表現、条件文）など、日本語文法をできる限りグローバルにとらえられる枠組を求めて考察を進めてきた。

さらに現代語の成果を古典語に適用して、古典語文法に新たな方向からアプローチをするとともに、従来の文法研究を歴史的にとらえることによって、各時代の文法理論を相対化することも試みている。言語理論に関しては、コミュニケーション行為構造の分析に力点を置きつつ、近年の有力な言語理論の批判的検討を通して、理論的全体像を模索している。

c 概要と自己評価

最近10年あまり特に力を入れて進めてきたことは、古典語のテンス・アスペクトに関して、これまでの研究史を概観し、その上に立ってこれまでの研究成果を包括的に説明できる理論的枠組を構築することであり、それは博士論文としてまとめた上で、それに推敲を重ね、『中古語過去・完了表現の研究』として出版することができた。現在では、テンス・アスペクトに続き、古典語の推量表現について研究を進めている。

またそれと平行して、現代語に関しては、ノダ・ワケダ・モノダ・コトダなどの形式名詞述語文、あるいは最近はとりたて詞と呼ばれることの多い副助詞、また否定文に関して研究を進めており、近い将来それぞれ単著としてまとめるつもりである。

さらにこれまであまり解明が進んでいない近世・近代の文法研究についても、数百点に及ぶ文献を収集し、それをもとに文法的な認識のあり方の変遷という観点から、分析を始めた。それぞれの時代の研究者が、どのような認識的な枠組のなかで研究をしてきたのか、そしてその枠組がどのようなきっかけで大きく方向を変えたのかなどを、実証的にたどっていききたい。

言語理論に関しても、特にグライスに端を発する研究の流れと広がりについて、批判的な究明を進めており、これもある程度全体像が見えてきた段階で、単著としてまとめたたい。

d 主要業績

(1) 論文

井島正博、「逆行推論について」、『成蹊大学文学部紀要』、第53号、pp.193-207、2018.3

井島正博、「ノ名詞節をとる構文の構造と機能」、『日本語学論集』、第14号、pp.25-51、2018.3

井島正博、「他言語から見た上代・中古語の推量表現」、沖森卓也編『歴史言語学の射程』三省堂、pp.133-149、2018.11

井島正博、「複文のテンス」、『日本語学論集』、第15号、pp.1-11、2019.3

井島正博、「いわゆる再帰動詞文について」、『日本語学論集』、第16号、pp.15-27、2020.3

(2) 書評

井島正博、「書評 福沢将樹 著『ナラトロジーの言語学—表現主体の多層性—』、『日本語の研究』、第 14 卷第 3 号、pp.166-173、2018.8

井島正博、「書評 大木一夫 著『文論序説』、『日本語文法』、第 19 卷第 1 号、pp.63-71、2019.3

(3) 講演

井島正博、「副詞句と否定」、異文化コミュニケーションにおける言語の役割講演、青島理工大学、2018.11.16

井島正博、「情報獲得経路の表現について」、第 2 回中日言語と翻訳国際シンポジウム、華僑大学、2019.10.19

(4) 事典項目

井島正博、「体言と用言」「文の構造」「文法論」、『日本語学大辞典』、東京堂出版、2018.10

3. 主な社会活動

(1) 学会

国内、日本語学会、評議委員、2018.4～2020.3

国内、日本語文法学会、評議委員、2018.4～2020.3

教授 **肥爪 周二** HIZUME, Shuji

1. 略歴

1989年3月 東京大学文学部国語学専修課程卒業
1991年3月 東京大学大学院人文科学研究科国語国文学専攻修士課程修了
1993年3月 東京大学大学院人文科学研究科国語国文学専攻博士課程中退
1993年4月 明海大学外国語学部日本語学科専任講師（～1996年3月）
1996年4月 茨城大学人文学部人文学科専任講師（～1997年9月）
1997年10月 茨城大学人文学部人文学科助教授（～2003年3月）
2003年4月 東京大学大学院人文社会系研究科・文学部助教授
2007年4月 東京大学大学院人文社会系研究科・文学部准教授
2018年4月 東京大学大学院人文社会系研究科・文学部教授（～現在に至る）

2. 主な研究活動

a 専門分野

国語学

b 研究課題

日本語音韻史・日本漢字音史・日本韻学史を、主な専門領域とする。古代日本における外国語研究の二本の柱、すなわち漢字音韻学（中国語学）・悉曇学（梵語学）の学史的研究を、主要な研究領域とする。先人の残したさまざまな記録を元に、江戸時代以前の日本における、音声観察・音声分類の発達および変遷を解明することを目指す。これらの研究成果と連動させつつ、漢字音の日本化の問題、拗音分布の偏在性についての歴史的解釈、濁音の起源（連濁現象の起源）についての考察など、音韻史分野にも研究対象を拡張し、着実に成果を上げている。近年の課題としては、国語音・漢字音（呉音系字音、漢音系字音、唐音系字音）・梵語音を総合する、日本語音節バリエーションの歴史を明らかにすることを目指している。

c 概要と自己評価

著書『日本語音節構造史の研究』は、肥爪の数十年来の業績のうち、日本語の音節構造の歴史に関わるものを集大成した研究書である。第一部 拗音論、第二部 二重母音・長母音論、第三部 撥音・促音論、第四部 清濁論 という構成になっており、日本語の音節構造に関わる主要なポイントを網羅し、それぞれに独自の新たな知見を提示している。

論文「サ行拗音—開拗音と合拗音のあわい—」においては、開拗音の中でも特異なふるまいをするサ行（ザ行）開拗音と、早々に日本語の音韻体系から弾き出されてしまったカ行（ガ行）合拗音とが、平安時代には、以外に通じ合う性質を持っていることを指摘した。それが、カ行合拗音が〈あきま〉に取り込む形で、当初から一単位で受容されたのに対し、サ行開拗音は、古代日本語のサ行子音の音価の特異性から、他の開拗音と同様に分割した二単位での受容と平行して、(現代語のような)一単位での受容も行われていたため、その一単位性が、共通のふるまいのベースとなったとする仮説を提唱した。

論文「上代語における文節境界の濁音化」においては、通常は「連濁」が起こることはない考えられている、文節境界においても濁音化が起こっていた可能性を、上代語資料から考察した。いくつかの候補となる事例を指摘し、そもそも「連濁」とはいかなる現象であったのか、「一語化」という基準そのものが歴史的に変化するのではないか等々、議論の前提となる概念の再検討を迫った。

論文「悉曇学者行智の江戸語音声観察—タ行音の場合—」においては、まず古代中国語の発音を復元し、それにより音訳漢字を読むことによって、インド本来の発音を得ようとした、江戸時代のユニークな悉曇学者・行智の、江戸語タ行音の音声観察について、紹介・分析した。行智の緻密な音声観察が、梵字の39種の子音を発音し分けるという、悉曇学上の必要から生じたものであったことを指摘した。

文献資料の調査と理論的な考察の双方を、バランスよく進めてゆくことを目指す方針が、順調に推し進められたと考える。特に今期は、これらの成果を単著『日本語音節構造史の研究』として刊行し、同書により、第38回新村出賞を受賞した。今後、同書に収められなかった悉曇学関係の論考をまとめていくと同時に、社寺における文献資料の調査を継続的に進め、その成果を順次公開していくことを目指したい。

d 主要業績

(1) 著書

肥爪周二、『日本語音節構造史の研究』、汲古書院、2019.1

(2) 論文

肥爪周二、「サ行拗音—開拗音と合拗音のあわい—」（韓国語）、『口訣研究』、2018.9

肥爪周二、「上代語における文節境界の濁音化」、『歴史言語学の射程』、2018.11

肥爪周二、「悉曇学者行智の江戸語音声観察—タ行音の場合—」、『近代語研究』、2019.9

(3) 学会発表

肥爪周二、「日本語音節構造史の研究」、国語研究室会、2018.7.14

(4) 受賞

国内、肥爪周二、新村出賞、新村出記念財団、2019.11.23

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

非常勤講師、國學院大學、「日本語音韻史研究」、2018.4～2020.3

(2) 学会

国内、訓点語学会、運営委員・編輯主任、2018.4～2019.3、編輯主任、2019.4～2020.3

国内、日本語学会、評議員、2018.4～2020.3、選挙管理委員長、2020.1～2020.3

09b 日本語日本文学（国文学）

教授 **長島 弘明** NAGASHIMA, Hiroaki

1. 略歴

1976年3月	東京大学文学部国語国文学専修課程卒業
1979年3月	東京大学大学院人文科学研究科国語国文学専門課程修士課程修了
1979年4月	東京大学大学院人文科学研究科国語国文学専門課程博士課程進学
1980年4月	実践女子大学文学部専任講師
1985年4月	名古屋大学文学部専任講師
1986年12月	名古屋大学文学部助教授
1993年4月	東京大学文学部助教授（1993年4月～1994年3月、名古屋大学助教授併任）
1995年4月	東京大学大学院人文社会系研究科助教授
1999年4月	東京大学大学院人文社会系研究科教授
2000年9月	博士（文学）（東京大学）
2019年3月	定年退職

2. 主な研究活動

a 専門分野

日本近世文学

b 研究課題

近世中期の上田秋成・建部綾足・与謝蕪村らの文人の文学を、伝記・作品論・思想論等の様々な面から考察する。新しい文学理念を掲げ、それまでになかった文学ジャンル・学問・絵画を生み出した文人の活動を、一人一人の個性・特殊性と、個人を越えた共通性との両面から明らかにすることを研究の目標とする。

c 概要と自己評価

上田秋成については、刊行半ばの全集の完結を目指すとともに、作家論を包含するような新しい伝記研究を進めつつある。建部綾足については、和文読本を中心とした作品論を、また蕪村については、発句と連句の評釈を書き進めている。

d 主要業績

(1) 論文

長島弘明、「芳賀矢一『留学日記』—東京大学国文学研究室蔵本の影印と翻刻—」、『東京大学国文学論集』、2019.3

(2) 学会発表・講演

長島弘明、「宣長と秋成」、鈴屋学会公開講演会、於松阪市産業振興センター、2018.4.21

(3) 啓蒙

長島弘明、「秋成／雑俎／蟹のはらわた（一）・（二）・（三）」、『国語国文』（通巻一四八号・一四九号・一五〇号）、2018.1

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

客員教授、放送大学、「上田秋成の文学（'16）」、2018年度
非常勤講師、二松學舎大学、「国文学講義」ほか、2018年度

(2) 学会

東京大学国語国文学会、評議員、2018年度
日本近世文学会、委員、2018年度

(3) 学外組織（学協会、省庁を除く）委員・役員

韓国檀国大学校日本研究所『日本学研究』海外編集委員、2018年度
韓国檀国大学校日本研究所国外研究諮問委員、2018年度

1. 略歴

1981年3月	東京大学文学部国文学専修課程卒業
1984年3月	東京大学大学院人文科学研究科国語国文学専門課程修士課程修了
1984年4月	東京大学大学院人文科学研究科国語国文学専門課程博士課程退学
1986年4月	東京大学文学部助手
1988年4月	フェリス女学院大学文学部専任講師
1991年4月	フェリス女学院大学文学部助教授
1993年4月	上智大学文学部助教授
1999年4月	東京大学大学院人文社会系研究科助教授
1999年4月	博士（文学）（東京大学）
2006年10月	東京大学大学院人文社会系研究科教授（現在に至る）

2. 主な研究活動

a 専門分野

中世文学、和歌文学

b 研究課題

和歌文学については、マクロ的には和歌史を構想し記述すること、ミクロ的には新古今集前後を中心とした中世和歌作品の方法を解明することを課題としている。前者は専門化し、細分化された研究の現状に対して、和歌を長い射程のもとに捉え、この文芸のもつ意義と独自性を総体的に把握することを目指している。後者は、作品を完成したものとして結果論的に捉えるだけでなく、より作者自身の方法に即した、内在的な理解を目標としている。

中世文学については、徒然草や方丈記など、とくに和歌的素養を基盤とした作品について、その文体と方法を解明することを目標としている。

c 概要と自己評価

2017年に刊行した『中世和歌史論 様式と方法』で中世和歌史をまとめたが、それ以後、中世に限らず、古代から近世までの和歌史を記述することを目指し、各時代の特徴的な歌人の方法の分析を行い、なぜ和歌史が続いたかの解明を進めた。解明のための重要視点の一つである「境界」については、とくに論考をまとめた。個別には、今期は、正徹・俊成・実朝（2本）ら中世歌人の論考を発表した。全体としての成果は2020年刊行の2冊の和歌史の著書にまとめる予定である。また、和歌が続いたことは教育とも不可分であり、そのことは現在の教育への提言にも生かしようと考え、古典教育の論考も2本執筆した。そのほか、専門的な研究にとどまらず、古典研究の現代的意義についてできるだけ積極的に発言するよう努めた。

d 主要業績

(1) 論文

- 渡部泰明、「正徹の幽玄」、『日本文学』、67-4、778、10-19頁、2018.4
渡部泰明、「古典に参加する——高等学校「古典探求」をめぐる——」、『日本語学』、37-12、144-154頁、2018.11
渡部泰明、「古人と「心ならひ」——藤原俊成「行末は」歌について」、『武蔵野文学』、66、1-7頁、2018.12
渡部泰明、『金槐和歌集』における百人一首歌、『季刊 第二次 悠久』、156、99-110頁、2019.1
渡部泰明、「「古典探求」の授業をどう考えるか」、『日本語学』、38-5、2019.5
渡部泰明、「和歌と境界」、『社藝堂』、6、21-31頁、2019.6
渡部泰明、「歌論における古典と現代」、『短歌』、66-9、74-77頁、2019.8
渡部泰明、「実朝像の由来」、渡部泰明編『源実朝 虚実を越えて』、勉誠出版、60-72頁、2019.12

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

放送大学客員教授、2018年度4~9月

(2) 学会

和歌文学会、常任委員、2018・2019年度
中世文学会、常任委員、2018年度

- 中世文学会、委員代表、2019年度
西行学会、常任委員、2018・2019年度
中古文学会、委員、2018・2019年度
(3) 学外組織（学協会、省庁を除く）委員・役員
日本学術会議、会員、2018・2019年度

教授 **安藤 宏** ANDO, Hiroshi

1. 略歴

- 1982年3月 東京大学文学部国文学専修課程卒業
1985年3月 東京大学大学院人文科学研究科国語国文学専門課程修士課程修了
1987年3月 東京大学大学院人文科学研究科国語国文学専門課程博士課程中退
1987年4月 東京大学文学部助手
1990年4月 上智大学文学部専任講師
1995年4月 上智大学文学部助教授
1997年4月 東京大学大学院人文社会系研究科助教授
2007年4月 東京大学大学院人文社会系研究科准教授
2010年4月 東京大学大学院人文社会系研究科教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

日本近代文学

b 研究課題

太宰治の文学の自意識過剰の饒舌体と呼ばれる文体に注目するところから出発、そのような文体が育まれてゆく必然性を近代文学史の展開に即して考察して行く中で、「私小説」というわが国独自の表現形式の生み出されていく過程を表現史的に解明する方向へと進んだ。作家論の一環として太宰治の文学の特質を解明して行く方向と、小説を中心とする日本近代文学の表現機構の研究とを、並行的しておしすすめて行くことを研究課題としている。

c 概要と自己評価

「表現機構」という観点から、小説が小説として認知される暗黙の要件を分析し、近代日本における変遷の様相を、『近代小説の表現機構』（岩波書店、2012年）にまとめ、それをさらに一般書の形で『日本近代小説史』（中公選書、2015年）と『私』をつくる 近代小説の試み』（岩波新書、2015年）にまとめた。これら近代小説研究に関する成果を踏まえ、蓄積してきた太宰治研究を再検討し、集成することが現在の課題になっている。

d 主要業績

(1) 論文

- 安藤宏、「太宰治「女の決闘」論」、『日本文学研究ジャーナル』9、2019.3
安藤宏、「太宰治の女性語りについて」、『女性文化』37、2019.4
安藤宏、「太宰治と現代—「自己の内なる天皇制」をめぐって」、『文藝別冊 永遠の太宰治』、2019.5

(2) 編集（編集責任者）

- 安藤宏、宗像和重共同編集、『日本文学研究ジャーナル』9、日本古典ライブラリー、2019.3
安藤宏、『太宰治 創作の舞台裏』、日本近代文学館、2019.6

(3) 小論・解説

- 安藤宏、「太宰治と三鷹市の未来」、『太宰治 三鷹市と共に—太宰治没後70年—』、2018.6
安藤宏・山下真史「教科書のなかの文学／教室のそとの文学Ⅱ—中島敦「山月記」とその時代」、『日本近代文学館』284、2018.7
安藤宏、「解説 太宰治「化学」ノート」、『資料集』11、青森県近代文学館、2018.11
安藤宏、「はじめに 小説は変貌する」、『小説は書き直される』、秀明大学出版会、2018.12

- 安藤宏、「『HUMAN LOST』の「準」典拠」、『神奈川近代文学館』143、2019.1
 安藤宏、「『隠沼』の記憶」、『太宰治生誕 110 年記念展—太宰治と弘前—』、弘前市立郷土文学館、2019.1
 安藤宏・土井雅也「生誕 110 年 太宰治—創作の舞台裏— 資料が伝える太宰治」、『日本近代文学館』288、2019.3
 安藤宏、「新出「お伽草紙」原稿の意義」、『日本近代文学館』289、2019.5

3. 主な社会活動

(1) 学外組織委員・役員

- 日本学術会議連携会員（2018、2019 年度）
 日本近代文学館理事（2018、2019 年度）
 日本近代文学会理事（2018、2019 年度）
 昭和文学会幹事（2018、2019 年度）
 筑摩書房教科書編集委員（2018、2019 年度）
 教育出版教科書編集委員（2018、2019 年度）

(2) 監修・編集企画

- 三鷹市スポーツと文化財団「太宰治三鷹とともに 没後 70 年展」、2018.6.16～7.16
 日本近代文学館「太宰治 創作の舞台裏」、2019.4.6～6.22
 三鷹市スポーツと文化財団「太宰治生誕 110 年特別展 辻音楽師の美学」、2019.9.21～10.20

(3) 講演

- トークイベント「小説は書き直される」、日本近代文学館、2019.1.6
 講演「資料で紐解く太宰治展～没後 70 年を迎えて」、三鷹市、2018.6
 日本近代文学館演習「資料を活用する研究法」、2018.8.21
 日本近代文学講座「資料は語る 東京近郊の文学 太宰治と伊豆—『斜陽』を中心に」、2018.9.15
 女性教養講座「太宰治の女性語りについて」、昭和女子大学、2018.10.24
 日本近代文学館講座「資料は語る 舞台裏から見る文学 太宰治・創作の舞台裏—生誕 110 年展のみどころ」、2019.5.18
 対談「太宰治 著書と資料をめぐって」（安藤宏、川島幸希）、山梨県立文学館、2019.6.15
 講演「太宰治と弘前・津軽」、弘前市立図書館、2019.8.17
 日本近代文学館演習「資料を活用する研究法」、2019.8.21
 講演「文学史に刻まれた文豪との日々 佐藤春夫・川端康成・志賀直哉」、三鷹市スポーツと文化財団、2019.10.5
 講演「太宰治『斜陽』の世界」、小山市、2019.12.7

教授 **鉄野 昌弘** TETSUNO, Masahiro

1. 略歴

- | | |
|----------|-------------------------------------|
| 1983年3月 | 東京大学文学部国文学専修課程卒業 |
| 1983年4月 | 東京大学大学院人文科学研究科国語国文学専門課程修士課程入学 |
| 1986年3月 | 同 修了 |
| 1986年4月 | 東京大学大学院人文科学研究科国語国文学専門課程博士課程進学 |
| 1990年3月 | 同 単位取得退学 |
| 1990年4月 | 帝塚山学院大学文学部専任講師 |
| 1994年4月 | 帝塚山学院大学文学部助教授 |
| 1995年4月 | 東京女子大学文理学部助教授 |
| 2003年4月 | 東京女子大学文理学部教授 |
| 2007年12月 | 東京大学大学院人文科学研究科 国語国文学専門課程 博士（文学）学位取得 |
| 2009年4月 | 東京女子大学現代教養学部教授（改組による学部名変更） |
| 2013年4月 | 東京大学大学院人文社会系研究科教授 |

2. 主な研究活動

a 専門分野

日本上代文学・和歌文学

b 研究課題

上代（奈良時代以前）日本文学を、韻文中心に研究している。特に『万葉集』の歌人、柿本人麻呂や、大伴家持の作品について、その読み直しを課題としている。『万葉集』の和歌は、中国の先進文明に正面から向き合って成立した日本という国家における草創期の文芸であり、漢詩文の表現に対して、学びつつ対抗するという両義的な関係を結んでいる。それゆえ、当時伝来していた六朝・初唐の漢詩文との比較・対照を主たる研究方法として、和歌独自の表現を明らかにしつつ、その価値を見出すことを論文執筆の際の、目標としている。更に『万葉集』は、7世紀前半から、8世紀中ごろまでの和歌の歴史を語る書物であると考えられ、歌人たちの積み重ねた作品群がいかなる軌跡を描くか、すなわち『万葉集』の和歌史を明らかにすることを、研究全体の目標とする。

c 概要と自己評価

この一、二年の業績も、それ以前から引き続いて、大伴家持の作品、特に『万葉集』巻十七以降の「歌日誌」の歌において、古代政治史上の事象がいかに関連しているかを俎上に乗せている。特にこの期間は、『万葉集』を締めくくる巻二十の歌々がどのようなことを語っているかを明らかにした上で、巻二十の持つ意義を明らかにする仕事に取り組んだ。今後は、『万葉集』全体の中で、「歌日誌」の持つ意味を体系的に明らかにしたいと考えている。

一方、家持の父である大伴旅人の伝記を書くことがもう一つの仕事であり、これはほぼこの期間に完成させることが出来、出版に付されることになっている。

d 主要業績

(1) 論文

「雪と雷一家持「歌日誌」の韜晦」、『上代文学』120号、2018.4、P31-46

「年初の雪は吉兆か」、『井手至博士追悼萬葉語文研究特別集』、和泉書院、2018.5、P201-222

「大伴家持は『万葉集』の完成にどう関わったのか」、『古典文学の常識を疑うII』、勉誠出版、2019.9、P26-29

『萬葉集』巻二十試論、『萬葉集研究』第39集、塙書房、2019.11、P345-388

「沖つ藻の花さきたらば」考一人麻呂歌集「略体歌」の「羈旅作」一、『国語と国文学』第97巻2号、2020.2、P18-32

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

東京女子大学非常勤講師、2013.4～2019.3、2019.3～現在 2018.4～2019.3

お茶の水女子大学非常勤講師、2018.4～2019.3

(2) 学会

萬葉学会 編輯委員

上代文学会 常任理事

(3) 学外組織

大学改革支援・学位授与機構 国語・国文学部会専門委員

高岡市万葉歴史館評議員

1. 略歴

- 1988年3月 東京大学文学部国文学専修課程卒業
1988年4月 東京大学大学院人文科学研究科国語国文学修士課程入学
1991年3月 同 修了
1991年4月 東京大学大学院人文科学研究科国語国文学博士課程進学
1996年3月 東京大学大学院人文社会系研究科日本文化研究専攻日本語日本文学
専門分野博士課程単位取得退学
1996年4月 東京大学大学院人文社会系研究科日本文化研究専攻日本語日本文学
専門分野研究生（～1997年3月）
1998年4月 博士（文学）学位取得（東京大学）
東京大学大学院人文社会系研究科日本文化研究専攻日本語日本文学専門分野博士課程修了
1998年4月 関西学院大学文学部専任講師
2002年4月 関西学院大学文学部助教授（2007年4月より准教授）
2008年4月 関西学院大学文学部教授
2013年4月 東京大学大学院人文社会系研究科准教授
2017年4月 同 教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

平安文学、源氏物語

b 研究課題

源氏物語は、平安前期に成立した長編物語・歌物語・和歌の発想を基盤とし、日記文学・漢詩文・史実等を貪婪に吸収して成立したと思われる。そこに到りつくまでの文学史的な動態、及び、源氏物語それ自体の構造や表現の分析を主な研究課題としており、初期の成果は『源氏物語の思考』（風間書房、2002年、第五回紫式部学術賞受賞）にまとめた。また平安時代の人々の思考や発想の形式にも関心を寄せており、和歌の贈答の分析を通じた意思伝達の呼吸などについて、『女から詠む歌 源氏物語の贈答歌』（青簡舎、2008年）に提案、これまでの成果は『源氏物語再考 長編化の方法と物語の深化』（岩波書店、2017年）にまとめた。そのほか、研究成果を一般の人々に分かりやすく伝える仕事として、瀬戸内寂聴訳源氏物語の注釈等の執筆のほか『男読み 源氏物語』（朝日新書、2008年）、『コレクション日本歌人選 和泉式部』（笠間書院、2011年）、『平安文学でわかる恋の法則』（ちくまプリマー新書、2011年）等の一般書も手掛けている。

c 概要と自己評価

今回は、故三角洋一氏（本学名誉教授）が執筆途中だった『風葉和歌集』（和歌文学大系、明治書院、2019年）の注釈や解説を補完して刊行したほか、本学で指導した院生たちとの論文集『新たなる平安文学研究』も刊行、その中では更級日記の表現と構造について物語との関係を論じた。現在は、久保田淳氏をはじめ五名で分担執筆の『古今和歌集』（和歌文学大系、明治書院）の注釈作業も進んでおり、源氏物語その他の平安朝物語を中心的な研究課題としつつも、より広域に、和歌・日記等の課題に取り組みつつある。

d 主要業績

(1) 著書

共著、三角洋一・高木和子、『物語二百番歌合／風葉和歌集』、明治書院、pp.495（うちp.357-413、422-426、428-473 執筆）、2019.1

編著、藤原克己監修、高木和子編、『新たなる平安文学研究』、青簡舎、pp.235（うち「更級日記における長編物語的構造」、p.203-227 執筆）、2019.10

(2) 論文

高木和子、「紫式部の表現—源氏物語・紫式部日記・紫式部集—」、『源氏物語 煌めくことばの世界Ⅱ』、p.19-34、2018.4

高木和子、「和歌に女歌・男歌はあるのか」、『古典文学の常識を疑うⅡ』、p.76-79、2019.9

高木和子、「源氏物語における〈対話が拓く物語〉」、『国語と国文学』、第96巻第10号、p.3-18、2019.10

(3) 書評

高木和子、「田坂憲二著『源氏物語の政治と人間』、『日本文学』、第67巻第8号、p.88-89、2018.8

(4) 時評

高木和子、「概観（文学）日本文学《古典》、『文藝年鑑 2019』、p.46-48、2019.6

(5) 啓蒙

高木和子、「源氏物語 その短編性と長編性 講演要旨」、『わかな（一般社団法人紫式部顕彰会会報）』、第51号、p.5-6、2019.12

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

連続講座、毎日文化センター・大阪、源氏物語を読む、1999.5～現在

特別講演、青山グリーンアカデミー、「第七一期《茶の湯の美》講座「幽玄の世界」 第四回『源氏物語』における「もののあはれ」、2018.7

特別講演、源氏物語アカデミー（於、福井県越前市）、「源氏物語における絵画化の場面」、2018.10

特別講演、東京大学公開講座（於、東京大学安田講堂）、「平安文学に見る愛の纏れ」、2018.12

特別講演、紫式部顕彰会、京都洛陽ライオンズクラブ共催（於、京都ホテルオークラ）、「源氏物語、その短編性と長編性」、2019.5

特別講演、源氏物語アカデミー（於、福井県越前市）、「源氏物語に見える雲」、2019.10

(2) 学会

中古文学会、常任委員、編集委員

紫式部学会、理事

(3) 学外組織(学協会、省庁を除く)委員・役員

紫式部学術賞（紫式部顕彰会）、審査委員

准教授 **佐藤 至子** SATO, Yukiko

1. 略歴

1994年3月	お茶の水女子大学文教育学部国文学科卒業
1994年4月	東京大学大学院人文科学研究科国語国文学専攻修士課程入学
1997年3月	同 修了
1997年4月	東京大学大学院人文社会系研究科日本文化研究専攻日本語日本文学専門分野博士課程進学
2000年3月	同 修了
2000年3月	博士（文学）学位取得（東京大学）
2000年4月	椋山女学園大学人間関係学部専任講師
2003年4月	椋山女学園大学人間関係学部助教授
2007年4月	日本大学文理学部准教授
2013年4月	日本大学文理学部教授
2018年4月	東京大学大学院人文社会系研究科准教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

日本近世文学

b 研究課題

近世後期から明治前期の戯作と芸能を主な研究対象としている。作品読解を通じて表現の基底にある価値観や知識を明らかにすること、近世の娯楽文化をめぐる諸事象と現代文化との連続性を考察することを目標としている。

c 概要と自己評価

戯作の文体と表現様式の分析から出発し、長編合巻の翻刻と書誌学的研究、戯作者山東京伝に関する研究などを積み重ねてきた。近年は幕末・明治に活躍した落語家三遊亭円朝の作品研究や、戯作に対する出版統制の実態解明にも力を注いでいる。これまで、近世後期の合巻に関する研究成果をまとめた『江戸の絵入小説—合巻の世界—』（ペリカン社、2001）、山東京伝の評伝をまとめた『山東京伝—滑稽洒落第一の作者—』（ミネルヴァ書房、2009）、古典を中心とする日本文学に描かれた妖術使いについて考察した『妖術使いの物語』（国書刊行会、2009）、戯作に対する出版統制について考察した『江戸の出版統制—弾圧に翻弄された戯作者たち—』（吉川弘文館、2017）などを発表している。

2018・2019年度は研究成果を一般向けにわかりやすく伝える仕事に精力的に取り組むとともに、時代横断的な研究テーマの開拓に努めた。

d 主要業績

(1) 論文

佐藤至子、「文を見る・絵を読む」、『近世文学史研究』、3、pp.65-79、2019.11

佐藤至子、「身の上を語る異類—黄表紙と合巻における擬人化についての考察—」、『東京大学国文学論集』、15、pp.171-183、2020.3

(2) 啓蒙

佐藤至子、「江戸文学に登場する悪人」、『江戸の悪 PART II』、pp.193-197、2018.6

佐藤至子、「文芸が描いた遊里」、『東京人』、403、pp.60-64、2018.11

佐藤至子、「御伽草子と戯作における擬人化表現」、『文化交流研究』、32、pp.25-31、2019.3

佐藤至子、「千手観音の「手」のゆくえ 『大悲千祿本』」、「紙上でみせる架空の歌舞伎 『正本製』」、「妖術使いと三すくみ 『児雷也豪傑譚』」、「歌舞伎役者の幽霊と化け猫 『百猫伝』」、「旅する藪医者の三都物語 『竹斎』」、「廓遊びの虚々々々 『傾城買四十八手』」、「江戸っ子が書く光源氏の物語 『彦紫田舎源氏』」、「〈奇〉と〈妙〉の江戸文学事典」、pp.30-35,133-138,194-200,208-213,286-291,385-390,488-494、2019.5

佐藤至子、「草双紙における絵と文はどう関わるのか」、『古典文学の常識を疑うⅡ 縦・横・斜めから書きかえる文学史』、pp.208-211、2019.9

(3) 講演

佐藤至子、「Japanese early-modern playful literature (geasku) and censorship 江戸の戯作と出版統制」、ケンブリッジ大学(英国)、2018.11

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

早稲田大学大学院非常勤講師、2018年度

(2) 学会

日本近世文学会、常任委員、2018・2019年度

(3) 学外組織(学協会、省庁を除く)委員・役員

国文学研究資料館古典籍共同研究事業センター、拠点連携委員、2019年度

1. 略歴

1994年4月	東京大学教養学部文科三類入学
1996年4月	東京大学文学部言語文化学科日本語日本文学（国文学）専修課程進学
1998年3月	同 卒業
1998年4月	東京大学大学院人文社会系研究科日本文化研究専攻日本語日本文学専門分野修士課程入学
2001年3月	同 修了
2001年4月	東京大学大学院人文社会系研究科日本文化研究専攻日本語日本文学専門分野博士課程入学
2006年3月	同 単位取得退学
2009年4月	東京大学大学院人文社会系研究科日本文化研究専攻日本語日本文学専門分野博士課程再入学
2010年3月	同 退学 2010年7月 博士（文学）学位取得（東京大学）
2011年4月	ノートルダム清心女子大学文学部 専任講師
2014年4月	ノートルダム清心女子大学文学部 准教授
2019年4月	東京大学大学院人文社会系研究科 准教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

日本中世文学・和歌文学

b 研究課題

日本の中世文学・和歌文学の研究を専攻している。特に平安時代後期から中世にかけての言説を研究の中心とし、鴨長明の諸作品（『方丈記』『無名抄』『発心集』）と和歌・歌学書・歌論書を主たる分析対象とする。核となる問題意識は、言葉がどのような世界をつくりだすのか、何を実現するのかということにある。その現場を、表現が巧まれる必然性・言説の主体や文化圏の価値観や構想という視点から分析し、特に中世前期における人と言葉の有り様の解明を試みる。言葉によって世界が構築される事例として、新古今時代を描出する『源家長日記』の分析を進めている。また、中世における紀行文学隆盛の基底として、巡礼記や和歌を伴う旅の記・物語といった作品群に着目し、旅・移動をめぐる言葉の動態を表現史・文学史として把握することを目指している。

c 概要と自己評価

鴨長明の諸作品を軸とした研究については、単著『鴨長明研究——表現の基層へ』（2015）にまとめたが、その過程で醸成した新たな問題意識をもとに、引き続き、『方丈記』や『発心集』についての論考を発表した。特に、『方丈記』については、災害を捉える視線・枠組みの分析を通して、古典として現代まで読み継がれる必然性の解明を試みている。また、中世和歌史の最重要歌人と位置付けられる西行について、その伝説化に大きな役割を果たした『西行物語』の分析をすすめ、個人という存在が公共的価値を有する古典文学作品となるプロセスを考察した。読解と表現分析を通して作品が古典となる文学史的必然性を解明し、現代における古典文学の意義を再考することを、今後の課題にしたいと考えている。

d 主要業績

(1) 論文

木下華子、「『西行物語』構想の方法——名所歌との関連をめぐって——」、『国語と国文学』、95-11、92-106 頁、2018.11

木下華子、「『発心集』蓮華城入水説話をめぐって」、倉本一宏編『説話研究を拓く 説話文学と歴史資料の間に』、389-410 頁、2019.2

木下華子、「災害を記すこと——『方丈記』「元暦の大地震」について」、『日本文学研究ジャーナル』、13、55-68 頁、2020.3

(2) 啓蒙

木下華子、「遁世者と乱世」、「軍記物語講座」によせて、8、（花鳥社HP）、web 原稿、2020.2

木下華子、「数寄者と中世文学」、『文化交流研究』、33、11-19 頁、2020.3

(3) 研究発表

木下華子、「『西行物語』構想の方法——名所歌との関連をめぐって」、東京大学中世文学研究会、2018.7

木下華子、『方丈記』の時間——「朧化」をめぐって——、2018 年度輔仁大学日本語文学科創立 50 周年—台湾日本語文学会創立 30 周年記念国際シンポジウム台湾における日本研究の課題と展望—文学・言語・社会、2018.12

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

ノートルダム清心女子大学非常勤講師、2019.4～2019.9

講演、早島町立図書館古典文学講座（於、岡山県早島町）、「能「藤戸」を読む」、2018.8

講座、NHK 文化センター高松教室（於、香川県高松市）、「中世日本の随筆を読む」、2018 年度

(2) 学会

中世文学会常任委員、2019 年度

西行学会会計監査委員、2018・2019 年度

10 日本史学

教授 **加藤 陽子** (戸籍名は野島陽子) KATO, Yoko

1. 略歴

- 1983年3月 東京大学文学部国史学専修課程卒業 (文学士)
- 1985年3月 東京大学大学院人文科学研究科修士課程修了 (国史学)
- 1989年3月 東京大学大学院人文科学研究科博士課程単位取得満期退学 (国史学)
- 1989年4月 山梨大学教育学部専任講師 (日本史学)
- 1991年4月 山梨大学教育学部助教授 (日本史学)
- 1992年12月 文部省在外研究員として、スタンフォード大学東アジアコレクション、ハーバード大学ライシャワーセンター研究員
- 1994年4月 東京大学文学部助教授 (日本史学)
- 1995年4月 東京大学大学院人文社会系研究科助教授 (日本史学)
- 1997年2月 博士 (文学) 取得
- 2009年4月 東京大学大学院人文社会系研究科教授 (日本史学)

2. 主な研究活動

a 専門分野

日本近代史

b 研究課題

1930年代の日本の政治と外交、近代日本の天皇制、いわゆる男子普通選挙制下の帝国議会議事録を読む

c 概要と自己評価

専攻は日本近現代史で、1930年代の外交と軍事を専門としている。近代において起こされた戦争が当該期の政治や社会に持った意味、あるいは、日清・日露・第一次世界大戦など、10年ごとになされた観のある戦争の記憶が総体として国民や国家に対してもたらした影響等について研究してきた。近年は、2011年の公文書管理法施行により利用しやすくなった宮内公文書館や国立公文書館の史料を用い、大正・昭和戦前期の詔書作成過程を研究している。また、昭和戦前期の政治史を専門とする歴史研究者として、日中関係史、日米関係史についても目配りしてきた。史料公開の先進性で知られるアメリカはもとより、近年では中国、台湾等でも史資料の公開が活発になってきたこともあり、内外の研究者との交流に努めている。

d 主要業績

(1) 著書

- 単著、加藤陽子、『天皇の歴史 8 昭和天皇と戦争の世紀』、講談社、2018.7
- 編著、加藤陽子、歴史学研究会編、加藤陽子責任編集『天皇はいかに受け継がれたか』、績文堂出版、2019.2
- 単著、加藤陽子、『天皇と軍隊の近代史』、勁草書房、2019.10

(2) 論文

- 加藤陽子、「歴史と憲法のあいだ 天皇と憲法を中心に」、『憲法問題』、30号、121-130頁、2019.5
- 加藤陽子、「日本象征天皇制的歴史考察」、『南開史学』、27期 2019年第1期、227-264頁、2019.6

(3) 書評

- ジェローム・グリーダー著、佐藤公彦訳、『胡適』、藤原書店、『毎日新聞』、2018.5.13
- 奈倉哲三ほか、『戊辰戦争の新視点 上・下』、吉川弘文館、『毎日新聞』、2018.6
- 東郷和彦、AN・パノフ、『ロシアと日本 自己意識の歴史を比較する』、東京大学出版会、『UP』、550号、40-46頁、2018.8
- 牧野邦昭、『経済学者たちの日米開戦——秋丸機関「幻の報告書」の謎を解く』、新潮社、『毎日新聞』、2018.9
- 木庭顕、『誰のために法は生まれた』、朝日出版社、『毎日新聞』、2018.10.14
- 東郷和彦、A・N・パノフ、『ロシアと日本 自己意識の歴史を比較する』、東京大学出版会、『UP』、553、36-41頁、2018.11
- 河原地英武、平野達志訳、家近亮子、川島真、岩谷将、『日中戦争と中ソ関係』、東京大学出版会、『毎日新聞』、2018.11
- 美濃部達吉著、高見勝利解説、『憲法講話』、岩波書店、『毎日新聞』、2019.1
- 黒川創、『鶴見俊輔伝』、新潮社、『毎日新聞』、2019.1

日本史研究会ほか編、『創られた明治 創られる明治』、岩波書店、『毎日新聞』、2019.1
 木畑洋一、『帝国航路を往く イギリス植民地と近代日本』、岩波書店、『毎日新聞』、2019.2
 長谷部恭男、『日本国憲法』、岩波書店、『毎日新聞』、2019.3
 仁藤敦史ほか、『古代王権の史実と虚構』、竹林舎、『毎日新聞』、2019.3
 巽由樹子、『ツアーりと大衆』、東京大学出版会、『毎日新聞』、2019.4
 尾藤正英、三谷太郎、原朗、『江戸時代とはなにか』『近代日本の戦争と政治』『満州経済統制研究』、『週刊 読書人』、2019.4
 大澤博明、『陸軍参謀 川上操六』、吉川弘文館、『毎日新聞』、2019.5
 春名宏昭、高橋典幸、村和明、西川誠、『皇位継承 歴史をふりかえり 変化を見定める』、山川出版社、『毎日新聞』、2019.6
 池田さなえ、『皇室財産の政治史』、人文書院、『毎日新聞』、2019.9
 宮内庁侍従職監修、『降りつむ』、毎日新聞出版、『毎日新聞』、2019.9
 朝日新聞社、『Journalism』、朝日新聞社、『毎日新聞』、2019.10
 牧原憲夫、『牧原憲夫著作集』上・下、有志舎、『毎日新聞』、2019.11
 本郷恵子、高橋陽一、高井ホアン、『院政、くわしすぎる教育勅語、戦前不敬発言大全』、講談社、太郎次郎社エディタス、合同会社パブリブ、『毎日新聞』、2019.12
 澤地久枝、『昭和とわたし』、文藝春秋、『毎日新聞』、2020.1
 大門正克、『増補版 民衆の教育体験 戦前・戦中の子どもたち』、岩波書店、『毎日新聞』、2020.1
 広田照幸ほか編、『歴史としての日教組 上・下』、名古屋大学出版会、『毎日新聞』、2020.2
 森まゆみ、『伊藤野枝集』岩波文庫、上野千鶴子・田房永子『上野先生、フェミニズムについてゼロから教えてください』大和書房、前田健太郎『女性のいない民主主義』岩波新書、『毎日新聞』 今週の本棚頁、2020.3

(4) 解説

加藤陽子、「負けた側の史劇が文学となるまで」、大岡昇平『レイテ戦記』(四)、255-262 頁、2018.7
 歴史学研究会委員会、「歴史学研究会近刊書籍のご紹介」、『歴史学研究』月報、2018 年 9 月号、2018.9
 加藤陽子、「戦争と大学の関係の深化を明らかに」、東京大学文書館所蔵『昭和 19 年学徒動員関係書類』パンフレット、2019.9

(5) 学会発表

国内、加藤陽子、「歴史と憲法のあいだ 天皇と憲法を中心に」、全国憲法研究会 憲法記念講演会、上智大学四谷キャンパス、2018.5.3
 国内、加藤陽子、「航空戦としての太平洋戦争」、ICU シンポジウム「“ここ”の歴史 幻のジェットエンジン、語る」、国際基督教大学、2018.6.2
 国内、加藤陽子、「「明治 150 年」を考える」、歴史教育者協議会 70 周年大会、京都府同志社中学・高校、2018.8.4
 国内、加藤陽子、「戦争の終わらせ方、負け方を想像する力」、戦争の終わり方を考える、東京大学文学部法文 2 号館 二番大教室、2018.8.10
 国内、加藤陽子、「天皇と皇位継承のコスモロジー～『創られた明治 創られる明治』」、歴研 総合部会例会 シンポジウム「天皇と皇位継承のコスモロジー」、明治大学 リバティタワー、2019.4.13

(6) 啓蒙

加藤陽子、「「明治 150 年」を考える」、『歴史地理教育』、887、24-31 頁、2018.11
 加藤陽子、「公開シンポジウム 後藤新平の「生を衛る道」を考える part2 戦争で生ずる境界領域と衛生」、『後藤新平の会 会報』、no.21、43-77pp、2020

(7) 会議主催(チェア他)

国内、「歴史学研究会 総合部会例会 天皇の身体と皇位継承」、チェア、東大文学部法文 2 号館 1 番大教室、2018.4.14

(8) マスコミ

「オピニオン 論点 ずさんな公文書管理 作成者の免責や時効も」、『毎日新聞 朝刊』、2018.4.13
 「天皇の「象徴」性とは何か」、『本』、講談社、2018.7.20
 「ドキュメンタリー「国家主義の誘惑」(渡辺謙一監督)の上映と対談」、『東中野 ポレポレ』、きろくびと、2018.7.29
 「戦後 73 年 戦争特番 学徒出陣「大学生はなぜ死んだ」」、TBS テレビ、2018.8.5
 「元首相が語った 公文書保存の意義 千代田で映画「陸軍前橋飛行場上映」」、『朝日新聞 朝刊 31 面』、2018.9.1
 「現代への視点 加藤陽子さん講演」、『北海道新聞』、2018.10.2
 「論点 元号を考える 時代に即した法制度に」、『毎日新聞 朝刊』、2019.4.3

「天皇はいかに受け継がれたか」、『週刊 読書人』、株式会社 読書人、2019.5.24
「日記でたどる「日本人の戦争」、NHK ラジオ第1、2019.8.14
「時代の葉 戦争でも向き合う機会失った」、『朝日新聞 夕刊 三面』、2019.8.21
「公共」再構築の好機に そこが聞きたい 天皇代替わりを振り返る」、『毎日新聞』、2019.12.17

(9) 教科書

『詳説日本史』、加藤陽子、執筆、山川出版社、2018

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

東京大学文学部、「天皇と天皇制を考える」、2018.6

特別講演、内閣府、「歴史の中の公文書 悠久の時間と目の前の空間と」、2018.8

北海道新聞、「現代への視点2018～歴史から学び、伝えるもの」、2018.9

ジュンク堂池袋本店、「太平洋戦争開戦日に考える 天皇と戦争、歴史と文学」、2018.12

朝日カルチャーセンター 新宿校、「『天皇はいかに受け継がれたか』を読む」、2019.4～2019.6

特別講演、立憲デモクラシーの会、「近代の天皇（制）と二つの憲法を考える」、2019.5

特別講演、日本弁護士連合会 東京弁護士会 第一東京弁護士会 第二東京弁護士会、「今、憲法を歴史から考える」、
2019.5

兵庫県白陵高校、「なぜ、歴史を学ぶのか」、2019.7

「飛ぶ教室」、「飛ぶ教室 第2回」、2019.7

2019年「後藤新平の会」シンポジウム 後藤新平の「生を衛る道」を考える Part2、「戦争で生ずる境界領域と衛生」、
2019.7

非常勤講師、九州大学文学部 九州大学大学院人文社会科学系研究科、「日本史学講義XX」「日本史特論IV」、2019.12

(2) 学外組織(学協会、省庁を除く)委員・役員

出版梓会、出版梓会文化賞 銓衡委員、2018.4～

東京大学新聞、評議員、2018.4～

教授 大津 透 OTSU, Toru

1. 略歴

1983年3月	東京大学文学部国史学専修課程卒業
1985年3月	東京大学大学院人文科学研究科修士課程国史学専門課程修了
1987年3月	東京大学大学院人文科学研究科博士課程国史学専門課程中退
1987年4月	山梨大学教育学部講師（歴史学）
1990年9月	山梨大学教育学部助教授（歴史学）
1994年11月	博士（文学）
1997年4月	東京大学大学院人文社会系研究科助教授
2002年10月	スイス、ジュネーブ大学招聘教授（～2003年2月）
2010年7月	東京大学大学院人文社会系研究科教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

日本古代史

b 研究課題

古代天皇制、日唐律令制比較研究、摂関期国家の研究

c 概要と自己評価

日本古代の律令制を東アジア世界の中で位置付けることを目的とし、それにともない古代天皇制の解明、敦煌吐魯番文書の研究、摂関政治期の国制の解明を行っている。科研費をうけて長年続けている天聖令にもとづく律令制の比

較研究については、律令制の特質と7世紀から9世紀にかけての東アジアの国際的緊張と隋唐文明の受容過程について論じた岩波新書『律令国家と隋唐文明』を執筆した。また亡くなられた吉田孝先生の残された律令制関係などの論文をまとめて岩波書店から『続律令国家と古代の社会』を編集して出版した。2019年の史学会大会でシンポジウム「日本律令制と中国文明」を企画し、その成果に基づいた論文集の出版準備を進めている。

d 主要業績

(1) 著書

単著、大津透、『律令国家と隋唐文明』、岩波書店、288頁、2020.2

共著、日本歴史学会編、『人とことば（人物叢書別冊）』、吉川弘文館、257頁、2020.3

(2) 論文

大津透、「畿内の人民支配」、広瀬和雄ほか編『畿内の古代学1巻 畿内制』、180-197頁、雄山閣出版、2018.4

大津透、「日唐古文書学比較研究の一箇視角—以文書処理を中心」、黄正建主編『中国古文書学研究初編』、上海古籍出版社、160-174頁、2019.5

大津透、「関晃『帰化人—古代の政治・経済・文化を語る—』、『日本史研究』、688、17-23頁、2019.12

(3) 解説

大津透、「解説」、吉田孝『続律令国家と古代の社会』岩波書店、355-366頁、2018.5

(4) 学会発表

国内、大津透、「古代天皇制の成立と特質」、宮城県高等学校社会科教育研究会、仙台第二高校、2018.9.21

(5) 会議主催(チェア他)

国際、「第63回国際東方学会議」、チェア、国家と儀礼—東アジアの中の日本古代文化、日本教育会館、2018.5.19

大津透、「シンポジウムIV 国家と儀礼—東アジアの中の日本古代文化」、『東方学会報』114、22-24頁、2018.7

国内、「第117回史学会大会古代史部会」、チェア、日本律令制と中国文明、東京大学、2019.11.10

(6) 小文

大津透、「日唐宋律令比較研究の進展」、『科研費NEWS』2018年度vol.1、5頁、2018.6

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

講演、「覆る道長像」、歴史文化講座「藤原道長 望月の歌から一千年 III」、京都府立文化芸術会館、2018.10.24

(2) 学会

国内、日本歴史学会、評議員、2002.7～

国内、東方学会、常務理事、2019.6～、国際東方学会議運営委員

教授 **鈴木 淳** SUZUKI, Jun

1. 略歴

1986年3月 東京大学文学部国史学科卒業

1992年3月 東京大学大学院人文科学研究科国史学専攻博士課程修了
(1995年3月 博士(文学)学位取得)

1992年4月 東京大学社会科学研究所助手

1994年4月 東京大学教養学部助教授

1996年1月 ドイツ、ボーフム大学(Ruhr-Universität Bochum) 客員教授(～1996年10月)

1996年4月 東京大学大学院総合文化研究科助教授(大学院重点化による)

1999年10月 東京大学大学院人文社会系研究科助教授

2007年4月 同准教授

2012年8月 同教授

2012年8月 米国、イェール大学(Yale University) 客員研究員(～2013年3月)

2. 主な研究活動

a 専門分野

日本近代史

b 研究課題

明治期の機械工業が元来の研究課題。新技術の導入が社会をどのように変えて行くのかという問題関心を中心に、史料に即した明治・大正期の再検討を心がけている。

c 概要と自己評価

共同研究や内外のシンポジウム等に参加して、従来より幅広く対象をとらえることができるようになり、産業遺産の研究でも多くの知見を得られたが、手を広げすぎて多忙なため、検討を深め、また体系的に成果を提示することが課題となっている。

d 主要業績

(1) 著書

共著、小林和幸編著『明治史研究の最前線』、筑摩書房、2020.1、187-200 頁執筆

(2) 論文

鈴木淳、「煙突と電柱の立ち並ぶ街—明治期東京の技術と生活」、お茶の水女子大学『比較日本学教育研究部門』第15号、2019.3、27-37 頁

鈴木淳、「東京大学における日本史学と古典講習科」、2014-2018 年多分野交流演習「東京大学草創期の授業再現」報告集『東京大学草創期とその周辺』東京大学大学院人文社会系研究科、2019.3、120-135 頁

鈴木淳、「大正期の飛行熱」、高田馨里編著『航空の二〇世紀—航空熱・世界大戦・冷戦』、日本経済評論社、2020.3、47-77 頁

Suzuki Jun (translated by David De Cooman), The Japanese Army Artillery and Engineering Officers's Study Visits to Europe and the "Japanese-German War", Jan Schmidt, Katja Schmidt (eds.), *The East Asian Dimension of the First World War*, Campus Verlag, Frankfurt/New York, 2020.2, pp.313-330

(3) 書評

「沢井実著『見えない産業—酸素が支えた日本の工業化』、『経営史学』54 卷 2 号、2019.9、49-51 頁

「ガラ紡を学ぶ会編著『臥雲辰致・日本独創のガラ紡—その遺伝子を受け継ぐ』、『技術と文明』22 卷 2 号、2019.10、63-69 頁

(4) 学会発表

海外、「19 世紀後半の日本に於ける汽罐製造技術の生成と普及」、2018.9.19、国際研究集会

International Symposium: Generation and Dissemination of Technical Knowledge in Japan from Edo- to Meiji-Period, Centre Européen d'Études Japonaises d'Alsace (CEEJA) アルザス・欧州日本学研究所

海外、「大学での機械工学教育の創始と日本産業革命の中での卒業生たちの役割」、2019.9.21、国際研究集会

International Symposium: Knowledge in Move, Formalization of Technical Know-how and the Creation of Technical Education in Meiji Japan (Project: From Craftsman to Engineer II), Centre Européen d'Études Japonaises d'Alsace (CEEJA)

海外、「世界文化遺産富岡製糸場の研究を通じて判明したヨーロッパ式技術の日本への移転の困難」2016.9.26、イタリア日本研究学会招待講演 XVIII Convegno di Studi sul Giappone, AISTUGIA, Università Degli Studi di Napoli "L'Orientale"

(5) 啓蒙

鈴木淳、「基調講演」、レンガドック活用イベント実行委員会『レンガドック 120 周年×浦賀奉行所開設プレ 300 周年記念シンポジウム 浦賀のまちと歴史資産について—レンガドックと奉行所、それらを繋ぐ流れは何か—』、2020.3、6-26 頁

3. 主な社会活動

(1) 学会

国内、史学会、理事、2016.10~2019.10

国内、日本産業技術史学会、理事、2009.5~、副会長、2017.5~

国内、政治経済学・経済史学会、編集委員、2009.1~、理事、2017.10~

(2) 行政

省庁、文化庁、文化審議会専門委員、2014.3~

1. 略歴

- 1994年3月 東京大学文学部国史学専修課程卒業
- 1996年3月 東京大学大学院人文社会系研究科日本文化研究専攻修士課程修了
- 1999年12月 東京大学大学院人文社会系研究科日本文化研究専攻博士課程単位修得の上退学
- 2000年1月 日本学術振興会特別研究員 (PD)
- 2003年3月 博士 (文学) (東京大学) (博人社 390 号)
- 2004年4月 宇都宮大学教育学部助教授 (社会科教育講座)
- 2007年4月 宇都宮大学教育学部准教授 (同)
- 2011年4月 東京大学大学院人文社会系研究科准教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

日本近世史

b 研究課題

近世前期を中心に、土地制度、身分と身分制、商品流通などの観点から近世社会の特質を検討している。

c 概要と自己評価

2018年度から、私が代表者となって科学研究費補助金による「幕府役所史料の整理・活用による近世法制史・身分論の新展開」、2019年度には分担者である「戦乱から平和・安定への転換に関する地域比較史研究—九州を中心に」という2つの研究活動を開始し、その史料調査を進めた。前者は地道に継続して行う史料整理の意味をもつ点で、後者は私がこれまで取り組んだことのないフィールドである点で、また両者とも法制史・対外関係史という不案内な分野に越境する取り組みでもあって、すぐに成果が得られるわけではないが、引き続き自分なりに視野の拡大と深化を進めることができたと思う。

d 主要業績

(1) 著書

共著、高埜利彦、牧原成征ほか、『近世史講義』、筑摩書房、2020.1

(2) 論文

牧原成征、「2017年の歴史学界—回顧と展望—日本 近世」、『史学雑誌』、127-5、2018.5

牧原成征、「「山里」村落の社会構造」、『歴史評論』、825、52-64頁、2019.1

牧原成征、「畿内の太閤検地とかわった村—三田智子『近世身分社会の村落構造』を読んで」、『部落問題研究』、228、38-48頁、2019.3

(3) 書評

小酒井大吾、『近世前期の土豪と地域社会』、『日本歴史』、2019.7

(4) 学会発表

国際、牧原成征、「日本の近世化と土地・商業・軍事」、第3回日本・中国・韓国における国史たちの対話の可能性円卓会議《17世紀東アジアの国際関係—戦乱から安定へ—》、大韓民国ソウル市Kホテル、2018.8.26

国内、牧原成征、「十七世紀研究・地域史の立場から—書評：三田智子『近世身分社会の村落構造—泉州南王子村を中心に—』を読む」、第56回部落問題研究者全国集会 (分代会歴史 I)、2018.10.28

(5) 予稿・会議録

国際会議、牧原成征、「日本の近世化と土地・商業・軍事」、2018.8.26

『SARA レポート』、86、112-125頁、2019.9

(6) 会議主催(チェア他)

国内、「史学会大会」、実行委員、東京大学法文1号館、2018.11.25

国内、「史学会大会」、実行委員、東京大学法文1号館、2019.11.10

(7) 研究テーマ

文部科学省科学研究費補助金、牧原成征、研究代表者、「幕府役所史料の整理・活用による近世法制史・身分論の新展開」、2018～

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

非常勤講師、慶応大学文学部、「日本史特殊」、2018.4～2019.3

非常勤講師、立教大学文学部、「史学講義」、2018.9～2019.3

非常勤講師、立教大学大学院文学研究科、「日本史演習」、2018.9～

(2) 学会

国内、日本歴史学会、評議員、2018.4～、理事、2019.7～

准教授 **高橋 典幸** TAKAHASHI, Noriyuki

1. 略歴

1989年4月	東京大学教養学部文科Ⅲ類入学
1991年4月	東京大学文学部国史学専修課程進学
1993年3月	東京大学文学部国史学専修課程卒業
1993年4月	東京大学大学院人文科学研究科国史学専攻修士課程進学
1995年3月	東京大学大学院人文科学研究科日本史学専攻修士課程修了
1995年4月	東京大学大学院人文社会系研究科日本文化研究専攻（日本史学）博士課程進学
1997年7月	同 博士課程（日本史学）中退
1997年8月	東京大学史料編纂所助手
2007年4月	東京大学史料編纂所助教
2009年1月	博士（文学）学位取得（東京大学）
2012年4月	東京大学大学院人文社会系研究科准教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

日本中世史

b 研究課題

中世武家政権の研究、14世紀政治社会史の研究

c 概要と自己評価

もっぱらモンゴル襲来を中心に鎌倉時代後半の外交・政治史研究に取り組んだ。また別に北条時頼政権について検討する機会を得たことにより、13世紀半ばから一貫する朝幕関係を見通す視座を得ることができた。今後は14世紀へと視野を拡大し、室町幕府成立期・南北朝期の政治史研究に進んでいきたいと考えている。また共同研究の一環として『平家物語』に取り組み、歴史学の立場から文学作品にアプローチする方法を模索した。さらに古記録から古文書の作成や授受を読み解くことで、古文書学の新たな一面を開拓することを試みた。

d 主要業績

(1) 著書

編著、高橋典幸・五味文彦、『中世史講義 院政期から戦国時代まで』、筑摩書房、2019.1

編著、春名宏昭・高橋典幸・村和明・西川誠、『皇位継承 歴史をふりかえり、変化を見定める』、山川出版社、2019.4

(2) 論文

高橋典幸、「中世の皇位継承」、『歴史と地理 日本史の研究』、717、1-14頁、2018.9

高橋典幸、「文書にみる源実朝」、『アジア遊学』、241、36-42頁、2019.12

(3) 書評

高橋典幸、木村英一『鎌倉時代公武関係と六波羅探題』清文堂出版、『ヒストリア』、269号、81-87頁、2018.8

(4) 解説

高橋典幸、「記録資料」「古文書」「古文書学」「書状」、『日本語学大辞典』、東京大学出版会、2018.10

(5) 学会発表

国際、Noriyuki Takahashi、「Succession to the Imperial Throne in medieval Japan」、RUB Japan Science Days、Ruhr-University Bochum (Germany)、2018.7.6

国内、高橋典幸、「御家人の西遷について その2」、国立歴史民俗博物館基幹研究「中世日本の地域社会における武家領主支配の研究」第7回共同研究会、ロイヤル胎内パークホテル(新潟県胎内市)、2018.9.6

国内、高橋典幸、「モンゴル襲来をめぐる外交戦」、くまもと文学・歴史館秋季特別展示会「蒙古襲来絵詞と竹崎季長」シンポジウム「蒙古襲来の真実」、くまもと文学・歴史館(熊本県熊本市)、2018.12.2

国内、高橋典幸、「鎌倉幕府軍事編成の再検討」、日本史研究会2019年9月例会、京都大学、2019.9.29

(6) 啓蒙

高橋典幸、「鎌倉時代の伊東」、『伊東市史 通史編 伊東の歴史1』、163-194頁、2018.3

高橋典幸、「中世史総論」、高橋典幸・五味文彦編『中世史講義 院政期から戦国時代まで』(筑摩書房)、13-28頁、2019.1

高橋典幸、「南北朝動乱期の社会」、高橋典幸・五味文彦編『中世史講義 院政期から戦国時代まで』(筑摩書房)、133-148頁、2019

高橋典幸、「実朝と実朝をめぐる人びと 御家人を中心に」、『悠久』、156号、60-73頁、2019.3

高橋典幸、「源頼朝」「北条時頼」「安達泰盛」「足利尊氏」、日本歴史学会編『人物叢書別冊 人とことば』吉川弘文館、2020.2

(7) 会議主催(チェア他)

国内、「第116回史学会大会」、実行委員、日本中世史部会、東京大学、2018.11.25

国内、「第117回史学会大会」、実行委員、日本中世史部会、東京大学、2019.11.10

(8) 共同研究(産学連携除く)

国内、主催、東京大学史料編纂所、「中世南九州仏教文化の総合的研究」、2018

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

非常勤講師、放送大学、「日本史のなかの神奈川」、2018.10

日本歴史文化講座(ヒスカル)、「鎌倉幕府と御家人」、2018.10

石川県立図書館、「鎌倉幕府と加賀・能登」、2019.11

鎌倉市、「源頼朝とまちづくり」、2019.12

セミナー、日蓮宗宗務院、「鎌倉幕府と宗教」、2020.1

(2) 学会

国内、日本古文書学会、学術雑誌編集長、2018.4～、理事、評議員、2018.4

国内、日本歴史学会、理事・評議員、2018.4

准教授 **三枝 暁子** MIEDA, Akiko

1. 略歴

1995年3月 日本女子大学文学部史学科卒業
1995年4月 東京大学文学部歴史文化学科研究生入学
1996年3月 東京大学文学部歴史文化学科研究生修了
1996年4月 東京大学大学院人文社会系研究科日本文化研究専攻(日本史学) 修士課程入学
1999年3月 東京大学大学院人文社会系研究科日本文化研究専攻(日本史学) 修士課程修了
1999年4月 東京大学大学院人文社会系研究科日本文化研究専攻(日本史学) 博士課程進学
2003年3月 東京大学大学院人文社会系研究科日本文化研究専攻(日本史学) 博士課程単位取得退学
2003年4月 日本学術振興会特別研究員(PD)～2005年3月
2005年4月 立命館大学文学部任期制講師～2008年3月
2006年6月 博士(文学)学位取得
2008年4月 立命館大学文学部准教授
2016年4月 東京大学大学院人文社会系研究科 准教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

日本中世史

b 研究課題

13～16世紀における日本中世の都市社会構造、中世身分制

c 概要と自己評価

中世都市京都の社会構造の分析を進めた。具体的には、「町」共同体の成立期とみなされている戦国期の社会構造の検討を進めるとともに、「西之京」地域の歴史について考察を深めた。特に「西之京」地域については、現在も中世に由来する神事が地域の人々の手で行われていることから、これまでとりくんできたフィールドワーク調査の成果と文献史料から読み取れる情報との接合を試み、近世・近現代の地域史をも視野に入れた検討を行うなど、研究手法の開拓を試みた。このほか、研究会および科学研究費による共同研究を通じ、10年ほどにわたって検討してきた、中世村落にかかわる研究の成果を論集としてまとめることができた。

d 主要業績

(1) 著書

編著、大山喬平・三枝暁子『古代・中世の地域社会―「ムラの戸籍簿」の可能性』思文閣出版、2018.9

共著、杉森哲也編『シリーズ三都 京都巻』1-23頁、東京大学出版会、2019.7

(2) 論文

三枝暁子、「脇田晴子の中世都市論をめぐって」、『歴史学研究』、969号、17-24頁、2018.4

三枝暁子、「フィールドワークで探る中世―西京の歴史と現在―」、『日本史研究』、678号、4-22頁、2019.1

三枝暁子、「16世紀戦乱下の北野社宮仕の生活と交流―能哲の「日記」から―」、『立命館大学人文科学研究紀要』、122号、205-227頁、2020.2

(3) 学会発表

国内、三枝暁子、「フィールドワークで探る中世―西京の歴史と現在―」、日本史研究会大会全体会シンポジウム、2018.10

(4) 啓蒙

三枝暁子、「室町将軍と天皇・上皇」、高橋典幸・五味文彦編『中世史講義―院政期から戦国時代まで―』201-216頁、筑摩書房、2019.1

三枝暁子、「西之京の前近代をさぐる」、上杉和央・加藤政洋編『地図で楽しむ京都の近代』56-61頁、風媒社、2019.2

(5) 共同研究（産学連携除く）

国内、参画、東京大学史料編纂所、共同利用・共同研究拠点一般共同研究「賀茂別雷神社文書の調査・研究」、2018.4～2019.3、2019.4～2020.3

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

非常勤講師、立命館大学（文学部）「京都学フィールドワーク」、2018.9（夏期集中授業）

非常勤講師、立命館大学（文学部）「京都学フィールドワーク」、2019.9（夏期集中授業）

非常勤講師、日本女子大学（文学部）「日本史講義」、2018.4～2019.3、2019.4～2020.3

非常勤講師、立教大学（文学部）「日本史演習」、2018.4～2018.9、「史学講義」、2018.10～2019.3

非常勤講師、明治大学（文学部）「日本史科学Ⅰ」、2019.4～2019.9

その他、諏訪市市民大学講座「京都西之京のずいきみこし―地域に息づく天神信仰―」、2019.2

(2) 学会

国内、日本古文書学会、評議員、2018.9～

国内、都市史学会、企画委員、編集委員、2018.12～

国内、歴史学研究会、研究副部長、2018.6～2019.5、研究部長、2019.6～

1. 略歴

- 2002年3月 東京大学文学部歴史文化学科（日本史学専修課程）卒業
2005年3月 東京大学大学院人文社会系研究科日本文化研究専攻（日本史学）修士課程修了
2009年4月 財団法人三井文庫契約研究員
2010年3月 東京大学大学院人文社会系研究科日本文化研究専攻（日本史学）博士課程修了
2010年3月 博士（文学）学位取得
2010年4月 公益財団法人三井文庫研究員
2015年7月 公益財団法人三井文庫主任研究員
2018年4月 東京大学大学院人文社会系研究科 准教授

2. 主な研究活動**a 専門分野**

日本近世史

b 研究課題

近世の天皇・朝廷の研究、近世都市豪商の研究

c 概要と自己評価

もっぱら三井家の史料に沈潜し、豪商の組織運営における利用の諸相から、近世の天皇・朝廷の機能・実態を検討した。従来研究してきた2つの領域の直接的な接点を考えたもので、利用の多様なあり方を、組織運営・内紛の歴史過程に内在して解釈し、都市宗教者をめぐる議論とも接合した点は、研究史上ある程度ユニークな試みであったと思うが、事実の羅列にとどまった感があり、近世社会のなかでの一般化になお課題が残った。共同研究等を通じては、ジェンダー史や画像史料の利用など、今後活かしてゆきたい分析視角・方法に触れ、若干試行することができた。また概説的な原稿の執筆や講演を通じて、従来の研究を要約する機会がいくつかあり、課題の所在と今後の研究計画を再考することができた。

d 主要業績**(1) 著書**

共著、春名宏昭・高橋典幸・村和明・西川誠、『皇位継承 歴史をふりかえり、変化を見定める』、山川出版社、55-75頁、2019.4

共著、高埜利彦、村和明ほか、『論集 近世の天皇と朝廷』、岩田書院、471-494頁、2019.5

共著、杉森哲也、村和明ほか、『シリーズ三都 京都巻』、東京大学出版会、75-99頁、2019.7

(2) 論文

村和明、「近世の皇位継承」、『歴史と地理 日本史の研究』720、1-14頁、2018.12

村和明、「近世の天皇・上皇と幕府」、『文化交流研究』32、77-83頁、2019.3

村和明、「三井からみた慶応三・四年一代官所年貢金取扱御用をめぐって」、『明治維新史研究』17、94-101頁、2019.11

(3) 学会発表

国内、村和明、「近世巨大商家におけるジェンダー史的観点の可能性」、国立歴史民俗博物館共同研究「日本列島社会の歴史とジェンダー」第7回研究会、国立歴史民俗博物館（千葉県佐倉市）、2018.5

国内、村和明、「都市豪商からみた慶応3・4年」、明治維新史学会第48回大会、駒澤大学（東京都世田谷区）、2018.6

国内、村和明、「近世三井家の内部抗争と決算帳簿」、東京大学経済史研究会、東京大学小島ホール（東京都文京区）、2019.6

(4) マスコミ

「歴史の審判を待つ—日本史の観点から探る出典選定の意図」、『東京大学新聞』、2018.5.14

(5) 共同研究（産学連携除く）

国内、主催、東京大学史料編纂所、一般共同研究「近世朝廷行事の通時変化と空間構成に関する史料情報の研究資源化」、2019

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

横浜開港資料館、「戊辰戦争と三井」、2018.9

東京大学フューチャーセンター推進機構・大学院人文社会系研究科次世代人文学開発センター共催公開講演、「江戸時代から考える改元・上皇・皇位継承」、2019.6

非常勤講師、東京女子大学、「日本史演習」、2018.4～2020.3

非常勤講師、東京女子大学、「4年次演習」、2018.4～2018.9、2018.4～2019.9

非常勤講師、慶應義塾大学、「日本史概説」、2019.8

(2) 学会

国内、日本古文書学会、学術雑誌編集委員、2018.4～

1 1 中国語中国文学

教授 大西 克也 ONISHI, Katsuya

1. 略歴

- 1985年3月 東京大学文学部中国語中国文学専修課程卒業
- 1985年4月 東京大学大学院人文科学研究科中国語学専攻修士課程入学
- 1987年3月 東京大学大学院人文科学研究科中国語学専攻修士課程修了
- 1987年4月 東京大学大学院人文科学研究科中国語学専攻博士課程進学
- 1988年9月 中華人民共和国北京大学中国語文学系留学（～1990年2月）
- 1990年3月 東京大学大学院人文科学研究科中国語学専攻博士課程退学
- 1990年4月 神奈川大学外国語学部専任講師
- 1993年4月 神奈川大学外国語学部助教授（～1995年3月）
- 1995年4月 東京大学大学院人文社会系研究科助教授
- 1998年3月 文部省在外研究員に採用され、中国広州市中山大学に於いて研修（～1998年12月）
- 2013年1月 東京大学大学院人文社会系研究科教授（現在に至る）
- 2019年4月 東京大学大学院人文社会系研究科長・文学部長（現在に至る）

2. 主な研究活動

a 専門分野

中国語学、中国古文字学

b 研究課題

(1) 上古中国語の文法研究

構文と文法範疇の相関的変容の諸相、及びそれに関与する様々なファクターの解明を目指している。

(2) 戦国秦漢出土文字資料の研究

戦国秦漢時代の出土文字資料の解読の他、言語がどのように文字化されたかという視点に基づき、地域毎の用字法の相違、秦による文字統一の実態や文字政策に関する探究を行っている。

c 概要と自己評価

研究課題(1)に関しては、上古の中国人が認識した世界をどのように言語化したのか、コーパスと残された文献の背後にはどのような世界が広がっているのかという新たな問題意識から研究を進めている。研究課題(2)に関しては、統一前後の出土資料における漢字の使用実態の解明を進めているが、近年は秦系や楚系の文献に見られる他国の文字影響に着目し、一筋縄ではいかぬ文字の歴史の複雑性に焦点を当てている。

d 主要業績

(1) 論文

ONISHI Katsuya, 「An Investigation of Clerical Script in Chu Regions during the Qin and Han Periods, and its Relationship to “Scribal Writing”」、『Bamboo and Silk』、vol.1, no.2, pp.359-402、2018

大西克也、「説“見”——清濁音變構詞另解」、『歴史語言學研究』、12、pp.14-26、2018.10

大西克也、「《清華染越公其事》「坳塗溝塘」考」、『第三十屆中國文字學國際學術研討會論文集』、pp.285-294、2019.5

大西克也、「論上古漢語代詞“之”和“其”的替代功能」、『歷時語言學研究』、13、pp.269-283、2019.10

大西克也、「「雅言」獻疑」、『東京大学中国語中国文学研究室紀要』、22、pp.11-32、2019.11

大西克也、李無未、「发现“东京大学在学证书”：解开中国语言学理论奠基者胡以鲁之谜」、『東京大学中国語中国文学研究室紀要』、22、pp.55-72、2019.11

(2) 学会発表

国際、大西克也、「也説清華簡从“𠄎”之字」、紀念清華簡入藏暨清華大學出土文獻研究與保護中心成立十周年國際學術研討會、清華大学、2018.11.18

国際、大西克也、「試論上古漢語被動句及其世界觀——以動力表達爲線索」、The annual meeting of the International Association of Chinese Linguistics、神戸市外国語大学、2019.5.10

国際、大西克也、「簡談漢字學在日本的情況」、第三十屆中國文字學國際學術研討會綜合座談「近年漢字文化圈的發展與變化」、國立成功大學、2019.5.24

国際、大西克也、「“弗”為“不之”合音說之我見」、第八屆出土文獻青年學者國際論壇、國立中興大學、2019.8.15

(3) 研究テーマ

文部科学省科学研究費補助金、大西克也、研究代表者、「中国語における文法的意味の史的変遷とその要因についての総合的研究」、2018～

文部科学省科学研究費補助金、大西克也、分担者（代表者は東大外）、「シナチベット諸語の歴史的展開と言語類型地理論」、2018～

3. 主な社会活動

(1) 学会

国内、日本中国語学会、会長、2018.4～2020.3

教授 齋藤 希史 SAITO, Mareshi

1. 略歴

1986年3月	京都大学文学部文学科中国語学中国文学専攻卒業
1986年4月	京都大学文学部聴講生
1988年4月	京都大学大学院文学研究科修士課程中国語学中国文学専攻入学
1990年3月	京都大学大学院文学研究科修士課程中国語学中国文学専攻修了（文学修士）
1990年4月	京都大学大学院文学研究科博士課程中国語学中国文学専攻進学
1991年3月	京都大学大学院文学研究科博士課程中国語学中国文学専攻退学
1991年4月	京都大学人文科学研究所助手
1997年4月	奈良女子大学文学部講師
1999年4月	奈良女子大学文学部助教授
2000年4月	国文学研究資料館文献資料部助教授
2000年4月	奈良女子大学文学部併任助教授
2001年10月	東京大学大学院総合文化研究科併任助教授
2002年10月	東京大学大学院総合文化研究科助教授
2002年10月	国文学研究資料館文献資料部併任助教授
2007年4月	東京大学大学院総合文化研究科准教授
2012年4月	東京大学大学院総合文化研究科教授
2015年5月	東京大学大学院人文社会系研究科教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

中国古典文学

b 研究課題

- (1) 中国古典詩文、とりわけ六朝から唐宋にかけての詩賦および文学論。
- (2) 古代から近代にいたる漢字圏の生成と展開、またその言語・文字・文学・出版。

c 概要と自己評価

(1)については、魏晋南北朝の詩および『文心雕龍』を中心として研究を進め、謝靈運および謝朓の詩の注釈に着手した。また古典詩の句法について、認知言語学の知見を参照しながら、とりわけ倒置や省略とされてきた技法の意義について再考した。

(2)については、共著『「国書」の起源』や論文「漱石詩の読者たち」他、講演、発表等において成果を示し、また科学研究補助金基盤(A)「東アジア古典学の次世代拠点形成」「国際協働による東アジア古典学の次世代展開」等の資金を得て、国内外との共同研究活動を積極的に行っている。なお、単著『漢文脈の近代』および『漢字圏の成立』の韓国語訳が出版されたことも成果に含めたい。

d 主要業績

(1) 著書

単著、齋藤希史(魯惠卿訳)、『漢文脈の近代:清末=明治の文学圏(延世大近代東アジア翻訳叢書シリーズ9)』、ソミヨン出版、2018

単著、齋藤希史(許智香訳)、『漢字圏の成立』、グルハンアリ、2018

辞書・辞典・事典、日本語学会、『日本語学大辞典』、東京堂出版、2018.10

共著、品田悦一・齋藤希史、『「国書」の起源 近代日本の古典編成』、新曜社、2019.9

(2) 論文

齋藤希史、「漱石詩の読者たち」、『日本近代文学』、98、2018.4

(3) 学会発表

国際、齋藤希史、「漢文脈の近代:清末=明治の文学圏」、第3回海外学者招待フォーラム、延世大学校近代韓国学研究所、2018.12.13

国際、齋藤希史、「文明の翻訳:近代東アジアにおける「漢」と「洋」」、第20回近代韓国学研究所国際学術大会、延世大学校、2019.7.19

(4) 啓蒙

齋藤希史、「漢詩人(漢文ノート36)」、『UP』、47(1)、pp.52-59、2018.1

齋藤希史、「百人一首を味わう【五三】」、『日本語学』、pp.72-73、2019.1

齋藤希史、「もうひとつの興味 成島柳北の漢詩から」、『学士会報』、937、2019.7

(5) マスコミ

「翻訳語事情(automobile→自動車)」、『読売新聞』、2018.4.2/同(ecology→生態学)、2018.6.4/同(influence→影響)、2018.8.6/同(department store→百貨店)、2018.10.1/同(astronomy→天文学)、2018.12.3/同(curator→学芸員)、2019.2.4/同(number→番号)、2019.4.1/同(century→世紀)、2019.6.3/同(organ→機関/器官)、2019.8.5/同(weathering→風化)、2019.10.7/同(mission→天職)、2019.12.2/同(infection→感染)、2020.2.3

(6) 研究テーマ

日本学術振興会 科学研究費助成事業 基盤(A)「東アジア古典学の次世代拠点形成——国際連携による研究と教育の加速」、2015~2018

日本学術振興会 科学研究費助成事業 基盤(A)、齋藤希史、研究代表者、「国際協働による東アジア古典学の次世代展開——文字世界のフロンティアを視点として」、2019~2024

日本学術振興会 科学研究費助成事業 特別研究員奨励費、齋藤希史、許智香、「翻訳と東アジア——近代日本におけるPhilosophyの翻訳と植民地朝鮮への伝播」、2017~2020

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

特別講演、韓国・東西大学校、「東アジアにおける文字と言語意識」、2018.11

特別講演、韓国・東西大学校「翻訳は何を生んだか」、2019.11

非常勤講師、早稲田大学政治経済学部、外国文学、2018-19

(2) 学会

国内、中国社会文化学会理事、東方学会学術委員、六朝学術学会理事、日本中国学会評議員、日本近代文学館運営審議委員

1. 略歴

- 1991年3月 東京大学文学部中国語中国文学専修課程卒業
1991年4月 東京大学大学院人文科学研究科修士課程中国語中国文学専攻入学
1993年3月 東京大学大学院人文科学研究科修士課程中国語中国文学専攻修了
1993年4月 東京大学大学院人文科学研究科博士課程中国語中国文学専攻進学
1993年9月 北京大学中文系留学（高級進修生として）（1994年7月まで）
1997年1月 東京大学大学院人文社会系研究科博士課程中国語中国文学専攻修了
1997年1月 博士（文学）学位取得
1997年4月 明治大学政治経済学部 専任講師
2002年4月 明治大学政治経済学部 助教授
2007年4月 明治大学政治経済学部 准教授
2010年4月 明治大学政治経済学部 教授
2013年4月 一橋大学大学院言語社会研究科 教授
2018年4月 東京大学大学院人文社会系研究科 教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

中国近現代文学

b 研究課題

(1) 中国モダニズム文学の展開

モダニズムを広義にとらえ、中国近現代文学において、西洋の文学技法を学んで中国の現実を描く文学創作がどのように展開したかを解明しようとしている。

(2) 現在の中国の知的状況

現在の中国の知識界の状況を捉え、その意味を日本に伝えようとしている。

c 概要と自己評価

(1) については、西洋的マルクス主義文芸思想を十分に吸収し、中国の現実に即した理論を構築しようとした胡風およびその周辺の文学活動を総体としてまとめるべく、一連の論文を発表している。その一部は中国において発表し、研究交流を進めている。

(2) については、中国の農村を内在的にとらえた梁鴻著『中国はここにある』を翻訳、出版した。本書は『日本経済新聞』『朝日新聞』など全国紙の書評でも取りあげられた。

d 主要業績

(1) 論文

鈴木将久、「中華人民共和国建国前後の茅盾」、『越境する中国文学—新たな冒険を求めて』、pp.165-188、2018.2

鈴木将久、「路翎的朝鮮戦争」、『人間思想（簡体字版）』、9、pp.145-164、2018.3

鈴木将久、「타계우씨요시미의'중국문학」、『연동하는동아시아를보는눈』、pp.299-326、2018.6

鈴木将久、「胡風の日本留学体験」、『戦前期アジア留学生と明治大学』、pp.191-226、2019.3

鈴木将久、「改革開放初期中国的”五・四”想像」、『東京大学中国語中国文学研究室紀要』、第22号、pp.87-103、2019.11

鈴木将久、「中国の農村を文学で表現すること」、『研究中国』、第10号、pp.87-103、2020.4

(2) 書評

魏時煜、『胡風：詩人理想与政治風暴』、『東方』、449、pp.32-36、2018.7

山崎眞紀子、石川照子、須藤瑞代、藤井敦子、姚毅、『女性記者・竹中繁のつないだ近代中国と日本』、『週刊読書人』、6頁、2018.7.13

黒川みどり・山田智、『竹内好とその時代』、有志舎、『歴史評論』、831号、pp.97-101、2019.7

山口守、『巴金とアナキズム』、中国文庫、『週刊読書人』、5面、2019.7.19

閻連科、『黒い豚の毛、白い豚の毛』、河出書房新社、『週刊読書人』、4面、2019.10.11

『野草』百号記念号編集委員会、『中華文藝の饗宴』、研文出版、『中国研究月報』、第861号、pp.19-21、2019.11

黒川みどり・山田智、『評伝 竹内好』、有志舎、『週刊読書人』、3面、2020.3.27

(3) 学会発表

- 国際、鈴木将久、「現実主義的再定義：茅盾『夜読偶記』及其周辺」、1957 歴史実践的社會、思想、文化、生活意涵、2018.4.28
- 国際、鈴木将久、「博士生《返乡笔记》表达了什么？」、东亚青年的精神状况与情感政治、2018.8.7
- 国際、鈴木将久、「竹内好思想中的中国文学」、南京論壇、2018.11.17
- 国際、鈴木将久、「胡風如何學習魯迅」、2018 西江 Transcultural China 國際學術會議、2018.12.20
- 国際、鈴木将久、「胡風如何學習魯迅」、中国現代左翼批評理論与实践再認識、上海大学、2019.3.12
- 国際、鈴木将久、「改革開放初期中国的“五・四”想像」、長期的視点と東アジアの歴史的視点における「五・四」、東京大学、2019.5.11
- 国際、鈴木将久、「淺析瞿秋白《赤都心史》」、「中国の文学革命と19-20世紀世界」研究会、京都大学、2019.11.16
- 国内、鈴木将久、「中国文学と世界との対話——「抒情」をめぐる」、東アジアにおける世界文学の可能性、東京大学駒場キャンパス、2020.2.11

(4) 総説・総合報告

- 鈴木将久、「中国を理解するために」、『現代思想』、46-6、pp.103-109、2018.4
- 鈴木将久、「中華人民共和国の文学をどう読むか」、『文化交流研究』、32、pp.1-8、2019.3
- 鈴木将久、「グローバル化時代の日本で「五・四」を考える」、『東方』、464号、pp.2-7、2019.11
- 鈴木将久、「対歴史研究的期待」、『人間思想（簡体字版）』、第11輯、pp.202-205、2019.11
- 鈴木将久、「作為東亞人文思想節点的「革命—後革命」」、『作為東亞人文思想節点的「革命—後革命」』 pp.7-19、2020.1
- 鈴木将久、「蘭明さんから李箱へ」、『九葉読詩会』、第5号、pp.58-63、2020.3

(5) 翻訳

- 個人訳、瞿秋白、「大衆文芸の問題」、鈴木将久、『大衆文芸の問題』、『中国現代文学傑作セレクション』、勉誠出版、2018.6
- 共訳、梁鴻、「中国在梁庄」、鈴木将久、『中国はここにある』、みすず書房、2018.9

(6) 研究テーマ

- 日本学術振興会 科学研究費 基盤 (B)、鈴木将久、研究代表者、「一九八〇年代中国の思想と文化に関する研究」、2017～2019

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

- セミナー、北京大学、「茅盾与胡風」、2018.4
- セミナー、南京大学、「茅盾的現實主義」、2018.11
- セミナー、重慶大学、「胡風如何學習魯迅」、2019.3

(2) 学会

- 国内、中国社会文化学会理事

1 2 東洋史学

教授 吉澤 誠一郎 YOSHIZAWA, Seiichiro

1. 略歴

1991年3月	東京大学文学部東洋史学専修課程卒業
1993年3月	東京大学大学院人文科学研究科（東洋史学）修士課程修了
1995年3月	東京大学大学院人文科学研究科（東洋史学）博士課程中退
1995年4月	東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所助手
1999年4月	東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所情報資源利用研究センター助手 〔2000年5月に、東京大学より博士（文学）の学位を取得〕
2001年4月	東京大学大学院人文社会系研究科助教授
2007年4月	東京大学大学院人文社会系研究科准教授
2018年9月	東京大学大学院人文社会系研究科教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

中国近代史

b 研究課題

主な研究課題は、近代中国における政治体制の模索、都市政治、経済建設、ナショナリズム、日中関係史。最近では、近代中国における歴史学の形成と日本の「東洋史学」の交流の考察にも関心がある。

c 概要と自己評価

中国近代における政治体制、中国沿海部と内陸部の経済的關係、知識人の国際関係認識など、複数の研究課題を並行して進めている。それらの成果の一部は論文にまとめて発表することができたが、それぞれのテーマに即した著作としてまとめていく作業も進行中である。

d 主要業績

(1) 論文

- 吉澤誠一郎、「近代世界のなかの日本と清朝」、波多野澄雄・中村元哉編『日中戦争はなぜ起きたのか—近代化をめぐる共鳴と衝突』、中央公論新社、2018.10
- 吉澤誠一郎、「危機のなかの清朝」、小松久男編『歴史の転換期 [9] 1861年 改革と試練の時代』、山川出版社、2018.10
- 吉澤誠一郎、「20世紀中国における人口論の展開」、『歴史学研究』978号、2018.12
- 吉澤誠一郎、「五四運動とその残影」、『歴史地理教育』891号、2019.3
- 吉澤誠一郎、「近代日本の中国城市指南及其印象：以北京、天津為例」、巫仁恕主編『城市指南与近代中国城市研究』、開源書局、2019.6

3. 主な社会活動

(1) 学会等の委員

- 国内、日本学術会議、連携会員、2014.1月～現在
- 国内、東洋文庫、兼任研究員、2009.4～現在
- 国内、中国社会文化学会、理事、2001.7～現在
- 国内、東方学会、学術委員、2013.6～現在
- 国内、東洋史研究会、評議員、2008.11～現在
- 国内、史学研究会、評議員、2013.6～現在

1. 略歴

- 1990年3月 岡山大学文学部史学科卒業
1990年4月 大阪市立大学文学研究科修士課程東洋史学専攻入学
1992年3月 同上 修了。文学修士の学位を取得
1992年4月 大阪市立大学文学研究科博士課程東洋史学専攻入学
1994年9月 武漢大学（中国）にて歴史系高級進修生として在外研究（～1996年7月）
2001年3月 大阪市立大学文学研究科博士課程東洋史学専攻修了。大阪市立大学文学研究科より博士（文学）の学位を取得
2001年10月 岡山大学文学部助教授
2006年4月 岡山大学大学院社会文化科学研究科助教授
2007年4月 岡山大学大学院社会文化科学研究科准教授
2010年4月 東京大学大学院人文社会系研究科准教授
2018年4月 東京大学大学院人文社会系研究科教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

中国古代史

b 研究課題

皇帝権力の形成と展開、4～5世紀の遊牧民族の南下と社会変容、都城史、石刻資料を用いた社会史

c 概要と自己評価

主に都城史の分野で自著『中国古代都城の設計と思想』（勉誠社、2016年）で残された幾つかの課題について研究をおこなった。また科研費、基盤研究（B）「東アジア史における「古代末期」の研究」を進めた。これらの研究活動の中で、共著『378年 失われた古代帝国の秩序』や論文、国際学会での発表を数多くおこなうなど、精力的に研究活動を進めた。

d 主要業績

(1) 著書

南川高志編、佐川英治ほか5名、『378年 失われた古代帝国の秩序』、山川出版社、2018.6

(2) 論文

佐川英治、「六朝建康城と日本藤原京」、『東アジア古代都市のネットワークを探る一日・越・中の考古学最前線一』、205-221頁、2018.2

佐川英治、「北魏道武帝の「部族解散」と高車部族に対する羈縻支配」、『多民族社会の軍事統治—出土史料が語る中国古代—』、289-310頁、2018.4

佐川英治、「唐長安城の朱雀大街と日本平城京の朱雀大路—都城の中軸道路に見る日唐政治文化の差異—」、『唐代史研究』、21、21-51頁、2018.8

佐川英治、「都城制の画期をめぐる歴史学と考古学—曹魏の鄴城と洛陽城の復元を中心に—」、『中国考古学』、18、31-48頁、2018.12

佐川英治、「北魏道武帝的“解散部落”与高車部族的羈縻政策」、『唐研究』、24、1-18頁、2019.3

佐川英治、「6世紀河北農村の慈善活動と石柱建立—北齊標異郷義慈恵石柱再考—」、『古代東アジアの文字文化と社会』、106-142頁、2019.4

佐川英治、林子微訳、「倫敦“古代世界的法与書写習慣”国際学術検討会参加記」、『中国中古史研究』、7、293-303頁、2019.12

佐川英治、「北魏六鎮史の研究（修訂版）」、森部豊編『石刻史料を用いた唐朝の羈縻支配に関する基礎的研究』、2016～2019年度科学研究費補助金（基盤研究C）成果報告書（JSPS16K03100）、pp.119-164、2020.3

(3) 学会発表

国際、佐川英治、「北魏道武帝的“部族解散”与高車部族的羈縻政策」、学術工作坊“族群凝聚与国家秩序”、北京、2018.6.2

国際、佐川英治、「漢帝国以後の多元社会」、第六屆漢化・胡化・洋化国際学術研討会、北京、2018.7.21

国際、佐川英治、「北魏六鎮与涼州人士」、涼州文化与糸綢之路国際学術研討会、武威、2018.10.11

- 国際、佐川英治、「北朝墓誌与六鎮研究」、「出土文献与漢唐間地方社会」学術研討会、上海、2018.10.27
 国際、佐川英治、「中国古代都城の設計とそこに現れた天下観」、第13回都城制研究会、2019.3.16
 国際、佐川英治、「北魏洛陽城在東亜都城史上的地位」、歴史学和考古学交錯的中古都城、上海、2019.4.20
 国際、佐川英治、「魏晋南北朝時代の禁碑令と碑文習慣」、中国古代石刻史料研究会、東京、2019.10.5
 国際、Eiji Sagawa、A Pluralistic World in the Wake of the Han Empire, International Conference “Beliefs and Cultural Flows of East Asia in the Late Antiquity and Medieval Period”, Paris、2019.10.16
 国内、佐川英治、「羈縻政策としての北魏六鎮」、第8回東西学術研究所研究例会、大阪、2019.10.26

(4) 研究テーマ

- 文部科学省科学研究費補助金、基盤研究 (B)、佐川英治、研究代表者、「東アジア史における「古代末期」の研究」、2018～
 文部科学省科学研究費補助金、佐川英治、分担者 (代表者は東大外)、「中国古代軍事史の多角的検討—「公認された暴力」のありか」、2018～

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

- 特別講演、南開大学、「383年 淝水之戦与中華世界的変化」、2018.6
 非常勤講師、京都大学、「中国古代都城の設計と思想」、2018.9
 非常勤講師、大阪市立大学、「漢帝国以後の多元世界」、2018.9
 特別講演、華東師範大学、「383年 淝水之戦与中華世界的変化」、2018.10
 特別講演、上海師範大学、「歴史学和考古学中的都城制分期—以曹魏鄴城与洛陽城的復原為中心—」、2018.10
 特別講演、早稲田大学、「4、5世紀を境とする東アジア世界の変化」、2019.1
 中央大学、「北魏六鎮と草原世界—「スイヤブと碎葉鎮城」に寄せて—」、2019.3
 清華大学、「再説北齊標異郷義慈惠石柱」、2019.11

(2) 学会

- 国内、東方学会、学術委員、2019.6～

(3) 学外組織(学協会、省庁を除く)委員・役員

- 民間企業、東京書籍株式会社、教科書「新しい社会」専門委員、2018.4～2019.3
 教育機関、放送大学、客員教授、2018.4～
 民間企業、東京書籍株式会社、「世界史探究」教科書の編集委員、2019.4～

准教授 **島田 竜登** SHIMADA, Ryuto

1. 略歴

- 1996年3月 早稲田大学政治経済学部経済学科卒業
 1998年3月 早稲田大学大学院経済学研究科理論経済学・経済史専攻修士課程修了
 2001年11月 ライデン大学アジア・アフリカ・アメリンディア研究センター上級修士課程修了
 2005年12月 ライデン大学より博士学位 (Doctor) 取得
 2006年3月 早稲田大学大学院経済学研究科理論経済学・経済史専攻博士後期課程退学
 2006年4月 西南学院大学経済学部講師
 2007年4月 西南学院大学経済学部准教授
 2012年4月 東京大学大学院人文社会系研究科准教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

東南アジア史、海域アジア史、アジア経済史

b 研究課題

アジア域内貿易史、オランダ東インド会社史、グローバル・ヒストリーと歴史叙述

c 概要と自己評価

2012年4月に着任して8年が経過した。このうち、2018年度から2019年度にかけて研究成果として発表したものは下記の論文6件などがある。また、編著の論文集出版の機会や科学研究費補助金を利用することなどを通じて国内の共同研究を推進したほか、国際共同研究ネットワークづくりにも力を注いだ。

d 主要業績

(1) 著書

編著、島田竜登、『1789年 自由を求める時代』、山川出版社、2018.8

編著、島田竜登、『1683年 近世世界の変容』、山川出版社、2018.12

(2) 論文

Ryuto Shimada, "Iranian Settlers in Ayutthaya and Intra-Asian Trade during the Seventeenth- and Eighteenth Centuries," in: Clara Wing-chung Ho et al. (eds.) *Collected Essays of To the Seas and Beyond: An International Conference on the History of the Maritime Silk Road*, Hong Kong: Hong Kong Museum of History and Department of History of Hong Kong Baptist University, pp. 111-114, 2018.8

島田竜登、「アジア海上貿易の転換」、島田竜登編『1683年 近世世界の変容』山川出版社、18-63頁、2018.12

Ryuto Shimada, "Southeast Asia and International Trade: Continuity and Change in Historical Perspectives," in: Keijiro Otsuka and Kaoru Sugihara (eds.) *Paths to the Emerging State in Asia and Africa*, Singapore: Springer pp. 55-71, 2019.1

島田竜登、「長期の一八世紀」の世界」、秋田茂編『グローバル化の世界史』ミネルヴァ書房、147-170頁、2019.4

Ryuto Shimada, "South Asian Settlers at Batavia in the Seventeenth and Eighteenth Centuries," in: Rila Mukherjee and Radhika Seshan (eds.) *Indian Ocean Histories: The Many Worlds of Michael Naylor Pearson*, London and New York: Routledge, pp. 124-136, 2019.8

Ryuto Shimada, "Tayowan as a Global Center: Trade and Agricultural Development in Taiwan by the Dutch East India Company during the Seventeenth Century," in: Liu Yi-chang & Ann Heylen (eds.), *Nanyang History, Society and Culture, V: Early Tainan Region*, Tainan: The International Center of Tainan Area Humanities and Social Science Research, Cultural Affairs Bureau of Tainan City Government, pp. 205-220, 2019.9

(3) 書評

島田竜登、書評、中牧弘允編『世界の暦文化事典』、『比較文明』、34、217-220頁、2018.10

(4) 口頭発表

国際、Ryuto Shimada, "Intra-Asian Trading Networks and the Dutch East India Company during the Seventeenth and Eighteenth Centuries," International Symposium: Global History and Hybrid Political Economy in Early Modern Eurasia, c. 1550-1850, The University of Tokyo, Tokyo, Japan, 2018.4.21

国際、Ryuto Shimada, "Maritime Traders and Trade Pattern in Transition in South Asia and Southeast Asia in 1780-1870: A Case Study of Java," XVIII World Economic History Conference, Massachusetts Institute of Technology, Boston, USA, 2018.7.31

国際、Ryuto Shimada, "Global Copper Trade in the Seventeenth and Eighteenth Century," XVIII World Economic History Conference, Massachusetts Institute of Technology, Boston, USA, 2018.7.31

国際、Ryuto Shimada, "Competition in the Indian Sales Market for Copper between Dutch and English Companies during the Eighteenth Century," XVIII World Economic History Conference, Massachusetts Institute of Technology, Boston, USA, 2018.8.1

国際、Ryuto Shimada, "The Pacific Rims in Global History," International Workshop: The Pacific Rim from Global Historical Perspectives, 1492-2018, The University of Tokyo, Tokyo, Japan, 2018.9.22

国内、島田竜登、「グローバル・ヒストリーのなかの産業革命と技術革新：現在への示唆」、第23回進化経済学会オータムコンファレンス、名古屋工業大学、2018.9.29

国際、Ryuto Shimada, "New Scopes for Asian Maritime History in the Early Modern Period from Global Perspectives," International Conference: Maritime Monsoon Asia in the Early Modern Period: Global Trade and Early European Colonial Cities, The University of Tokyo, Tokyo, Japan, 2019.1.18

国際、Ryuto Shimada, "Japanese Views of the World from a Historical Perspective," German-Japanese Joint Symposium: Cultures in Translation: World History - World Literature - World Society: Japan, Germany and the World in a Transcultural Comparison, The University of Tokyo, Tokyo, Japan, 2019.10.10

国際、Ryuto Shimada, "Commodity Chain and Cultural Divergence," Workshop: Categories at Work in Global History, University of Warwick, Warwick, United Kingdom, 2019.10.17

国際、Ryuto Shimada, “Keynote Lecture: Nagasaki: A Gateway of Tokugawa Japan to the World Economy,” Expert Meeting: Between Realism and Reality, National Museum of Ethnology, Leiden, The Netherlands, 2019.10.30

国内、島田竜登、「シンポジウム趣旨説明：「長期の18世紀」と海域アジア——港市と農村の社会変化」、2019年度東方学会秋季学術大会、日本教育会館、2019.11.9

国際、Ryuto Shimada, “Latin American Silver into Tokugawa Japan,” Trans-Pacific Histories of Natural Resources, Pontifical Catholic University of Chile, Santiago, Chile, 2020.1.14

国内、島田竜登、「近世長崎出島のアジア人奴隷」、国際商業史研究会、東京大学、2020.1.26

国内、島田竜登、「19世紀ジャワの海運」、京都大学東南アジア地域研究研究所共同利用・共同研究拠点「東南アジア研究の国際共同研究拠点」「近代東南アジアの社会経済的変容とコミュニケーション技術の発展」2019年度第2回研究会、京都大学、2020.2.1

(5) その他

島田竜登、「グローバル化する反グローバル運動」、『中央公論』、132(12)、62-65頁、2018

(6) 研究テーマ

科学研究費補助金、島田竜登、研究代表者、国際共同研究加速基金（国際共同研究強化）「近世アジアと砂糖の世界史：砂糖の生産・国際流通・消費文化に関する国際共同研究（国際共同研究強化）」、2016年度～2019年度

科学研究費補助金、島田竜登、研究代表者、基盤研究（C）「グローバル商品の誕生：世界の一体化初期局面の主要15品目の生産と多様な消費文化」、2016年度～

科学研究費補助金、島田竜登、研究代表者、「近世海上貿易ネットワークの構造と変容：アジアの季節変動とグローバル・ヒストリー」、2019年度～

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

客員准教授、放送大学、「グローバル経済史」、2018年度、2019年度

非常勤講師、立教大学法学部、「世界史概説」、2018年度、2019年度

非常勤講師、立正大学経済学部、「アジア経済史」、2018年度、2019年度

非常勤講師、早稲田大学政治経済学部、「グローバル史」、2018年度、2019年度

(2) 学会等

史学会、大会実行委員、2012～、編集委員、2014～2018、理事、2018～

社会経済史学会、幹事、2014～

東南アジア学会、学術渉外委員、2013～2018

東方学会、学術委員、2019～

東洋学・アジア研究連絡協議会、会計監査、2014～2018、幹事、2018～

比較文明学会、理事、2017～、編集委員、2014～、編集委員会委員長、2017～

(3) 学外組織(学協会、省庁を除く)委員・役員

東洋文庫、研究員（客員）、2013～

准教授 守川 知子 MORIKAWA, Tomoko

1. 略歴

1994年3月	京都大学文学部史学科（西南アジア史学専攻）卒業
1996年3月	京都大学大学院文学研究科東洋史学（西南アジア史学）専攻修士課程修了
1996年4月	京都大学大学院文学研究科歴史文化学専攻（西南アジア史学専修）博士後期課程進学
1997年11月	テヘラン大学文学部史学科博士課程留学
2002年3月	京都大学大学院文学研究科博士後期課程研究指導認定退学

2002年4月	京都大学研修員
2002年8月	バンベルク大学人文学部イラン学科留学
2003年4月	日本学術振興会特別研究員 PD
2005年11月	博士（文学）学位取得（京都大学）
2006年4月	北海道大学大学院文学研究科歴史地域文化学専修・東洋史学講座 助教授
2007年4月	北海道大学大学院文学研究科 准教授
2016年4月	東京大学大学院人文社会系研究科 准教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

西アジア史、イラン史、宗教社会史

b 研究課題

シーア派の聖地巡礼や死者を聖地に埋葬する「移葬」など、西アジアの宗教社会史的研究を主たる研究課題としている。近年は、アルメニア人などの宗教マイノリティにみるイスラーム社会や、ムスリム側から見た仏教やキリスト教といった異文化接触に関心があり、また、多様な人びとからなる西アジアの都市社会の比較検討を行っている。

c 概要と自己評価

2018年度から始まった新学術領域研究「都市文明の本質」の計画研究班代表として、イスラーム時代の西アジア都市に関する研究を進めている。個人研究での主な対象はサファヴィー朝期の首都イスファハーンであるが、イラク・シリア・エジプト・中央アジア等、国内外の都市研究の専門家との国際交流に積極的に取り組んでいる。また、西アジア・イスラーム社会の中の異教徒に関する研究を進めるとともに、ライフワークでもある「移葬」や「聖地巡礼」に関して研究成果の発表に努めている。2019年には、日本の西アジア史研究の歴史と研究動向について英語論文としてまとめた。

d 主要業績

(1) 著書

共著、島田竜登編、『1683年 近世世界の変容（歴史の転換期7）』、山川出版社、2018.12

共著、山口昭彦編、『クルド人を知るための55章』、明石書店、2019.1

共著、永原陽子編、『人々がつなぐ世界史』（MINERVA 世界史叢書4）、ミネルヴァ書房、2019.8

(2) 論文

守川知子、「移葬の心性史——シーア派イスラーム社会における死者の聖地巡礼」、『比較文明』、34、27-44頁、2018.11

守川知子、「あるアルメニア人改宗者の遍歴にみる宗教と近世社会」、島田竜登編『1683年 近世世界の変容』（歴史の転換期7）、山川出版社、64-109頁、2018.12

守川知子、「東西両大国のはざままで——オスマン＝イラン国境画定に翻弄されるクルド人」、山口昭彦編『クルド人を知るための55章』、明石書店、62-66頁、2019.1

守川知子、「近世西アジア社会における「異教徒」と宗教的社会変容」、「2018年度大学研究助成 アジア歴史研究報告書」、135-155頁、2019.3

守川知子、「サファヴィー朝下のイスファハーンと新ジュルファー——近世西アジア都市の非ムスリム街区」、新学術領域研究『都市文明の本質——古代西アジアにおける都市の発生と変容の学際研究1』、研究成果報告2018年度、163-172頁、2019.3

Tomoko Morikawa、「The Study of West Asian History in Japan: A Historical Review and Recent Developments」、『Acta Asiatica (Bulletin of the Institute of Eastern Culture)』、117、<Eastern Studies Emanating from the East: Its Diversity and Possibilities>、pp. 63-74、2019.8

守川知子、「近世イランの王都の中のキャラバンサライ——『イスファハーンのキャラバンサライ案内』を中心に」、新学術領域研究『都市文明の本質——古代西アジアにおける都市の発生と変容の学際研究2』、研究成果報告2019年度、207-221頁、2020.3

(3) 学会発表

国内、守川知子、「17世紀後半のアルメニア人ネットワーク——二人の商人の軌跡から」、近世ユーラシアにおける宗教・交易ネットワークとアルメニア人、2018.6.16

国内、守川知子、「異邦人・異教徒として生きる——近世世界を旅したアルメニア人改宗ムスリム」、2018年度朝日講座「「居場所」の未来」、東京大学、2018.10.31

- 国際、Tomoko Morikawa、「An Armenian Merchant Family from New Julfa in the Seventeenth and Early Eighteenth Centuries」、*Maritime Monsoon Asia in the Early Modern Period: Global Trade and Early European Colonial Cities*、The University of Tokyo、2019.1.19
- 国際、Tomoko Morikawa、「Intermediary Agents Between Europe and Iran: Armenian Merchants in the 17th Century」、*International Conference on Safavid Studies: Cultural Relations of Iran and Europe in the Safavid era*、Esfahan University、Esfahan (Iran)、2019.4.28
- 国際、Tomoko Morikawa、「From New Julfa of Isfahan to the World: Armenian Trade Network and a Non-Muslim Quarter in a Capital City」、*International Workshop: "Network and Urban Landscape in Historical Perspective"*、American University in Cairo (Egypt)、2019.8.24
- 国際、Tomoko Morikawa、「Abgar Valijanjan and his Life as a *Jadid al-Islam*: A Shi'ite Armenian in the late seventeenth century」、*Ninth European Conference of Iranian Studies (ECIS9)*、Freie Universität Berlin (Germany)、2019.9.9
- 国内、守川知子、「「ジャディード・アル＝イスラーム (*Jadid al-Islam*)」として生きたあるアルメニア人改宗者の生涯——個人・家族・国家と近世西アジアの宗教マイノリティ」、第295回北大東洋史談話会、北海道大学、2019.9.25
- 国際、Tomoko Morikawa、「Pilgrimages and Holidays in Global History」、*Workshop: Categories at Work in Global History*、University of Warwick (United Kingdom)、2019.10.17
- 国内、守川知子、「シーア派イスラーム社会のイマーム崇敬と聖廟巡礼」、スペイン史学会第41回大会、慶應義塾大学日吉キャンパス、2019.11.2
- 国内、守川知子、「シーア派ムスリムのみた17世紀の仏教世界——サファヴィー朝使節団とシャム」、第43回龍谷大学東洋史学研究会研究大会、龍谷大学、2019.11.22
- 国内、守川知子、「聖都アルダビールとサファヴィー朝——サフィー廟を中心に」、2019年度公開研究会「アルダビール再考：前近代イランにおけるタリーカ・聖者廟・都市」、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所、2020.2.15

(4) 会議主催(チェア他)

- 国際、「Frontiers in Asia」、主催、Università degli Studi di Napoli "L'Orientale (Italy)、2018.6.29～2018.6.30
- 国際、「Baghdad, a 1400 year old city in West Asia」、主催、The University of Tokyo、2019.1.29
- 国際、「Network and Urban Landscape in Historical Perspective」、主催、American University in Cairo、Library of Alexandria (Egypt)、2019.8.24～2019.8.26
- 国際、「Sasanian Cities」、主催、The University of Tokyo、2020.2.19

(5) 研究テーマ

- 文部科学省補助金、新学術領域研究、守川知子、研究代表者、「中世から近代の西アジア・イスラーム都市の構造に関する歴史学的研究」、(新学術領域研究(研究領域提案型)「都市文明の本質——古代西アジアにおける都市の発生と変容の学際研究」)、2018～
- 科学研究費(挑戦的研究(萌芽))、守川知子、研究代表者、「シーア派イスラームの聖廟・墓地の形成と発展：法理論と地理空間情報による総合的研究」、2017～
- 科学研究費(基盤研究(B))、守川知子、研究代表者、「近世ユーラシアにおける宗教・交易ネットワークとアルメニア人」、2017～
- 二国間交流事業オープンパートナーシップ共同研究、守川知子、研究代表者、「信仰・交易と移動ルートに見る近世アジア社会のダイナミズム、2017.4～2019.3

3. 主な社会活動

(1) 学会等

- 国内、東洋史研究会、評議員、2016.11～
- 国内、日本中東学会、評議員、2017.4～
- 国内、東方学会、学術委員、2019.6～
- 国内、史学会、編集委員、2019.7～
- 国内、東洋文庫、兼任研究員
- 国内、内陸アジア史学会、理事、2018.10～

13 中国思想文化学

教授 **小島 毅** KOJIMA, Tsuyoshi
29 次世代人文学開発センター《先端構想部門》 参照

教授 **横手 裕** YOKOTE, Yutaka

1. 略歴

1988年3月 東京大学文学部中国哲学専修課程卒業
1990年3月 東京大学大学院人文科学研究科修士課程（中国哲学専攻）修了
1991年8月 東京大学大学院人文科学研究科第一種博士課程（中国哲学専攻）中退
1991年9月 京都大学人文科学研究科助手
1997年4月 千葉大学文学部助教授
2003年4月 東京大学大学院人文社会系研究科助教授
2007年4月 東京大学大学院人文社会系研究科准教授
2015年4月 東京大学大学院人文社会系研究科教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

中国思想、道教、中国医学

b 研究課題

- (1) 道教思想、道教史の解明
- (2) 道教と中国医学の関係史
- (3) 儒・仏・道の三教交渉史を中心とする中国思想史

c 概要と自己評価

研究の中心は道教であるが、道教と中国仏教との関係、および儒・仏・道の三教の影響関係からみた中国思想史についても考察を進めている。三教についてはこれまで道・仏の関係を論じることが多く、とくに道教の内丹説と仏教とのかかわり方について多角的な考察を行ってきたが、三教みつどもえの関係についてはあまり論ずることができなかったため、本期間では新たに儒教知識人の考える仏教・道教関係などについても考察を試みた。また道教に関しては根本資料の「道蔵」に対する科研プロジェクトの調査と研究を一層推し進めた。さらに道教と中国医学、およびアジア医学との関係の研究にも着手し、アジア医学研究者たちと科学研究費補助金によるプロジェクトを新たに立ち上げた。

d 主要業績

(1) 編著書

横手裕、『宮内庁書陵部所蔵道蔵経目録稿』、科学研究費補助金研究成果報告書、2019.11、全305頁

横手裕、『宮内庁書陵部所蔵道蔵を中心とする明版道蔵の調査と研究』、科学研究費補助金研究成果報告書、2020.2、全262頁

(2) 書評

横手裕、吉元昭治著『道教医学——東洋思想の淵源を学ぶ——』、『日本歴史学雑誌』第65巻第3号（通巻1575号）、日本医史学会、2019.9、pp.395-397

(3) 学会発表

国際、横手裕、「正統道蔵日本宮内庁本解謎」、「從《道蔵》到《道蔵輯要》：版本・流変与伝承」研討会、香港中文大学、2018.4.7

国内、横手裕、「身中の洞天福地説とその淵源」、シンポジウム「洞天思想の展開とベトナム・日本」、専修大学、2019.3.9

国際、横手裕、「日本未公開道蔵二種初探」、老子道文化国際学術研討会、中国・瀋陽、2019.9.7

(4) 研究テーマ

科学研究費補助金、基盤研究 (A)、横手裕、研究代表者、「宮内庁書陵部所蔵道蔵を中心とする明版道蔵の調査と研究」、2016～

科学研究費補助金、基盤研究 (A)、横手裕、研究代表者、「アジアの伝統医学における医療・医学の倫理と行動規範、及びその思想史的研究」、2019～

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

国際日本文化研究センター、研究員、2018.4～

京都大学人文科学研究所、研究員、2019.4～

(2) 学会

日本道教学会、理事、論文審査員、2018～

中国社会文化学会、理事、2018～

日本中国学会、論文審査委員、2018～

教授 陳 捷 CHEN, Jie

1. 略歴

- | | |
|---------|--|
| 1985年7月 | 北京大学中国語言文学系古典文献専攻卒業 |
| 1988年7月 | 北京大学中国語言文学系古典文献専攻修士課程修了 |
| 1988年7月 | 北京大学中国語言文学系・古文献研究所助手 |
| 1990年8月 | 北京大学中国語言文学系・古文献研究所専任講師 (～1995年3月) |
| 1994年2月 | 慶應義塾大学附属研究所斯道文庫訪問研究員 (～1995年1月) |
| 1994年8月 | 東京大学東洋文化研究所外国人研究員 (～1995年3月) |
| 1998年3月 | 東京大学大学院人文社会系研究科アジア文化研究専攻 (東アジア思想文化専門分野) 博士課程単位取得退学 |
| 1998年4月 | 文部省学術振興会特別研究員 PD |
| 1999年4月 | 日本女子大学人間社会学部文化学科専任講師 (～2003年3月) |
| 2001年4月 | 東京大学大学院人文社会系研究科博士 (文学) 学位取得 |
| 2003年4月 | 日本女子大学人間社会学部文化学科助教授 |
| 2004年4月 | 国文学研究資料館研究部助教授 |
| 2007年4月 | 国文学研究資料館研究部准教授 |
| 2013年4月 | 国文学研究資料館研究部教授 |
| 2017年4月 | 東京大学大学院人文社会系研究科 教授 |

2. 主な研究活動

a 専門分野

中国書籍史 東アジアの書籍交流史 日中文化交流史

b 研究課題

1. 明清時代の中国地方の商業出版について
2. 江戸時代の詩経学と博物学
3. 江戸～明治時代の日中学術交流

c 概要と自己評価

東アジアの文化交流を視野に入れながら、日本と中国の書籍文化と学術交流史を研究している。本期間では引き続き江戸時代の中国文化の受容と多元文化を中心に研究を進め、詩経学と博物学との関係に注目し、『毛詩品物図考』をはじめとする江戸時代の一連の『詩経』における植物・動物・昆虫の名物解釈についての書籍を調査研究し、これらの研究によって、江戸時代における中国文化の受容の特徴について分析を行った。

d 主要業績

(1) 著書

陳捷、『医学・科学・博物——東アジア古典籍の世界』、編著、東京：勉誠出版、2020.2

(2) 論文

陳捷、「接受・融合・創新：從『毛詩品物図考』看十八世紀日本『詩経』名物学研究的特色」、『中国典籍与文化』2018年第4期（総第107期）、pp.139-149、p112、2018.10（加筆したものはち顧永新編『経学文献学研究』（pp.231-246、北京大学出版社、2019.10）に収録されている。）

陳捷、「経学註釈と博物学の間——江戸時代の『詩経』名物学について」、陳捷編『医学・科学・博物——東アジア古典籍の世界』、pp.245-264、東京：勉誠出版、2020.2

(3) 学会発表

国際、陳捷、「清末銅版印刷與日本」、第10回東アジア文化交渉学会第25「近代東アジア文化交渉中的応用類出版物」、香港城市大学、2018.5.12-13

陳捷、「経書注釈と博物学の間で——江戸時代の『詩経図』について」、「九州大学国際シンポジウム」、九州大学、2018.9.21

国際、陳捷、「経書注釈と博物学之間：關於江戸時代『詩経』名物学研究」、「第二届儒家經典的跨域伝承国際學術研討會——中心与辺縁的文化受容及伝承」主題講演、香港浸会大学善衡キャンパス邵逸夫大楼九階RRS905會議室、2018.10.25

国際、陳捷、「日本江戸時代対古代書籍訂形式和装具的研究——從藤貞幹『好日小録』談起」、中国・上海図書館、「芸術としての書籍」国際シンポジウム、2018.11.1-2

国際、陳捷、「從岸田吟香看十九世紀七八十年代中日民間往来」、南京フォーラム、南京大学、分論壇三「人的移動知的流轉：亞太歴史・現状・未来」、2018.11.17-18

国際、陳捷、「關於阮輝燿漢詩『餞日本使回程』的积読」、「河静省干禄県阮輝燿家族 17-20 世紀漢喃遺產価値研究」国際研討會、ベトナム・Hà Tĩnh（河静）、2019.5.9-10

国際、陳捷、「乾隆・嘉慶期における叢書の編纂と出版についての考察」、「第64回国際東方学者会議」、東京、日本教育会館、2019.5.18

国際、陳捷、「江戸博物学と詩経名物学研究浅談」、「中、日『詩経』学之比較研究」學術研討會、台湾中央研究院文哲所二階會議室、2019.8.24

国際、陳捷、「關於乾嘉時期叢書編纂与刊刻的考察」、「中研院明清研究国際學術研討會」、台湾中央研究院近代史研究所、2019.8.28-30

(4) 研究テーマ

文部科学省科学研究費補助金、基盤研究C、陳捷、研究代表者、「明清時代における濬湾（江西金溪）の出版業に関する総合的研究」、2017.4～2019.3

3. 主な社会活動

(1) 学会

日本中国学会

中国社会文化学会、理事

14 インド語インド文学

准教授 梶原 三恵子

KAJIHARA, Mieko

1. 略歴

- 1989年3月 大阪大学文学部哲学科インド哲学専攻卒業
- 1991年3月 大阪大学大学院文学研究科哲学哲学史専攻博士前期課程修了
- 1996年3月 大阪大学大学院文学研究科哲学哲学史専攻博士後期課程単位取得退学
- 1996年9月 米国ハーヴァード大学大学院サンスクリット・インド学科留学
- 2002年6月 博士 (Ph.D.) 学位取得 (ハーヴァード大学)
- 2009年10月 京都大学人文科学研究所助教
- 2012年4月 東京大学大学院人文社会系研究科准教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

ヴェーダ学、インド学

b 研究課題

古代インドの家庭儀礼と社会文化

c 概要と自己評価

専門としている「ヴェーダ宗教儀礼からみる古代インドの社会と文化」というテーマについて、三つの方向から研究を進めた。第一に、ヴェーダ聖典学習者および学習を指すサンスクリット単語について、用例を文献の時代層にそって網羅的に分類・検討し、時代と文脈による用法の変遷を跡づけた。第二に、ヴェーダ学習者の入門儀礼の際に学習の第一歩として教えられる「サーヴィトリ」とよばれる詩節について、どの詩節がサーヴィトリとよばれ、どのように神聖視されたか、そして、ポスト・ヴェーダ期の宗教文献にどのように影響を与えたかについて精査し解明した。第三に、新層に属するアーラニヤカの章の冒頭にしばしば付されているシャーンティとよばれる文言を手がかりに、ヴェーダ聖典が師から学生への教授によって学習をとおして伝承された形跡の一端に光をあてた。

d 主要業績

(1) 論文

梶原三恵子、「ヴェーダ文献における brahmācārin- の語義 — 「学生」と「禁欲者」のあいだ」、『東洋文化研究所紀要』、175、61-103頁、2019.3

Kajihara, Mieko、「The Sacred Verse Sāvitrī in the Vedic Religion and Beyond」、『Journal of Indological Studies』、30&31、1-36頁、2019.11

梶原三恵子、「アーラニヤカ文献の生成過程の一側面 — śānti マントラを手掛かりに」、『印度学仏教学研究』、68(1)、1-8頁、2019.12

(2) 学会発表

国内、梶原三恵子、「グリヒヤ祭にみる「伝統」と「慣習」、日本印度学仏教学会第69回学術大会、東洋大学、2018.9.2

国内、梶原三恵子、「アーラニヤカ文献の章構造とヴェーダ学習」、日本印度学仏教学会第70回学術大会、佛教大学、2019.9.8

国内、梶原三恵子、「アーラニヤカ文献の śānti マントラ — 「聖典」の形成過程を考える」、古代・中世インドの社会と宗教 — 「聖典」の諸相 (共同研究「ブラフマニズムとヒンドゥイズム：南アジアの社会と宗教の連続性と非連続性」第7回シンポジウム、京都大学、2020.2.23

(3) 会議主催 (チェア他)

国内、共同研究「ブラフマニズムとヒンドゥイズム：南アジアの社会と宗教の連続性と非連続性」第5回シンポジウム「古典インドの哲学と学問：始まりと展開」、共催、京都大学芝蘭会館別館、2018.10.7~2018.10.8

国内、共同研究「ブラフマニズムとヒンドゥイズム：南アジアの社会と宗教の連続性と非連続性」第6回シンポジウム「古代・中世インドの王権と宗教」、主催、東京大学、2019.3.23~2019.3.24

国内、共同研究「ブラフマニズムとヒンドゥイズム：南アジアの社会と宗教の連続性と非連続性」第7回シンポジウム「古代・中世インドの社会と宗教 — 「聖典」の諸相」、共催、京都大学芝蘭会館別館、2020.2.23

(4) 共同研究（産学連携除く）

国内、京都文教大学、「ヴェーダとタントラの相互影響：南インド現地調査と文献調査に基づく総合的研究」、2019～

3. 主な社会活動

(1) 学会

国内、インド思想史学会、理事、2016.4～

国内、日本印度学仏教学会、理事、2017.9～

国内、日本南アジア学会、会員

国内、東方学会、会員

国際、American Oriental Society, Member

(2) 行政

日本学術会議 連携会員、2017.10～

15 インド哲学仏教学

教授 下田 正弘 SHIMODA, Masahiro
29 次世代人文学開発センター《人文情報学部門》参照

教授 蓑輪 顕量 MINOWA, Kenryo

1. 略歴

1983年3月 東京大学文学部印度哲学印度文学専修課程卒業（学士）
1983年4月 東京大学大学院人文科学研究科印度哲学印度文学専攻修士課程入学
1986年3月 同大学院（印度哲学印度文学専攻）修士課程修了（修士）
1986年4月 東京大学大学院人文科学研究科印度哲学印度文学専攻博士課程進学
1990年3月 東京大学大学院人文科学研究科印度哲学印度文学専攻博士課程単位取得退学
1991年4月 日本学術振興会特別研究員（～1993年3月）
1998年4月 愛知学院大学文学部日本文化学科 助教授（～2004年1月）
1998年10月 博士（文学）の学位取得
2004年1月 愛知学院大学文学部日本文化学科 教授
2010年4月 東京大学大学院人文社会系研究科 教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

仏教学、東アジアの仏教及び日本仏教に関する研究。

b 研究課題

東アジアにおける仏教の研究。特に日本仏教における修行、学問に関する研究を行っている。学問に関わるところでは、古代の論義に関する研究を南都に残された法会資料を用いながら考察を進めており、古代から中世に掛けて行われた仏教教理に関する論争に焦点を当てている。また、当時の僧侶の仏身観にも焦点を当てて研究を行った。また修行道に関する研究は、東南アジアや東アジア世界に伝わる止観と呼ばれる修行の実際に注意を払いながら、東アジア世界に残された文献資料を用いて、修行道の内容を明らかにすることを旨として研究を進めている。

c 概要と自己評価

2018年4月からは2020年3月までの間は、科学研究費（挑戦的研究）で研究代表者を務め、「仏教学、心理学、脳科学の協同による仏教の止観とマインドフルネスの実証的研究」と題して、三年間の予定で研究を進めている。その一環で、オーストラリアとベトナムに現地調査を行い、仏教の瞑想の実態とマインドフルネスの世界における広がりについて、知見を深めることができた。二年目の2019年度には仏教の瞑想の歴史を中心に、インドから日本にわたる展開の概説を「瞑想のダイナミズム」と題して執筆し、臨川書店から共著として出版する準備を進めた（出版は2020年度に入る）。また、2016年度からアジア研究図書館上廣倫理財団寄付研究部門の部門長としての任務が続いており、こちらに多くの時間を割かざるを得ない事態が続いている。『法勝寺御八講問答記』の翻刻は若干の進展しかできていないことが惜しまれる。日本の戒律に関する研究は、唐招提寺を中心に思想的な展開を再考している。最終的には多少、仕事が過剰気味と思われ、また広げた仕事が多くなりすぎている感があるので、この点の調整を、同じく今後の課題としたい。

d 主要業績

(1) 論文

蓑輪顕量、「寺僧と遁世門の活躍—戒律・禅・浄土の視点から」、ザ・グレイトブッダシンポジウム論集『中世東大寺の華嚴世界—戒律・禅・浄土』、12、71-86頁、2018.3
蓑輪顕量、「日本古代における『大般若経』の受用」、柴原永遠男・佐藤信・吉川真司編『東大寺の新研究 東大寺の思想と文化』、71-94頁、2018.3

袁翰頤量、「セッション No.1 の発表に関するコメント」、日本仏教学会叢書『人間とは何か』、197-204 頁、2019.3

(2) 解説

袁翰頤量、「オーストラリア・マインドフルネス調査旅行記」、『仏教文化』、58、184-196 頁、2019.12

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

特別講演、叡山学院、「天台の止観とマインドフルネス観」、2019.3

非常勤講師、東洋大学大学院、「日本仏教文献研究」、2019.4～2020.3

特別講演、叡山学院、「天台の止観とマインドフルネス」、2019.7

特別講演、亀田生涯学習センター、「マインドフルネス/心の観察法—仏教の伝えた悩み・ストレスを超える道」、2019.7

セミナー、日蓮宗現代宗教研究所、「鎌倉時代の法華経観」、2020.1

特別講演、公益財団法人 仏教伝道協会、「台湾の仏教—拠点寺院と盛んな修行/禅七と仏七」、2020.3

(2) 学会

国内、日本印度学仏教学会、理事、評議員、常務委員

国内、日本宗教学会、常務理事、評議員

国内、パーリ学仏教文化学会、理事

国内、KIERA-LP 学会、会長 (2015.10～)

(3) 学外組織 (学協会、省庁を除く) 委員・役員

一般財団法人東京大学仏教青年会、理事

准教授 高橋 晃一 TAKAHASHI, Kouichi

1. 略歴

1991 年 4 月	東京大学教養学部文科三類 入学
1993 年 4 月	東京大学文学部印度哲学専修課程 進学
1995 年 3 月	同 上 卒業
1995 年 4 月	東京大学大学院人文社会系研究科アジア文化研究専攻修士課程 入学
1998 年 3 月	同 上 修了
1998 年 4 月	東京大学大学院人文社会系研究科アジア文化研究専攻博士課程 進学
2002 年 3 月	同 上 単位取得退学
2002 年 4 月	東京大学大学院人文社会系研究科 助手 (～2005 年 3 月)
2004 年 9 月	博士 (文学) (東京大学)
2005 年 4 月	東京大学大学院人文社会系研究科 学術研究支援員 (～2005 年 9 月)
2005 年 10 月	日本学術振興会海外特別研究員 (ハンブルク大学アジア・アフリカ研究所) (～2007 年 9 月)
2007 年 10 月	東京大学大学院人文社会系研究科 学術研究支援員 (～2008 年 3 月)
2008 年 4 月	東京大学大学院人文社会系研究科 特任研究員 (～2012 年 3 月)
2012 年 4 月	筑波大学大学院人文社会科学部研究科 助教 (～2013 年 3 月)
2013 年 4 月	東京大学大学院人文社会系研究科 特任研究員 (～2017 年 3 月)
2017 年 4 月	東京大学大学院人文社会系研究科 准教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

- (1) インド仏教の論書研究
- (2) チベット撰述の注釈文献に関する研究
- (3) サンスクリット語およびチベット語文献の XML によるマークアップ方法の研究

b 研究課題

(1) インド仏教の文献は、大きく経・律・論の三つの分野に分けられる。そのうち、論は仏教思想家が著した哲学文献であり、論書と呼ばれる。この論書を主な研究対象としている。特にインド大乘仏教の一学派である瑜伽行派の論書を分析し、その思想形成の過程を考察している。この学派の思想は唯識思想として知られているが、最初期の文献では唯識思想は説かれず、ものの実在を前提にして思想が構築されている。この最初期の思想形態そのものの解明と、唯識思想へ展開した過程を解明し、仏教における唯識説の意義を考察することを課題としている。特にこのような哲学的思想と、大乘仏教としての倫理的実践の關係に着目して、瑜伽行派の思想を包括的に明らかにすることを目指している。

(2) (1)と関連して、チベット人によって著された瑜伽行派文献に対する注釈書の内容分析を行う。近年、発見・公刊された『カダム全書』という著作群には瑜伽行派文献に対する注釈が数多く含まれており、その内容の分析は喫緊の課題となっている。

(3) こうしたテキスト分析に関しては、電子化テキストによるデータベースの作成が効率の良い方法と考えられる。近年ではXMLを用いたテキスト分析が盛んに行われるようになってきたが、既存のガイドラインであるTEI:P5は、サンسكريット語およびチベット語の仏教文献の分析に関しては、改良の余地がある。実際に文献をエンコーディングしながら、具体的な問題提起をすることを目指す。

c 概要と自己評価

(1) 従来の研究では瑜伽行派の哲学的な思想と、大乘仏教としての倫理的実践の關係性に着目した研究はほとんどなされてこなかっただけでなく、一部の研究においては両者は思想的に見て無關係に発展したとさえされる場合も見られる。しかし、この学派の最初期の文献を分析すると、瑜伽行派の哲学的思想は、大乘仏教の倫理的実践と直結し、利他行を標榜する大乘仏教の行動原理に基盤を与えるものであることを示すことができる。これは従来の研究の視点に大きな改変を加えるものであり、重要な意義を持つと考えているが、成果は学会での発表のみであり、今後、論文の形で公開しなければならない。

(2) 『カダム全書』は近年になって発見・公刊されたもので、カダム派をはじめとするチベットの学僧が残した著作が数多く収録されているが、その全体像は明らかになっていない。現在、科学研究費基盤Bの助成を受け、『カダム全書』所収の『阿毘達磨集論』の複数の注釈を整理し、分析を行っている。チベット仏教の資料ではあるが、インドの仏教思想の問題点を探る手掛かりにもなることが明らかになってきた。

(3) 『阿毘達磨集論』の複数の注釈を、TEIガイドラインに準拠して、XMLにより構造化した電子データを作成している。XMLは文字列をタグと呼ばれる記号(例:<p></p>など)で囲むことで、テキストデータを構造的に分析することができる。

しかし、『カダム全書』所収の『阿毘達磨集論』注釈をXMLで構造化するにあたり、チベット仏教文献に特有の詳細な段落構成を忠実に分析しようとすると、TEIガイドラインの既存のタグセットでは対応できないことが分かってきた。研究グループでは、この問題を解決するためにTEIガイドラインのカスタマイズについて検討している。

d 主要業績

(1) 論文

Takahashi Koichi, "Six Perfections (*pāramitā*) in the *Tattvārtha* Chapter of the *Bodhisattvabhūmi*", *International Journal of Buddhist Thought and Culture* 28-1, 137-158, 2018.6

(2) 学会・シンポジウム発表

国際、Takahashi Koichi, Nemoto Hiroshi, "How to Encode the Tibetan Commentaries on the *Abhidharmasamuccaya*", The 18th Annual TEI Conference and Member's Meeting, 2018.9.13

国内、高橋晃一、「インド唯識思想における実在の位置づけ」、日本哲学会第78回大会・学協会シンポジウム「実在論の可能性——インド哲学との対話」、2019.5.19

国際、高橋晃一、「『解深密経』の思想」、印度佛教專題講座、北京大学、2019.9.21

3. 主な社会活動

(1) 非常勤講師

大正大学非常勤講師

(2) 学会

日本印度学仏教学会、評議員、常務委員

仏教思想学会、幹事

東方学会

日本チベット学会
日本南アジア学会
International Association of Buddhist Studies
Japanese Association for Digital Humanities

准教授 **加藤 隆宏** KATO, Takahiro

1. 略歴

1993年4月 東京大学教養学部文科三類入学
1995年4月 東京大学文学部思想文化学科インド哲学仏教学専修課程進学
1997年3月 同卒業
1997年4月 東京大学大学院人文社会系研究科アジア文化研究専攻インド文学・インド哲学・仏教学専門分野
修士課程入学
2000年3月 同 修士課程修了
2000年4月 東京大学大学院人文社会系研究科アジア文化研究専攻インド文学・インド哲学・仏教学専門分野
博士課程進学
2003年11月 ブネー大学（インド）サンスクリット高等研究科研究生
（平成15年度文部科学省アジア諸国等派遣留学生、～2005年9月）
2006年9月 東京大学大学院人文社会系研究科アジア文化研究専攻インド文学・インド哲学・仏教学専門分野
博士課程単位取得退学
2006年10月 マルティン・ルター大学ハレ・ヴィッテンベルク（ドイツ）インド学科博士候補
2006年10月 マルティン・ルター大学インド学研究所助手（～2007年8月）
2007年9月 （財）恵光日本文化センター客員研究員（～2008年8月）
2008年9月 ドイツ学術振興会（DFG）常勤研究員（マルティン・ルター大学、～2011年8月）
2011年6月 博士号最終試験合格（Dr. Phil, magna cum laude, マルティン・ルター大学ハレ・ヴィッテンベルク）
2011年9月 マルティン・ルター大学日本学科 講師（～2012年3月）
2012年4月 東京大学大学院人文社会系研究科 助教（～2016年3月）
2016年4月 中部大学人文学部 准教授（～2018年3月）
2018年4月 東京大学大学院人文社会系研究科 准教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

六派哲学を中心としたインド哲学、サンスクリット文献学、写本学

b 研究課題

主たる研究領域はヴェーダーンタ派の思想で、同派において聖典とされるウパニシャッド文献、『ブラフマ・スートラ』、『バガヴァッド・ギーター』に対する註釈文献などの分析を通じて、現代にまで脈々と受け継がれるヴェーダーンタ思想の展開について研究を進めている。

近年は、古文書学的に文献を扱うというスタンスで、写本の収集、テキスト校訂、訳註研究という基礎的な研究を続けている。現在取り組んでいるプロジェクト「バースカラ」はヴェーダーンタ派の聖典『ブラフマ・スートラ』、『バガヴァッド・ギーター』に対するバースカラ註の校訂テキストを作成し、それにもとづいて訳註研究を行うというものである。

以上のような写本研究や校訂訳註研究など基礎的な研究を地道に続けながら、同時に、社会の動向に注意し、現実の様々な問題解決に向けてインド哲学からどのような貢献ができるのかを常に意識した思想研究を目指している。

c 概要と自己評価

引き続き、中心課題である「バースカラ」研究に従事している。『ブラフマ・スートラ註解』については、すでに公開済みの第1章と第2章に加え、後半部分の第3章・第4章についてもほぼ完成しており、新たに発見された写本の異

読情報をアップデートし、近年中の刊行を目指している。『バガヴァッドギーター註解』のテキスト作成についても少しずつ進めており、写本との照合が終わり次第順次公開をしていきたい。

この他、科研プロジェクト「インドにおける因果の思想の研究」に参加し、思想研究に積極的に取り組んだ。また、JST/RISTEX のプロジェクト「自律機械と市民をつなぐ責任概念の策定」に参加し、AI（人口知能）技術の社会実装に際して起こりうる倫理的問題などについてインド思想の観点から評価・提言を行った。今後も現代社会における様々な問題にも積極的に取り組んでいきたい。

d 主要業績

(1) 論文

加藤隆宏、「ヴェーダーンタ哲学研究前史—〈ウパニシャッド〉の受容」、『文化交流研究：東京大学文学部次世代人文学開発センター研究紀要』32、33-44 頁、2019.3

Takahiro Kato, 「Interpretation of mithyājñāna in the Pañcapādikā」、In: Vedānta Science and Technology: A Multidimensional Approach、109-114 頁、2020.1

카토 타카히로 「상카라의 불이론 베단타 철학에서의 명상 (シャンカラの不二一元論ヴェーダーンタにおける瞑想)」 『인도철학과 요가 (インド哲学とヨーガ)』 원광대학교 요가학연구소 인문총서 (圓光大学校ヨーガ学研究所人文叢書) 3、49-70 頁、2020.3

加藤隆宏、「初期不二一元論派における anvayavyatireka 説再考」、『インド哲学仏教学研究』28、1-17 頁、2020.3

(2) 学会発表

国際、Takahiro Kato、「The Development of the Concept of Avidyā in Vivaraṇa Tradition」、49th All India Oriental Conference、Veraval, India、2018.5.19

国内、加藤隆宏、「不二一元論派における anvayavyatireka 説再考」、日本印度学仏教学会第 69 回学術大会、東洋大学、2018.9.2

国際、Takahiro Kato、「Ahimsa, Unity (abheda), and the Realization of the Truth」、19th International Conference of Chief Justices of the World、Lucknow, India、2018.11.18

国内、加藤隆宏、「インド思想における所有と煩惱」、JST/RISTEX/HITE 研究開発プロジェクト「自律機械と市民をつなぐ責任概念の策定」第 7 回研究会、愛知教育大学、2019.3.11

国際、Takahiro Kato、「Meditation in Sankara's Advaita Vedanta」、10th Wonkwang Yoga Conference: Yoga and Self-Realization II、圓光大学校 (益山・韓国)、2019.4.18

国際、加藤隆宏、「バースカラ研究—インド哲学研究の一事例」、印度佛教專題講座、北京大学、2019.9.21

国際、Takahiro Kato、「The Concept of Responsibility in Indian Tradition.」、22nd International Congress of Vedānta、Jawaharlal Nehru University、2020.1.11

(3) 予稿・会議録

国際、Takahiro Kato、「The Development of the Concept of Avidyā in Vivaraṇa Tradition」、『Prajñāpiyūṣam』、177 頁、2018.5

(4) 翻訳

抄訳、Wilhelm Halbfass、「Karma und Wiedergeburt im indischen Denken」、加藤隆宏、「『インド思想における業と再生』— 第 5 章「ヒンドゥー教の哲学諸体系における業と再生」和訳 —」、『生田哲学』、21、60-99 頁、2020.3

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

学習院大学文学部非常勤講師、2018.4～

東洋大学国際哲学研究センター客員研究員、2019.12～

(2) 学会

日本印度学仏教学会 評議員

名古屋大学印度学仏教学研究学会

北陸宗教文化学会

東海印度学仏教学会

Deutscher Morgenländische Gesellschaft

International Association of Sanskrit Studies

All India Oriental Conference (Life Member)

(3) 学外組織 (学協会、省庁を除く) 委員・役員

第 24・25 期日本学術会議、連携会員、2017.10～

16 イスラム学

教授 柳橋 博之 YANAGIHASHI, Hiroyuki

1. 略歴

- 1980年3月 東京大学文学部東洋史学専修課程卒業
- 1983年3月 東京大学大学院人文科学研究科修士課程修了（東洋史学）
- 1988年9月 東京大学大学院人文科学研究科博士課程単位取得満期退学（東洋史学）
- 1988年10月 茨城大学教養学部専任講師
- 1989年4月 同 助教授
- 1993年4月 東北大学大学院国際文化研究科助教授
- 1997年4月 東京大学大学院人文社会系研究科助教授（1997年度は東北大学大学院と併任）
- 2007年4月 東京大学大学院人文社会系研究科准教授
- 2010年4月 東京大学大学院人文社会系研究科教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

イスラーム法、法学ハディース

b 研究課題

法学に関わるハディース（預言者ムハンマドの言行の記録）の形成過程を研究している。

c 概要と自己評価

最近の5年間は、学術的な内容を含むハディース（預言者伝承）を研究しており、その成果として、2019年に英文による単著を公刊した。その後は、ハディースの計量分析に研究の重点を移し、現在、英文による単行本を執筆している。

d 主要業績

(1) 著書

単著、柳橋博之、『Studies in Legal Hadith』、Brill、2019.2

(2) 解説

柳橋博之、「学界回顧 東洋」、『法律時報』、2018.12

(3) 学会発表

国内、柳橋博之、「イスナードの定量的分析の試み」、日本オリエント学会第60回大会、京都大学、2018.10.14

国内、柳橋博之、「Essay of a quantitative analysis of hadith」、Workshop The meaning of Sacred Text、東京大学、2019.8.24

3. 主な社会活動

(1) 学会

国内、一般社団法人日本イスラム協会、代表理事、2011.4～

1. 略歴

- 1992年3月 東京大学文学部イスラム学専修課程卒業
- 1992年4月 東京大学大学院人文科学研究科イスラム学修士課程入学
- 1994年3月 同修了
- 1994年4月 東京大学大学院人文科学研究科イスラム学博士課程進学
- 1998年3月 博士（文学）の学位取得
- 1998年4月 東京大学東洋文化研究所研究機関研究員（～2000年3月）
- 2000年4月 日本学術振興会特別研究員（PD）（～2003年3月）
- 2004年4月 神田外語大学外国語学部専任講師
- 2008年4月 神田外語大学外国語学部准教授
- 2013年4月 東京大学大学院人文社会系研究科准教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

シーア派思想史

b 研究課題

9世紀以降のシーア派思想史における「極端派」思想と十二イマーム派、イスマエーイル派の形成過程との関係について研究している。

c 概要と自己評価

主流シーア派の自己形成、およびそれに呼応する形で成立したアラウィー派、ドゥルーズ派の初期思想について研究し、その成果を研究ノート（訳注）一本と共著一冊で公開することができた。研究はおおむね順調に進んでいる。

d 主要業績

(1) 著書

共著、伊藤邦武・山内史朗・中島隆博・納富信留（編）、『世界哲学史 3：中世 I 超越と普遍に向けて』、筑摩書房、2020.3

(2) 論文

菊地達也、「『英知の書簡集』の宇宙創成論：「真理の開示」翻訳（2）」、『慶應義塾大学言語文化研究所紀要』、50、243-254 頁、2019.3

(3) 書評

井筒俊彦、『クルアーンにおける神と人間：クルアーンの世界観の意味論』、慶應義塾大学出版会、『イスラーム世界研究』、50、259-263 頁、2019.3

(4) 会議主催(チェア他)

国内、「イスラーム地域研究・若手研究者の会」、その他（コメンテーター）、早稲田大学、2019.6.1

3. 主な社会活動

(1) 学会

国内、一般社団法人日本イスラム協会、理事、2014.6

国内、日本中東学会、理事、2019.3～

17 西洋古典学

教授 葛西 康德 KASAI, Yasunori

1. 略歴

- 1978年3月 東京大学法学部第一類（私法コース）卒業
- 1986年8月 連合王国ブリストル大学古典学・考古学科留学（～1988年7月）
- 1992年2月 Ph.D.学位取得（連合王国ブリストル大学）
- 1978年4月 東京大学法学部助手
- 1982年4月 新潟大学教養部講師
- 1986年4月 新潟大学法学部助教授
- 1992年4月 新潟大学法学部教授
- 1993年11月 オクスフォード大学クライスト・チャーチ客員研究員（～1995年1月）
- 1995年4月 新潟大学大学院現代社会文化研究科担当（「古典社会文化論」担当）
- 1999年9月 オクスフォード大学ベイリオル・コレッジ客員フェロー（～2000年9月）
- 2002年4月 新潟大学法学部法政コミュニケーション学科長（～2003（平成15）年3月）
- 2004年4月 新潟大学大学院実務法学研究科教授
- 2006年4月 大妻女子大学文学部コミュニケーション文化学科教授
- 2011年4月 東京大学大学院人文社会系研究科教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

西洋古典学 ギリシア・ローマ法

b 研究課題

- 1 古代ギリシア人の「対立状況における行動様式」の特徴を、compliance と defiance という概念枠組を用いて、経済、法、宗教、哲学等の諸側面から総合的に考察する。そして、それらを、The Greeks on Compromise というタイトルで一冊にまとめたいたいと考えている。
- 2 古代ギリシア法をローマ法およびそのほかの西洋法の中に、総合的に位置づける。具体的には、古代ギリシア法入門のような形でまとめたいたいと思っている。
- 3 西洋学問の近世・近代の日本への移入を「文化転移」として、「普及」と「翻訳」という視点から総合的に把握する。

c 概要と自己評価

上記の研究課題に関して今期は以下のような具体的な研究作業を実施した。

- 1 課題1に関して、特に宗教と法の側面から、一般的な話を公開講演で行うとともに、学会で研究発表を行った。
- 2 課題2に関しては、デモステネスの私訴弁論の翻訳解説（36-38）を継続して行い、2019年5月に『デモステネス弁論集5』として出版した。また、科研費研究として「法学提要」の歴史的・総合的研究を開始し、その中にギリシア法を位置付ける可能性を探っている。ギリシア法・ローマ法に関する研究発表を行い、論文を公刊した。
- 3 課題3に関して、2014年度から続いている大学院演習「他分野交流演習」を2018年度で終了し、その成果を報告集として公刊した。

d 主要業績

(1) 著書

共著、小島毅編、『知の古典は誘惑する』、岩波書店 岩波ジュニア新書、2018

単著、葛西康德、『文化転移—混合・普及・界面—』、秀飯舎、2018.6

共著 葛西康德ほか、『デモステネス弁論集5』、京都大学学術出版会、2019.5

担当部分 第36—38弁論（245-346頁）、「私訴弁論の世界」（423-509頁）、第37—38弁論作品解説（600-640頁）

合計 101+86+40=227頁

Yasunori Kasai, 'Hybris, Iniuria and Harassment' at SIHDA conference at Edinburgh, U. K. (*Société internationale Fernand de Visscher pour l'Histoire des Droits de l'Antiquité*) on 5 September 2019

Yasunori Kasai (Tokyo), Bogišić and 'Ancient Law', At INTERNATIONAL SYMPOSIUM, Date: November 19(MON), 2019.
Venue: Montenegrin Academy of Sciences and Arts, Podgorica, Montenegro Comparative Studies of Civil Law between Modern South Slavic Regions and Japan: Co-organized by Montenegrin Academy of Sciences and Arts & Slavic and Eurasian Research Center at Hokkaido University

(2) 論文

葛西康德、「古代ギリシア教に改宗することはできるか」、青山学院大学文学部『史友』、第51号、27-52頁、2019.3
Yasunori Kasai, 'Information in the Anciennt and Modern – Hybris and Defamation in Greek and Roman Law', in: Ulrike Babusiaux and Mariko Igimi (eds.), Messages from Antiquity -Roman Law and Current Legal Debates-, Böhlau Verlag, Wien Köln Weimar, 2019.6, pp 185-213

葛西康德、「Aequitas, Epieikeia, Ubuntu—平等と衡平」 柏木昇他編『日本とブラジルからみた比較法—二宮正人先生古稀記念論文集—』、信山社、2019.7、353-386頁

(3) 書評

栗辻悠、「古代レトリック再考（一）——ローマ世界における法廷実践の観点から——」・「古代レトリック再考（二）——ローマ世界における法廷実践の観点から——」、関西大学、『法制史研究』、68号、327-331頁、2019.3

(4) 研究報告書

葛西康德（編）、『東京大学草創期とその周辺』2014—2018年度多分野交流演習「東京大学草創期の授業再現」、2018
Kasai Yasunori (ed.) 「The Fifth Conference of Tokyo Cambridge Research Seminar on Law and Humanities, SGU Programme between Cambridge and Tokyo」, pp.131, 2018.8

Kasai Yasunori (ed.) 「The Sixth Conference of Tokyo Cambridge Research Seminar on Law and Humanities, SGU Programme between Cambridge and Tokyo」, pp.112, 2019.8

(5) 会議主催(チェア他)

国内、「法制史学会第70回総会」、青山学院大学、2018.7.14

Yasunori Kasai, 'Hybris, Iniuria and Harassment' at SIHDA conference at Edinburgh, U. K. (*Société internationale Fernand de Visscher pour l'Histoire des Droits de l'Antiquité*) on 5 September 2019

Yasunori Kasai (Tokyo), Bogišić and 'Ancient Law' At INTERNATIONAL SYMPOSIUM, Date: November 19(MON), 2019.
Venue: Montenegrin Academy of Sciences and Arts, Podgorica, Montenegro, Comparative Studies of Civil Law between Modern South Slavic Regions and Japan: Co-organized by Montenegrin Academy of Sciences and Arts & Slavic and Eurasian Research Center at Hokkaido University

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

非常勤講師、青山学院大学法学部、「基礎特法論」、2018.4～

非常勤講師、青山学院大学法学部、「法と社会」、2018.9～

特別講演、田崎財団、「英国の教育について」、2018.11、2019.11

(2) 学会

「日本西洋古典学会（委員）」「日本法制史学会」「日本宗教学会」「19世紀学学会」

「法とコンピュータ学会（理事）」

The Hellenic Society, The Selden Society, World Society of Mixed Jurisdiction Jurists

International Academy of Comparative Law (Associate member)

(3) 学外組織（学協会、省庁を除く）委員・役員

日本学術会議連携会員

新潟大学超域学術院運営委員会委員

18 フランス語フランス文学

教授 野崎 歓 NOZAKI, Kan

1. 略歴

1981年3月	東京大学文学部第三類フランス語フランス文学専修課程卒業
1981年4月	東京大学大学院人文科学研究科修士課程入学（仏語仏文学）
1985年4月	東京大学大学院人文科学研究科専攻博士課程進学
1985年9月	パリ第3大学博士課程（～1989年3月）（フランス文学、フランス政府給費留学生）
1989年4月	東京大学文学部助手
1990年4月	一橋大学法学部専任講師
1993年4月	一橋大学法学部助教授
1997年5月	一橋大学大学院言語社会研究科助教授
2000年4月	東京大学大学院総合科学研究科助教授
2007年4月	東京大学大学院人文社会系研究科助教授
2012年4月	東京大学大学院人文社会系研究科教授
2019年3月	退職

2. 主な研究活動

a 専門分野

ジェラルール・ド・ネルヴァルの作品を中心とするフランス・ロマン主義文学。近現代小説論、翻訳論、映画論。

b 研究課題

- (1) フランス・ロマン主義文学における作者像の成立と変容。
- (2) 近現代文学における翻訳をめぐる問題の探求。
- (3) フランス映画史における作家主義の再検討。

c 概要と自己評価

(1) については、科学研究費を得て、日仏の研究者たちとの対話を重ねながら横断的、複眼的な探求を試み、その成果の一端を刊行することができた。とりわけジェラルール・ド・ネルヴァルの代表作『火の娘たち』の翻訳・研究を進め、翻訳（およびそれに付すべき注釈）はほぼ完成しつつある。

(2) は(1)と緊密に関連する主題であり、作者の問題を考える際に「翻訳者」という補助線を引くことが意味をもつというアイデアのもと、フランスおよび日本の作家における事例を探っている。その具体例として井伏鱒二について論じてきた文章をまとめ、単行本として刊行することができた。

(3) に関しては、フランス映画理論史上、重要な存在とみなされるアンドレ・バザンに関する科学研究費プロジェクトに参加し、バザン研究を牽引するイエール大学教授ダドリー・アンドルーを囲むシンポジウム企画の実現に協力、「作家主義」の実相を考察した。

d 主要業績

(1) 著書

野崎歓、『水の匂いがするようだ——井伏鱒二のほうへ』集英社、2018、283p.

野崎歓（編）、『フランス文学を旅する60章』、明石書店、2018、366p.

野崎歓、『異邦の香り——ネルヴァル「東方紀行」論』、講談社文芸文庫、講談社、2019、521p.（2010年刊の増補版）

野崎歓、『高校生と考える21世紀の論点 桐光学園大学訪問授業』、左右社、2019（分担執筆：野崎歓「不思議の国フランス」、pp.53-65）

野崎歓、『翻訳家たちの挑戦 日仏交流から世界文学へ』澤田直・坂井セシル編、水声社、2019（分担執筆：野崎歓「翻訳という名の希望」、pp.285-301）

(2) 論文

Kan Nozaki, « Pour une réhabilitation de Lamartine au Japon », 「立教大学 フランス文学」第48号（立教大学フランス文学研究室）、2019.3、pp.75-80

野崎敏、「〈インテグラル・バザン〉と出会うために——ダドリー・アンドルーの問いかけ」、「アンドレ・バザン研究」第3号（山形大学人文社会科学部附属映像文化研究所・アンドレ・バザン研究会）、2019.3、pp.37-45

野崎敏、「近代日本文学における外国語体験——翻訳のダイナミズム」、「言語文化」（明治学院大学言語文化研究所）、第37号、2020.3、pp.51-63

(3) 書評・映画評

野崎敏、「映画は彼女たちのものである——金井美恵子『スタア誕生』の言葉」、「早稲田文学」2018年春、1027号、pp.232-237

野崎敏、「角田光代『私はあなたの記憶のなかに』書評」、「週刊現代」、講談社、2018.4.21、p.110

野崎敏、「佐藤元状『グレーム・グリーン ある映画的人生』書評」、「日本経済新聞」、2018.4.14

野崎敏、「シモヌ・ド・ボーヴォワール『モスクワの誤解』書評」、「週刊読書人」、2018.5.4

野崎敏、「台湾映画の夜——ワン・レン監督『スーパーシチズン 超級大国民』」、「すばる」集英社、2018.5、pp.362-363

野崎敏、「矢橋徹『ヌーヴェル・ヴァーグの世界劇場』書評」、「キネマ旬報」キネマ旬報社、2018.8月上旬、pp.172-173

野崎敏、「シネマ万華鏡 濱口竜介監督『寝ても覚めても』」、日本経済新聞、2018.8.31 夕刊

野崎敏、「動物たちのしるしのもとに——金子薫の小説をめぐるエスキス」、「文藝」、河出書房新社、2018年夏、pp.366-371

野崎敏、「ハリウッドのスカンク——デヴィッド・ロバート・ミッチェル監督『アンダー・ザ・シルバーレイク』」、「すばる」、2018.11、pp.330-331

野崎敏、「カトリヌの眼差しのもとで——ロブ=グリエの禁欲的悦楽」映画の快楽、快楽の映画——アラン=ロブ・グリエ レトロスペクティブ公式パンフレット」ザジフィルムズ、2018.11、pp.106-109

野崎敏、「大澤真幸『三島由紀夫 ふたつの謎』書評」、「青春と読書」集英社、2018.12、p.55

野崎敏、アンリ・シャリエール『パピヨン』平井啓之訳、解説、河出文庫、下巻、2019、pp.464-467

野崎敏、「読むことと書くことの鮮やかな連携」、堀江敏幸『子午線を求めて』、解説、講談社文芸文庫、講談社、2019、pp.267-275

野崎敏、「地下水の流れを絶やさないために」、渡辺一夫『ヒューマニズム考』、解説、講談社文芸文庫、講談社、2019、pp.221-230

野崎敏、「『神』の御利益あらかたな帽子——アントワヌ・ローラン『ミッテランの帽子』」『波』、新潮社、2019.1、53巻1号、pp.18-19

野崎敏、「原点回帰の頼もしさ——ウォン・ジョン監督『誰がための日々』」、「すばる」、2019.2、pp.400-401

野崎敏、「ママは失踪中——ギヨーム・セネズ監督『パパは奮闘中！』」、「すばる」、2019.5、pp.304-305

野崎敏、「スーパースターになるためには——アドヴェイト・チャンダン監督『シークレット・スーパースター』」、「すばる」、2019.8、pp.334-335

野崎敏、「川上未映子と「生む・有無」問題——『きみは赤ちゃん』賛」、「文學界」、文藝春秋、2019.8月号、pp.158-160

野崎敏、「唯一無二の導きの書 ジャン=ピエール・ベルトメ『ジャック・ドゥミ——夢のルーツを探して』」、「キネマ旬報」、2019.9月下旬、p.178

野崎敏、「イレーヌ・ネミロフスキー『フランス組曲』、『翻訳者による海外文学ブックガイド BOOKMARK』、金原瑞人、三辺律子編、CCCメディアハウス、2019、p.96

野崎敏、「世界文学のごたえ——『世界文学アンソロジー』書評」、「英語教育」、大修館書店、2019.12、p.91

野崎敏、「宗教なき時代の救済を問う——ウエルベック『セロトニン』」、「日本経済新聞」、2019.11.17

野崎敏、「香港、アッド・オイル！——オリヴァー・チャン監督『淪落の人』」、「すばる」、2020.2、306-307

野崎敏、「友情と創造の場、ここにあり——カウテル・アディミ『アルジェリア、シャラ通りの小さな書店』、「ふらんす」、白水社、2020.3、p.62

(4) 講演・対談・シンポジウム

野崎敏、講演「翻訳と文学創造」関西学院大学文学部、2018.7.4

野崎敏、オーレリー・フォリア講演会「ラマルチーヌとメランコリー」司会（仏語）、東京大学文学部、2018.10.29

野崎敏、オーレリー・フォリア講演会「ロマン主義と文学の現代性」コメンテーター（仏語）、立教大学文学部、2018.10.31

- 野崎敏、講演「フランス小説の光と影 マルタン・デュ・ガール『チボー家の人々』」、2018.11.13、NHK 文化センター青山教室
- 野崎敏、講演「翻訳すなわち創造」、明治大学大学院教養デザイン研究科主催、2018.11.17
- 野崎敏、講演「フランス文学から映画へ——ジャック・ドゥミ『ロバと王女』をめぐる」、上智大学ヨーロッパ研究所主催、2018.11.20
- 「アンドレ・バザン 生誕100周年記念イベント 1. 21世紀のアンドレ・バザンに向けて」、ダドリー・アンドルー、濱口竜介、三浦哲哉、堀潤之、角井誠、伊津野知多、野崎敏（総合司会）、アンドレ・バザン研究会主催、東京大学駒場キャンパス、2018.12.16
- 「アンドレ・バザン 生誕100周年記念イベント 2. 映画とアダプテーション——アンドレ・バザンを中心に」、ダドリー・アンドルー、吉村和明、須藤健太郎、大久保晴朗、野崎敏（総合司会）、アンドレ・バザン研究会主催、山形大学人文社会科学部、2018.12.18
- 野崎敏、講演「フランス文化の『不思議』」、NHK 文化センター講演会、NHK 文化センター青山教室、2019.4.2、5.7、6.4、7.2、9.3、10.1、12.3
- 野崎敏、講演「堀口大學の翻訳詩」、長岡・堀口大學を語る会、第27回講演会、2019.5.15
- 塚本昌則、野崎敏、対談「夢の交歓」、神保町ブックセンター・岩波書店、2019.5.23
- 野崎敏、講演「野崎敏のフランス文学案内」、朝日カルチャーセンター新宿教室、2019.5.31、7.5、9.27、11.22、2020.1.24、2.28
- 野崎敏、講演「ノートル＝ダムと文学」、NHK 文化センター名古屋教室、2019.7.18
- 野崎敏、講演「フランス文学 名作の世界へ」、NHK 文化センター横浜ランドマーク教室、2019.9.20
- 鹿島茂、野崎敏、対談「初心者でも読める！ ブルースト『失われた時を求めて』」、NHK 文化センター青山教室、2019.10.4
- 野崎敏、講演「翻訳は文学の栄養素」、みなと区民大学・明治学院大学言語文化研究所共催講演会、2019.10.22
- 柴田元幸、和田忠彦、沼野燕子、松永美穂、野崎敏、「シンポジウム The Joy of translation ?」、東京国語大学総合文化研究所、2019.10.23
- 野崎敏、講演「フランス文学から映画へ ヴィクトル・ユゴー『ノートル＝ダム・ド・パリ』をめぐる」、上智大学ヨーロッパ研究所主催講演会、2019.10.29
- 中条省平、駒井稔、野崎敏、鼎談「僕らが本からもらったもの」、出版文化産業振興財団、2019.11.1
- 野崎敏、講演「映画、夢のリアリズム」、東京女子大学学会主催講演会、2019.11.15
- 野崎敏、講演「時代の流れにあらがって 大河小説の可能性」、ロマン・ロラン研究所・アンスティテュ・フランセ関西・京都共催講演会、2019.11.30
- 金沢美知子、野崎敏、講演と対談「ガイコク・ブンガクのミライ」、放送大学文京学習センター公開講演会、2019.12.14
- 野崎敏、講演「フランス文学が教えてくれること」、放送大学群馬学習センター公開講座、2019.12.21
- (5) 啓蒙
- 野崎敏、「PICKUPMOVIE」(連載)、「芸術新潮」、2018.4月号、p.137；2018.5月号、p.185；2018.6月号、p.121；2018.7月号、p.161；2018.8月号、p.145；2018.9月号、p.161；2018.10月号、p.161；2018.11月号、p.161；2018.12月号、p.161；2019.1月号、p.129；2019.2月号、p.129；2019.3月号、p.137；2019.4月号、p.127；2019.5月号、p.153；2019.6月号、p.137；2019.7月号、p.145；2019.8月号、p.113；2019.9月号、p.145；2019.10月号、p.145；2019.11月号、p.161；2019.12月号、p.153；2020.1月号、p.153；2020.2月号、p.129；2020.3月号、p.145
- 野崎敏、「魚尊び小さな生の救済願う 井伏鱒二生誕120年」、「読売新聞」、2018.5.21 夕刊
- 野崎敏、「概観二〇一七年・翻訳『文藝年鑑2018』」、日本文藝協会編、新潮社、2018.6、pp.57-59
- 野崎敏、「よみがえらせる人、ロラン・バルト」『パブリッシャーズ・レビュー (みすず書房の本棚)』、2018.6.15
- 野崎敏、「イブセさん健在なり」『青春と読書』、集英社、2018.8、pp.14-15
- 金井美恵子・野崎敏、対談『「スタア誕生」余話——映画は彼女たちのものである』、「文學界」、2018.9、pp.176-194
- 「野崎敏氏 最終講義レポート『ネルヴァルと夢の書物』」、「週刊読書人」、2019.4.5
- 野崎敏、「キーンさんを偲ぶ——澄明な文体」、「すばる」、2019.5、pp.198-199
- 野崎敏、「パリの心臓が燃やされた ノートル＝ダム 市民の不朽の大伽藍」、「朝日新聞」、2019.4.17
- 野崎敏、「翻訳楽しむ心 大学から学ぶ」、「新潟日報」、2019.4.29
- 中西進・川合康三・野崎敏、「座談会 日本文学研究の楽しさ、広さ、深さ」、司会・上野誠、「文学・語学」全国大学国語国文学会編、第224号、2019.6、pp.25-46
- 野崎敏、「文学二〇一八年 翻訳『文藝年鑑 2019』」、日本文藝家協会編、新潮社、2019.6、pp.61-63

- 野崎敏、「ネルヴァルと夢の書物」、「すばる」、2019.7、pp.256-274
 野崎敏、「風来坊の世界文学——ネルヴァルの不思議な旅」、「本」、講談社、2019.9、pp.8-9
 野崎敏、「フランス文学はつねに古典である」、「kotoba」、集英社、2019年秋、pp.75-81
 野崎敏、「追悼・池内紀 自由人の矜持」、「すばる」、2019.11、pp.208-209
 野崎敏・澤田直・鈴木雅生、「座談会 僕らはこんな本を読んできた」、「ふらんす」、2019.11、pp.6-12
 野崎敏、「終わりのないダンスへの招待」、荒木悠展『ニッポンノミヤゲ Le Souvenir du Japon』カタログ、資生堂、2019.12、pp.46-47

(6) 翻訳

野崎敏（単独訳）、André Bazin, « Réflexions sur la critique » アンドレ・バザン「批評に関する考察」翻訳・訳者解題、「アンドレ・バザン研究」第2号、山形大学人文学部附属映像文化研究所、2018.3、pp.108-124

(7) 受賞

第17回角川財団学芸賞受賞（著書『水の匂いがするようだ——井伏鱒二のほうへ』、集英社、2018年による）

3. 主な社会活動

(1) 学会

日本フランス語フランス文学会員
 「ルヴュ・ネルヴァル」(Revue Nerval) 誌日本連絡員

(2) 学外組織（学協会、省庁を除く）委員・役員

小西国際交流財団日仏翻訳文学賞選考委員長
 群像新人文学賞選考委員
 芸術選奨選考委員

教授 **塚本 昌則** TSUKAMOTO, Masanori

1. 略歴

- 1982年 3月 東京大学文学部第三類フランス語フランス文学専修課程卒業
 1984年 4月 東京大学大学院人文科学研究科修士課程入学（仏語仏文学）
 1987年 4月 東京大学大学院人文科学研究科博士課程進学
 1988年 10月 パリ第12大学博士課程（～1991年9月）（フランス文学、フランス政府給費留学生）
 1992年 3月 東京大学大学院人文科学研究科博士課程退学
 1992年 4月 東京大学文学部助手
 1994年 4月 白百合女子大学文学部専任講師（フランス文学）
 1997年 4月 東京大学大学院人文社会系研究科助教授（フランス語フランス文学）
 2010年 4月 東京大学大学院人文社会系研究科教授（フランス語フランス文学）

2. 主な研究活動

a 専門分野

フランス近代文学。

b 研究課題

- (1) ポール・ヴァレリー研究。「夢」というトポス、断章という形式からの検討。
 (2) クレオール文学研究。エキゾティシズムとは無縁の、活力にあふれたその作品美学の研究を、セゼール、グリッサン、シャモワゾー、コンフィアンなどの作品読解を通して進めている。
 (3) 20世紀フランス文学における散文の研究。小説全盛の19世紀とは異なり、20世紀には、詩的強度を備えたさまざまな散文作品が書かれるようになった。とりわけ、時間意識、夢と覚醒というテーマ、イメージの活用法、さらに人文学との接点という視点から、その特質の一端を捉えようと試みている。

c 概要と自己評価

(1)については、長年の課題として研究を続けている。昨年、「夢」というテーマをめぐって、ヴァレリーを出発点に、プルースト、ブルトン、サルトル、バルトを比較検討する本を出版した。ヴァレリー研究は、これまでにない精度をもった伝記やさまざまな書簡が刊行され、作家ヴァレリーの研究という点で新たな展開を迎えている。その成果を参照しながら、「夢」との関係でしばしば問題となるヴァレリーの「犯罪」幻想を扱った論文を執筆した。

(2)については、グリッサンの小説・評論の翻訳を現在準備中である。また、クレオール文学を日本語で訳そうとする時に生じる問題について、論文を発表した。

(3)については、現在、20世紀文学と人文科学の境界を探る研究会を開催、人類学、フィクション論、精神分析、現象学の専門家のお話を伺いながら、早稲田大学・鈴木雅雄教授とともに、知ることと作りだすことの境界を問う作業を行っている。この試みを今後も継続し、新たな文学概念構築の手がかりを掴みたいと願っている。また、ウィリアム・マルクス教授（コレージュ・ド・フランス）の著書『文学との訣別』の翻訳を刊行した。これは18世紀から20世紀にかけて、文学が社会において途方もなく高い地位を獲得した後、その価値が下落して、現在では当てにならない書き物という評価を得るに至った、その変転の根本にある考え方を分析した本である。

d 主要業績

(1) 著書

三浦信孝・塚本昌則編、『ヴァレリーにおける詩と芸術』、水声社、2018.8

単著、塚本昌則、『目覚めたまま見る夢——20世紀フランス文学序説』、岩波書店、2019.2

(2) 論文

塚本昌則、「放心の幾何学——20世紀フランス文学における眠りと夢(5)——」、『思想』、no 1130、116-137頁、2018.6

塚本昌則、「ヴァレリーと犯罪——カトリーヌ・ポッジと「奇妙な眼差し」の形成について」、『愛のディススクール——ヴァレリー「恋愛書簡」の詩学』、森本淳生・鳥山定嗣編、水声社、217-238頁、2020.3

(3) 書評

「2018年回顧・外国文学（フランス）」、『週刊読書人』、2018.12.21

「2019年回顧・外国文学（フランス）」、『週刊読書人』、2019.12.20

(4) 学会発表・研究座談会

国内、Masanori Tsukamoto、「Le support de la lumière : une théorie virtuelle du cinéma chez Valéry」、Le cinéma des poètes、東京大学文学部、2018.12.15

国内、Masanori Tsukamoto、「Que veut dire “l’usage littéraire du langage” ? - La parole à l’état naissant chez Valéry et chez Merleau-Ponty」、Merleau-Ponty devant Valéry - le cours au Collège de France en 1953 : « Recherches sur l’usage littéraire du langage」、東京大学文学部、2019.3.27

国内、箭内匡・鈴木雅雄・塚本昌則、研究座談会『文学としての人文知』第1回、「〈イメージの人類学〉をめぐって」、東京大学文学部、2019.7.1

国内、久保昭博・鈴木雅雄・塚本昌則、研究座談会『文学としての人文知』第2回、「フィクション論の現在——ジャン＝マリー・シェフェール『なぜフィクションか？』をめぐって」、早稲田大学文学部、2019.11.21

国内、立木康介・廣瀬浩司・鈴木雅雄・塚本昌則、研究座談会『文学としての人文知』第3回、「無意識と文学」、東京大学文学部、2019.11.21

国内、塚本昌則、「ヴァレリーと犯罪——カトリーヌ・ポッジとの往復書簡と1920年代の変貌」、京都大学人文科学研究所、2019.12.21

(5) 啓蒙

塚本昌則、「ポール・ヴァレリー、セットとジェノヴァ——地中海を旅する想像力」、『フランス文学を旅する60章』（野崎歓編）、明石書店、236-240頁、2018.10

山本貴光・塚本昌則（対談）、「これからの文学問題」、神楽坂モノガタリ、2019.4.19

野崎歓・塚本昌則（対談）、「夢の交歓」、神保町ブックセンター・岩波書店、2019.5.23

(6) 翻訳

個人訳、William Marx、「L’adieu à la littérature : Histoire d’une dévalorisation XVIIIe-XXe siècle」、塚本昌則、ウィリアム・マルクス『文学との訣別——近代文学はいかにして死んだのか』、水声社、2019.3

3. 主な社会活動

(1) 学会

日本フランス語フランス文学会

(2) 学外組織(学協会、省庁を除く)委員・役員

日仏会館フランス語コンクール審査員

准教授 **塩塚 秀一郎** SHIOTSUKA, Shuichiro

1. 略歴

1989年4月 東京大学教養学部理科一類入学
1993年3月 東京大学教養学部教養学科第二（フランスの文化と社会）卒業
1993年4月 東京大学大学院人文科学研究科修士課程（仏語仏文学専攻）入学
1995年3月 同 修了
1995年4月 東京大学大学院人文社会系研究科博士課程（欧米系文化研究専攻）進学
1995年10月 パリ第三大学博士課程入学（フランス文学・文化）
2000年7月 同 博士学位（文学）取得
2001年3月 東京大学大学院博士課程単位取得退学
2001年4月 北海道大学大学院文学研究科 助教授
2005年4月 早稲田大学理工学術院理工学部 助教授
2007年4月 早稲田大学理工学術院創造理工学部 准教授
2010年4月 同 教授
2012年4月 京都大学大学院地球環境学堂 准教授
2015年4月 京都大学大学院人間・環境学研究科 准教授
2016年4月 同 教授
2018年4月 東京大学大学院人文社会系研究科 准教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

フランス近現代文学

b 研究課題

- (1) ジョルジュ・ペレック研究。制約下の創作や日常の探求という観点から検討している。
- (2) レーモン・クノー研究。特異な〈知〉の概念の検討。
- (3) 都市や集合住宅をめぐるドキュメンタリー文学の研究。

c 概要と自己評価

(1) ペレックによる日常の探求の記録を翻訳し『パリの片隅を実況中継する試み』（水声社）として刊行した。また、ウリボ美学とロマン主義美学の関係をめぐってカナダにおける研究集会で発表を行い、成果を論文として発表した。『煙滅』における「不在」の象徴の変化をめぐる論文を専門誌に発表した。

(2) クノーと映画の関係について研究集会で発表した。また、中期の小説を対象に知恵の概念を検討した著作を執筆し現在刊行準備中である。

(3) 都市の遊歩と対比する意味で、経路があらかじめ定められた移動の表象について考察し、オーストラリアにおける研究集会で発表を行い、成果を論文として発表した。

d 主要業績

(1) 論文

塩塚秀一郎、「現代フランス文学における道行きと束縛をめぐって」、『文化交流研究』、no 32、28-30 頁、2019.2

Shuichiro SHIOTSUKA, « Le parcours littéraire de Perec comme « modèle structurel » du parcours artistique de quelques peintres dans *La Vie mode d'emploi* », *Le Cabinet d'amateur. Revue d'études perecquiennes* (revue en ligne), Association Georges Perec, 2019.9

Shuichiro SHIOTSUKA, « Le pouvoir d'évocation du lipogramme dans *La Disparition* – La signification de la contrainte et son évolution », *Cahiers Georges Perec*, n° 13, p.57-62, 2019.5

塩塚秀一郎、「流れからの〈逸脱〉が意味するもの：ジュリアン・グラック『狭い水路』における風景の呼びかけ」、『文学と環境』、no 22、5-13 頁、2019.5

(2) 書評

塩塚秀一郎、『ジョルジュ・ペレック 制約と実存』、『UTokyo BiblioPlaza』、2018.10

(3) 学会発表

国内、塩塚秀一郎、「Le cinéma comme sagesse du peuple-le mélange du réel et de l'imaginaire dans Loin de Rueil de Queneau」、Le cinéma des poètes、2018.12.15

国外、Shuichiro Shiotsuka、「Les méthodes mathématiques et la marge pour la verve artistique dans *La Vie mode d'emploi* de Georges Perec」、X prend Y pour Z : littérature, contrainte et mathématiques、ブリティッシュ・コロンビア大学 (カナダ)、2019.6.2

国外、Shuichiro Shiotsuka、「La potentialité d'autres « contraintes existentielles » antérieures ou extérieures à l'Oulipo : *Les eaux étroites* (1976) de Julien Gracq et *La Modification* (1957) de Michel Butor」、Les effets de l'Oulipo、ニュー・イングランド大学 (オーストラリア)、2019.12.12

(4) 翻訳

個人訳、Georges Perec、「Tentative d'épuisement d'un lieu parisien」、塩塚秀一郎、ジョルジュ・ペレック『パリの片隅を 実況中継する試み』、水声社、2018.10

3. 主な社会活動

(1) 学会

日本フランス語フランス文学会関東支部幹事、2019.6~2020.2

文学・環境学会評議員、2019.4~2020.3

(2) 学外組織(学協会、省庁を除く)委員・役員

小西国際交流財団日仏翻訳文学賞選考委員、2019.4~2020.3

准教授 **王寺 賢太** OHJI, Kenta

1. 略歴

1988年4月 東京大学教養学部文科3類入学
1992年3月 東京大学文学部第3類(語学文学)仏語仏文学専修課程卒業
1992年4月 東京大学大学院人文科学研究科修士課程(仏語仏文学専攻)入学
1993年10月 ストラスブール第2大学修士課程(近代文学)入学
1994年10月 パリ第7大学高等研究課程入学(～1995年9月 修了)
1996年3月 東京大学大学院人文社会系研究科修士課程(欧米系文化研究専攻)修了
1996年4月 東京大学大学院人文社会系研究科博士課程(欧米系文化研究専攻)進学
1996年10月 パリ第7大学博士課程(テキストと資料の科学)入学(～2004年12月)
1996年10月 高等師範学校外国人聴講生(～1997年7月)
1997年4月 日本学術振興会特別研究員(DC2)(～1999年3月)
2000年3月 東京大学大学院人文社会系研究科博士課程単位取得退学
2000年4月 日本学術振興会特別研究員(PD)(～2003年3月)
2005年1月 京都大学人文科学研究所 助教授
2007年4月 京都大学人文科学研究所 准教授
2008年8月 ライデン大学図書館スカリゲル・フェロー
2009年10月 パリ第1大学(哲学科)外国人研究員(～2010年9月)
2012年7月 パリ西大学博士号(仏語仏文学)取得
2019年9月 東京大学大学院人文社会系研究科 准教授

2. 主な研究活動（2019 年度分～）

a 専門分野

フランス近現代思想

b 研究課題

- (1) フランスを中心とする 18 世紀西洋思想——レナル／ディドロ『両インド史』から出発して、啓蒙期の歴史叙述・政治思想・経済思想の交錯に焦点を当てる。
- (2) フランス 20 世紀思想——1960 年代以降の構造主義・ポスト構造主義の諸潮流について、西欧近世思想史との関係ならびに同時代の左翼政治との関係に焦点を当てる。
- (3) 日本の近現代思想・批評——とくに西洋の同時代の思想との関連に焦点を当てる。

c 概要と自己評価

- (1) 『両インド史』批評校訂版共同ディレクターとして、この批評校訂版第三巻の刊行に関わった。現在、第四巻についても鋭意編集作業を進めている。『両インド史』に関しては、イエズス会パラグアイ布教区叙述についても、日仏両国語で論文を発表した。ほかに後期ディドロの政治思想の変遷について仏語で論文を発表した。
- (2) ミシェル・フーコーがディドロの『ラモーの甥』について論じた『狂気の歴史』の一章を、ヘーゲル『精神現象学』との対比において分析する論文を発表した。また、京大人文研在職中に開催されたフランスの六八年五月についての思想史的考察を行う連続講演会に論文を執筆し、論文集を編纂した。
- (3) アルチュセールの日本における初期の受容について論文を発表した。また、社会思想史学会では『社会思想史事典』をめぐるシンポジウムでコメンテーターを務めた。哲学会では、現代精神医学と哲学の関係について研究発表を行っている。

d 主要業績

(1) 編著

編著、王寺賢太・立木康介編、『〈68 年 5 月〉と私たち』、週刊読書人、324 頁、2019.4

Guillaume-Thomas Raynal, *Histoire philosophique et politique des établissements et du commerce des Européens dans les deux Indes*, t. III, dir. Anthony Strugnelli, Gianluigi Goggi et Kenta Ohji, Femay-Voltaire, Centre international d'étude du 18^e siècle, 659 p., 2020.1

(2) 主要論文

王寺賢太「京大人文研のアルチュセール——〈68 年〉前後」、前掲王寺・立木共編著、205-230 頁、2019.4

Kenta OHJI, « Par-delà la volonté générale : le "concert des volontés" selon le dernier Diderot », dans Marie Leca-Tsiomis et Ann Thomson (éd.), *Diderot et la politique, aujourd'hui*, Paris, Société Diderot, p. 25-43, 2019.5

Kenta OHJI, « L'utopie barré : à propos des missions jésuites du Paraguay d'après l'*Histoire des deux Indes* », dans Lise Andries et Marc-André Bernier (éd.), *L'Avenir des Lumières/Future of the Enlightenment*, Paris, Éditions Hermann, p. 299-318, 2019.7

王寺賢太「ヘーゲルを模倣するフーコー——『狂気の歴史』のラモーの甥論をめぐって」、『思想』no. 1145、p. 42-63、2019.9

王寺賢太「「文明化」の方向転換——レナル／ディドロ『両インド史』のイエズス会パラグアイ布教区叙述をめぐって」、齋藤晃編『宣教と適応——グローバルミッションの近世』、名古屋大学出版会、466-514 頁、2020.2

(3) 学会発表

国内、王寺賢太、「『社会思想史事典』の／をめぐる問いかけ」、社会思想史学会第 44 回大会、甲南大学岡本キャンパス、2019.10.25

国内、王寺賢太、「〈ポスト 68 年〉の狂気と哲学」、哲学会第 58 回研究発表大会、東京大学文学部、2019.11.3

(4) マスコミ

「『68 年』から現在を問う」、『京都新聞』、2019.7.16

3. 主な社会活動

(1) 学会

日本 18 世紀学会幹事、2007 年～現在

国際 18 世紀学会幹事、2015.7～2019.6

(2) 学術委員

Diderot Studies (Université Laval, Canada) 日本通信員、2007 年～現在

Guillaume-Thomas Raynal, *Histoire philosophique et politique des établissements et du commerce des Européens dans les deux Indes* 批評校訂版 (Femay-Voltaire, Suisse, Centre international d'étude du 18e siècle) 編集委員、2013 年～現在、共同ディレクター、2016 年～現在

Cromohs (*Cyber Review of Modern Historiography*, Firenze University Press) Editorial Board メンバー、2014 年～現在

ENC CRE (Édition Numérique Collaborative et CRitique de l'Encyclopédie de Diderot), Académie des Sciences (France) 編集チームメンバー、2016 年～現在

19 南欧語南欧文学

教授 浦 一章 URA, Kazuaki

1. 略歴

1982年3月	東京大学教養学部教養学科イギリス科卒業
1984年3月	同 文学部イタリア語イタリア文学専修課程卒業
1987年3月	東京大学大学院人文科学研究科フランス語フランス文学専門課程(イタリア語イタリア文学専攻)修士課程修了
1987年4月	東京大学大学院人文科学研究科フランス語フランス文学専門課程(イタリア語イタリア文学専攻)博士課程進学
1988年3月	東京大学大学院人文科学研究科フランス語フランス文学専門課程(イタリア語イタリア文学専攻)博士課程中途退学
1988年4月	東京芸術大学音楽学部一般学科専任講師
1990年4月	同 助教授
1994年4月	東京大学文学部南欧語南欧文学科助教授
1995年4月	同 大学院人文社会系研究科助教授
2010年4月	同 教授、現在に至る。

2. 主な研究活動

a 専門分野 b 研究課題

(ダンテを中心とした) イタリア文学、中世オック語文学

c 概要と自己評価

概要

『ダンテ研究 I』(東京、東信堂、1994年)以降も、『神曲』以前のダンテ、恋愛詩人としてのダンテを研究の中心に据え、1230年頃からホーエンシュタウヘン家の宮廷で花開いたシチリア派の詩人たちや、それに続くシチリア・トスカーナ派の詩人たちについての知識を深め、さらには南仏トルバドールたちの詩に対する理解を深めること。ダンテは少なくとも8名のトルバドールに言及しており、そのうちアルナウト・ダニエルを「煉獄篇」第26歌に登場させる際には、わざわざオック語で語らせるという念の入りようである。そのため、ダンテとトルバドールとの関係に対する興味が現在では次第に大きくなりつつある。また、恋愛詩の伝統はペトラルカをへて、時と地域、個性の壁を超越した一種の文学的コイナーを形成してゆくため、ダンテ以降の恋愛詩をも視野に含めるよう努め、ダンテの受容史という観点から、その最初の崇拜者ともいべきボッカチオおよび騎士道物語詩(とりわけタツソ)にも関心を寄せている。

自己評価

『神曲』とも対照させながら、『シタ・ノワ』に収録された韻文のスタイルの変化を跡づけることが現在の主要な課題であるが、文体を問題とする困難な研究は少しずつ前進を続けている。トスカーナ地方の文学(とりわけダンテ)がアペニン山脈以北の地方、たとえばボローニャを中心としたエミリア・ロマーニャ地方や、パドヴァ、ヴェネツィア、トレヴィーゾなどを含むヴェネト地方でどのように受容されたかについても知見を深めるべく努めている。教育面では、現在、効果的な文学史教育を模索中であるが、必要な講義資料の整備を進めつつ、19-20世紀の作家にとり組んでいる(2011年度より引き続き、リゾルジメント期の作家を主題として発展中である)。すでに中世オック語入門に関してはルーティーン化が完了したとあってよい状況だが、入門を終えた後の教育体制の改善は中断している。また、イタリアの「詩的言語」の特徴を語学的な観点から体系的に教育すべく案を練っている。また、研究面でも教育面でも、体制を整えるためにすべきことは多大にあるが、2018年2月14日21時半頃に交通事故に遭い、半年にわたる入院生活を余儀なくされ、前進が困難になりつつある。

d 主要業績

(1) 著書

共著、浦一章、『黎明のアルストピア』、ありな書房、2018.5

(2) 論文

浦一章、『ロレンツォ・デ・メディチとイタリア文学』、『黎明のアルストピア』（東京、ありな書房）、325-344 頁、2018.5

浦一章、「旅する詩人の日伊比較—西行、ダンテ、ペトラルカー」、『西行学』（笠間書院）、9 号、256(20)-250(26)頁、2018.10

(3) 書評

リナ・ボルツォーニ、『クリスタルの心—ルネサンスにおける愛の談論、詩、そして肖像画』（足立薫、伊藤博明、金山昌弘訳）、ありな書房、『図書新聞』、3337、4-4 頁、2018.2

(4) 翻訳・資料紹介

共訳、浦一章・永井裕子、小佐野重利（編著）『オリジナルとコピー—16 世紀および 17 世紀における複製画の変遷』、三元社、85-127 頁、2019.5

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

特別講演、集英社（および東京大学文学部）、「恋愛における最大の悲しみ—ダンテと宮廷風恋愛の伝統」、2014.12

特別講演、群馬県立土屋文明記念文学館、「『神曲』に描かれた中世イタリア—ダンテ生誕 750 周年に寄せて」、2015.12

20 英語英米文学

教授 大橋 洋一 OHASHI, Yoichi

1. 略歴

1976年3月	東京教育大学文学部文学科英語英文学専攻 卒業（文学士）
1979年3月	東京大学大学院人文科学研究科修士課程 修了（英文学）
1979年4月	東京大学文学部英文科 助手
1981年4月	中央大学法学部 専任講師（英語）
1983年4月	学習院大学文学部英米文学科 専任講師
1985年4月	学習院大学文学部英米文学科 助教授
1994年4月	学習院大学文学部英米文学科 教授
1996年4月	東京大学大学院人文社会系研究科 助教授（英語学英米文学）
1999年4月	東京大学大学院人文社会系研究科 教授
2019年3月	定年退職

2. 主な研究活動

a 専門分野

英国演劇・批評理論

b 研究課題

- (1) シェイクスピアを中心とする英国初期近代演劇の研究。
- (2) 英国演劇研究。
- (3) 英語圏の文学理論の研究。教育の場で、理論あるいは分析法をいかに教えるかという問題も視野に入れる。

c 概要と自己評価

上記(1)に関しては、継続研究課題。2016年～17年においては、シェイクスピアの悲劇に関する包括的な研究を実施。2018年より研究成果を公表予定。またシェイクスピア劇を中心としてアダプテーション問題を考察した。(2)についてはハロルド・ピンターに関する研究を本格的に開始。また演劇分野としては英国演劇におけるメタドラマと不条理演劇を考察。(3)エコクリティシズムの視点と方法を、文学研究や教育の場へ適用することを考察し、2016年～2017年は動物論に集中。シェイクスピア研究・英文学研究と動物論との合体を考えた。

d 主要業績

(1) 論文

大橋洋一、「シェイクスピアとアダプテーション (1) ——The Tamer Tamed」、『英語圏文化研究 UTokyo』（東京大学大学院英語圏文化研究会編、ISSN 2431-3099）第12号（2018.3）、pp. 75-90

(2) エッセイ

大橋洋一、「理論と自転車運転術」、『れにくさ——現代文芸論研究室論集』（東京大学大学院人文社会系研究科・文学部 現代文芸論研究室編、ISSN 2187-0535）第9号（2019.3）、pp.12-23

(3) 教科書分担執筆

沼野充義・野崎敏編『ヨーロッパ文学の読み方——近代篇（放送大学教材）』、日本放送大学教育振興会、2019.3、
第2章 イギリス (1) シェイクスピア『ロミオとジュリエット』を読む
第3章 イギリス (2) スウィフト『ガリヴァー旅行記』を読む
第4章 イギリス (3) ブロンテ『嵐が丘』を読む

(4) 翻訳

単独訳、テリー・イーグルトン『文学という出来事』（Terry Eagleton, *The Event of Literature*）、平凡社、2018.4

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

集中講義、文教大学文学部英米言語英米文学科、「英米文化特論／英米文化・英米文学特論」、2018.9
非常勤講師、東京藝術大学大学院音楽研究科、～2020

- (2) 学外組織（学協会、省庁を除く）委員・役員
福原記念英米文学研究助成基金、運営委員、2012年～

教授 **渡邊 明** WATANABE, Akira

1. 略歴

1987年3月	東京大学文学部英語英米文学専修課程卒業
1989年3月	東京大学大学院人文科学研究科英語英米文学専攻修士課程修了
1993年9月	マサチューセッツ工科大学大学院言語・哲学科博士課程修了 博士号 (Ph.D. in Linguistics) 取得 博士論文 AGR-Based Case Theory and Its Interaction with the A-bar System
1994年4月	神田外語大学外国語学部英米語学科専任講師
1997年4月	同 大学院言語科学研究科助教授
1998年4月	東京大学大学院人文社会系研究科助教授
2016年4月	東京大学大学院人文社会系研究科教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

英語学／理論言語学

b 研究課題

程度表現の構造と意味

c 概要と自己評価

2018年度は科研費基盤 (C) の課題「日英語の程度表現の統語構造と意味」の4年目にあたる。主たる成果は、程度変項の全称量化が日本語に存在しているという事実の発見である。日本語に限らず他の言語においても、同種の統語パターンが存在することが報告されたことは知る限りこれまでになく、画期的な成果だと自負している。これは不定 (indeterminate) が関わる現象なので、譲歩節を除けば英語には存在しない日本語の特徴である。当該現象が否定極性や自由選択の性格を帯びる場合についての論文が、極性についての論文集に収録された。否定極性や自由選択との関連では、名詞修飾の最上級が英語で類似のデータパターンを示すことがよく知られているのだが、日本語の最上級は英語で見られる絶対用法を欠くという発見も、この研究の副産物として特筆に値する。日本語の最上級が序数詞を使うという特徴に関連していると考えて間違いない。日本語の最上級に欠けている用法は、スウェーデン語において通常の最上級と形態上区別されており、日本語の特徴はこの区別をさらに裏付けるものとなっている。

上記科研費課題の最終年度である2019年度は、大きさをあらわす述語が修飾している名詞に内在する程度を示すという現象について2017年度から取り組んでいたものを論文にまとめた。近く刊行予定である。この研究から浮かび上がってくる特筆すべき日本語の特徴は、程度修飾の意味を表現するには普通の形容詞ではなく「おお」や接頭辞「だい」という形態的に特化した形式に依存するという点であり、本研究では、英語その他の言語を扱っている先行研究で気づかれていなかった程度修飾のためのサイズ表現の普遍文法上の特殊性をあぶり出すことに成功した。

d 主要業績

(1) 著書

共著、Watanabe, Akira (ほか多数)、『The Handbook of Japanese Contrastive Linguistics』、De Gruyter Mouton、2018.2

(2) 論文

渡辺明、「程度修飾と極性が交差するところ」、『極性表現の構造・意味・機能』澤田治・岸本秀樹・今仁生美 [編]、開拓社、128-152頁、2019.11

(3) 学会発表

国際、Akira Watanabe、「Ordinals, superlatives, and linearization」、7th Workshop on Phonological Externalization of Morphosyntactic Structure、北海道大学、2018.9.14

国内、渡辺明、「名詞の最上級?」、日本英語学会、横浜国立大学、2018.11.24

国内、渡辺明、「Pred⁰」、日本英語学会シンポジウム、横浜国立大学、2019.11.9

3. 主な社会活動

(1) 学外組織（学協会、省庁を除く）委員・役員

Linguistic Inquiry (出版元 MIT Press)、編集委員、2018.4～2020.3

Journal of East Asian Linguistics (出版元 Springer)、編集委員、2018.4～2020.3

the Language Faculty and Beyond (John Benjamins)、advisory board member、2018.4～2020.3

Acta Linguistica Academica、編集委員、2018.4～2020.3

日本英語学会、評議員、2019.4～

教授 後藤 和彦 GOTOU, Kazuhiko

1. 略歴

1979年4月	九州大学文学部 入学
1983年3月	同大学同学部英語学英米文学専門課程 卒業
1983年4月	東京大学大学院人文科学研究科英語英米文学専攻修士課程 入学
1986年3月	同大学院同研究科同専攻修士課程 修了
1986年4月	東京大学大学院人文科学研究科英語英米文学専攻博士課程 入学
1988年3月	同大学院同研究科同専攻博士課程 中退
1988年4月	東京女子大学文理学部英米文学科 専任講師
1992年4月	同大学同学部同学科 助教授
1993年9月	ノースカロライナ大学チャペルヒル校 フルブライト交換研究員（～1994年9月）
1997年4月	立教大学文学部英米文学科 助教授
1999年4月	同大学同学部同学科 教授
2003年9月	ノースカロライナ大学チャペルヒル校 フルブライト交換研究員（～2004年9月）
2007年4月	立教大学文学部文学科英米文学専修 教授
2017年4月	東京大学大学院人文社会系研究科 教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

アメリカ文学、特にアメリカ南部文学

b 研究課題

アメリカ南部文学の総体的特徴のひとつとして「戦後性」に着目し、ドイツの文化史家ウォルフガング・シヴェルプッシュが2002年に唱えた「敗北の文化」の概念を枠組みとして、日本の近代文学、あるいは所謂「戦後文学」との相対的比較を行う。

c 概要と自己評価

2005年に出版した著書『敗北と文学——アメリカ南部文学と日本近代文学』においてその概要を提示した、19世紀中葉の南北戦争以降の「敗北の文学」としてのアメリカ南部文学と、所謂「戦後文学」を含む日本近代文学の比較検討に関するおおまかな定式ないし視座にしたがって、対象となる両文学それぞれのより細かい時代区分における比較検証を継続的に行っている。

2018年度は科研基盤研究C「アメリカ南部文学の戦後性について——戦後日本文学との比較考察」の第3年目にあたっており、それまで2カ年にわたる研究の進捗に準じて、第一次大戦後のアメリカ文学のモダニズム全盛期にあって、モダニズムの技術革新とその背後にある T. S. Eliot の *The Waste Land* にその顕著な表現を見出す都会型孤立の精神を受け継ぎつつ、家族とその土地にまわりつく敗北の閨歴に対する嫌悪と執着をあわせもつ William Faulkner、Thomas Wolfe などを対象とし研究を継続した。

2019年度は同科研最終年度にあたり、やはり当初の研究計画にもとづいて、20世紀中葉移行の南部文学に焦点を当てた。この時期にはヴェトナム戦争におけるアメリカ国家としての一種の敗北経験が差し挟まれ、南部史家 C. Vann Woodward は、ヴェトナムの「敗北」を経てアメリカは初めて南部に比肩する経験を積むことになることになると言ったが、

ヴェトナム体験が南北戦争後に出来た土地の〈規約〉の破壊、内在の美学の断絶と新しい外部由来の親しみのない新美学への転轍といった事態を果たしてともなったか、疑問の余地なしとはしない。いずれにせよこの時期については、ふたつの「敗北」における精神的震度の相違を問題とする南部作家たちを対象に据えることとした。

4カ年の研究成果は以下に記したような論文等に反映されているほか、また現在、「女・性と歴史——『響きと怒り』と『或る女』より」と題し、「敗北の文化」下の文学に現れる歴史転轍の象徴として女性の人生の不可逆な屈折を見出し、イギリス、フランス、ロシア、ニューイングランドの同様の「女の一生」ものとの差異を検討する論文を執筆中、今年度末か来年度早々に出版される予定。加えて同内容のものを20年度開催予定の日本英文学会全国大会シンポジウムにて発表を予定している。

d 主要業績

(1) 論文

後藤和彦、「混血の使途——『八月の光』と『墓碑銘』、『フォークナーの水脈、花岡秀監修、藤平育子・中良子編』、265-88頁、2018.9

後藤和彦、「家・父・伝説—フォークナーと島崎藤村」、『フォークナーと日本文学』（諏訪部浩一、日本ウィリアム・フォークナー協会編）、74-99頁、2019.10

(2) 書評

巽孝之、『パラノイドの帝国 アメリカ文学精神史講義』、大修館書店、『英語教育』、Vol. 67, No. 13、91頁、2019.3

岡本正明、『アルタモント、天使の詩——トマス・ウルフを知るための10章』、英宝社、『週刊読書人』、第3293号、7頁、2019.6

(3) 解説

後藤和彦、「概観二〇一七年「アメリカ文学」」、日本文藝家協会編『文藝年鑑2018』、69-71頁、2018.6

後藤和彦、「概観二〇一八年「アメリカ文学」」、日本文藝家協会『文藝年鑑』、76-78頁、2019.6

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

広島大学大学院、「米文学特殊講義」、2018.8

東北学院大学大学院、「現代英米文学演習」、2020.8

(2) 学会

国内、日本アメリカ文学会、副会長、2018.4～

国内、日本マーク・トウェイン協会、評議員、2018.4～

教授 **阿部 公彦** ABE, Masahiko

1. 略歴

1985年3月	静岡県静岡聖光学院高等学校卒業
1985年4月	東京大学教養学部文科三類入学
1989年3月	同 文学部英語英米文学科専修課程卒業
1989年4月	東京大学大学院人文科学研究科（英語英米文学専攻）入学
1992年3月	同 修士課程修了・修士（文学）
1993年10月	連合王国ケンブリッジ大学大学院博士課程入学（英米文学専攻）
1997年5月	同博士課程修了 博士号取得（文学） タイトル：‘Wallace Stevens and the Aesthetic of Boredom’
1992年4月	東京大学文学部英語英米文学科助手
1993年4月	帝京大学文学部助手
1997年4月	帝京大学文学部専任講師
2001年4月	東京大学大学院人文社会系研究科助教
2007年4月	東京大学大学院人文社会系研究科准教授
2018年4月	東京大学大学院人文社会系研究科教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

英米文学

b 研究課題

英語圏の詩や小説の研究を中心とする。個々の作品の緻密な解釈と、作品を作品たらしめる力学の解明に向けた努力を研究の中心としつつ、同時に、「なぜ詩でなければならないか?」「なぜ小説なのか?」という素朴な疑問との取り組みをも課題とする。詩や小説を自足的なジャンルとみなすのではなく、「問答形式」「ポライトネス」「言語運用能力」「事務能力」「胃弱」といった周辺テーマとからめた研究を行う。

c 概要と自己評価

概要

2018年度から2019年度にかけては、引き続きポライトネス研究をすすめ、詩や小説の語り手が読者とどのような人間関係を築こうとしているかという疑問を足がかりに、語りの作法構築の問題を考察した。

自己評価

ポライトネスへの注目を出発点にした文学研究はまだ一般的にも広がりを見せているとは言えないので、今後も協同研究のような形でネットワークを広げ、より広範にわかる対象をとりあげながら理論の洗練をめざしたい。また「凝視」の研究の延長線上として、「共視」や「錯視」「注意散漫」といった類似テーマの研究も引き続き行う予定である。

d 主要業績

(1) 著書

編著、阿部公彦 飯田橋文学界、『現代作家アーカイブ3——自身の創作活動を語る』、東京大学出版会、2018.2
単著、阿部公彦、『NHK 100分de名著 『夏目漱石スペシャル』』、NHK出版、2019.2

(2) 論文

阿部公彦、「小川洋子の不安」、『すばる』、2018.4月号、174-85頁、2018.3

阿部公彦、「主観共有の魅惑——フォークナーから谷崎潤一郎、今村夏子まで」、『フォークナー』、20号、97-112頁、2018.5

Masahiko Abe, "Influence of English Literature and Language on Ôe Kenzaburô, Murakami Haruki, *Oxford Research Encyclopedia of Literature*, 2019.3

阿部公彦、『読解力が危機だ!』論が迷走するのはなぜか?——『読めていない』の真相をさぐる、『現代思想』、2019.5月号、136-54頁、2019.4

(3) 書評

藤野可織『ドレス』、河出書房新社、『すばる』、2018.2月号、340-41頁、2018

本谷有希子『生きてるだけで、愛』、新潮文庫、『神奈川新聞』、2018.1

加藤秀行『海亀たち』、新潮社、『波』、2018.1

トマス・ハーディ『テス』、ちくま文庫、『週刊読書人』、2018.5月18日号、4頁

小山田浩子『庭』、新潮社、『すばる』、6月号、pp.346-47、2018.5

町田康『湖畔の愛』、新潮社、『週刊現代』、5月19日号、107頁、2018.5

今村夏子「白いセーター」、『神奈川新聞』、7頁、2018.7

北条裕子「美しい顔」、太田靖久「うみまち」、辻原登「月も隈なきは」、木村友祐「生きものとして狂うこと」、『共同通信』(各地方紙)、2018.7

西村賢太「羅針盤は壊れても」、古市憲寿「平成くん、さようなら」、鴻池瑠衣「ジャップ・ン・ロール・ヒーロー」、近本洋一「括弧に入れられた『心』」、『共同通信』(各地方紙)、2018.8

柴崎友香『公園へ行かないか? 火曜日に』、新潮社、『群像』、10月号、358-59頁、2018.9

吉田修一『国宝』(上・青春編/下・花道編)、『週刊現代』、29号、115頁、2018.9

石井遊佳「象牛」、石田千「鳥居」、紗倉まな「春、死なん」、『共同通信』(各地方紙)、2018.9

森嶋外『渋江抽斎』、『神奈川新聞』、11頁、2018.9

熊野純彦『本居宣長』、三国美千代「いかれころ」、木村紅美「わたしの拾った男」、日上秀之「はんぶくするもの」、『共同通信』(各地方紙)、2018.10

吉村萬老『前世は兎』、集英社、『週刊文春』、2018.12.27

金原ひとみ「ストロングゼロ」、宮内悠介「ローパス・フィルター」、笠野頼子「返信を、待っていた」、西加奈子「私に会いたい」、沼田真佑「陶片」、帯木蓬生『ネガティブ・ケイバビリティ 答えの出ない事態に耐える力』、『共同通信』(各地方紙)、2018.12

- マーティン・エドワーズ『探偵小説の黄金時代』、国書刊行会、『日本経済新聞』、2018.12.26 夕刊、4 頁
- 辻原登『不意撃ち』、河出書房出版社、『文学界』、2019.2 月号、290-91 頁、2019.1
- 志賀直哉「城の崎にて」、『神奈川新聞』、2019.1.13 朝刊、11 頁
- 佐伯一麦「ななかまど、ローワンツリー」、赤井浩太「日本語ラップ feat.平岡正明」、青木淳悟「憧れの世界」、『共同通信』(各地方紙)、2019.1
- 川崎長太郎『鳳仙花』、『神奈川新聞』、2019.6.30
- 竹村はるみ『グロリアーナの祝祭』、江田孝臣『エミリ・ディキンソンを理詰めで読む』、山崎光夫『胃弱・癩癩・夏目漱石』、西元直子『くりかえしあらわれる火』、鴻巣友季子『翻訳って何だろう?』、「みすず」、1/2 月号、33 頁、2019.2
- 鴻池留衣『ジャップ・ン・ロール・ヒーロー』、新潮社、『すばる』、3 月号、404-5 頁、2019.2
- 川上未映子「夏物語(前編)」、吉本ばなな「ミトンとふびん」、『ユリイカ』2 月号(「よしもとばなな特集」)、宮下遼「青痣」、『共同通信』(各地方紙)、2019.2
- 今村夏子『父と私の桜尾通り商店街』・「むらさきのスカートの女」、町屋良平「ショパンズンビ・コンテスタント」、橋本治『『近未来』としての平成』、石橋正孝「絵画・推理・歴史」、『共同通信』(各地方紙)、2019.3
- 夏目漱石『明暗』、『神奈川新聞』、2019.4.7 朝刊、11 頁
- 絲山秋子「袋小路の男」、『読売新聞』、2019.4.14 朝刊、11 頁
- 古谷田奈月「神前酔狂宴」、佐伯一麦『山海記(さんげいき)』、笙野頼子「会いに行つて」、保坂和志・郡司ペギオ幸男対談「芸術を憧れる哲学」、奥野沙世子「逃げ水は街の血潮」、『共同通信』(各地方紙)、2019.4
- デイヴィッド・ピース『X という患者』、『日本経済新聞』、2019.5.11 朝刊、30 頁
- ロバート・キャンベル『井上陽水英訳詞集』、木戸岳彦『不在の歌』、島田雅彦「スノードロップ」、古市憲寿「百の夜は跳ねて」、石倉真帆「そこどけあほが通るさかい」、『共同通信』(各地方紙)、2019.5
- 羽田圭介『ボルシェ太郎』、河出書房新社、『新潮』、2019.7 月号、202 頁、2019.6
- 柴崎友香『ビリジアン』、河出文庫、『読売新聞』、2019.6.9 朝刊
- 佐伯一麦『山海記』、講談社、『読書人』、2019.6 月 21 日号、5 頁
- アラン・シリトー『長距離走者の孤独』、『日本経済新聞』、2019.6 月 23 日号
- 田中慎弥『ひよこ太陽』、新潮社、『すばる』、2019.8 月号、340-41 頁、2019.7

(4) 解説

- 阿部公彦、「ほんとうのエリオットはどこに?」、T・S・エリオット 深瀬基寛訳『荒地/文化の定義のための覚書』(中公文庫)、324-32 頁、2018.4
- 阿部公彦、「ぼっさ、ぼっさと見る人」、武田百合子『新版 犬が星見た』(中公文庫)、409-16 頁、2018.10
- 阿部公彦、「解説」、吉田修一『橋を渡る』(文春文庫)、512-19 頁、2019.2

(5) 学会発表

- 国際、阿部公彦、「The Power of 'Child-like Language and Stories」」、2018 Pyeongchang Humanities Forum, Pyeongchang, Seoul 平昌 ソウル、2018.1.20
- 国内、阿部公彦、「スピーキングテストでスピーキング力はあがるか」、「大学入学者選抜における英語試験のあり方をめぐって」、東京大学本郷キャンパス、2018.2.10
- 国際、阿部公彦、「Humanities in Asia in the 21st Century」(アジアにおける 21 世紀の人文学を考える)、東京大学駒場キャンパス 18 号館コラボレーションルーム 1、2018.6.1
- 国内、阿部公彦、「この英語騒動から見えてくること」、関西英語教育学会 2018 年度(第 23 回)研究大会、関西国際大学・尼崎キャンパス、2018.6.9
- 国内、阿部公彦、「小説家の英語——大江健三郎は何を受け取ったか」、中四国アメリカ文学会第 47 回大会、島根大学、2018.6.16
- 国内、阿部公彦、「近代小説の「のぞき」と「不機嫌」——ジェイン・オースティンの『高慢と偏見』を中心に」、日本オースティン協会第 12 回大会、大妻女子大学、2018.6.30
- 国際、Masahiko Abe、「Teacher Education and Professional Training」Panel Discussion with Dr. Rod Ellis, Dr. David Nunan, Dr. Yuji Nakamura & Dr. Masahiko Abe. Moderator: Dr. Hayo Reinders」、2018 Anaheim University TESOL Residential Session & MECTokyo, Anaheim University、2018.8.4
- 国内、阿部公彦、「現代作家アーカイブ 高橋睦郎さんに聞く」、2018.8.20
- 国際、Masahiko Abe、「セクション「伝統」(17 日):「日本語と声の文化」、セクション「心の連帯」(18 日):ディスカッション」、東アジア文学フォーラム、ソウル光化門教保ビル 23 階教保コンベンションホール、2018.10.17

- 国内、阿部公彦、「〈英詩はわからない〉が教えてくれること」、東京大学ホームカミングデイ 文学部企画「人文学の最前線」、東京大学文学部法文二号館一番大教室、2018.10.20
- 国内、阿部公彦、「『注意散漫』で読むイギリス小説——『ハワーズ・エンド』に「らくがき」するとわかること」、日本英文学会九州支部大会、九州女子大学、2018.10.21
- 国内、阿部公彦、「英語教育をダメにする「売り文句」ワースト3」、日本英文学会関東支部 秋季大会 シンポジウム、早稲田大学 36号館3階、2018.10.27
- 国際、阿部公彦、「シンポジウム等 15日(作家会議10:00-12:00)、16日(10:00-11:30)」、広州国際文学週、広州 ホテル広東 広州外語外貿大学、2018.12.14
- 国際、阿部公彦、「CEFRの福と災い」(シンポジウム3 「CEFRと入学試験をめぐって」、国際研究集会2019「CEFRの理念と現実」、京大大学人間環境学研究所 地下講義室吉田キャンパス、2019.3.5
- 国内、阿部公彦、「ディキンソンはどこまでまじめなのか」、日本エミリー・ディキンソン協会第34回大会シンポジウム「ホイットマンとディキンソン」、2019.6.15
- 国内、阿部公彦、「「らくがき式読書法」から「小説の文体」へ」(シンポジウム「文体とは何か?多角的に考える」、日本文体論学会第115回大会、大東文化大学1号館102教室、2019.6.23
- 国内、阿部公彦、「文学とポライトネス」(シンポジウム「近代・英語・ポライトネス—近代社会で(イン)ポライトに生きること—」、近代英語協会第36回大会、明治大学中野キャンパス311教室、2019.6.29

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

- 南京大学 千林キャンパス、「近代小説と「胃腸的想像力」」、2018.3
- 日比谷カレッジ・ワークショップ、「これなら読める『名作』!「らくがき式」読書のススメ」、2018.3
- 特別講演、成蹊大学、「なぜ私たちの英語は「失敗」するのか?」、2018.7
- セミナー、立教大学、「ブルーストを読破する@立教 第6回」、2018.8
- 特別講演、駿台予備学校、「英語学習に立ちはだかる「日本語の壁」——なぜ、もうちょいリスニングに時間をかけるべきなのか」、2018.9
- 特別講演、桐光学園、「講演英語の勉強、どこからはじめる?どこまでやる?」、2018.11
- 特別講演、神戸女学院、「《日本人は英語がしゃべれない》問題について、英文学的見地からいろいろ考えてみる」、2018.11
- Tokyo Humanities、「"Is Speaking a Skill?"」、2018.12
- 大妻女子大学、「「読解力」とは何か?」、2019.1

(2) 学会

- 国内、日本英文学会、理事、2018.4~2020.3
- 国内、日本英文学会関東支部、支部長、2018.4~2020.3
- 国内、日本アメリカ学会、編集委員(英文号)、2018.4~2020.3
- 国内、日本T・S・エリオット協会、委員、2018.4~2020.3
- 国内、ポエティカ、編集委員、2018.4~2020.3

1. 略歴

1979年 9月	国際基督教大学 教養学部 人文科学科 入学
1984年 3月	国際基督教大学 教養学部 人文科学科 卒業
1984年 4月	東京大学大学院 総合文化研究科 比較文学比較文化専攻 修士課程入学
1987年 3月	東京大学大学院 総合文化研究科 比較文学比較文化専攻 修士課程修了
1987年 4月	東京大学大学院 総合文化研究科 比較文学比較文化専攻 博士課程入学
1990年 3月	東京大学大学院 総合文化研究科 比較文学比較文化専攻 博士課程単位 取得満期退学
1990年 4月	東邦大学薬学部 専任講師
1992年 4月	中央大学法学部 専任講師
1993年 4月	中央大学法学部 助教授
1998年 4月	中央大学法学部 教授
2014年 4月	上智大学文学部英文学科 教授
2016年 3月	東京大学大学院 総合文化研究科 比較文学比較文化専攻博士号（学術）取得
2017年 4月	日本学術振興会学術システム研究センター専門研究員（～現在）
2019年 4月	東京大学大学院人文社会系研究科 教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

イギリス文学、比較文学

b 研究課題

イギリス文学、文化における「階級」の表象が研究の中心である。小説や演劇、詩、そして音楽や視覚芸術、映像作品、そしてアダプテーションも含む幅広いテキストにおける「階級」の概念とイメージ、ステレオタイプの考察を行っている。

c 概要と自己評価

2018年度から2019年度にかけては以前から研究の対象だった「文学作品」のアダプテーションを引き続き行うと共に、イギリスにおける「黒人」のイメージとその変遷という課題も扱った。いずれの研究も「階級」という視点を用いたものである。例えばジェイン・オースティンの小説においては、現代イギリスにおいても完全には理解されていない当時の「階級」という要素が、ハリウッド映画や人気テレビドラマへのアダプテーション作品においてどのように変換し、受容されるかを分析した。また、イギリスにおける「黒人」のイメージは、現在ではよくとりあげられている研究である。しかし本研究では18世紀の「反奴隷制運動」が、アッパー・クラスにあこがれるミドル・クラスにとりあげられ、表面的な「流行」となって、感傷的な詩や演劇作品を生み出したことを分析したことに独自性があると思われる。2019年度にはさらに、イギリス文学、文化における「アッパー・クラス」の表象の研究に着手し、「カントリー・ハウス観光」をテーマに小説、演劇と詩の考察を行った。これまであまり研究されていなかった「ロウワー・ミドル・クラス」の表象を引き続き行うと共に、イギリスにおける「他者」、「理想化されたアッパー・クラス」にも研究対象を広げている。

d 主要業績

(1) 著書

共著、新井潤美「ジェイン・オースティンのアダプテーション——成功の秘訣」、中央大学人文科学研究科編『英文学と映画』、中央大学出版部、2019.3

共著、新井潤美「コックニー」、「イギリスを知る会」監修『ヴィクトリア朝が教えてくれる英国の魅力—イギリスを知る10のキーワード』、ダイヤモンド社、2019.9

単著、新井潤美、『(英国紳士)の生態学—ことばから暮らしまで』、講談社、2020.1

(2) 論文

新井潤美、「イギリスにおける反奴隷制運動と文学」、『英文学と英語学』、第55号、1-23頁、2019.1

新井潤美、「変わりゆくヴィクトリア女王の「イメージ」」、『ヴィクトリア朝文化研究』、第17号、119-25頁、2019.11

新井潤美、「Janeitesの功罪——Jane Austen 受容についての考察」、『東京大学文学部次世代人文学開発センター研究紀要 文化交流研究』、第33号、65-70頁、2020.3

(3) 解説

新井潤美、「目からウロコの名作再読4——ジェイン・オースティン著『高慢と偏見』、『中央公論』、第133巻第4号、254-255頁、2019.4

新井潤美、『ピータールー』解説、映画『ピータールー』プレス用パンフレット、2019.5

新井潤美、映画『ピータールー解説』、映画『ピータールー——マンチェスターの悲劇』劇場用パンフレット、2019.8

新井潤美、「郊外の〈英国紳士〉たち」、『本』、44-45頁、2020.2

(4) 学会発表

国内、新井潤美、「ジェイン・オースティン映画の解釈と受容」、アメリカ学会、北九州市立大学、2018.6.3

国内、新井潤美、「プーター氏の悲哀—ヴィクトリア朝におけるロウワー・ミドル・クラスの表象」、日本ヴィクトリア朝文化研究学会、日本女子大学、2018.11.17

国内、新井潤美、「*‘Rather a Friend to the Abolition’*——ジェイン・オースティンの作品における「黒人」への言及」、日本ギャスケル協会第31回大会シンポジウム「イギリス小説における黒人の表象あるいは不在」、実践女子大学、2019.10.5

国内、新井潤美、「*The Stately Homes of England*—イギリスのカントリー・ハウスと文学」、早稲田大学英文学会・英語英文学会2019年度合同大会、早稲田大学、2019.11.30

(5) マスコミ

「カントリー・ハウスへようこそ!」、『日本経済新聞』、2019.7.15

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

セミナー、イギリスを知る会、「カントリーハウスの貴族と使用人の世界」、2018.7

非常勤講師、東京大学大学院総合文化研究科、「イギリス表象芸術論」、2018.9～2019.1

非常勤講師、上智大学、「*Special Topics in British Studies in English*」、2019.4～2019.7

朝日カルチャーセンター、「P.G. ウッドハウスの「ジーヴス」を読む——完璧な使用人?」、2019.5

非常勤講師、上智大学、「英文学特講・演習」、2019.9～2020.3

(2) 学会

国内、日本比較文学会、理事、2018.6～

国内、日本英文学会関東支部、理事、2019.4～

国内、日本比較文学会東京支部、幹事、2019.6～

(3) 行政

法務省、考査委員、2018.10～2021.10

(4) 学外組織

日本学術振興会学術システム研究センター専門研究員、2017.4～2021.3

准教授 諏訪部 浩一 SUWABE, Koichi

1. 略歴

1994年3月 上智大学文学部英文学科卒業
1997年3月 東京大学大学院人文社会系研究科欧米系文化研究専攻修士課程修了
2002年3月 東京大学大学院人文社会系研究科欧米系文化研究専攻博士課程単位取得退学
2004年4月 東京学芸大学教育学部講師
2004年6月 ニューヨーク州立大学バッファロー校大学院英文科博士課程修了
2006年4月 東京学芸大学教育学部助教授
2007年4月 東京学芸大学教育学部准教授
2007年10月 東京大学大学院総合文化研究科准教授
2010年4月 東京大学大学院人文社会系研究科准教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

アメリカ文学

b 研究課題

モダニズム文学を中心とするアメリカ小説研究

c 概要と自己評価

主たる研究対象は、ウィリアム・フォークナーを中心としたアメリカにおけるモダニズム期の小説である。個々の作品を、大戦間という時代的文脈と小説の発展という美学的問題とあわせて、包括的に考察し、理解することを目標としている。そうした目的のために、近年においては「純文学」だけではなく、「大衆文学」と見なされている作品をも研究対象としてきた。2018～19年度は、フォークナーへの関心を発展させる一方、カート・ヴォネガットなど、フォークナー以後の現代小説などを広く視野に収めた研究を継続的にこなした。

d 主要業績

(1) 著書

共著、高柳俊一・巽孝之監修、上智大学文学部英文学科同窓会編、『上智英文90年』、彩流社、2018.5
共著、花岡秀監修、藤平育子・中良子編、『フォークナー文学の水脈』、彩流社、2018.9
単著、諏訪部浩一、『カート・ヴォネガット—トラウマの詩学』、三修社、2019.6
編著、諏訪部浩一+日本ウィリアム・フォークナー協会編、『フォークナーと日本文学』、松柏社、2019.10
共著、杉野健太郎責任編集、『アメリカ文学と映画』、三修社、2019.10

(2) 論文

諏訪部浩一、「回顧と展望—「フォークナーと日本文学」をめぐって」、『フォークナー』、第20号、pp.85-96、2018.5
Koichi Suwabe、「Teaching Faulkner」、『Teaching Faulkner』、36 (Fall 2018)、2019.3
諏訪部浩一、「「フォークナリアン」としてのトニ・モリスン」、『ユリイカ』、第51巻第17号、pp.137-45、2019.10

(3) 書評

Koichi Fujino、『Studying and Teaching W. C. Faulkner, William Faulkner, and Digital Literacy: Personal Democracy in Social Combination』、『アメリカ文学研究』、第55号、pp.121-22、2019.3
F・スコット・フィッツジェラルド、『美しく呪われた人々たち』、『すばる』、第41巻第8号、pp.346-47、2019.7
本田康典、『北回帰線』物語—パリのヘンリー・ミラーとその仲間たち』、『アメリカ文学研究』、第56号、pp.101-02、2020.3

(4) 学会発表

国内、諏訪部浩一、「消えゆく南部—フォークナーのスノーパス三部作を中心に」、アメリカ学会第53回年次大会、法政大学市ヶ谷キャンパス、2019.6.2
国内、諏訪部浩一、「ウィリアム・フォークナーとファム・ファタールの詩学」、中・四国アメリカ文学学会第48回大会、香川大学幸町キャンパス、2019.6.8
国内、諏訪部浩一、「戦争小説」としての『スローターハウス5』、日本アメリカ文学学会東北支部12月例会、東北大学片平キャンパス、2019.12.7

(5) 啓蒙

諏訪部浩一、「「反平成」的なものを求めて」、『文藝』、第58巻第2号、pp.240-41、2019.5
諏訪部浩一、「ヴォネガットの戦争体験を議論の核として」、『週刊読書人』、2019.9.20号、第8面
諏訪部浩一、「阿部と重になれなかった男」、『文學界』、第73巻第10号、pp.68-71、2019.10
諏訪部浩一、「「アメリカ文学との邂逅」をめぐって」、『図書新聞』、2019.11.23号、第3面
諏訪部浩一、「失われた三〇年—なぜアメリカ文学研究者は現代文学を読まなくなったのか」、『群像』、第75巻第3号、pp.272-83、2020.3

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

非常勤講師、学習院大学、「英語文化コース演習D」、2018.4～2020.3
非常勤講師、早稲田大学、「英米文学特殊研究3」、2018.4～2018.9、2019.4～2019.9
非常勤講師、西南学院大学、「英米文学・文化論特殊講義」、2018.9

(2) 学会

国内、日本英文学会、編集委員、2018.4～2020.3

国内、日本アメリカ文学会、代議員、2018.4～2020.3、編集委員、2018.4～2020.3

国内、日本アメリカ文学会東京支部、副支部長、2018.4～2020.3、評議員、2018.4～2020.3、支部会報編集委員、2018.4～2020.3

国内、日本ウィリアム・フォークナー協会、評議員、2018.4～2020.3、編集委員、2018.4～2020.3

21 ドイツ語ドイツ文学

教授 大宮 勘一郎 OHMIYA, Kanichiro

1. 略歴

- 1984年3月 東京大学教養学部教養学科第2・ドイツの文化と社会卒業
- 1986年3月 東京大学大学院総合文化研究科地域文化研究専攻修士課程修了
- 1986年 ロータリー財団奨学生としてドイツ連邦共和国ミュンヘン大学留学（～1988年）
- 1991年4月 共立女子大学国際文化学部専任講師
- 1992年 ドイツ学術交流会（DAAD）奨学金によりドイツ連邦共和国マンハイム大学留学（～1993年）
- 1996年4月 共立女子大学国際文化学部助教授
- 2001年 アレクサンダー・フォン・フンボルト財団研究奨学金によりドイツ連邦共和国ベルリン自由大学研究滞在（～2002年）
- 2002年4月 慶應義塾大学文学部助教授
- 2005年4月 慶應義塾大学文学部教授
- 2007年4月 慶應義塾大学大学院文学研究科委員兼任
- 2011年4月 東京大学文学部・大学院人文社会系研究科教授（現職）

2. 主な研究活動

a 専門分野

ドイツ近現代文学

b 研究課題

ヴァルター・ベンヤミン研究、ハインリッヒ・フォン・クライスト研究

c 概要と自己評価

ベンヤミン研究は、同時代の作家フーゴ・フォン・ホーフマンスタールやエルンスト・ユンガーらの、いわゆる保守革命運動との関係を考察する作業を進めている。科研費による研究プロジェクトに関しては、「情動と技術の人間学的考察」（2013～2015年度）、「抗争」言説の再検討（ドイツ文学の場合）（2016～18年度）に引き続き、「ドイツ文芸における「古典」概念の再検討」（2019年度～）を進め、内外の研究者との議論を行っており、「国語」の規範性とその解体に関する論文が印刷中である。クライスト研究としては、編著『ハインリッヒ・フォン・クライスト―「政治的なるもの」をめぐる文学』（2020.3）を上梓し、導入、論文と重要論考の翻訳を掲載した。「双務的秩序」の喪失と回復の試みとしてドイツ文学を読み直す試みは継続中である。ドイツ・アカデミズムにおける「コミュニケーションの分断」状況、「ハビトゥス」論の歴史的位相論、および、いわゆる「経験美学」への批判的応答という題目で学会発表を三度行なっている。

d 主要業績

(1) 著書

大宮勘一郎（編著）、『ハインリッヒ・フォン・クライスト―「政治的なるもの」をめぐる文学』、インスクリプト社、2020.3

(2) 論文

大宮勘一郎、「ヘッセのアメリカ／アメリカのヘッセ」、『詩・言語』東京大学大学院人文社会系研究科ドイツ語ドイツ文学研究会編第85号、1-13頁、2018.11

OHMIYA, Kanichiro, 『Auf der Brücke Wohnen-Über Heideggers Bauen und Wohnen nachdenken』、『Wohnen und Unterwegssein Interdisziplinäre Perspektiven auf west-östliche Raumfigurationen』、139-156頁、2019.1

大宮勘一郎、「ドイツ再統一と政治的言説の変容―国民の「不一致的統合」とある学問的スキャンダル」、『断絶のコミュニケーション』、93-122頁、2019.3

大宮勘一郎、「ペンテジレーア ―「政治的なるもの」と愛』、『ハインリッヒ・フォン・クライスト ―「政治的なるもの」をめぐる文学』、79-111頁、2020.3

(3) 学会発表

国内、大宮勘一郎、「ドイツ再統一と政治的言説の変容—国民の「不一致的統合」とある学問的スキャンダル」、日本独文学会春季研究発表会、早稲田大学、2018.5.27

国際、OMIYA, Kanichiro、「Die Sprache der Toten. Die historische Dimension vom „Habitat“-Begriff und die „Pathosformel“ bei Aby Warburg」、日本独文学会第 61 回文化ゼミナール、リゾートホテル蓼科、2019.3.21

国際、OMIYA, Kanichiro、「Einige kritische Anmerkungen zur empirischen Ästhetik」、Humboldt-Kolleg, Tokio 2019: Neuronale Geisteswissenschaften und empirische Ästhetik、東京大学駒場キャンパス、2019.5.19

(4) 啓蒙

大宮勘一郎、「ゲーテ『若きヴェルターへの悩み』を読む」、『ヨーロッパ文学の読み方—近代篇』、77-91 頁、2019.3

大宮勘一郎、「トーマス・マン『トニーオ・クレーガー』を読む」、『ヨーロッパ文学の読み方—近代篇』、92-109 頁、2019.3

大宮勘一郎、「慣習としての生命／出来事としての生命—生命・生活・生存—」、『組織としての生命—生命の教養学 15』、慶應義塾大学出版会、2019

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

非常勤講師、慶應義塾大学、「生命の教養学」、2018.6

招待講師、ゲーテ・インスティトゥート、「What ist Benjamin's "Passagen-Werk"?」、2019.5

教授 宮田 眞治 MIYATA, Shinji

1. 略歴

1987年3月 京都大学文学部卒業（文学士）
1989年3月 京都大学大学院文学研究科修士課程（ドイツ語学・ドイツ文学専攻）修了（文学修士）
1990年3月 京都大学大学院文学研究科博士後期課程（ドイツ語学・ドイツ文学専攻）退学
1990年4月 神戸大学教養部助手
1991年10月 神戸大学教養部講師
1992年10月 神戸大学文学部講師
2000年10月 神戸大学文学部助教授
2000年4月 文部省在外研究員としてドイツベルリン自由大学に留学（2001年2月まで）
2007年4月 東京大学大学院人文社会系研究科准教授
2018年4月 東京大学大学院人文社会系研究科教授（現職）

2. 主な研究活動

a 専門分野

近代ドイツ語圏文学

b 研究課題

18世紀の文学・思想が研究の中心にある。もともと初期ロマン主義研究から出発し、ノヴァーリスを中心に仕事を進めてきた。とくに超越論哲学・自然科学との関係において初期ロマン主義が展開した独自の表現技法と、その背景にある言語・芸術観が興味のある中心にあった。また、その問題意識を継承する20世紀の文学者・思想家の系譜も研究の対象となった。現在は、啓蒙期の文学・思想を、ロマン主義の前史という観点に限定されることなく研究している。また、18世紀以後、ドイツ語圏にあって、自然科学者であり、あるいは自然科学研究から出発しつつ、文学者であった人々—ハーラー、リヒテンベルク、ノヴァーリス、アルニムから現代にいたるまで—の営みを〈実験者の文学〉という観点から跡付けるという作業を進めている。

c 概要と自己評価

G.Ch.リヒテンベルク（1742-1799）が30年以上にわたって書き残したノート『雑記帳』*Sudelbücher* 日本語版の編集・翻訳作業が一段落し、刊行にいたった。2000ページ以上の原著をテーマ別に編集し、詳細な注と解説および年譜を付したもので、この規模での刊行は日本初である。

ドイツロマン主義・啓蒙主義をさまざまなコンテクストにおいて検討するという年来の研究方針は継続中であり、今期は、ドイツロマン派の作家E.T.A.ホフマンとノヴァーリスについてそれぞれ研究発表と論文執筆を行った。

2019年6月より、日本独文学会の会長に就任し、アジアゲルマニスト会議2019（2019年8月26日から29日、北海学園大学）の最終日には会長あいさつを行った。

d 主要業績

(1) 著書

共著、三浦信孝、塚本昌則（編）、『ヴァレリーにおける詩と芸術』、水声社、2018.8

共著、前田佳一（編）、『固有名詞の詩学』、法政大学出版局、2019.2

(2) 翻訳

個人訳（編訳）、Georg Christoph Lichtenberg: "Sudelbücher"、宮田眞治、『リヒテンベルクの雑記帳』、作品社、2018.6

(3) 学会発表

国内、宮田眞治、「ホフマンとディドロ」、シンポジウム「名前の詩学—文学作品における固有名詞と否定性の諸相」、東京大学、2018.2.11

国内、宮田眞治、「〈メディウム〉としてのガイスト——ノヴァーリスの〈ガイスト〉をめぐる」、ワークショップ「近代ドイツにおけるガイスト概念の諸相」（科研費基盤研究（C）17K02255「プネウマからガイストへ——古代ギリシアからゲーテにいたる人間三元論の系譜」（研究代表者：茶谷直人）による）、神戸大学、2019.12.22

3. 主な社会活動

(1) 学会

国内、日本独文学会、会長、2019.6～

国内、日本シェリング協会、理事、2008～

准教授 **山本 潤** YAMAMOTO, Jun

1. 略歴

1995年4月	東京大学文科Ⅲ類入学
1999年3月	東京大学文学部言語文化学科ドイツ語ドイツ文学専修課程卒業
1999年4月	東京大学大学院人文社会系研究科欧米系文化研究専攻ドイツ語ドイツ文学専門分野修士課程入学
2001年3月	東京大学大学院人文社会系研究科欧米系文化研究専攻ドイツ語ドイツ文学専門分野修士課程修了
2001年4月	東京大学大学院人文社会系研究科欧米系文化研究専攻ドイツ語ドイツ文学専門分野博士課程進学
2003年10月	ドイツ学術交流会（DAAD）奨学生としてルートヴィヒ・マクシミリアン大学（ドイツ・ミュンヘン）に留学（～2006年3月）
2009年3月	東京大学大学院人文社会系研究科欧米系文化研究専攻ドイツ語ドイツ文学専門分野博士課程単位取得満期退学
2010年4月	博士（文学）取得（東京大学大学院人文社会系研究科）
2011年4月	首都大学東京都市教養学部 准教授
2018年4月	東京大学大学院人文社会系研究科 准教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

ドイツ中世文学

b 研究課題

口伝の英雄詩を素材とし、ドイツ語圏俗語文芸の初の興隆期とされる12世紀末から13世紀前半にかけて詩作された叙事文学を主たる研究対象としている。声の文化の領域における記憶伝承を担っていた英雄詩の英雄叙事詩化による記憶の変容の問題を出発点に、匿名性を基本とする英雄詩／英雄叙事詩の語り手の問題や、英雄叙事詩の歴史性の問題に取り組んできた。現在は対象を宮廷叙事詩に拡大し、中世俗語文芸における作者性や虚構性といったテーマを扱っている。また、中世文芸のアクチュアリティの問題も考察の射程に入れ、中世後期における英雄叙事詩の変容をはじめ、近代以降の中世文芸受容史も研究対象としている。目下、近代以降の文学史記述における中世文芸の立ち位置の変遷を検証している。

c 概要と自己評価

2018年度末に「作者性と作者コンセプト」という主題のもと、ドイツからゲストを招聘して国際コロキウムを主催した。同コロキウムでは中世叙事文学における語りと真実性および作者性についての報告を行い、2016年度から採択されている科研費(若手B)「作者性の諸相—中世ドイツ英雄叙事詩における歴史性と虚構性の問題」の成果を公開したほか、国内外の研究者と時代横断的な研究交流を行うことができた意義は大きいものと考えている。また、テキストの作者と語り手、そしてその名前に関する研究成果を共著および論文という形で2018年度に公開した。2019年度は、日本独文学会春季研究発表会において、コロキウム「フラグメントの諸相—文化的実践としての」にパネリストとして参加し、中世英雄叙事詩の持つ歴史性についての報告を行った。これは中世盛期から後期にかけて、英雄叙事詩の前提とする歴史構造が変化していることを指摘したものであり、英雄叙事詩の持つ歴史性の一端を明らかにしたものである。

d 主要業績

(1) 著書

共著、前田佳一(編著)、『固有名の詩学』、法政大学出版局、2019.2

(2) 論文

山本潤、「中世ドイツ語文芸における作者性と匿名性」、『文化交流研究』、第32号、95-104頁、2019.3

(3) 学会発表

国際、山本潤、「Die Wahrheit des Erzählten. Zu Formen der Autorität in der mittelhochdeutschen Epik」、Internationales Kolloquium „Autorschaft und Autorkonzept“、東京大学、2019.3.16

国内、山本潤、「歴史」の断片—ドイツ英雄叙事詩のフラグメント性、2019年度日本独文学会春季研究発表会シンポジウム「フラグメントの諸相—文化的実践としての」、学習院大学、2019.6.9

(4) 会議主催(チェア他)

国際、Internationales Kolloquium „Autorschaft und Autorkonzept“、主催、東京大学、2019.3.15～2019.3.16

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

非常勤講師、首都大学東京／東京都立大学、「ドイツ語学特殊講義」、2018.4～2020.3

非常勤講師、お茶の水女子大学、「ことばと世界6 海外の文学」、2018.4～2018.9、「ヨーロッパ言語文化論」、2019.10～

(2) 学会

国内、日本独文学会、企画理事、2019.6～

国内、西洋中世学会、常任委員、2019.12～

(3) 学外組織(学協会、省庁を除く)委員・役員

DAAD 友の会、理事、2019.9～

22 スラヴ語スラヴ文学

教授 三谷 恵子 MITANI, Keiko

1. 略歴

1981年3月	東京大学文学部露語露文学専攻卒業
1983年3月	東京大学大学院人文科学研究科修士修了（露語露文学）
1983年4月	東京大学人文科学研究科博士課程進学
1986年10月	ザグレブ大学哲学部留学（～1988年9月）
1989年3月	東京大学文学部人文科学研究科博士課程修了
1990年4月	東京大学文学部助手（ロシア語ロシア文学研究室）
1993年6月	筑波大学文芸言語学系講師
1997年7月	同助教授
1999年4月	京都大学人間・環境学研究科助教授
2005年4月	同教授
2013年4月	東京大学人文社会系大学院教授（スラヴ語スラヴ文学科）

2. 主な研究活動

a 専門分野

スラヴ語学、スラヴ語歴史文法、中世スラヴ文献学；旧ユーゴ圏の言語文化；スラヴ語圏の少数言語；言語接触と言語維持。

b 研究課題

以下の事柄を研究課題としている。すなわち、共通スラヴ語から現代のスラヴ諸言語にいたる変化のプロセスを、文献学的に解明にすること。スラヴ語間の類似性と共通性、また個別のスラヴ語における言語特徴とくに形態統語論的特徴について実証的に分析すること。旧ユーゴ圏における言語と文化の諸相、とりわけ言語と社会や歴史の関わりに注目し社会言語学的視点をとり入れた言語研究を行うこと。またスラヴ文献学、スラヴ語史、中世スラヴ文化研究の融合的研究としての中世スラヴ比較文献研究を行うこと。

c 概要と自己評価

スラヴ語史、スラヴ語文法論とくにロシア語およびボスニア・クロアチア・セルビア語の通時的および共時的研究を進めている。また中世文献を言語学、翻訳理論、比較テキスト研究などを融合された新たなアプローチで分析する試みに着手し、この成果は海外の国際学会、国内で自ら開催した国際シンポジウムで発表している。さらに法学・法制史の研究者と共同研究を行い、近代スラヴ地域と近代日本における法と言語、法における用語の問題の比較研究にも着手している。これらの成果を論文として刊行し、またスラヴ語学概論やボスニア・クロアチア・セルビア語の授業に反映させている。

d 主要業績

(1) 論文

Keiko Mitani, The Dream of King Jehoash: A Textual Analysis, *Scrinium*. 2018, No.4. pp.298-317

三谷恵子、「環バルト海地域の言語接触と言語変化」、『スラヴ学論集』、2018. Vol. 21、55-79 頁

Keiko Mitani, The Twelve Dreams of King Shahaisha. Comparison of early Russian copies and the South Slavonic tradition, *Comparative and Contrastive Studies in Slavic Languages and Literatures. Japanese Contributions to the XVI International Congress of Slavists Belgrade, August 20-27, 2018*, 2018, pp.1-29

三谷恵子、「『聖使徒ペテロとアンデレの異教徒の町への伝道物語』のスラヴ写本比較考察」、『SLAVISTIKA』XXXIII 2017/2018、125-144 頁

Кэйко Митани. Текстологический и лингвистический анализ списков Деяний апостолов Петра и Андрея в стране варваров// Труды Института Русского Языка им. В. В. Виноградова. Выпуск 16. Лингвистическое источниковедение и история русского языка. (2016-2017). 2018. С.158-171.

三谷恵子、「ヴァルタザル・ボギシッチと法・慣習・言語」、『東京大学草創期とその周辺』2014-2018 年度多分野交流演習「東京大学草創期の授業再現」報告集、2019.3、206-218 頁

三谷恵子、「スカンデルバグ物語 伝説とヴァリエーション」、『れにくさ 沼野充義教授退職記念号』、2019年(2020.3)、10-I、457-469

三谷恵子、「スラヴ世界における Acta Thomae Minora (『小トマス行伝』) の伝統とグリゴローヴィチ・コレクション No.22」、『ロシア語研究』 29号、2019、47-167頁

Keiko Mitani, Intertextuality in Medieval Slavonic Literature: Apocalypse of Pseudo-Methodius and the Legend of the Twelve Fridays, Scripta & e-Scripta, 2019/ No.9, pp.145-164

(2) 発表・講演

a. 学会・研究会発表

Keiko Mitani, "Importance of Intertextuality in Medieval Slavonic Literature: *Apocalypse of Pseudo-Methodius in the Legend of Twelve Fridays* as a Case," International Conference of Society of Biblical Literature /European Association of Biblical Studies. Helsinki 2018. 31.07. Helsinki University. (ヘルシンキ大学、2018.7.31)

Keiko Mitani, "Dvanaest snova Šahinšahi-Rani ruski prijepisi u poredbi sa južnoslavenskom tradicijom—,"XVI. Međunarodni kongres slavista. Beograd. 21. kolovoza 21. 2018. (ベオグラード大学、2018.8.21)

Keiko Mitani, "Legal Language Questions in the History of Serbian, Croatian, and Montenegrin: The Nineteenth-century Situation Viewed from the Perspective of Forensic Linguistics", International Symposium "Languages rising above Empires, Blocks and Unions, 1918-2018." 2018.12.14. Sapporo. (北海道大学スラブユーラシア研究センター、2018.12.14)

Keiko Mitani, "Lexical and Grammatical Features of the "Apocryphal Acts of Thomas in India" in MS No.1789/700 of the Dragomirna Monastery (Moldavia)," The 10th East Asian Conference on Slavic Eurasian Studies, 6/30/2019, University of Tokyo, Hongo, JAPAN (東京大学、2019.6.30)

Keiko Mitani, "The Slavonic Tradition of the "Apocryphal Acts of Thomas in India: How many Translations and How did they appear?" The Society of Biblical Literature, 2019 International meeting, The Pontifical Gregorian University, Rome. July 3, 2019. (ローマ教皇庁立グレゴリアン大学、2019.7.3)

Keiko Mitani, "The Slavonic Version of the Testament of Job: Language variability and textual attributes," 12th International Congress of South-East European Studies, Bucharest 2019, 01-06, 2019, Sep. 6th. (ブカレスト大学、2019.9.6)

三谷恵子、「グラゴル派聖務日課書の中の『コンスタンティノス一代記』、パネル発表『コンスタンティノス一代記』再訪—コンスタンティノス=キュリロス没後 1150 年によせて—」、日本ロシア文学会第 69 会大会 (早稲田大学)、2019.10.27

Keiko Mitani, "Legal Language and Language Standardization: V. Bogišić and the nineteenth-century South Slavic regions," International Symposium "Comparative Studies of Civil Law between Modern South Slavic Regions and Japan: Structure, Origin and Language," Podgorica, Nov.18. 2019. (モンテネグロ学術アカデミー、2019.11.18)

b. 講演

三谷恵子、「ユーゴスラヴィアとポストユーゴスラヴィアの文学—多文化空間の語り部たち」、北海道大学スラブユーラシア研究センター2019年公開講座、講演、2019.5.24

Keiko Mitai, "Valtazar Bogišić, Japan, and 19th century South Slavic regions" University of Ljubljana, Faculty of Arts, Ljubljana Dec. 10. 2019 (Erasmus plus program) (リュブリアナ大学、2019.12.10)

Keiko Mitai, "Slavic Studies in Japan" University of Ljubljana, Faculty of Arts, Ljubljana Dec. 11. 2019. 2019.12.11 Ljubljana, Filozofski fakultet U (Erasmus plus program) (リュブリアナ大学、2019.12.11)

(3) 共同研究

平成 31 (2019) 年度 北海道大学スラブ・ユーラシア研センター、平成 31 年度「スラヴ・ユーラシア地域を中心とした総合的研究」に関する「プロジェクト型」の共同研究、『近代南スラヴ地域の法形成と法言語—セルビア民法典とモンテネグロ一般財産法の比較研究』、研究代表者

Comparative Studies of Civil Law between Modern South Slavic Regions and Japan: Structure, Origin and Language Comparative Studies of Civil Law between Modern South Slavic Regions and Japan: Structure, Origin and Language. モンテネグロ学術アカデミーとの共同研究、2019年度

3. 主な社会活動

(1) 学会

国内

ロシア東欧学会、理事、2015.12~2018.10

日本ロシア文学会会長、2017.10~ (2021 全国大会まで)

日本スラヴ学研究会企画編集委員長、2019.6～2021.6

(2) 学術誌国際編集委員

Rasprave, Institute of Croatian Language (Zagreb), International board (2018.4～2020.4)

Slovo, Old Slavonic Institute (Zagreb), International advisory committee (2018.4～2020.3)

(3) その他

早稲田大学文学学術院、非常勤講師、2018.4～2020.3

北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター共同研究員、2018.4～2020.3

教授 **沼野 充義** NUMANO, Mitsuyoshi

23 現代文芸論 参照

准教授 **楯岡 求美** TATEOKA, Kumi

1. 略歴

- 1987年4月 東京大学教養学部文科Ⅲ類入学
- 1990年10月 第二回ソ連給費留学生としてロシア国立レニングラード大学留学（～1992年9月）
- 1993年3月 東京大学教養学部教養学科第二地域文化学科（ロシアの文化と社会）卒業
- 1996年3月 東京大学大学院人文社会系研究科（スラヴ語スラヴ文学）修士課程修了
- 1996年4月 東京大学大学院人文社会系研究科（スラヴ語スラヴ文学）博士課程進学
- 1999年9月 東京大学大学院人文社会系研究科（スラヴ語スラヴ文学）博士課程単位取得退学
- 1999年10月 北海道大学スラブ研究センター・COE 講師
- 2000年4月 神戸大学国際文化学部・講師
- 2001年4月 神戸大学国際文化学部・助教授
- 2001年8月 ロシア国立人文大学人文歴史学部（モスクワ）にて研修
（文部省派遣若手在外研修 ～2002年4月）
- 2003年1月 学位・博士（文学）取得
- 2007年4月 神戸大学大学院国際文化学研究科・准教授
- 2010年8月 イギリス・ケンブリッジ大学ウルフソン・コレッジおよびロシア国立人文大学人文歴史学部にて
研修（神戸大学若手教員長期海外派遣プログラム ～2011年4月）
- 2016年4月 東京大学大学院人文社会系研究科（スラヴ語スラヴ文学）准教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

ロシア・ソ連の文学、ロシア・ソ連文化論、ロシア・ソ連演劇史。

b 研究課題

主としてロシア語による文学・演劇・映画を素材として、芸術表現の特質と可能性、時代や社会による価値体系の変容や人間関係の諸相を明らかにすることを目的とする。

c 概要と自己評価

ロシア・ソ連では、文学と共に演劇・映画がメディアとしても重要な社会的機能を担っている。これらのジャンルの創作が歴史的および現在の社会においてどのように受容されているのかを、笑い話や起源などの民衆文化も含め、現地調査と文献調査を平行して研究を行っている。近年の研究関心は翻案研究とロシア語をドミナントとするソ連文化形成との二つの領域にわたる。

ポストモダン以降の文化潮流においては、狭義の意味での作品のオリジナリティを論じることは難しくなっている。個別創作者の独創性や表現力がどのように評価されるのかを、文学と演劇・映画といった異なるメディアによ

る翻案作品を比較検証する。感情など視覚化言語化の難しいものが、メディアの変更にともない、どのようなメカニズムで情報が付与され/欠落する者に注目することで、演劇や文学それぞれのジャンル固有の表現特性の有無について考察を行っている。

さらに、ロシア連邦外の旧ソ連圏におけるロシア語文化の形成プロセスの再検討とポストソ連期における継承と離反の現況についての研究を進めている。特にコーカサス地域出身の創作者の活動に注目し、従来は画一的に中心から周縁へと一方的に伝達されたと考えられてきたソ連文化の多様性について再検討することを目指し、現地調査および文献調査をベースとした研究を行っている。

これらの成果は国内外の研究会、シンポジウムの企画し、参加することで国際的に専門の研究者間での交流を図り、論文及び共著書等において刊行している。現場で活動する創作者とも研究成果の共有をはかるために上映や講演の企画を実施し、学生にも授業等の場において成果を還元している。

d 主要業績

(1) 共著・論文等

a. 編共著

沼野充義・望月哲男・池田嘉郎（編集代表）・楯岡求美・井上まどか・金山浩司・熊野谷葉子・鴻野わか菜・坂庭淳史・乗松享平（編集委員）、『ロシア文化事典』、丸善出版、2019、全886頁、ISBN978-4-621-30413-6（編集担当：「映画」の章、「舞台芸術」の章、執筆担当項目：「映画」章扉コラム、「舞台芸術」章扉コラム、「ドラマ劇場」、「劇作家オストロフスキー」「芸術家たちの同盟組織」（以上、単著）、「娯楽映画」（ヴァレリー・グレチュコと共著）

b. 共著

定延利之編著『限界芸術「面白い話」による音声言語・オラリティの研究』、ひつじ書房、2018.3、楯岡求美「ロシアの笑い話におけるエスニック・ステレオタイプ」（pp.406-437）担当

c. 論文

楯岡求美、「歴史パノラマとしてのマヤコフスキー《ミステリヤ・ブッフ》」、『SLAVISTIKA』、33-34、19-34頁、2019.3

d. 評論等

楯岡求美、書評「分在する私」中村唯史、大平陽一編著『自叙の迷宮：近代ロシア文化における自伝的言説』、水声社、2018『図書新聞』3244号、2018.6

楯岡求美、劇評「誰でもアリノママに自分らしく生きたい」（演劇集団円・岸田今日子記念 円・こどもステージNo.37『はだかナオウさま』2018.12.21-27）、『シアターカイ月刊批評通信102号』、2019.3、p.7

楯岡求美、劇評「豊かな感性を育てる学校教育の基盤は、文学と演劇（サンクトペテルブルグ市立中等教育学校ヴェンデルキンド演劇部来日公演）」、『シアターα（カイ）月刊批評通信106号』、2019.7、pp.6-7

(2) 発表・講演

a. 学会・研究会発表

Kumi TATEOKA, "Georges Pitoeff (Геворг Пигоян) and Modernism in Theatre," International Conference "The Dynamics of Cultural Processes between Center and Periphery", Ivane Javakishvili Tbilisi State University, 6-7 September 2019.

Kumi TATEOKA, "Acceptance and influence of Soviet movies in postwar Japan", The 10th East Asian Conference on Slavic Eurasian Studies, June 29—30, 2019, at The University of Tokyo.

Kumi Tateoka, Образ персонажа из отдаленной по духу культуры в пьесе Евгения Гришковца "Как я съел собаку" (2002) (エヴゲニー・グリシュコヴェツの戯曲『私はどうして犬を食べたか』における文化的異質性と登場人物の造形), Caucasus: Cross-Cultural Cross-Roads, Russia-Armenia University. 4-5 September 2019.

Kumi Tateoka, Cultural Studies: Emic-Etic Correlation in Research and Teaching, 9-10 September 2018, Tbilisi State University. Round-table discussion "Multiculturalism and the Soviet Regime", Cultural Studies: Emic-Etic Correlation in Research and Teaching, 9-10 September 2018, Tbilisi State University.

b. 講演等

楯岡求美、劇団地点（劇場実験）「秋元松代研究～台詞の音楽性と新たな『語り』」（2018年度共同研究プロジェクト公募研究Ⅱ）、京都芸術劇場 studio21（京都造形芸術大学）、2019.3.9

(3) 共同研究

科学研究費基盤B（18H00655）「ロシアとコーカサス諸地域の文化接触：受容と変容と離反のダイナミズム」（2018-2021）研究代表

科学研究費基盤B（16H05657）「オーラルヒストリーによる旧ソ連ロシア語系住民の口頭言語と対ソ・対露認識の研究」（研究代表：柳田賢二・東北大学教授、2016-2019）：分担者

国際共同研究加速基金（国際共同研究強化（B））「多言語多文化芸術運動としてのトビリシ・アヴァンギャルドの歴史的資料調査と考察」（研究代表：増本浩子・神戸大学教授、2019-21）：分担者

3. 主な社会活動

(1) 学会

日本ロシア文学会、理事、2016.10～2018.10、国際交流委員長、2016.10～現在

23 現代文芸論

教授 沼野 充義 NUMANO, Mitsuyoshi

1. 略歴

1977年3月	東京大学教養学部教養学科学士
1979年3月	東京大学人文科学研究科（露語露文学専攻修士課程）修士
1981年9月	ハーヴァード大学 Harvard University フルブライト全額給費奨学生として留学（スラヴ語スラヴ文学専攻博士課程）（～1985年7月）
1984年6月	ハーヴァード大学修士
1985年3月	東京大学人文科学研究科（露語露文学専攻博士課程）単位取得満期退学
1984年2月	ハーヴァード大学、ティーチング・アシスタント（～1985年6月）
1985年8月	東京大学教養学部、専任講師（ロシア語教室・教養学科ロシア分科）（～1989年1月）
1987年10月	ワルシャワ大学東洋学研究所、客員講師（日本語日本文学）（～1988年9月）
1989年1月	東京大学教養学部、助教授（ロシア語教室・教養学科表象文化論）（～1994年3月）
1994年4月	東京大学文学部、助教授（スラヴ語スラヴ文学）（～2004年3月）
2000年5月	ロシア国立人文大学（モスクワ）、客員研究員（国際交流基金フェロー）（～同年11月）
2002年10月	モスクワ大学アジア・アフリカ研究所、客員教授（～同年11月）
2004年4月	東京大学大学院人文社会系研究科・文学部教授
2016年7月	ハーバード大学世界文学研究所（Institute for World Literature）ハーバード大学夏期集中セッションセミナーリーダー（客員教授）
2020年3月	定年退職

2. 主な研究活動

a 専門分野

近現代ロシアおよびポーランド文学、現代日本文学を視野に入れた世界文学論、越境・亡命文学

b 研究課題

- (1) ロシア・東欧から日本までを視野に入れた形での新たな世界文学論へのアプローチ
- (2) ユーラシア研究という新たな枠組みの中でのロシア東欧文学の位置づけ
- (3) ロシア近代小説の研究と翻訳（特にチェーホフ、ナボコフ）
- (4) ポーランドのSF作家スタニスワフ・レムの研究および著作の翻訳

（概要）興味と活動は近・現代文学全般にわたり、現代世界文学への比較文学的アプローチや現代日本文学の批評・時評も行なっているが、本来の専門領域はロシア文学およびポーランド文学（主として19～20世紀）である。1994年文学部に赴任して以来、スラヴ語スラヴ文学専修課程と並行して、西洋近代語近代文学専修課程の教育・運営に一貫して携わり、2007年4月に西洋近代語近代文学専修課程を改組した形で現代文芸論専修課程が創設されると、こちらに研究・教育の軸を移しながらも、スラヴ語スラヴ文学の専修課程の研究・教育活動にも引き続き関わってきた。

スラヴ文学の研究と並行して、「世界文学」の視点からできるだけ幅広く現代文学を（日本文学の特殊性と普遍性も視野に入れて）とらえるように努めている。一国一言語の枠内に収まらないような、亡命・越境・二言語併用などの問題に特に関心がある。

海外（特にロシア東欧）と日本の文化・文学交流にも関心があり、国際交流基金や文化庁の様々な企画に協力し、ロシアや東欧の作家との交流や、日本文学の海外紹介といった事業にも積極的に参加している。

2018年7月にはハーバード大学世界文学研究所（Institute for World Literature）の夏期集中セッションを東京大学本郷キャンパスで行い、ホストとしてその実施・運営に携わった。4週間にわたって世界の若手文学研究者たち約130名と講師陣10数名が集まり、猛暑の中、教室・設備が必ずしも理想的な条件ではなかったにもかかわらず、充実した集中セミナーを成功裏に行うことができた。

さらに2017年6月29日・30日には、第10回スラヴ研究東アジア学会大会を東京大学本郷キャンパスで開催し、副組織委員長として大会運営に携わった。中国・韓国・日本を始めとし、ロシア、中央アジア、欧米からの参加者も含め、200人近い研究者を集めて活発な報告・討論が行われ、有意義な大会となった。

(自己評価) 研究上の関心と活動範囲が年々広がっていき、またスラヴ語スラヴ文学と現代文芸論の両方の分野にまたがって研究・教育を行っているため、広い視野からのダイナミックな研究・教育活動を目指してはいるものの、研究のためのエネルギーと時間が分散して総花的になりやすく、それぞれのテーマについてきちんとしたまとめができないまま放置してあるものも多いが、これまで書いてきた様々な論文を集成した論集『世界文学論』および過去に出版した『亡命文学論』『ユートピア文学論』の大幅な増補改訂版を出版するための準備作業を進め、近い将来出版できる見通しになった。

国際的なイベントとしては、ハーバード大学の世界文学研究所夏季集中セミナーの東京大学における実施(2018年)、スラヴ研究東アジア学会大会の東京大学における実施(2019年)に携わり、学術活動の国際化に貢献することができた。どちらも研究室のスタッフ、大学院生、学生たちの積極的な参加・協力を得て初めて可能になったことは改めてここに特筆しておきたい。

d 主要業績

(1) 著書

共著、坂本龍一、谷川俊太郎、飯尾潤、磯崎憲一郎、一柳慧、井上章一、白杵陽、大島まり、小平麻衣子、門脇厚司、金井景子、玄田有史、島菌進、高橋悠治、中沢けい、成田龍一、沼野充義、根岸英一、東直子、水野和夫、吉増剛造、李禹煥、『高校生と考える希望のための教科書 桐光学園大学訪問授業』、左右社、2018.4(「ポスト・トゥールース時代の文学」324-342頁を執筆)

監修、沼野充義監修、曾秋桂編『村上春樹における魅惑』、淡江大學出版中心、2018.6(「監修のことば」として「人間ならざる者たち」の魅惑と恐怖 村上文学における動物(「象の消滅」を中心に)19-42頁を執筆)

共編、沼野充義、野崎敏編『ヨーロッパ文学の読み方—近代篇』、放送大学教育振興会、2019.3

共編、沼野充義、巽孝之、木村朗子共編『思想 危機の文学』(2019.11月号)、(巽孝之・木村朗子との共著で「提起 危機に立ち向かう文学」7-8頁を執筆、また「世界(文学)とは何か? 理念、現実、実践、倫理」9-23頁を執筆)

(2) 論文

沼野充義、「聖書とウイスキー ロシア人はフォークナーをどう読んできたか」、『フォークナー』20号、1-14頁、2018.6

(3) 書評

フィリップ・サンズ、『ニュルンベルク合流 「ジェノサイド」と「人道に対する罪」の起源』、『毎日新聞』、2018.4.29
黒田龍之介、『物語を忘れた外国語』、『週刊現代』、2018.6.2

多和田葉子、『地球にちりばめられて』+ダニエル・ヘラー=ローゼン、『エコラリアス』、『毎日新聞』、2018.6.10
『ミセス 9月号』、『毎日新聞』、「マガジン評」、2018.8.19

J・M・クッツェー、『モラルの話』、『毎日新聞』、2018.9.23

中野理恵、『すきな映画を仕事にして』、『毎日新聞』、2018.11.25

岡真理、『ガザに地下鉄が走る日』、『毎日新聞』、2018.12.16

マイケル・エメリック、『てんてこまい』+岡井隆、関口涼子、『注解するもの、翻訳するもの』+木村朗子、『その後の震災後文学論』、『毎日新聞』、「2018 この3冊」、2018.12.16

『三田文学 No.136 冬季号』、『毎日新聞』、「マガジン評」、2019.1.27

西成彦、『外地巡礼 「越境的」日本語文学論』、『読売新聞』、「第70回読売文学賞選評」、2019.2.2

*このほか、『毎日新聞』書評委員として、年間6~7本、文学・人文関係書の書評を『毎日新聞』日曜書評欄「今週の本棚」に掲載。

(4) 解説

沼野充義、「日本文学のいま、ここ 世界文学共和国は可能か?」、日本文藝家協会編『文学2018』、講談社、1-11頁、2018.4

沼野充義、「愛なき世界の悲劇と希望 『ラブレス』の翻訳不可能性と普遍性」、アンドレイ・ズビャギンツェフ監督『ラブレス』(映画プログラム)、2018.4

沼野充義、「スタニスワフ・レムと『ソラリス』について 藤倉大氏のオペラ日本上演に寄せて」、藤倉大『歌劇 ソラリス 全幕』(劇場プログラム)、東京芸術劇場、2018.10(ページ数はないが表紙裏を1頁とした場合6-10頁に相当)

沼野充義、「もっと『グレート・コメット』を知ろう!」、デイブ・マロイ作『ナターシャ・ピエール・アンド・ザ・グレート・コメット・オブ・1812』(ミュージカルプログラム)、2019.1

沼野充義、「彼方の光に導かれて、あるいは「走れ、オザワ!」、小澤裕之『理知のむこう ダニエル・ハルムスの手法と詩学』、未知谷、355-365頁、2019.3

沼野充義、「《外套》の中にはまりこんで ゴーゴリの魔力とノルシュテイン」、才谷遼監督『ノルシュテイン《外套》をつくる』(映画プログラム)、2019.3

沼野充義、「世界中の舞台でカモメは飛び続ける、そして日本でも」、チェーホフ作『新国立劇場 演劇 2018/2019 シーズン かもめ』(劇場プログラム)、24-25 頁、2019.4

沼野充義、「響き渡る魔法のコーラス ソロモン・ヴォルコフにおける文化と政治」、ソロモン・ヴォルコフ『20 世紀ロシア文化全史 政治と芸術の十字路で』、今村朗訳、河出書房新社、361-371 頁、2019.4

沼野充義、「境界を越え、歴史に抗って生きたロシアの黒人」、ウラジーミル・アレクサンドロフ『かくしてモスクワの夜はつぐられ、ジャズはトルコにもたらされた——二つの帝国を渡り歩いた黒人興行師フレデリックの生涯』、竹田円訳、白水社、309-318 頁、2019.10

(5) 学会発表

国際、沼野充義、「世界文学を可能にしているのは翻訳である」、日仏会館国際シンポジウム「世界文学の可能性——日仏翻訳の遠近法」、日仏会館(東京)、2018.4.14

国際(招待講演)、沼野充義、「大江健三郎と世界文学——周縁から普遍へ」、第四回大江健三郎文学研究会、紹興越秀外国語学院(中国)、2019.3

国際、Mitsuyoshi Numano、「Strange Encounters of the Two ‘Beautiful Ladies’: Mutual Interest and Influence between Japanese and Polish Literature.」、The 13 th Days of Japan, University of Warsaw, October 2019

(6) 啓蒙

沼野充義、アンドレイ・ズビャギンツェフ、「現代ロシアの「非愛」の世界 アンドレイ・ズビャギンツェフとの対話」、『すばる』2018 年 5 月号、276-283 頁

沼野充義、「ドストエフスキーが日本人に人気の理由は? 日本にも“ドストエフスキー的なもの”が至る所に潜んでいるから」、『日経おとなの OFF』2018.8 月号、46-49 頁

沼野充義、「この夏お薦めの 3 冊」、『読売新聞』2018.8.7 (G・ガルシア・マルケス『百年の孤独』、ミロラド・パヴィチ『ハザール事典』、カズオ・イシグロ『忘れられた巨人』を取り上げる)

沼野充義、「天才ならば目指すは世界」、『文學界』2018.10 月号、45-46 頁

沼野充義、新元良和、越川芳明(鼎談)、「村上春樹訳『キャッチャー・イン・ザ・ライ』を読む」、越川芳明『周縁から生まれる ボーダー文学論』、彩流社、208-244 頁、2018.10

沼野充義、「おそロシア? すばらシア! (下) 寒くて暖かい国ロシアを知る 文学から探る日ロ交流」、『随刊東京大学新聞』2018.11.20 (取材・武沙佑美)

沼野充義、「もう一つの世界文学」、『作品社 40 周年記念冊子』10-11 頁、2019.1

沼野充義、「山王と私 1」、『山王 1・2 丁目 自治会ニュース』平成 31 年 3 月号

沼野充義、「山王と私 2」、『山王 1・2 丁目 自治会ニュース』平成 31 年 4 月号

沼野充義、「池内さんの声が今でも聞こえるような気がする」、『新潮』2019.11 月号、190-191 頁

沼野充義、「ドナルド・キーンとロシア」、『すばる』2019.5 月号、196-197 頁

(7) 会議主催(チェア他)

ハーヴァード大学世界文学研究所夏期集中セミナー東京大学セッション(実施責任者)、東京大学、2018.7.2-26

The 10th East Asian Conference on Slavic Eurasian Studies (第 10 回スラヴ・ユーラシア研究東アジア大会) 副組織委員長、東京大学、2019.6.28-30

丸善出版『ロシア文化事典』刊行記念シンポジウム「ロシアの謎、魅惑の文化」、東京大学文学部 1 番大教室、2020.2

(8) 総説・総合報告

共編、沼野充義、望月哲男、池田嘉郎共同編集代表『ロシア文化事典』、丸善出版、2019.10

(9) マスコミ

沼野充義、「ノーベル文学賞発表見送り 現代に相応しい選考だったか」、『読売新聞』2018.5.8

沼野充義、「美しい顔」芥川賞選考 参考文献「昇華」が必要、『読売新聞』2018.7.20

沼野充義、「1968 年(昭和 43 年)川端康成のノーベル文学賞受賞 世界が認めた日本の美学」、『朝日新聞』2019.2.13

沼野充義、「インタビュー 名著のツボ——連載 9 ドストエフスキー『罪と罰』」、『週刊文春』、117 頁、2019.3.21、(取材・石井千湖)

沼野充義、「インタビュー 名著のツボ——連載 10 ドストエフスキー『カラマーゾフの兄弟』」、『週刊文春』、145 頁、2019.3.28 (取材・石井千湖)

沼野充義、「翻訳がつなく世界文学」、『読売新聞』2019.10.4

(10) 翻訳

ウラジミール・ナボコフ『賜物』(『賜物 父の蝶』新潮社所収)、2019.7 (2010年河出書房新社版『賜物』の改訂版)

(11) 予稿・会議録

沼野充義、「チェーホフとサハリンの美しいニヴフ人 村上春樹、大江健三郎からサンギまで」、『れにくさ』10-1号、10-26頁

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義など

パネリスト報告、第18回東京大学ホームカミングデイ・シンポジウム「言葉の危機——入試改革・教育政策を問う」
東京大学文学部、2019.10

(2) 学会

国内、日本スラヴ学研究会、会長、2015.6～2019

国内、日本学術会議、連携会員、2014.10～

国内、日本スラヴ学研究会、会長、2015.6～2019

日本文藝家協会、会員、協会編纂物委員

日本ペンクラブ、国際委員会委員長 2015～2019年、理事 2017～2019年、常務理事 2019年～

教授 柳原 孝敦 YANAGIHARA, Takaatsu

1. 略歴

1989年3月 東京外国語大学外国語学部スペイン語学科 卒業
1989年4月 東京外国語大学大学院外国語学研究所修士課程入学(ロマンス系言語専攻)
1991年3月 同 修了
1991年4月 Centro de Estudios Literarios, Instituto de Investigaciones Filológicas de la Universidad Nacional Autónoma de México [メキシコ国立自治大学文献学研究所文学研究センター] 訪問研究生(メキシコ政府交換留学生として、～1992年2月)
1992年4月 東京外国語大学大学院地域文化研究科博士後期課程進学(地域文化専攻)
1995年3月 同 単位取得退学
1996年4月 法政大学経済学部助教授
2002年4月 Centro de Estudios Latinoamericanos Rómulo Gallegos [ロムロ・ガリェーゴス・ラテンアメリカ研究センター、ベネズエラ] 客員研究員(～2003年3月)
2004年4月 東京外国語大学外国語学部助教授
2007年4月 同 准教授
2009年4月 東京外国語大学大学院総合国際学研究院准教授(大学院重点化による)
2012年4月 同 教授
2013年10月 東京大学大学院人文社会系研究科准教授
2017年4月 同 教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

スペイン語圏の文学、ラテンアメリカ思想文化論。

b 研究課題

知識人たちの環大西洋的ネットワークの形成。

c 概要と自己評価

研究課題である環大西洋地域を横断する知識人たちのネットワークの形成と個々の活動、その表現の様態についての研究は、2020年3月まで科学研究費の研究助成を受けていた。2019年11月に刊行した『テキストとしての都市 メキシコ DF』の一部はこの助成の成果でもある。助成期間は終わったものの、研究はなお進行中である。

d 主要業績

(1) 著書

柳原孝敦『テキストとしての都市 メキシコ DF』東京外国語大学出版会、2019、全272頁

(2) 論文

柳原孝敦、「コスモポリタンな欲望 ブエノスアイレス—パリーブエノスアイレス」、『れにくさ』、9号、145-156頁、2019.3

(3) 研究ノート

柳原孝敦、「翻訳と書き換え—「死とコンパス序説」」、『れにくさ』第10-1号589-596頁、2020.3

(4) 書評

ホルヘ・フランコ／田村さと子訳、『外の世界』、作品社、『週刊読書人』、4月13日号、5面、2018.4

星野智幸、『焰』、新潮社、『文藝』、8月号、506頁、2018.5

神里雄大、『バルパライソの長い坂を下る話』、白水社、『新潮』、7月号、304-305頁、2018.6

マヌエル・アサーニャ、『ベニカルロの夜会—スペイン戦争についての対話』深澤安博訳、法政大学出版局、2019、『週刊読書人』11月15日号、3面、2019.11

マリオ・バルガス＝リョサ、『プリンストン大学で文学／政治を語る—バルガス＝リョサ特別講義』、河出書房新社、2019、『週刊読書人』2月21日号、4面、2020.2

(5) 総説・総合報告

柳原孝敦、「現代メキシコ文学への招待—時代に呼応する文学の流れ」、『現代メキシコを知るための70章』、282-285頁、2019.1

柳原孝敦、「スペイン語文学の現在（グローバル化の時代を読む）」、『NHK ラジオテキスト まいにちスペイン語』連載、2019.4～2020.3

3. 主な社会活動

(1) 学会

日本イスパニヤ学会理事（広報担当）2014.4～2018.3

准教授 **阿部 賢一** ABE, Kenichi

1. 略歴

1995年3月	東京外国語大学外国語学部ロシア・東欧語学科チェコ語専攻卒業
1999年3月	東京外国語大学大学院地域文化研究科博士前期課程修了
2002年6月	パリ第4大学第3課程スラヴ研究科DEA取得
2003年3月	東京外国語大学大学院地域文化研究科博士後期課程修了
2003年10月	北海道大学スラヴ研究センターCOE 研究員
2004年4月	東京外国語大学大学院国際文化講座助手
2005年4月	武蔵大学人文学部ヨーロッパ比較文化学科専任講師
2008年4月	同准教授
2010年4月	立教大学文学部文学科文芸・思想専修／文学研究科比較文明学専攻准教授
2016年4月	東京大学大学院人文社会系研究科准教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

中東欧文学、比較文学

b 研究課題

20世紀プラハの文学・美術

c 概要と自己評価

現在、主に以下のテーマに基づき、研究を進めている、

- (1) 20世紀チェコ文学
- (2) 中東欧における文学史記述
- (3) 翻訳の諸問題

(1) に関しては、近年、戯曲家・政治家ヴァーツラフ・ハヴェルを中心に研究を行なっている。社会主義体制下におけるハヴェルの戯曲と政治の関係を、翻訳、論文を通して検討を行ない、その成果は単著にまとめられた。

(2) に関しては、文学理論の観点からの考察を共著で行ない、今後はさらに複数言語の文学史記述の可能性を探求する予定である。

(3) については、(2)とも関連する文学史のレベルの問題、世界文学的な文脈での問題（これについて論文「翻訳における時差——「世界文学」と「時間」」を参照）、さらには文芸翻訳の実践の3つの問題系から研究を進めており、その成果の一部は着実に論文として発表している。

d 主要業績

(1) 著書

単著、阿部賢一、『NHK 100分de名著 ヴァーツラフ・ハヴェル『力なき者たちの力』』、NHK出版、2020.1

共著、井上暁子・三谷研爾・阿部賢一・藤田恭子・越野剛、『東欧文学の多言語的トポス』、水声社、2020.3

(2) 論文

阿部賢一、「「スラング」の機能 チェコ文学の「1989年」」、『思想』、2019.10月号、no.1146、140-152頁、2019

Kenichi ABE、「Exotiky se chraň! “neboli mentální mapa poetistů」、『Slovníky modernistů a paradigmata moderny』、2019

阿部賢一、「コンスタンチン・ビーブルの詩集『紅茶と珈琲を運ぶ船とともに』におけるエキゾティシズム」、『れにくさ』、第9号、44-61頁、2019.3

阿部賢一、「ボヘミアにおける文学史の系譜——フェリクス・ヴォジチカの「文学史」論をめぐる」、井上暁子・三谷研爾・阿部賢一・藤田恭子・越野剛、『東欧文学の多言語的トポス』、水声社、69-105頁、2020.3

阿部賢一、「翻訳における時差——「世界文学」と「時間」」、坪井秀人・瀧井一博・白石恵理・小田龍哉編『越境する歴史学と世界文学』、臨川書店、137-150頁、2020.3

阿部賢一、「ヴァーツラフ・ハヴェルの戯曲『再開発』と全体主義」、『れにくさ』第10-1号、42-59頁、2020.3

(3) 学会発表

国際、阿部賢一、「„Exotiky se chraň!“ neboli mentální mapa poetistů」、Slovníky modernistů a paradigmata moderny、モラヴィア図書館（チェコ共和国）、2018.9.20

国内、阿部賢一、「ボヘミアにおける文学史の系譜」、シンポジウム「東欧文学の多言語的トポス：複数言語使用地域の創作をめぐる求心力と遠心力」、東京大学、2018.10.6

国際、阿部賢一、「Svět zvířat v díle Bohumila Hrabala」、Internationale Konferenz "Achtung, Ein grosser Autor! Milan Kundera und Bohumil Hrabal"、ライプツィヒ大学、2019.2.16

国内、阿部賢一、「翻訳されるテキスト、翻訳されないテキスト：中東欧の視点から」、日本フランス語フランス文学会関東支部、日本女子大学、2019.3.9

国内、阿部賢一、「翻訳における時差——「世界文学」と「時間」」、国際ワークショップ「グローバル・ヒストリーと世界文学」、2019.6.2

国内、阿部賢一、「増殖し、分裂する「私」：20世紀初頭のプラハにおける「人造人間」と「分身」の系譜」、日本比較文学会東京支部シンポジウム、東海大学高輪キャンパス、2019.10.19

国内、阿部賢一、「劇作家が政治家になる時——ヴァーツラフ・ハヴェルと89年」、第4回ボヘミア・フォーラム、大阪大学、2019.11.30

(4) 会議主催(チェア他)

国際、「The Institute for World Literature」、実行委員、2018.7.2~2018.7.26

(5) 翻訳

共訳、Derek Sayer、"Prague, Capital of the Twentieth Century: A Surrealist History"、阿部賢一、河上春香、宮崎淳史、『プラハ、二〇世紀の首都 あるシュルレアリスム的な歴史』、白水社、2018.9

個人訳、Jakub Plachý、"Velká kniha o čurání"、阿部賢一、『おしっこ "小" 百科』、河出書房新社、2018.12

個人訳、Bohumil Hrabal、"Obsluhoval jsem anglického krále"、阿部賢一、『わたしは英国王に給仕した』、2019.3

個人訳、Bianca Bellová、"Jezero"、阿部賢一、『湖』、河出書房新社、2019.4

個人訳、Václav Havel、"Moc bezmocných"、阿部賢一、『力なき者たちの力』、2019.8

(6) 研究テーマ

文部科学省科学研究費補助金、阿部賢一、研究代表者、「ボヘミア文学史の記述に関する研究」、2019～

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

非常勤講師、東京外国語大学、「ヨーロッパ文化研究、チェコ語」、2018.4～2018.9

非常勤講師、立教大学、「世界文学論」、2019.9～

非常勤講師、NHK 文化センター、2019.10～

(2) 学会

国内、日本スラヴ学研究会、企画編集委員長、2016.6～2018.6

(3) 学外組織(学協会、省庁を除く)委員・役員

国内、翻訳コンテスト審査員 (チェコセンター)、2016～現在に至る

2 4 西洋史学

教授 高山 博

TAKAYAMA, Hiroshi

HP: <http://www.l.u-tokyo.ac.jp/~tkymh/index.html>

1. 略歴

- 1980年3月 東京大学文学部西洋史学科卒業
- 1980年4月 東京大学大学院人文科学研究科西洋史学修士課程入学
- 1982年3月 東京大学大学院同研究科同修士課程修了（文学修士）
- 1982年4月 東京大学大学院同研究科同博士課程進学
- 1984年9月 アメリカ、エール大学大学院歴史学博士課程入学
(Harvard Yenching Institute, Doctoral Scholarship for Junior Faculty, 1984-88 による)
- 1986年5月 アメリカ、エール大学大学院 M.A. (Master of Arts) 取得
- 1987年9月 アメリカ、エール大学 teaching assistant (12月まで)
- 1988年3月 東京大学大学院人文科学研究科西洋史学博士課程単位取得退学
- 1989年6月 イギリス、ケンブリッジ大学客員研究員 (1990年3月まで)
- 1990年5月 アメリカ、エール大学大学院歴史学博士課程修了、Ph.D.取得
Robert S. Lopez Memorial Prize (最優秀中世史博士論文賞)
- 1990年4月 一橋大学助教授 (経済学部) (1993年4月から1994年3月まで併任助教授)
- 1993年4月 東京大学文学部助教授 (文化交流研究施設)
- 12月 サントリー学芸賞
- 1994年6月 地中海学会賞
- 10月 マルコ・ポーロ賞
- 1995年10月 フランス、国立社会科学高等研究院客員研究員 (1996年9月まで)
(国際交流基金フェローシップによる)
- 1998年4月 東京大学大学院人文社会系研究科助教授 (文化交流研究施設・基礎部門)
- 2001年10月 (西洋史学助教授を併任)
- 2002年4月 21世紀COEプログラム委員会分野別審査・評価部会委員 (人文科学) (2005年まで)
- 2002年10月 イタリア、American Academy in Rome, R.A.A.R. (Resident of American Academy in Rome), (12月まで)
- 2004年4月 東京大学大学院人文社会系研究科教授 (西洋史学) 現在に至る
- 2004年4月 日本学術振興会 学術システム研究センター研究員 (人文学) (2007年3月まで)
- 2008年4月 文部科学省、科学官 (2012年3月まで)
- 2009年10月 アメリカ、UCLA, CMRS Distinguished Visiting Scholar
- 2015年6月 西洋中世学会会長 (~2019年6月まで)
- 2016年4月 紫綬褒章
- 2016年6月 史学会理事長 (~2020年6月まで)
- 2019年9月 アメリカ、Institute for Advanced Study (Princeton), Willis F. Doney Member 2019-2020 (12月まで)

2. 主な研究活動

a 専門分野

西洋中世史、地中海史

b 研究課題

- (1) 古代から現代に至る諸国家の形態、組織、統治システムの比較を行う。
- (2) 西洋中世の主要な君主国の統治システムを比較・検討し、その異同を明らかにする。
- (3) 異なる文化・宗教を背景に持つ様々な人間集団が、地中海を舞台にどのように接触・対応していったかを通時的に見通すとともに、地中海の回りに形成された三大文化圏（ラテン・キリスト教文化圏、ギリシャ・ビザンツ文化圏、アラブ・イスラム文化圏）研究の接合を目指す。
- (4) 上記三大文化が併存する十二世紀ノルマン・シチリア王国の解明を行う。

- (5) 異文化交流によって生じる様々な現象を分析し、人間集団が持つ特性と多様性を考える。
- (6) グローバル化が社会や国家形態に及ぼす影響を考察する。

c 概要と自己評価

教育・研究上の義務は滞りなく果たすことができたと思う。

d 主要業績

(1) 著書

単著、Hiroshi Takayama、『Sicily and the Mediterranean in the Middle Ages』、Routledge、2019

(2) 論文

高山博、「中世地中海から現代世界を見る」、『国際哲学研究』、7号、33-39頁、2018

Hiroshi takayama、「Mediterranean Studies in Japan and My Research Focus」、『Proceedings of The 2nd International Conference of the Asian Federation of Mediterranean Studies Institutes』、3-14頁、2018.12

高山博、「中世シチリアにおける異文化の併存と対立～ヨーロッパ、イスラム、ビザンツ～」、『学習院史学』、57号、67-80頁、2019.3

(3) 学会発表

国内、高山博、「中世シチリアにおける異文化の併存と対立」、学習院大学史学会大会、学習院大学、2018.6.16

国際、Hiroshi Takayama、「Mediterranean Studies in Japan and My Research Focus」、The 2nd International Conference of the Asian Federation of Mediterranean Studies Institutes、University of Kyoto、2018.12.23

国際、Hiroshi Takayama、「The Norman Court of Sicily: A Crossroads of Greek, Arabic and Latin Cultures」、Yale Lectures in Medieval Studies, Fall 2019, Yale University, 2019.9.30

国際、Hiroshi Takayama、「Multilingual Documents of Medieval Sicily and Peasant Studies」、Princeton's Comparative Diplomatics Workshop, Princeton University, 2019.10.23

国際、Hiroshi Takayama、「Islamic Sicily an Introduction: Was the Norman Court of Sicily 'the Pleasure Dwellings of the Mohammedan East' ?」、A Lecture, University of Colorado (Boulder), USA, 2019.11.12

国際、Hiroshi Takayama、「Muslim Peasants in Norman Sicily: Reconsidering Established Categories」、A Research Talk, University of Colorado (Boulder), USA, 2019.11.13

(4) 総説・総合報告

高山博、「2017年の歴史学界：総説」、『史学雑誌』、127編5号、1-5頁、2018.5

高山博、「2018年の歴史学界：総説」、『史学雑誌』、128編5号、1-5頁、2019.5

3. 主な社会活動

(1) 学会

国内、史学会、理事長、2016.6～2020.6

国内、西洋中世学会、会長、2015.6～2019.6

国内、史学研究会、評議員、2004年度～現在

(2) 学術雑誌編集

国際、*Spicilegium* (Japan Society for Medieval European Studies, Japan), Editor, 2019-present; Editorial Board, 2015-present

国際、*Corpus Membranarum Capuanarum* (Edizioni Scientifiche Italiane, Italy), Comitato Scientifico Onorario, 2014-present

国際、*Archivio Normanno-Svevo* (Centro Europeo di Studi Normanni, Italy), Comitato Scientifico, 2008-present

国際、*International Medieval Bibliography* (Brepols, UK): Regular Contributor for Japan, 1995-present

(3) その他の委員等

公益財団法人 高梨学術奨励基金、選考委員、2017.5.12～現在

公益財団法人 東洋文庫、研究員、2020.1.16～現在

1. 略歴

1991年	東京大学大学院人文科学研究科博士課程博士・博士（文学）
1991年11月	東京大学文学部助手
1993年4月	大阪外国語大学外国語学部助教授
2002年3月	ケンブリッジ大学古典学部客員研究員、クレアホール客員フェロー（～2003年2月）
2006年4月	東京大学大学院人文社会系研究科助教授
2007年4月	東京大学大学院人文社会系研究科准教授
2010年11月	東京大学大学院人文社会系研究科教授

2. 主な研究活動

a 専門分野 b 研究課題

古代ギリシア史

c 概要と自己評価

研究・教育及びこれに関わる学内外の諸活動に従事し、責務を果たした。

d 主要業績

(1) 著書

（翻訳）『古代ギリシア人:自己と他者の肖像』ポール・カートリッジ著、白水社、2019年5月、46版、307頁（新装復刊）

（翻訳監修）『World History for High School（英文詳説世界史）』、山川出版社、橋場弦（監修者代表）・岸本美緒・小松久男・水島司監修、2019年8月、459頁（共編）

(2) 会議主催(チェア他)

国際、「古代史の会 P.J.Rhodes 教授講演会」、チェア、東京大学文学部第三会議室、2018.9.11

国際、「P.J.Rhodes 教授 ギリシア碑文セミナー」、チェア、東京大学文学部西洋史学研究室別室、2018.9.13

国際、「Annalisa Marzano 氏、ローマ考古学セミナー」、チェア、東京大学文学部第三会議室、2019.4.19

(3) マスコミ

「ギリシア人の世界と古代オリンピック 第1回 ギリシア文明とわたしたち」、『NHK ラジオ第2放送 カルチャーラジオ 歴史再発見 毎週火曜放送』、日本放送協会、2018.7.3

「ギリシア人の世界と古代オリンピック 第2回 都市国家の出現——ギリシア人の世界」、『NHK ラジオ第2放送 カルチャーラジオ 歴史再発見 毎週火曜放送』、日本放送協会、2018.7.10

「ギリシア人の世界と古代オリンピック 第3回 デモクラシーの誕生」、『NHK ラジオ第2放送 カルチャーラジオ 歴史再発見 毎週火曜放送』、日本放送協会、2018.7.17

「ギリシア人の世界と古代オリンピック 第4回 アテナイ民主政」、『NHK ラジオ第2放送 カルチャーラジオ 歴史再発見 毎週火曜放送』、日本放送協会、2018.7.24

「ギリシア人の世界と古代オリンピック 第5回 民主政に生きる人びと」、『NHK ラジオ第2放送 カルチャーラジオ 歴史再発見 毎週火曜放送』、日本放送協会、2018.7.31

「ギリシア人の世界と古代オリンピック 第6回 民主政は減びず」、『NHK ラジオ第2放送 カルチャーラジオ 歴史再発見 毎週火曜放送』、日本放送協会、2018.8.7

「ギリシア人の世界と古代オリンピック 第7回 古代オリンピックのはじまり」、『NHK ラジオ第2放送 カルチャーラジオ 歴史再発見 毎週火曜放送』、日本放送協会、2018.8.14

「ギリシア人の世界と古代オリンピック 第8回 競技と祭典」、『NHK ラジオ第2放送 カルチャーラジオ 歴史再発見 毎週火曜放送』、日本放送協会、2018.8.21

「ギリシア人の世界と古代オリンピック 第9回 何のためのオリンピックか?」、『NHK ラジオ第2放送 カルチャーラジオ 歴史再発見 毎週火曜放送』、日本放送協会、2018.8.28

「ギリシア人の世界と古代オリンピック 第10回 葬送と競争の文化」、『NHK ラジオ第2放送 カルチャーラジオ 歴史再発見 毎週火曜放送』、日本放送協会、2018.9.4

「ギリシア人の世界と古代オリンピック 第11回 理想の間人像——均整の美」、『NHK ラジオ第2放送 カルチャーラジオ 歴史再発見 毎週火曜放送』、日本放送協会、2018.9.11

「ギリシア人の世界と古代オリンピック 第12回 民主政とオリンピックをむすぶもの」、『NHK ラジオ第2放送 カルチャーラジオ 歴史再発見 毎週火曜放送』、日本放送協会、2018.9.18

「ギリシア人の世界と古代オリンピック 第13回 ギリシア人が教えること」、『NHK ラジオ第2放送 カルチャーラジオ 歴史再発見 毎週火曜放送』、日本放送協会、2018.9.25

(4) 教科書

『詳説世界史』、木村靖二ほか、執筆、山川出版社、2018

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

NHK 文化センター青山教室、「ギリシア人の世界と古代オリンピック」、2018.5～2018.7

非常勤講師、御茶ノ水女子大学、「歴史情報論」、2018.10～2019.3、「西洋政治史」、2020.4～9

いなぎICカレッジ・プロフェッサー講座、「古代ギリシアの知恵を探る（第1～6回）」、2019.10.26、11.30

(2) 学会

国内、史学会、理事、2018.6～

国内、日本西洋古典学会、常任委員、2019.6～

教授 **勝田 俊輔** KATSUTA, Shunsuke

1. 略歴

1986年4月	東京大学教養学部文科Ⅲ類 入学
1991年3月	東京大学文学部西洋史学専修課程 卒業
1991年4月	東京大学大学院人文科学研究科修士課程西洋史学専攻 入学
1994年3月	同 修了
1994年4月	東京大学大学院人文科学研究科博士課程西洋史学専攻 進学
1995年10月	アイルランド共和国ダブリン大学留学（～1997年9月） （1996年9月まではアイルランド政府給費留学生）
1999年3月	東京大学大学院人文社会系研究科博士課程西洋史学専攻 単位取得退学
1999年4月	東京大学大学院人文社会系研究科西洋史学研究室 助手
2002年3月	博士（文学）学位取得
2002年4月	岐阜大学教育学部社会科教育講座（史学） 助教授
2007年4月	同 准教授
2012年4月	東京大学大学院人文社会系研究科 准教授
2018年9月	東京大学大学院人文社会系研究科 教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

アイルランド近代史、近代ブリテン世界史、近代コスモポリタニズム

b 研究課題

19世紀アイルランド農村史、近代ダブリン都市史、近代ブリテン世界史、近代コスモポリタニズム

c 概要と自己評価

教育・研究・学内業務において、基本的責任を果たした。

d 主要業績

(1) 著書

編著、勝田俊輔（上野格・森ありさとの共編）、『世界歴史大系 アイルランド史』、山川出版社、2018.6

共著、勝田俊輔、竹内真人編『ブリティッシュ・ワールド——帝国紐帯の諸相』、日本経済評論社、2019.2

(2) 論文

勝田俊輔、「救済と改良——大飢饉期のアイルランド——」、『歴史学研究 特集人口と権力 (II)』、978、24-35 頁、2018.12

勝田俊輔、「近世アイルランド (アルスタ) の植民都市——「市場」と「文明」——」、『都市史研究』5号 (小特集 植民地と都市そして地域)、5号、66-75 頁、2018.12

勝田俊輔、「18 世紀西洋世界のコスモポリタニズム——コメントにかえて」、『日本 18 世紀学会年報』、34 号、39-48 頁、2019.6

勝田俊輔、「アイルランド人移民——複眼的・長期的視点から」、『ヴィクトリア朝文化研究』、17 号、53-72 頁、2019.11

勝田俊輔、「アイルランド大飢饉の研究動向——歴史研究と歴史認識 (武井章弘との共著)」、『経済論集』33 巻 1・2 号、33-50 頁、2019.12

(3) 学会発表

国内、勝田俊輔、「アイルランド人移民——複眼的・長期的視点から」、シンポジウム「移民への錯綜する眼差し——排除と寛容のはざままで」日本ヴィクトリア朝文化研究学会第 18 回全国大会、日本女子大学、2018.11.17

(4) 教科書

『新世界史 B 改訂版』、勝田俊輔、執筆、山川出版社、2019

3. 主な社会活動

(1) 学外組織 (学協会、省庁を除く) 委員・役員

任意団体、史学会、評議員、2014.5～

都市史学会、企画委員、編集委員

准教授 **長井 伸仁** NAGAI, Nobuhito

1. 略歴

1989 年 3 月 大阪大学文学部史学科西洋史学専攻 卒業
1991 年 3 月 大阪大学大学院文学研究科博士前期課程史学専攻 修了
1997 年 9 月 同 博士後期課程 単位修得退学
1997 年 11 月 パリ第 1 大学 博士 (歴史学) 学位取得
1999 年 10 月 大阪大学大学院文学研究科 助手
2000 年 4 月 徳島大学総合科学部 助教授
2012 年 4 月 上智大学文学部史学科 准教授
2014 年 4 月 同 教授
2016 年 4 月 東京大学大学院人文社会系研究科 准教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

フランス近現代史

b 研究課題

19 世紀パリの政治社会史、フランス共和主義の政治文化、近代フランスにおけるカトリシズム

c 概要と自己評価

研究に関しては、先期に引きつぎパリ民事簿復元事業の研究をおこなった。また、フランス史の概説書を共同で執筆し、担当した 19 世紀前半期に関して、最新の研究成果を盛り込んで新たなフランス近代史像を描いた。教育では、フランス史研究者の育成に努めた。

d 主要業績

(1) 著書

共著、平野千果子編、長井伸仁ほか著、『新しく学ぶフランス史』、ミネルヴァ書房、2019.11

(2) 書評

長井伸仁、「高橋則雄『パリ・コミュニケーションにおける人民主権と公教育』(すずさわ書店、2019年)」、『神奈川大学評論』、第95号、155頁、2020.3

(3) 総説・総合報告

長井伸仁、「近代—フランス(回顧と展望)」、『史学雑誌』、第127編第5号、348-354頁、2018.5

長井伸仁、「社会史と現在」、谷川稔ほか編『越境する歴史家たち—近社研(1985-2018)からのオマージュ』、ミネルヴァ書房、152-155頁、2019.5

(4) 翻訳

編訳、Régine Azria, Danièle Hervieu-Léger, dir., *Dictionnaire des faits religieux*, 杉村靖彦、伊達聖伸、鶴岡賀雄、増田一夫、長井伸仁編訳、『宗教事象事典』、みすず書房、2019.5

共訳、Philippe Boutry, "De l'invention du cimetière au triomphe de l'incinération: les transformations de la mort en France du XVIIIe siècle au XXIe siècle", 長井伸仁、長島濤訳、「墓地の発明から火葬の勝利へ: フランスにおける死の変容(18-21世紀)」、『思想』、第1150号、6-24頁、岩波書店、2020.2

(5) 教科書

橋場弦、桜井英治編、長井伸仁ほか著、『中学歴史 日本と世界』、山川出版社、2020年3月検定合格

3. 主な社会活動

(1) 学会

国内、日本西洋史学会、『西洋史学』編集委員、2017.4～

(2) 講演会

長井伸仁、「フランス革命はどのように想起されてきたのか」、津山洋学資料館、2019.9.8(日)

准教授 **池田 嘉郎** IKEDA, Yoshiro

1. 略歴

1994年3月 東京大学文学部西洋史学専修課程 卒業
1994年4月 東京大学大学院人文科学研究科修士課程西洋史学専攻 入学
1996年3月 東京大学大学院人文社会系研究科修士課程西洋史学専攻 修了
1996年4月 東京大学大学院人文社会系研究科博士課程西洋史学専攻 進学
1998年10月 ロシア連邦ロシア科学アカデミー・ロシア史研究所留学(文部省アジア諸国等派遣留学生)
(～2000年9月)
2003年3月 東京大学大学院人文社会系研究科博士課程西洋史学専攻 単位取得退学
2005年10月 博士(文学) 学位取得
2006年9月 新潟国際情報大学情報文化学部情報文化学科 専任講師
2010年4月 東京理科大学理学部第一部教養学科 准教授
2013年4月 東京大学大学院人文社会系研究科 准教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

近現代ロシア史

b 研究課題

ヨーロッパの周縁としてのロシアから、20世紀史を捉え直すこと。

c 概要と自己評価

ロシア革命 100 周年を 2017 年に終え、2018 年・19 年度はあらたな研究活動に向けての準備作業が多かった。また、学会関連では、ロシア史研究会の委員長（2019 年 11 月から）となったほか、同年 6 月には東京大学本郷キャンパスで行なわれた第 10 回東アジア・スラヴ・ユーラシア研究大会の組織委員長もつとめた。また 2018 年度・2019 年度とも、ICCEES（国際中欧・東欧研究協議会）の執行委員会メンバーとして、国際的な研究者共同体の維持・発展に微力ながら貢献した。

d 主要業績

(1) 著書

編著、望月哲男、沼野充義、池田嘉郎編『ロシア文化事典』、丸善出版、2019.10

(2) 論文

池田嘉郎、「テクニカラーのソ連——『金星勲章の騎士』に見る戦後ソヴィエト社会と日本」、『西洋史学報』45 号、9-26 頁、2019.3

池田嘉郎、「古典再読 溪内謙著『スターリン政治体制の成立』再読」、『西洋史学』267 号、71-76 頁、2019.6

池田嘉郎、「Воспоминания Н. И. Астрова о смерти братьев в Гражданской войне」、『Эпоха Революции и Гражданской войны в России. Проблемы истории и историографии』、354-370 頁、2019.12

(3) 学会発表

国際、池田嘉郎、「Nikolai Astrov and Post-First World War Europe」、第 10 回スラヴ・ユーラシア研究東アジア大会、2019.6.30

(4) 啓蒙

和田春樹・長谷川毅・池田嘉郎「座談会 ロシア革命の百年を問い直す：民主主義・戦争・権力」、『世界』918 号、198-207 頁、2019.3

(5) 研究テーマ

文部科学省科学研究費補助金、基盤研究 C、池田嘉郎（研究代表者）、「第一次世界大戦から 1930 年代までのロシアにおける身体——労働・医療・モラル」、2019～2021

3. 主な社会活動

(1) 学会

ICCEES (International Council for Central and Eastern European Studies), member of the Executive Committee

JCREES（日本ロシア・東欧研究連絡協議会）からの ICCEES 日本代表、JCREES 参与

ロシア史研究会委員長

『史学雑誌』編集委員

第 10 回スラヴ・ユーラシア研究東アジア大会（2019.6.29-30、東京大学本郷キャンパス）、組織委員長

25 社会学

教授 武川 正吾 TAKEGAWA, Shogo

1. 略歴

1984年3月 東京大学大学院社会学研究科博士課程単位取得退学
社会保障研究所、中央大学を経て、1993年4月から東京大学助教授
現在 東京大学大学院人文社会系研究科教授
2019年3月 退職

2. 主な研究活動

a 専門分野

福祉社会学、社会政策、比較福祉レジーム分析

b 研究課題

- (1) 社会政策および社会計画に関する理論的研究
- (2) 日本の地域社会計画に関する実証的研究
- (3) 諸外国の社会政策に関する研究
- (4) 社会保障をはじめとする社会政策に関する政策論的研究
- (5) 福祉国家と福祉社会に関する理論的実証的研究
- (6) 社会政策と社会意識に関する実証的研究

c 概要と自己評価

東アジア諸国における福祉レジームの比較分析をポスト・オリエンタリスト・アプローチによって遂行している。また、公共社会学に関する研究を行い、これを実証的な観点および理論的な観点で、単著と共編著にまとめることができた。また、現在は生産レジームと再生産レジームの発展段階における時間のズレが、各国の福祉レジームにどのような影響を及ぼすかについての研究を進めている。今後、これを継続・発展させることが課題である。

d 主要業績

(1) 論文

武川正吾, 角能, 小川和孝, 米澤旦、「高福祉高負担論への支持動向の反転」、『社会政策』、2018.10

3. 主な社会活動

(1) 学外組織（学協会、省庁を除く）委員・役員

福祉社会学学会顧問、独立行政法人日本学術振興会事業委員会委員、国立社会保障・人口問題研究所評議員
社会政策学会顧問

1. 略歴

- 1981年3月 東京大学大学院社会学研究科修士課程修了
- 1983年3月 東京大学大学院社会学研究科博士課程中退
- 1983年4月 東京大学教養学部助手
- 1986年4月 法政大学社会学部専任講師
- 1988年4月 法政大学社会学部助教授
- 1994年10月 東京大学文学部助教授（東京大学大学院社会学研究科担当）
- 1995年4月 東京大学大学院人文社会系研究科助教授（文学部担当）
- 1997年4月 オックスフォード大学オリエンタル・インスティテュート研究員（海外研修）
- 2000年4月 同研究科文化資源学専攻助教授（形態資料学専門分野）併任
- 2005年3月 博士（社会学）学位 東京大学
- 2005年9月 東京大学大学院人文社会系研究科教授（文学部担当）
- 2009年6月 濱田総長下での東京大学「行動シナリオ」プロデュース会議メンバー
- 2011年4月 東京大学人文社会系研究科副研究科長（～2013年3月）
- 2015年4月 五神総長下での「東京大学ビジョン2020」起草会議メンバー
- 2017年4月 東京大学文学部長・人文社会系研究科長（～2019年3月）

2. 主な研究活動

a 専門分野

文化の社会学、歴史社会学、社会意識論、社会学方法論、社会調査史

b 研究課題

概要

- (1) 歴史社会学の思想と方法。柳田国男の方法論。
- (2) モノとしての書物をモデルとしたメディア文化の地層分析。読書空間論。ケータイ電話論。
- (3) 社会調査の社会史。日本近代における調査の実践史と方法意識の展開。
- (4) 文字テキスト以外の資料へのテキスト概念の可能性の拡大。かわら版・新聞錦絵データベースの実験、浅草公園十二階凌雲閣の研究など。

c 概要と自己評価

2016年度から2017年度にかけては、2014年にまとめられた『論文の書きかた』を踏まえて、大学院の演習において実践的な論文執筆をめぐる教育をおこなった。2017年度からは学部長職のため、学部講義と演習は担当する余裕がなくなったが、大学院では本研究科の社会学・文化資源学専門分野の学生だけでなく、学際情報学府や総合文化研究科等の多様な学生の論文指導を、当該学生が自発的に選んだテーマにそって実施した。柳田国男研究では、歴民博との共同研究でのサハリンの現地調査を踏まえ、共著『柳田国男と考古学』や『国立歴史民俗博物館研究報告』において、これまでほとんど論じられてこなかった「樺太紀行」の方法的な意義を発掘している。実験的な試みでもあった都市東京のシンボルであった建物の研究と民間学者のライフヒストリーを組み合わせた『浅草公園凌雲閣十二階』について、江戸東京博物館のシンポジウムに参加し、その報告書に発表内容にもとづいた報告を載せて啓発的な社会発信に携わった。この著作は、学際的な日本生活学会から、2017年度の今和次郎賞を授与された。また歴史民俗博物館の「万年筆の生活誌」の企画展示にかかわって、この普及した筆記具が人びとの文字を書く実践をいかに変えたのか、またこの新しい「民具」ともいべき近代の発明がいかなる産業化のプロセスを経たのか等を分析し、新たな歴史社会学の可能性を追求した。研究科長の職務の煩雑さに時間をとられて、2017年度に完成する予定で進めてきた『文化資源学講義』の刊行が遅れて2018年度にずれ込むことになったのは残念であった。

d 主要業績

(1) 著書

単著、佐藤健二、『文化資源学講義』、東京大学出版会、2018.9

(2) 論文

佐藤健二、「戦争社会学とはなにかをめぐって」、『戦争社会学研究』、3号、pp.150-178、2019.6

佐藤健二、「考現学の本願と方法的規準」、『現代思想』、47巻9号、pp.40-54、2019.7

佐藤健二、「柳田國男による柳田國男——全自序集の序にかえて」、柳田國男『柳田國男全自序集 I』、中央公論新社、pp.9-23、2019.11

(3) 解説

佐藤健二、「解説」、柳田國男『日本の民俗学』、中公文庫、pp.402-409、2019.6

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

静岡県立大学非常勤講師、2016年度

(2) 学会

日本社会学会、社会調査協会

教授 白波瀬 佐和子 SHIRAHASE, Sawako

1. 略歴

1997年 オックスフォード大学 University of Oxford (社会学)・社会学博士
1997年4月 国立社会保障・人口問題研究所室長
2003年4月 筑波大学大学院システム情報工学研究科助教授
2006年4月 東京大学大学院人文社会系研究科准教授 (社会学)
2010年8月 東京大学大学院人文社会系研究科教授 (社会学)

2. 主な研究活動

a 専門分野

社会階層論、人口社会学、計量分析

b 研究課題

主な研究課題として次の4つに取り組んでいる。

- (1) 少子高齢社会の不平等構造
- (2) 社会的、私的移転に関する実証研究
- (3) 資産の不平等に関する実証研究
- (4) 社会階層と移動に関する実証研究

c 概要と自己評価

人口高齢化と階層格差に関する研究を中心に進めている。「社会階層と社会移動に関する全国調査」(SSM調査)2015年を実施し、2018年度より、少子高齢社会の階層格差に関する実証研究(基盤研究A:18H03647)を開始し、超高齢社会の階層格差についての本格的な研究成果のために作業を開始した。具体的な成果としては、学術論文への掲載に加え、少子高齢社会の階層構造を人生初期、中期、後期にわけて検討することとした。また、「中高年者の生活実態に関する継続調査」ウェーブ5を実施した。英文書籍としても刊行をめざすべく、作業に入った。

以上、研究活動は予定どおり進行している。

d 主要業績

(1) 論文

白波瀬佐和子・石田浩、「少子高齢社会における社会階層とライフコース」、『理論と方法』、第33巻・第2号、185-201頁、2018

(2) 書籍

白波瀬佐和子(編著)、『東大塾 これからの日本の人口と社会』、東京大学出版会、2019年

(3) 学会発表

国際、白波瀬佐和子、「What can we see in the social stratification of Japan as we focus on gender, family, and population?」、International Sociological Association, RC28, Yonsei University, Seoul, South Korea, 2018.5.26

国際、白波瀬佐和子、「How to transmit the social advantage to next generations? Focusing on the educational advantage in the multigenerational perspective」、ISA World Congress of Sociology, RC28, Toronto, Canada, 2018.7.17

- 国際、白波瀬佐和子、”Protecting socially vulnerable people in Japan, the world’s most aged society: Focusing on multi-generational co-residence”、ISA World Congress of Sociology, RC19, Toronto, Canada, 2018.7.21
- 国際、白波瀬佐和子、”Conflict and Solidarity in Gender and Generation of the most Aged Society, Japan”、World Social Science Forum、九州、2018.9.28
- 国際、白波瀬佐和子・毛塚和宏・瀧川裕貴、”Does the growth in the number of highly educated mothers make the society more equal? A Study of intergenerational educational mobility between mothers and children”、International Sociological Association RC28, Goethe University, Frankfurt, Germany, 2019.3.23
- 国際、白波瀬佐和子・麦山亮太、”The Impact of Class Origin throughout the Life Course: Focusing on the most aged society, Japan”、International Sociological Association, RC28, Princeton University, U.S.A., 2019.8.18
- 国内、白波瀬佐和子、「SSM 調査と政府統計調査からみる戦後日本のかたち：社会階層論的検討」、日本社会学会、甲南大学、2018.9.16
- 国内、白波瀬佐和子、「少子社会のパラドックス—家族政策か母親就労支援か—」、日本家族社会学会、神戸学院大学、2019.9.14
- 国内、白波瀬佐和子、「日本の人口高齢化—社会階層論からの検討—」、日本社会学会、東京女子大学、2019.10.5
- 国内、麦山亮太・白波瀬佐和子、「出身階層の影響力の継続性に関する検討：高齢層に着目して」、日本社会学会、東京女子大学、2019.10.5

3. 主な社会活動

(1) 学会

- 国内、日本家族社会学会、理事、2019.9～
- 国内、社会調査協会、理事、2019～
- 国外、International Sociological Association, Vice-President for Finance and Membership, 2018～
- 国外、International Sociological Association, Research Committee of Social Stratification, Board member, 2018～
- 国外、International Science Council, Committee Member for Freedom and Responsibility in Science, 2019～

(2) 行政

- 厚生労働省、社会保障審議会委員、2018～
- 文部科学省、科学技術・学術審議会委員、2018～
- 総務省、統計委員会委員、2017～2019
- 復興庁、復興推進委員、2018～
- 東京都社会福祉審議会委員、2018～

教授 **赤川 学** AKAGAWA, Manabu

1. 略歴

- 1990年 3月 東京大学大学院社会学研究科社会学修士課程修了
- 1995年 東京大学大学院社会学研究科社会学博士課程単位取得退学
- 1995年 信州大学人文学部人間情報学科文化情報論講座助手
- 1995年 専修大学文学部社会学科非常勤講師
- 1996年 富山大学人文学部非常勤講師
- 1998年 徳島大学総合科学部非常勤講師
- 1999年 岡山大学文学部行動科学科社会学・文化人類学講座講師
- 1999年 信州大学人文学部人間情報学科非常勤講師
- 2000年 筑波大学第一学群社会学類非常勤講師
- 2001年 岡山大学文学部行動科学科社会学・文化人類学講座助教授
- 2002年 信州大学人文学部人間情報学科文化情報論講座助教授
- 2005年 名古屋大学大学院国際多元文化専攻ジェンダー論講座非常勤講師
- 2006年 東京大学大学院人文社会系研究科社会学専門分野准教授
- 2018年 11月 東京大学大学院人文社会系研究科社会学専門分野教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

社会問題の社会学

歴史社会学

b 研究課題

セクシュアリティの歴史社会学

人口減少社会論

社会問題の構築主義アプローチ

社会関係資本の実証的分析

c 概要と自己評価

概要:以下の領域を中心に研究を進めている。

- (1) 社会問題プロセスの理論化
- (2) 近代日本におけるセクシュアリティをめぐる言説の変容
- (3) 人口減少社会を前提とした制度設計・社会構想
- (4) 社会関係資本の測定を基盤にした地域再生

自己評価

(1)に関しては、少子化対策や有害コミック規制などの具体的な社会問題を取り上げ、その言説や政策の形成プロセスに関する理論形成を試みている。(2)に関しては、明治期初頭の性科学書『造化機論』の翻訳過程を追尾している。(3)については、少子化対策をやめて、人口減少を前提とした年金制度、経済成長、都市―農村間の財・サービスの分配などに関する論文をいくつか執筆した。(4)については、集落・村落レベルで社会関係資本を測定し、それが地域社会の持続可能性を生み出すかいなかに着目した研究を継続している。

d 主要業績

(1) 著書

共著、赤川学、「清内路の地域力を比較する」、吉田伸之編『山里清内路の社会構造』、349-363頁、山川出版社、2018.9

(2) 論文

赤川学、「ソーシャル・キャピタルは川崎市地域包括ケアシステムの構築に役立つか?」、『死生学・応用倫理研究』、No.24、35-51頁、2019.3

Manabu Akagawa, Does Social Capital Improve Community-based Integrated Care Systems?, Journal of Asian Sociology, Institute for Social Development and Policy Research, Seoul National University, 48(4): 509-522, 2019.12

(3) 学会発表

国内、「高田保馬の少子化論に学ぶ」、日本人口学会第70回大会企画セッション⑥、明海大学、2018.6.3

国内、「明治期の性教育言説：性情報空間の変遷に着目して」、日本人口学会第71回大会「性に関する情報の伝達と人口」、香川大学、2019.6.1

国内、「高田少子化論の進化論的基盤」、第90回日本社会学会大会テーマセッション「進化論と生物学と社会学」、甲南大学、2018.9.15

国内、「ソーシャル・キャピタルは健康と幸福度を高めるか：川崎市地域包括ケアシステムの場合」、第91回日本社会学会大会一般報告・地域社会・地域問題(2)、東京女子大学、2019.10.5

(4) その他

エッセイ：「世界一孤独？ 日本の中高年男性が絶対無視できない「悲しき未来」、現代ビジネス、2018.4.28 掲載

エッセイ：「人口減少は本当に危機か？ 大問題でないと言える「シンプルな理由」、現代ビジネス、2019.1.2 掲載

ワーキングペーパー：「ソーシャル・キャピタルと健康・幸福度の因果推論―ソーシャル・キャピタルは健康と幸福度を高めるといえるか―」、東京大学文学部社会学研究室ワーキングペーパーS-9、2019.5

エッセイ：「子供を持ちたい」と願う女性でさえ性交頻度が少ないという事実」、現代ビジネス、2019.6.26 掲載

エッセイ：「150年前の日本人はどんな「性情報」を得ていたか、常識の大転換」、現代ビジネス、2019.11.18 掲載

(5) 受賞

国内、赤川学、Manabu Akagawa、計画行政学会論説賞、計画行政学会、2018.9.7

3. 主な社会活動

(1) 学会

国内、日本社会学会、理事、2015.9～2018.9

国内、日本社会学会、社会学評論編集委員会査読委員、2018.10～

(2) 他機関での講義等

非常勤講師、慶應義塾大学文学部「社会問題の社会学」、2016.9～

非常勤講師、お茶の水女子大学文教育学部「ジェンダー論演習Ⅱ」、2018.10～2019.3

非常勤講師、早稲田大学政経学部「理論社会学」、2019.4～2019.9

(3) 学外組織（学協会、省庁を除く）委員・役員

川崎市精神保健福祉センター、「広義のひきこもり支援ニーズ調査」委員会・委員

准教授 **出口 剛司** DEGUCHI, Takeshi

1. 略歴

1993年3月 一橋大学社会学部卒業
1994年4月 東京大学大学院 社会学研究科社会学専攻 修士課程入学
1996年3月 同 人文社会系研究科社会文化研究専攻 修士課程修了
1996年4月 同 博士課程進学
2001年3月 同 博士課程単位取得退学
2001年4月 博士（社会学）学位取得（東京大学）
2001年4月 立命館大学産業社会学部助教授（～2007年3月）
2005年9月 フランクフルト大学社会研究所客員研究員（～2006年9月）
2007年4月 立命館大学産業社会学部准教授（～2008年3月）
2008年4月 明治大学情報コミュニケーション学部准教授
2011年4月 東京大学大学院人文社会系研究科准教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

理論社会学 社会学史研究

b 研究課題

- (1) フランクフルト学派の学説史研究
- (2) コミュニケーション理論、承認理論に基づく批判的社会理論の展開
- (3) 日本の社会学史の再評価と海外への紹介

c 概要と自己評価

- (1) エーリッヒ・フロムの理性概念とそれに基づく社会批判の再構成を行っている。その成果を国際エーリッヒ・フロム協会主催の国際会議で報告、論文として発表した。現在は後期フロムのナルシズム論の再評価を行う一方、後期ヒューマニズムを生成の哲学の観点から再構成する作業に取り組んでいる。
- (2) 現代資本主義の構造的特質を理論的に解明する。「資本主義的近代化のパラドックス」や現代社会がかかえる社会病理の諸相を承認論、コミュニケーション論の観点から分析している。
- (3) 欧米の社会学理論を背景に戦後日本で発展した社会学理論の独自性に注目し、その現代的意義を再評価すると同時に、国際会議の場で世界に発信している。

d 主要業績

(1) 論文・著作

出口剛司、「ポスト真実における社会学理論の可能性—批判理論における理論の機能を手がかりにして」『現代思想』vol. 45-6、pp. 234-45、2017

『大学4年間の社会学を10時間で学べる』(单著) 角川書店、2019、230頁

(2) 学会発表

国内(司会)、出口剛司、第90回日本社会学会大会シンポジウム、東京大学、2017.11.5

国際、Takeshi Deguchi、「Post-truth Politics as a Pathology of Normalcy: Beyond alienation and narcissism in the age of globalisation」、International Erich Fromm Research Conference, Berlin International Psychoanalytic University, Berlin、21th-23th June 2018

国際、Takeshi Deguchi、「Healing Power and Artificial Intelligence: How can an animal-type robot have a mind?」、New Perspectives on the Digital Revolution: Media and cultural transformations, Hawke EU Centre, the University of South Australia, Adelaide、8th August 2018

国際、Takeshi Deguchi「Power and Artificial Intelligence: How can an animal-type robot have a mind?」、2018 SNU-UT Joint Sociological Forum, Seoul National University, Seoul、9th-10th November 2018

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

非常勤講師、明治大学大学院情報コミュニケーション研究科、「社会的人間論」、2013.4～

非常勤講師、明治大学情報コミュニケーション学部、「コミュニケーション基礎」、2013.4～

非常勤講師、立教大学社会学部、「社会学史」、2013.4～

非常勤講師、中央大学法学部、「現代社会理論」、2013.9～

(2) 学会

国内、日本社会学理論会、理事(運営委員会)、2016.9～2018.9

国内、日本社会学史学会、研究担当理事、2014.6～

(3) 学外組織(学協会、省庁を除く)委員・役員

明治大学情報コミュニケーション学部ジェンダーセンター、運営委員(学外委員)、2012.1～

准教授 祐成 保志 SUKENARI, Yasushi

1. 略歴

1997年3月 東京大学文学部行動文化学科社会学専修課程卒業
1997年4月 東京大学大学院人文社会系研究科社会文化研究専攻修士課程入学
1999年3月 同 人文社会系研究科社会文化研究専攻修士課程修了
2002年3月 同 博士課程単位取得退学
2004年4月 札幌学院大学社会情報学部講師(～2006年3月)
2005年5月 博士(社会学)学位取得(東京大学)
2006年4月 札幌学院大学社会情報学部助教授
2007年4月 信州大学人文学部准教授
2012年4月 東京大学大学院人文社会系研究科准教授
2019年4月 ブリストル大学政策研究院客員研究員(～2019年9月)

2. 主な研究活動

a 専門分野

コミュニティの社会学、ハウジングの社会学、社会調査史

b 研究課題

- (1) 建造環境と社会構造の関係についての理論的・経験的研究
- (2) 国際的な社会調査史

c 概要と自己評価

2019 年度に特別研究期間を取得し、「若手研究者の国際展開事業」(東京大学)の支援により、約半年間、英国に滞在する機会を得たことで、研究は当初の構想をこえて進展した。(1) 日英のハウジングの比較において鍵となる要素として、「ハウジング・マネジメント」に着目した。日本では、住宅管理はもっぱら不動産の管理を指しているが、英国の公共賃貸住宅セクターで発展したハウジング・マネジメントには、居住者およびコミュニティに対するソーシャル・ワークが含まれる。研究成果の一端は、英語論文、国際学会を通じて発表することができた。(2) 英国の社会調査史において重要な位置を占めながら、日本においてほとんど検討が進んでいない 1930 年代の「大衆観察運動」(Mass-Observation) について、現地で資料収集を行い、日本の 1920 年代の「考現学」との比較を進めた。また、日本の住宅研究の源流と言える 1940 年前後の建築学者・西山卯三の研究活動を再検討した結果、国際的な同時代性のみならず、社会学との接点を見出すことができた。

d 主要業績

(1) 論文

祐成保志、「住居への退却、まちの再生」『新建築』新建築社、93(8)、36-39 頁、2018.8

祐成保志、「日本型ハウジング・レジームの転換」、連合総合生活開発研究所編『弱者を生まない社会へ』、35-52 頁、2019.2

祐成保志、「住宅研究というフロンティア」、住総研編『未来の住まい』柏書房、161-179 頁、2019.3

祐成保志、「大衆の観察/大衆による観察：1930 年代イギリスの考現学的実践」『現代思想』青土社、49(9)、191-203 頁、2019.7

祐成保志、「団地と「総中流」社会」、『総中流の始まり：団地と生活時間の戦後史』青弓社、126-151 頁、2019.11
Sukenari, Yasushi, Implementing the Concept of "housing support" in a Super-aged Society, *Journal of Asian Sociology*, Institute of Social Development and Policy Research, Seoul National University, 48(4): 491-508, 2019.12

祐成保志、「日本における住居社会学の形成：西山卯三『住宅問題』を読む」『都市社会研究』せたがや自治政策研究所、12、73-88 頁、2020.3

祐成保志・船戸修一・武田俊輔・加藤裕治、「村の記録」のなかの都市：テレビ・ドキュメンタリーに描かれた農村の変容」、『変容する都市のゆくえ』文遊社、349-379 頁、2020.3

(2) 学会発表

国際、Sukenari Yasushi、「Implementing the concept of "housing support" in a super-aged society」、European Network for Housing Research Conference、Harokopio University of Athens、2019.8.28

国際、Sukenari Yasushi、「Domestication of a planned residential environment」、ReVision: Strategies for Renewing Apartment Buildings & Neighbourhoods、九州大学、2019.11.26

(3) その他

Sukenari, Yasushi, Book Review: Housing in Post-Growth Society: Japan on the Edge of Social Transition, *International Journal of Japanese Sociology*, The Japan Sociological Society, 28(1): 211-213, 2019.3

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

非常勤講師、日本大学文理学部、「社会学特殊講義 3」、2018.4~2018.9、2019.10~2020.3

非常勤講師、静岡県立大学国際関係学部、「人間科学基礎論 A・B」、2018.9、2018.12

(2) 学会

国内、日本生活学会、編集委員、2014~

国内、日本社会学会、学術情報支援委員、2015~

国内、日本生活学会、理事、2016~

国内、都市住宅学会、編集委員、2018~ 理事、2020~

1. 略歴

1998年3月	東京大学文学部行動文化学科社会学専修課程卒業
1998年4月	東京大学大学院人文社会系研究科社会文化研究専攻修士課程入学
2000年3月	同 人文社会系研究科社会文化研究専攻修士課程修了
2000年4月	同 博士課程進学
2003年3月	同 博士課程単位取得退学
2003年4月	日本学術振興会特別研究員 (PD)
2006年3月	博士 (社会学) 学位取得
2006年4月	お茶の水女子大学文教育学部 講師
2007年4月	信州大学医学部保健学科 講師
2011年5月	奈良女子大学生生活環境学部生活文化学科 准教授 (～2012年3月)
2012年4月	奈良女子大学大学院生活環境科学系生活文化学領域 准教授
2018年10月	東京大学大学院人文社会系研究科 准教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

医療社会学 ケアの社会学 認知症研究

b 研究課題

- (1) 認知症をめぐる支援・運動の展開に関する経験的・理論的研究
- (2) 東日本大震災被災地域における脆弱性の抱えた個人・世帯の経験に関する実証研究
- (3) 遺伝性疾患保因者の経験・アイデンティティ・社会関係に関する経験的・理論的研究

c 概要と自己評価

(1) に関しては、日本における当事者運動や認知症をめぐる活動の経験的調査をしつつ、障害学や医療社会学における障害の社会モデルや医療化などの枠組みを参照しながら理論的な整理をして、論文や学会報告の形で成果報告を行った (一連の研究は 2020 年度に著書として出版予定である)。(2) に関しては 2012 年度から社会福祉学の研究者等と行ってきたインタビュー調査に基づく調査をテキストマイニングなどの方法も用いながら分析し、成果を著書として刊行した。(3) に関しては、以前の患者調査を踏まえて、血友病患者の家族・親族における推定保因者に対するインタビューを患者団体とともに 2019 年度から開始し、2020 年度以降の成果報告に向けて分析を進めている。

d 主要業績

(1) 論文

井口高志、「認知症ケアにおける地域の意義——認知症の人の一貫性の維持と緩和に注目して」、『保健医療社会学論集』、29 (2)、27-34 頁、2019.2

Iguchi Takashi, “How has the new image of people with dementia emerged in Japan? : An analysis of TV documentary programs in the NHK data archives”, Nara Women's University Sociological Studies, 26, 84-98, 2019.3

井口高志、「「家族介護者支援」はなぜどのように論じられたのか?」、奈良女子大学生生活文化学研究会編、『ジェンダーで問い直す暮らしと文化：新しい生活文化学への挑戦』敬文舎、209-244 頁、2019.3

井口高志、「ポスト診断時代における認知症の社会学の課題」、『家族研究年報』、44、23-42 頁、2019.7

(2) 学会発表

国内、井口高志、「レビー小体型認知症 (DLB) における「適切な対応」と「進行」の理解をめぐって—DLB の人の介護者と医療者との質疑応答のデータからの検討」、第 44 回保健医療社会学学会大会、2018.5.19

国内、井口高志、「認知症経験の変容と相互行為—新しい認知症ケア時代の社会学」、家族問題研究学会 2018 年度大会、2018.7.14

国内、井口高志、「認知症経験の変容と相互行為—ポスト診断時代の社会学的課題」、2018 年度第 4 回 ケアの人類学研究会、2018.9

国際、Mami Kubota, Yasuko Kato, Masami Kutsumi, Takashi Iguchi, Yasushi Morimura, The Demands and Challenges of DLB (Dementia with Lewy Bodies) Support Network Participants, 22nd East Asian Forum of Nursing Scholars(EAFONS), 2019.1.17

国内、井口高志、「認知症の本人の登場はいかになされ、何をもたらすのか？—認知症の人たちの「当事者宣言」が拓く課題」、第15回認知症当事者研究勉強会、2019.2.23

国内、井口高志、「認知症ケア・医療の社会的観察と実践」、第20回日本認知症ケア学会、2019.5.25

国内、井口高志、「「拡散する家族介護」への支援を考える」、第26回多文化間精神医学会、龍谷大学深草キャンパス、2019.12.1

国際、Takashi Iguchi, Dementia in Japan: how it has been understood and how this paradigm is changing, UTokyo-NTU Joint Conference, Care and Migration in Japan and Taiwan, The University of Tokyo Hongo campus, 2019.12.9

(3) その他

樋口直美・井口高志、「幻視は‘まぼろし’ではない」、「支援」編集委員会編、『支援』8、114-131頁、2018.4

井口高志、「認知症当事者本が拓くもの——2017年の著作群を中心に」、「支援」編集委員会編、『支援』8、212-224頁、2018.4

井口高志、「観察法から社会調査を考える」、奈良女子大学生生活文化化学研究会編、『ジェンダーで問い直す暮らしと文化——新しい生活文化学への挑戦』敬文舎、307-321頁、2019.3

井口高志、「XIII 家族社会学の隣接領域 3 福祉社会学」、西野理子・米村千代編、『よくわかる家族社会学』ミネルヴァ書房、144-145頁、2019.12

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

特別講演、信州大学医学部保健学科、「ヒューマンセクシュアリティ」、2018.11.8、2019.11.7

非常勤講師、奈良女子大学生生活環境学部、「家族関係論」、2019.4～2019.7

公開講座、第92回5月祭実行委員会、「認知症をめぐる諸実践の社会学」、2019.5.18

非常勤講師、関西医科大学看護学部、「家族社会学」、2019.10～2019.11

非常勤講師、九州大学文学部、「ケアの社会学」、2019.12

(2) 学会

国内、日本家族社会学会、学会誌編集委員、2016.9～2019.9

国内、日本保健医療社会学会、評議委員、2017.5～

国内、関西社会学会、学術雑誌専門委員（査読委員）、2019.10～

国内、関東社会学会、専門審査委員、2019.12～2020.3

(3) 行政

省庁、日本学術会議、科学技術政策、外部評価委員、2018.10～

自治体、東京都財務局、審査委員、2019.10～2019.11

26 社会心理学

教授 亀田 達也 KAMEDA, Tatsuya

1. 略歴

1982年	東京大学文学部卒業 (社会心理学専修課程)
1989年	University of Illinois at Urbana-Champaign, Ph.D. (Department of Psychology)
1989年	東京大学大学院社会学研究科博士課程退学
1989年4月	東京大学文学部助手
1991年4月	東洋大学社会学部講師
1994年4月	北海道大学文学部助教授
1997年7月	Fulbright fellowship (University of Colorado at Boulder, Northwestern University)
2000年4月	北海道大学大学院文学研究科教授
2001年8月	Deutscher Akademischer Austausch Dienst Research Fellow (Max Planck Institute in Berlin, Center for Adaptive Behavior and Cognition)
2008年8月	Residential Fellow, Center for Advanced Study in the Behavioral Sciences at Stanford University
2012年4月	北海道大学社会科学実験研究センター長 (兼務)
2014年10月	東京大学大学院人文社会系研究科教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

社会心理学、実験社会科学、行動生態学

b 研究課題

社会的意思決定

c 概要と自己評価

概要

人が社会場面でいうさまざまな意思決定について、以下の3つのテーマを中心に研究している。

(1) 「集合知」の認知・生態学的基盤の理解

個人のもつさまざまな情報をよりよい社会的決定のためにどのように集約するのかという問いは、21世紀の社会科学の直面する重要課題の1つである。本プロジェクトでは、近年、生物学領域と情報科学領域で大きな注目を集めている社会性昆虫の「群知能」(swarm intelligence)に関する知見を参考にしながら、人間の集合行動における「集合知」の発生可能性について検討している。人間集団において集合知の生まれる認知的・生態学的な条件について、数理モデル、コンピュータ・シミュレーション、種間比較実験、インターネット実験などを用い理論的・実証的に明らかにする。

(2) 「正義」の脳科学的・行動的基盤の理解

富や権利の配分を含む「社会のあり方」に関する価値対立は、“Occupy Wall Street”運動に示されるように、喫緊の政治的・社会的課題になっている。本プロジェクトは、「社会のあり方」に関する人間の価値判断がどのような行動・認知・神経科学的メカニズムを持つのかを検討する。人文学・社会科学で蓄積されてきた規範的理論(「あるべき行為・社会とは何か」に関する論考)との対応関係を視野に入れながら、計算論的モデリング、MRIを用いた脳画像計測、eye-trackerを用いた視線計測、末梢自律神経反応の計測、内分泌反応計測などを含む、行動・認知・神経科学の研究手法を用いて、「社会価値」がどのように獲得され、私たちの心にどのように実装されるのかを実証的に探る。

(3) 「共感性」の認知・神経基盤の理解

「ヒトの共感能力とは何か」という問いは、社会的存在としての人間を考える上で極めて重要である。痛みや恐れ・興奮が集団内で伝搬するといった「原初的な共感」は、群れ生活を営む動物が同種他個体の反応をモニターし、その反応を自らも引き受けることで、捕食者の出現などの環境変化に直ちに反応できるように身体的に準備するといった適応的機能をもつだろう。一方、ヒトに特徴的とされる「高次共感」の機能的意義についてはほとんど分かっていない。本プロジェクトでは、「痛み反応の同期化現象」を軸に、ヒトの原初的共感と高次共感の相互作用を探る。また、相手との関係に応じて共感性がどのように変化するかについて、注意配分や情報探索行動、自律神経系反応の計測

を軸に解析し、得られた結果を他の動物種と比較する。さらに、課題遂行中の脳活動を fMRI により計測することで、共感の質・量の違いと相関する脳部位を特定し、これらの脳部位の賦活パターンが行動の個人差とどのように連動するのかについても併せて解明しようとする。

自己評価

上記の3つのプロジェクトは、

- (a) 基盤研究 S 「集合行動の認知・神経・生態学的基盤の解明」 (平成 28-令和 2 年度)
 - (b) JST 戦略的創造研究推進事業 (CREST) 「脳領域/個体/集団間のインタラクション創発原理の解明と適用」 (平成 29 年 9 月-令和 5 年 3 月 研究代表 津田一郎・中部大学教授)
 - (c) 科学研究費・新学術領域研究 (研究領域提案型) 「ヒト社会における共感性」 (平成 25-29 年度)
- の支援を受けて行われた。いずれも、生物学・脳科学・情報科学・複雑系科学・経済学・倫理学・法哲学の研究者とのコラボレーションを軸に、PD・大学院生などの若手をチームメンバーとするプロジェクト型研究である。数年間に亘る密接な協同の結果、文理あるいは専門の壁を超えた共通理解が大きく進み、共通概念のもとに研究を展開できる段階に達している。下記に見るように、その成果の一端は、国際誌の論文や、ハンドブック・辞典のチャプターとして公刊されている。今後は新しい計測・モデル技法を取り入れつつ、コラボレーションをさらに拡充する。

d 主要業績

(1) 論文

- Bryant, G.A., Fessler, D.M., …Kameda, T., Kuroda, K. …, & Yi Zhou, 「The perception of spontaneous and volitional laughter across 21 societies」, 『Psychological Science』, 29(9), 1515-1525 頁, 2018
- Muthukrishna, M., Henrich, J., Toyokawa, W., Hamamura, T., Kameda, T., & Heine, S., 「Overconfidence is universal? Elicitation of genuine overconfidence (EGO) procedure reveals systematic differences across domain, task knowledge, and incentives in four populations」, 『PLoS ONE』, 13(8), e0202288 頁, 2018
- Ogawa, A., Ueshima, A., Inukai, K., & *Kameda, T., 「Deciding for others as a neutral party recruits risk-neutral perspective-taking: Model-based behavioral and fMRI experiments」, 『Scientific Reports』, 8, 12857 頁, 2018
- 齋藤美松・亀田達也, 「世代間衡平問題の解決に高齢層が果たす役割」, 『学術の動向』, 23, 31-33 頁, 2018
- Kim, H., Toyokawa, W., & Kameda, T., 「How do we decide when (not) to free-ride? Risk tolerance predicts behavioral plasticity in cooperation」, 『Evolution and Human Behavior』, 40, 55-64, . Doi: 10.1016/j.evolhumbehav.2018.08.001 頁, 2019
- Ogawa, A., & Kameda, T., 「Dissociable roles of left and right temporoparietal junction in strategic competitive interaction」, 『Social Cognitive and Affective Neuroscience』, nsz082, doi: 10.1093/scan/nsz082, 2019
- Kawada, A., Nagasawa, M., Murata, A., Mogi, K., Watanabe, K., Kikusui, T., & Kameda, T., 「Vasopressin enhances human preemptive strike in both males and females」, 『Scientific Reports』, 9(1), 9664. doi: 10.1038/s41598-019-45953-y, 2019
- Kuroda, K., & Kameda, T., 「You watch my back, I'll watch yours: Emergence of collective risk monitoring through tacit coordination in human social foraging」, 『Evolution and Human Behavior』, 40, 5, 427-435. doi: 10.1016/j.evolhumbehav.2019.05.004 頁, 2019
- Saito, Y., Ueshima, A., Tanida, S., & Kameda, T., 「How does social information affect charitable giving?: Empathic concern promotes support for underdog recipient」, 『Social Neuroscience』, doi: 10.1080/17470919.2019.1599421, 2019
- Murata, A., Nishida, H., Watanabe, K. & Kameda, T., 「Convergence of physiological responses to pain during face-to-face interaction」, 『Scientific Reports』, 10, 450, doi:10.1038/s41598-019-57375-x, 2020
- 亀田達也, 「行動科学の視点から見た行動経済学」, 『日本労働研究雑誌』, 714, 28-38 頁, 2020

(2) 学会発表

- 国際, Kuroda, K., & Kameda, T., 「Emergence of cooperative division of labor in dyadic foraging under risk」, Human Behavior and Evolution Society The 30th Annual Meeting, Amsterdam, Netherlands, 2018
- 国際, Ueshima, A., & Kameda, T., 「What am I supposed to say?: Anticipating group discussion promotes cognitive consistency in distributive choices for others」, The 40th Annual Meeting of the Cognitive Science Society, Madison, USA., 2018
- 国内, 河田淳・永澤美保・村田藍子・茂木一孝・渡邊克己・菊水健史・亀田達也, 「アルギニンヴァソプレシンによる防衛的な攻撃行動の促進」, 日本人間行動進化学会第 11 回大会, 高知工科大学, 2018
- 国内, 河田淳・永澤美保・村田藍子・茂木一孝・渡邊克己・菊水健史・亀田達也, 「アルギニンヴァソプレシンによる先制攻撃行動の促進」, 日本社会心理学会第 59 回大会, 追手門学院大学, 2018
- 国内, 金恵麟・亀田達也, 「社会情報は偏見に基づく推定バイアスを低減できるか?—情報カスケードパラダイムを用いた実験的検討—」, 第 22 回実験社会科学カンファレンス, 名古屋市立大学, 2018

- 国内、金恵璘・亀田達也、「社会情報は偏見に基づく推定バイアスを低減できるか？—情報カスケード実験による検討—」、日本人間行動進化学会第11回大会、高知工科大学、2018
- 国内、黒田起吏・大槻久・亀田達也、「Speed-accuracy tradeoff 状況における二者の意思決定プロセス」、日本人間行動進化学会第11回大会、高知工科大学、2018
- 国内、黒田起吏・亀田達也、「リスク下の社会的採餌における協力的な分業の創発 認知-生理-行動実験による検討」、日本社会心理学会第59回大会、追手門学院大学、2018
- 国内、内藤碧・増田直紀・亀田達也、「社会的ネットワーク構造が集合知の創発に与える影響—時間的変動環境における集合知の検討—」、日本人間行動進化学会第11回大会、高知工科大学、2018
- 国内、内藤碧・増田直紀・亀田達也、「社会的ネットワーク構造が集合知の創発に与える影響—時間的変動環境における集合知の検討—」、第22回実験社会科学カンファレンス、名古屋市立大学、2018
- 国内、Ogawa, A., Kameda, T.、「Neural correlates of recognition of other's inference of own belief in competitive strategic choices」、第2回ヒト脳イメージング研究会、玉川大学、2018
- 国内、Ogawa, A., Kameda, T.、「Striatal activation for winning-percentage-maximization in competitive situation」、脳と心のメカニズム 第18回冬のシンポジウム、ルスツリゾート、2018
- 国内、小倉有紀子・豊巻敦人・久住一郎・松島俊也・亀田達也、「Effect of producer-scrouter structure on foraging behavior in humans」、脳と心のメカニズム 第18回冬のワークショップ、ルスツリゾート、2018
- 国内、齋藤美松・亀田達也、「Warm heart, but Cool head—熟慮・計算に基づいた向社会行動の可能性」、新学術領域研究「共感性の進化・神経基盤」第2回若手研究者合宿、ラフォーレリゾート修善寺研修センター、2018
- 国内、上島淳史・亀田達也、「社会的分配をめぐる合意形成の経験は平等原理とマキシミン原理の区別を促すか：二者間での相互作用場面を用いた実証研究」、日本行動経済学会第12回大会、慶應義塾大学、2018
- 国内、上島淳史・亀田達也、「平等主義的分配は他者との相互作用場面において支持されるか (2) —合意形成場面における情報探索プロセスと発話の分析—」、日本人間行動進化学会第11回大会、高知工科大学、2018
- 国内、上島淳史・亀田達也、「話し合いの経験が平等原理とマキシミン原理の区別を促す：二者間の合意形成場面を用いた実験研究」、第22回実験社会科学カンファレンス、名古屋市立大学、2018
- 国内、上島淳史・亀田達也、「社会的インタラクションの予期が分配の決定の一貫性を高める」、日本認知科学会第35回大会、立命館大学、2018
- 国内、上島淳史・小川昭利・大飼佳吾・亀田達也、「他者のためのリスク決定を支える認知過程の検討—マウスラボとfMRIによる実験研究—」、日本社会心理学会第59回大会、追手門学院大学、2018
- 国内、齋藤美松・亀田達也、「持続可能な社会形成に高齢層が果たす役割の検討」、第1回フューチャー・デザイン・ワークショップ、総合地球環境学研究所（京都市）、2018.1.27
- 国際、Naito, A., Masuda, N., & Kameda, T.、「Social network and collective intelligence under non-stationary uncertain environment. Talk in an organized symposium」、The 7th International Congress on Cognitive Neurodynamics, Alghero, Italy, 2019.9.29
- 国際、Kameda, T., Saito, Y., Kamijo, Y., & Ueshima, A.、「When individual benevolent actions hinder collective welfare: Experiments on people's volunteer behaviors for real earthquake victims」、National Taiwan University - University of Tokyo Joint Workshop Experimental Social Sciences, University of Tokyo, 2019.12.21
- (3) 会議主催(チェア他)
- 国内、「Deciphering individuals' interactions involved in the coordination of three-dimensional nest construction in ant colonies」新・社会心理学コロキウム (Dr. Guy Theraulaz 講演)、主催、東京大学、2018.9.10
- 国際、NTU-UT Joint Workshop: Experimental Social Sciences、主催、東京大学、2018.12.21-23
- (4) 受賞
- 国内、上島淳史・亀田達也、第22回実験社会科学カンファレンス・ポスター賞、第22回実験社会科学カンファレンス、2018
- 国内、内藤碧・増田直紀・亀田達也、第22回実験社会科学カンファレンスポスター賞、第22回実験社会科学カンファレンス、2018
- 国内、上島淳史・亀田達也、2018年度若手研究者国際会議発表助成、日本認知科学会、2018
- 国内、上島淳史・亀田達也、行動経済学会ポスター報告奨励賞(一般部門)、日本行動経済学会第12回大会、2018
- 国内、上島淳史・亀田達也、若手ポスター発表賞、日本人間行動進化学会第11回大会、2018
- 国内、河田淳・永澤美保・村田藍子・茂木一孝・渡邊克巳・菊水健史・亀田達也、若手口頭発表賞、日本人間行動進化学会第11回大会、2018
- 国内、上島淳史・亀田達也、優秀発表賞、日本心理学会第83回大会、2019

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

経済同友会 産業懇談会「第4 木曜グループ」2019年4月例会、「モラルの起源を考える―実験社会科学からの問い」、2019.4

北海道大学人間知・脳・AI研究教育センター開所式、「集合知の発生条件を考える」、2019.7

日産自動車株式会社 総合研究所、「集団のインタラクション創発原理を考える」、2019.9

司法研修所・令和元年度民事通常専門研究会2（合議充実）、「合議と社会心理学」、2019.10

【行動理解】社会システムの高度化に資する人間の行動理解とマネジメント技術の創出戦略目標ワークショップ
文部科学省研究開発局第一会議室、「科学技術と人文社会科学連携による“良き社会システム”のデザイン：実験社会科学の視点」、2019.12

課題設定による先導的人文学・社会科学研究推進事業シンポジウム、「「社会価値」に関する規範的・倫理的判断のメカニズムとその認知・神経科学的基盤の解明」、2020.2

JST 未来社会創造事業人間行動・社会活動データ等の高度利活用技術により新たな価値を創造する情報社会の実現
ワークショップ、「行動科学と情報科学の連携による“良き社会システム”のデザインに向けて：実験社会科学の視点」、2020.2

(2) 学会

社会心理学会理事、2017.3～2019.3

人間行動進化学会理事

(3) 行政

学術会議（第一部）、会員、2014～

学術会議・心理学教育学委員会、科学者委員会、心理学教育学委員会委員長、科学者委員会委員、実験社会科学分科
会委員長、2018～

(4) 学外組織(学協会、省庁を除く)委員・役員

Psychological Review (American Psychological Association)、Consulting Editor、2018～

教授 唐沢 かおり KARASAWA, Kaori

1. 略歴

1992年	University of California, Los Angeles Ph.D
1992年	京都大学大学院文学研究科博士後期課程
1992年4月	名古屋明德短期大学講師
1995年4月	日本福祉大学情報社会科学部助教授
1999年6月	名古屋大学情報文化学部助教授
2001年4月	名古屋大学大学院環境学研究科助教授
2006年10月	東京大学大学院人文社会系研究科准教授
2010年8月	東京大学大学院人文社会系研究科教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

社会心理学

b 研究課題

- 1) Mind reading and moral judgments
- 2) Beliefs in free will and self-regulation
- 3) Methodology and Science communication

c 概要と自己評価

概要

1) Mind reading and moral judgments : 近年の社会心理学は、私たちが道徳的事柄、公正さに関心を抱く「モラル・エージェント」であるという人間観を提出している。この研究課題は、他者の心的状態（意図・動機・態度・感情など）の推論に基づき他者を「裁き」の視線で評価し、そこでの評価に基づき、「援助、非難、許し」などの道徳的な態度・行動を他者に向ける点に着目し、モラル・エージェントを支える社会的認知過程を解明することを目指す。

2) Beliefs in free will and self-regulation : 本研究課題は、自由意志信念や決定論的信念が自己制御的な行動や、自己・他者の行動理解に及ぼす影響について検討するものである。決定論的信念としては、遺伝子決定論、科学決定論、社会決定論などを対象とし、自由意志信念とともにそれらの認知構造の解明を目指すと共に、自己制御的な対人判断や行動を促進、抑制する心的メカニズムについて検討する。

3) Methodology and Science communication : 本研究課題では、「科学知・実践知・人文知」の融合領域として社会心理学を位置づけた上で、その立ち位置からの方法論の批判的検討、および、科学的成果を市民に伝達する際の諸問題についての検討を行う。特にAI、ロボット、自動運転など、新たな技術導入による影響や社会受容を対象に議論を進める。加えて科学技術に関するESLI・RRIに対する社会心理学の貢献を探る活動を行う。

自己評価

これらの研究課題について、科学研究費などの支援も得て、活発にデータ収集活動を行い、その成果を学会発表、論文という形で発信している。その多くは大学院生との共同研究であり、後継者育成についても努力している。1)については、その成果を著書にまとめたとともに、3)と融合させ、「ロボット」「人工知能」など、人以外の対象に対する心的状態の推論に議論を拡張し、応用可能性を検討するための研究プロジェクトを工学関係の研究者と遂行している。また日立東大ラボなどの活動を通して、企業に所属する研究者と共に、技術の社会実装、社会受容についても考察を進めている。2)については「自由意志の有無」に関する科学コミュニケーション、また哲学者との共同研究として実験哲学的な概念分析へと議論を展開している。また、認識論についての大規模な国際比較研究のチームに日本のリーダーとして所属しており、国際交流も積極的に進めている。以上の研究は、科学哲学、工学などの研究者と進めているが、今後は、さらに研究のネットワークを広げるとともに、他分野に対しても積極的な研究成果発信に努め、融合的領域としての社会心理学の基盤形成に尽力したい。

d 主要業績

(1) 著書

Machery, E., Stich, S., Rose, D., Chatterjee, A., Karasawa, K., Struchiner, N., Sirkker, S., Usui, N., & Hashimoto, T., 『Gettier was framed. In S. Stich, M. Mizumoto, & E. McCready (Eds.), Epistemology for the Rest of the World (pp. 123-148)』, New York: Oxford University Press, 2018

唐沢かおり、「幸福への課題：個と社会の調和に向けて」、日立東大ラボ（編）『Society 5.0：人間中心の超スマート社会』, pp.272-284, 日本経済新聞出版社, 2018

唐沢かおり、「ステレオタイプと偏見」、竹村和久（編）『公認心理師の基礎と実践 ①社会・集団・家族心理学』, pp. 47-60, 遠見書房, 2018

唐沢かおり、「高齢者」、北村英哉・唐沢穰（編）『偏見や差別はなぜ起こる?』, pp.203-219, ちとせプレス, 2018

編著、戸田山和久・唐沢かおり、『概念工学 宣言！ 哲学×心理学による知のエンジニアリング』, 名古屋大学出版会, 2019

(2) 論文

田戸岡好香・樋口収・唐沢かおり、「食品のネガティブイメージにステレオタイプ抑制が及ぼす影響」、『心理学研究』, 89, 22-28 頁, 2018

Hashimoto, T., & Karasawa, K., 「Impact of consumer power on consumer's reactions to corporate transgression.」, 『PLoS One』, 13, 2018

白岩祐子・唐沢かおり、「死因究明における死亡時画像診断(Ai)の意義：司法解剖を経験した交通死遺族との面接にもとづく検討」、『人間環境学研究』, 16, 25-34 頁, 2018

Cova, F., Machery, E., Stich, S., Rose, D., Olivola, C. Y., Alai, M., Angelucci, A., Bermiūnas, R., Buchtel, E. E., Chatterjee, A., Cheon, H., Cho, I.-R., Cohnitz, D., Dranseika, V., Lagos, Á. E., Ghadakpour, L., Grinberg, M., Hannikainen, I., Hashimoto, T., Horowitz, A., Hristova, E., Jraissati, Y., Kadreva, V., Karasawa, K., Kim, H., Kim, Y., Lee, M., Mauro, C., Mizumoto, M., Moruzzi, S., Omelas, J., Osimani, B., Romero, C., Rosas Lopez, A., Sangoi, M., Sereni, A., Songhorian, S., Sousa, P., Struchiner, N., Tripodi, V., Usui, N., Vázquez del Mercado, A., Volpe, G., Vosgerichian, H. A., Zhang, X., & Zhu, J., 『De pulchritudine non est disputandum? A cross-cultural investigation of the alleged intersubjective validity of aesthetic judgment』, 『Mind & Language』, 2018

- 齋藤真由・白岩祐子・唐沢かおり、「大学生における司法参加意欲の規定因：要因関連モデルを用いた検討」、『実験社会心理学研究』、58、1-14 頁、2018
- Hashimoto, T., Karasawa, K., Hirayama, K., Wada, M., & Hosaka, H., 「Community Proactivity in Disaster Preparation: Research Based on Two Communities in Japan」、『Journal of Disaster Research』、13、755-766 頁、2018
- ターン有加里ジェシカ・村田光二・唐沢かおり、「犯罪者の子どもと連合的スティグマ—遺伝的本質主義の観点から—」、『人間環境学研究』、16、77-82 頁、2018
- 白岩祐子・小林麻衣子・唐沢かおり、「犯罪被害者遺族による制度評価—被害者参加制度・意見陳述制度に着目して—」、『犯罪心理学研究』、56、105-115 頁、2018
- Ohtaka, M., & Karasawa, K., 「Perspective-taking in families based on the social relations model」、『実験社会心理学研究』、58、111-115 頁、2019
- ターン有加里ジェシカ・橋本剛明・Manfred Schmitt・唐沢かおり、「公正感受性尺度日本語版 (JSI-J) の作成」、『心理学研究』、印刷中、2019
- Yukari Jessica Tham, Takaaki Hashimoto, and Kaori Karasawa, 「The positive and negative effects of justice sensitivity and justice-related emotions in the volunteer's dilemma」、『Personality and Individual Differences』、In press、2019
- 福本都・橋本剛明・唐沢かおり、「争いの被害者のパーソナリティと赦し—視点取得の効果に着目して—」、『人間環境学研究』、17、17-24 頁、2019
- Tanibe, T., Hashimoto, T., Tomabechi, T., Masamoto, T., & Karasawa, K. 「Attributing mind to groups and their members on two dimensions.」、『Frontiers in Psychology』、10、840、2019
- 白岩祐子・齋藤真由・唐沢かおり、「司法解剖の告知による死者の非人間化：心の知覚理論にもとづく検討」、『死生学・応用倫理研究』、24、39-57 頁、2019
- 福本都・橋本剛明・唐沢かおり、「争いの被害者のパーソナリティと赦し—視点取得の効果に着目して—」、『人間環境学研究』、17、17-24 頁、2019
- Tham, Y. J., Hashimoto, T., & Karasawa, K., 「The positive and negative effects of justice sensitivity and justice-related emotions in the volunteer's dilemma」、『Personality and Individual Differences』、151(1), 109501、2019
- ターン有加里ジェシカ・橋本剛明・Manfred Schmitt・唐沢かおり、「公正感受性尺度日本語版 (JSI-J) の作成」、『心理学研究』、90、503-512 頁、2019
- Hannikainen, I. R., Machery, E., Rose, D., Stich, S., Olivola, C. Y., Sousa, P., Cova, F., Buchtel, E. E., Alai, M., Angelucci, A., Bermiūnas, R., Chatterjee, A., Cheon, H., Cho, I., Cohnitz, D., Dranseika, V., Lagos, Á. E., Ghadakpour, L., Grinberg, M., Hashimoto, T., Horowitz, A., Hristova, E., Jraissati, Y., Kadreva, V., Karasawa, K., Kim, H., Kim, Y., Lee, M., Mauro, C., Mizumoto, M., Moruzzi, S., Ornelas, J., Osimani, B., Romero, C., Rosas, A., Sangoi, M., Sereni, A., Songhorian, S., Struchiner, N., Tripodi, V., Usui, N., del Mercado, A. V., Volpe, G., Vosgerichian, H. A., Zhang, X., Zhu, J., 「For whom does determinism undermine moral responsibility? Surveying the conditions for free will across cultures」、『Frontiers in Psychology』2019

(3) 学会発表

- 国内、福本都・橋本剛明・唐沢かおり、「争いの被害者のパーソナリティと赦し：視点取得の効果に着目して」、日本社会心理学会第 59 回大会、追手門学院大学、2018.8.28
- 国内、ターン有加里ジェシカ・村田光二・唐沢かおり、「犯罪者の子どもと連合的スティグマ：遺伝的本質主義の観点から」、日本社会心理学会第 59 回大会、追手門学院大学、2018.8.28
- 国内、森芳竜太・白岩祐子・唐沢かおり、「炎上加担者ほどのような人物か：『広めること』に着目して」、日本社会心理学会第 59 回大会、追手門学院大学、2018.8.28
- 国内、唐沢かおり、「『心』の概念工学」、日本社会心理学会第 59 回大会、追手門学院大学、2018.8.28
- 国内、笠原伊織・唐沢かおり、「自由意志信念が量刑判断に及ぼす影響：顕在的動機との関連に着目して」、日本社会心理学会第 59 回大会、追手門学院大学、2018.8.29
- 国内、谷辺哲史・唐沢かおり、「介護ロボットの生物らしさの知覚が利用意図に与える影響」、日本社会心理学会第 59 回大会、追手門学院大学、2018.8.29
- 国内、白岩祐子・栗本真奈・唐沢かおり、「形見における両価性：死別の受容との関係から」、日本グループ・ダイナミックス学会第 65 回大会、神戸大学、2018.9.8
- 国内、谷辺哲史・橋本剛明・苔米地飛・正本拓・唐沢かおり、「集団の実体性が集団への心の帰属に与える影響」、日本グループ・ダイナミックス学会第 65 回大会、神戸大学、2018.9.9
- 国内、森芳竜太・橋本剛明・唐沢かおり、「『制裁への不十分感』が第三者の制裁行動に及ぼす影響」、日本グループ・ダイナミックス学会第 65 回大会、神戸大学、2018.9.9

- 国内、唐沢かおり、「Society 5.0 と心理学：IT システムと社会規範について」、日本心理学会第 82 回大会、仙台国際センター、2018.9.25
- 国内、谷辺哲史・佐藤由依・唐沢かおり、「援助依頼への曖昧なフィードバックの解釈における受容期待の効果」、日本心理学会第 82 回大会、仙台国際センター、2018.9.26
- 国内、唐沢かおり、「日本心理学会におけるジェンダー平等の現状と課題：社会心理学の現状」、日本心理学会第 82 回大会、仙台国際センター、2018.9.27
- 国際、Karasawa, K., 「Human-robot interaction and perception of subjective state in a robot」、International Workshop on Morality and Robots: Moral HRI、Meiji University、2018.11.30
- 国際、Tham, Y., Hashimoto, T., & Karasawa, K., 「Egoistic Motives of Concerning Injustice for Others: Justice Sensitivity and Self-Consciousness.」、The Society for Personality and Social Psychology Annual Convention、Portland, OR、2019.2.7
- 国際、Tanibe, T., Zemba, Y., & Karasawa, K., 「Mind Attribution to Social Robots and Elderly Care」、The Society for Personality and Social Psychology Annual Convention、Portland, OR、2019.2.9
- 国際、Hashimoto, T., & Karasawa, K., 「Effects of Agency on Morally Instrumental Harm: A Mouse-Tracking Investigation.」、The Society for Personality and Social Psychology Annual Convention、Portland, OR、2019.2.9
- 国際、Hashimoto, T., & Karasawa, K., 「General/Personal Just World Beliefs as Determinants of Attitudes toward Victim of Perpetration.」、International Convention of Psychological Science、Paris, France、2019.3.7
- 国際、Tham, Y. J., Hashimoto, T., Schmitt, M., and Karasawa, K., 「Development of a Japanese version of the Justice Sensitivity Inventory (JSI-J)」、The 9th Asian Conference on Psychology & the Behavioral Sciences、Tokyo, Japan、2019.3.21
- 国際、Tham, Y. J., Hashimoto, T., Shiraiwa, Y., and Karasawa, K., 「Who “volunteers”? The effect of justice sensitivity in a volunteer’s dilemma at a university dorm」、The 9th Asian Conference on Psychology & the Behavioral Sciences、Tokyo, Japan、2019.3.23
- 国内、唐沢かおり、「Society 5.0 を応用哲学する：IT システムと社会規範(2)」、応用哲学会第 11 回年次大会、京都大学、2019.4.28
- 国内、唐沢かおり、「データ駆動社会のリスクについて—「人間中心」社会の実現に向けたデータ活用のあり方—」、第 55 回幹事技術フォーラム「Society5.0 が実現するデータ駆動型まちづくり—展望と課題—」、日本大学、2019.5.28
- 国内、ターン有加里ジェシカ・村田光二・唐沢かおり、「血縁関係に対する潜在的態度と顕在的態度」、日本認知科学会第 36 回大会、静岡大学、2019.9.5
- 国内、唐沢かおり、「高等学校への心理学教育の導入をめぐる」、日本心理学会第 83 回大会、立命館大学、2019.9.12
- 国内、唐沢かおり、「ワーキングメモリの測定と概念化」、日本心理学会第 83 回大会、立命館大学、2019.9.13
- 国内、唐沢かおり、「データ活用による住民のためのまちづくりにおける社会心理学の貢献を探る」、日本グループ・ダイナミクス学会第 66 回大会、富山大学、2019.10.19
- 国内、谷辺哲史・唐沢かおり、「自動運転による事故とメーカーへの責任帰属」、日本グループ・ダイナミクス学会第 66 回大会、富山大学、2019.10.19
- 国内、橋本剛明・唐沢かおり、「道徳的ジレンマ判断に行為者性と自己制御が与える影響—マウストラッキングによる意思決定過程の検討—」、日本グループ・ダイナミクス学会第 66 回大会、富山大学、2019.10.29
- 国内、苫米地飛・唐沢かおり、「自由意志信念とその関連信念が自己コントロールに与える影響」、日本グループ・ダイナミクス学会第 66 回大会、富山大学、2019.10.29
- 国内、白岩祐子・堀江宗正・唐沢かおり、「日本人の死後観—死後生はどのように信じられているか—」、日本社会心理学学会第 60 回大会、立正大学、2019.11
- 国内、唐沢かおり、「Society5.0 の課題と社会心理学の貢献」、日本社会心理学学会第 60 回大会、立正大学、2019.11.10
- 国内、谷辺哲史・膳場百合子・唐沢かおり、「ロボットに対する心の知覚の 2 次元構造と利用意図—介護場面におけるコミュニケーションロボットの利用を題材とした検討—」、日本社会心理学学会第 60 回大会、立正大学、2019.11.10
- 国内、ターン有加里ジェシカ・橋本剛明・唐沢かおり、「ボランティアのジレンマにおける構成感受性の正の影響と負の影響—「誰かがやらなければいけない」状況での行動意思の個人差—」、日本社会心理学学会第 60 回大会、立正大学、2019.11.10
- 国内、苫米地飛・唐沢かおり、「遺伝子に基づく説明が責任帰属に与える影響—遺伝子本質主義の態度に着目して—」、日本社会心理学学会第 60 回大会、立正大学、2019.11.10

国際、Tham, Y., Hashimoto, T., Shiraiwa, Y., & Karasawa, K.、「Take one for the team!」 The positive and negative effects of justice sensitivity in a volunteer's dilemma in workplace scenarios」、The 13th biennial Asian Association of Social Psychology, Taipei, 2019.7.12

国際、Tham, Y. J., Hashimoto, T., & Karasawa, K.、「How people evaluate volunteers and shirkers in the volunteer's dilemma? The effect of perceived cost of volunteering」 The Society for Personality and Social Psychology Annual Convention, New Orleans, 2020.2.28

(4) 啓蒙

唐沢かおり、「心を読むことをめぐって—付度の心理学」、『心と社会』、183、99-104 頁、2018

唐沢かおり、「非人間化—ひととして尊重しないこと—をめぐって」、『TASC Monthly』、512、6-12 頁、2018

(5) 受賞

国内、唐沢かおり、日本社会心理学会出版賞、日本社会心理学会、2018.8.28

3. 主な社会活動

(1) 学会

国内、日本社会心理学会、会長、2019.4～

国内、日本社会心理学会、常任理事、2018.4～2019.3

国内、応用哲学会、理事、2018.6～

国内、科学哲学会、理事、2019.4～

国内、科学基礎論学会、理事、2018.4～

国内、日本心理学会、代議員、2018.4～

(2) 行政

自治体、消防庁、科学技術政策、火災予防審議会委員、2018.7～

(3) 学外組織（学協会、省庁を除く）委員・役員

日本学術会議（第一部）、連携会員、2018.4～

日本学術振興会学術システム研究センター専門研究員、2018.4～

教授 村本 由紀子 MURAMOTO, Yukiko

1. 略歴

1984年4月	東京大学文科Ⅲ類入学
1988年3月	東京大学文学部社会心理学専修課程卒業
1988年4月	株式会社 日本長期信用銀行 入行
1992年4月	東京大学大学院社会学研究科社会心理学専攻修士課程入学
1994年3月	同 修了（修士（社会心理学））
1994年4月	東京大学大学院社会学研究科社会心理学専攻博士課程進学
1997年3月	東京大学大学院人文社会系研究科社会文化研究専攻博士課程単位取得退学
1998年4月	京都大学総合人間学部基礎科学科 助手（2000年3月迄）
1999年3月	東京大学大学院人文社会系研究科 博士（社会心理学）取得
2000年4月	岡山大学文学部行動科学科 助教授
2001年4月	岡山大学大学院文化科学研究科産業社会文化学専攻 助教授（兼任）
2004年4月	横浜国立大学経営学部 助教授
2005年4月	横浜国立大学大学院国際社会科学研究科 助教授
2007年4月	横浜国立大学大学院国際社会科学研究科 准教授
2011年4月	横浜国立大学大学院国際社会科学研究科 教授
2011年10月	東京大学大学院人文社会系研究科 准教授
2018年4月	東京大学大学院人文社会系研究科 教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

社会心理学

b 研究課題

心と社会環境の相互構成過程の探究

- 1) 多元的無知による集団規範の維持過程
- 2) 文化的慣習の社会生態学的基盤
- 3) 組織文化・風土をめぐる諸問題

c 概要と自己評価

1) 集団規範の生成と再生産過程…人は周囲の他者の行動を観察し、特定の行動が共有されていると感じることによって、「規範」の存在を知覚する。人はその知覚に基づき、たとえそれが自らの選好とは異なっているとしても、規範にしたがった行動をとる傾向がある。この行動がさらに他者によって観察されることで、やがて、実際には誰も望んでいないはずの規範が予言の自己成就的に維持・再生産される。こうした「多元的無知」現象の共同主観的な相互規定メカニズムを検討することは、心の社会・文化的起源を探るうえで重要な意味をもつと考えられる。私たちは、実験室内にミニマルな規範伝達の連鎖を作り出すことで、このメカニズムに迫る試みを行っている。また、多元的無知の生起や伝播に影響を及ぼす社会環境の特質の探究も進めている。

2) 文化的慣習の社会生態学的基盤…ある社会や集団において、特定の慣習や思考様式が共有され、維持されている理由について体系的な検討を行うには、その慣習や思考様式を取り巻く生態環境の特質と歴史、環境に適応する過程で作られた特有の社会構造や人間関係のありよう、それらの維持・再生産に寄与する個々人の心理や行動の特質、といった諸変数間の関係を丹念に探り、描き出すことが必要となる。私たちは、社会の現場における慣習や思考様式の「事例」に焦点を当て、マイクロ・エスノグラフィーの研究法論を用いてその生成・維持過程を継時的に追跡する試みを行っている。

3) 組織文化・風土をめぐる諸問題…国や民族といった大きなレベルの文化に比して、小規模で人の入れ替わりが頻繁に行われる企業組織の文化は、変化プロセスの把握が比較的容易であるため、心と文化に関わる理論構築に向けた検証が行いやすいという利点がある。私たちのこれまでの研究では、強い組織文化は組織変革にとって正負両面の効果をもつ（生産性向上のための学習を促進する一方で、環境変化に対応した柔軟な変革を抑制しうる）ことが示された。現在はさらに視野を広げ、各種の人事制度（ハード）と文化・風土（ソフト）の相互作用の様相や、それらが従業員の心理・行動に与える多面的な影響過程についての検討を行っている。

自己評価

研究の実施にあたっては、研究室所属の大学院生はもとより、国内外の研究者（経営学・社会学・人類学等の関連他領域を含む）とも広く連携して、国際的・学際的な視野に立つ共同研究プロジェクトとしての展開に努めている。一部のテーマに関しては科学研究費の助成を受けている。いずれの研究テーマに関しても、その成果は随時、学会発表および学術論文として発信している。また、企業や地域共同体など、社会の現場に根差した研究を手がけていることから、実社会への研究成果の還元と、産学連携にも努めている。

d 主要業績

(1) 著書

村本由紀子、「社会と個人」、繁樹算男（編）『公認心理師の基礎と実践：②心理学概論』、pp.161-176、遠見書房、2018

村本由紀子、「インフォーマル・インタビュー」「インフォーマント」「データ収集と分析の往復」「フォーマル・インタビュー」、pp.11-12, 117, 147-148、能智正博他（編）『質的心理学辞典』、新曜社、2018

池田謙一・唐沢穰・工藤恵理子・村本由紀子、『New Liberal Arts Selection 社会心理学（補訂版）』、有斐閣、482pp.、2019

(2) 論文

Daniel A. Effron, Hazel Rose Markus, Lauren M. Jackman, Yukiko Muramoto, & Hamdi Muluk, 「Hypocrisy and culture: Failing to practice what you preach receives harsher interpersonal reactions in independent (vs. interdependent) cultures.」、『Journal of Experimental Social Psychology』、76、371-384 頁、2018.5

正木郁太郎・村本由紀子、「性別ダイバーシティの高い職場における職務特性の心理的影響：仕事の相互依存性と役割の曖昧性に着目して」、『経営行動科学』、30、133-149 頁、2018.7

鈴木啓太・岡蒼透・村本由紀子、「実体理論者が努力を重視するとき：他者の能力評価における評価者の暗黙理論と努力情報の効果」、『人間環境学研究』、16、83-88 頁、2018.12

岩谷舟真・正木郁太郎・村本由紀子、「労働市場における個人のパフォーマンスと流動性の関連について：組織風土・移動コストの調整効果に着目して」、『経営行動科学』、31、101-116 頁、2020

Keita Suzuki, Tomoya Yoshino, and Yukiko Muramoto, 「The effects of a selection system and implicit theories on individual effort.」、『Japanese Journal of Experimental Social Psychology』、(in press)、2020

(3) 学会発表

国際、Ikutaro Masaki & Yukiko Muramoto, 「The joint effect of diversity climate and value diversity on employees' motivation for a promotion: A case of global manufacturing company in Japan.」、The 29th International Congress of Applied Psychology, Montreal, Canada, 2018.6.27

国際、Keita Suzuki & Yukiko Muramoto, 「The effects of implicit theories and task-switching cost on individuals' performance of a task.」、The 29th International Congress of Applied Psychology, Montreal, Canada, 2018.6.29

国際、Shuma Iwatani, Kazumu Takahashi, & Yuiko Muramoto, 「Social mobility and the fear of bad reputation.」、The 29th International Congress of Applied Psychology, Montreal, Canada, 2018.6.30

国際、Keita Suzuki, Yukiko Muramoto, & Aoto Oka, 「How do incremental and entity theorists perceive the relationship between other's effort and outcome?」、The 24th Congress of the International Association of Cross-Cultural Psychology, Guelph, Canada, 2018.7.3

国際、Yukiko Muramoto, 「Effects of institutional factors and leadership structures on workplace norms and employees' work attitude in Japan.」、The 24th Congress of International Association for Cross-Cultural Psychology, Guelph, Canada, 2018.7.5

国内、岩谷舟真・村本由紀子・小泉喜之介・芹澤鮎子・栗本真奈、「多元的無知の維持メカニズム：逸脱者罰と関係流動性に着目して」、日本社会心理学会第 59 回大会、追手門学院大学、2018.8.20

国内、鈴木啓太・吉野智哉・村本由紀子、「選抜制の有無と暗黙理論が努力量に与える影響」、日本グループ・ダイナミックス学会第 65 回大会、神戸大学、2018.9.9

国内、岩谷舟真・正木郁太郎・村本由紀子、「個人の社会的価値と流動性の関係、および組織風土の調整効果」、日本心理学会第 82 回大会、仙台国際センター、2018.9.25

国内、村本由紀子、「地域コミュニティ研究のこれから：離島漁村のフィールドワークを例にして」、日本心理学会第 82 回大会、仙台国際センター、2018.9.25

国内、村本由紀子、「心理学を広くひとに伝える：翻訳出版の経験から」、日本心理学会第 82 回大会、仙台国際センター、2018.9.25

国際、Shuma Iwatani, Aki Hasegawa, Yukiko Muramoto, Ikutaro Masaki, & Shiho Imashiro, 「Effects of social and individual mobility on reputation estimation.」、The 13th biennial conference of Asian Association of Social Psychology, Taipei, Taiwan, 2019.7.11

国際、Keita Suzuki, Mayu Yasuda, & Yukiko Muramoto, 「Task choice strategies of entity and incremental theorists in daily lives: Investigation through situation sampling method」、The 13th biennial conference of Asian Association of Social Psychology, Taipei, Taiwan, 2019.7.12

国内、仲間大輔・仲村友希・村本由紀子、「貢献能力の格差と組織内協力：社会的ジレンマ状況を用いた実験研究」、日本産業組織学会第 35 回大会、日本大学、2019.9.1

国内、村本由紀子、「心理統計で何を教えるべきか：頻度主義・ベイズ主義の対立を超えて（指定討論）」、日本心理学会第 83 回大会・公募シンポジウム、2019.9.11

国内、岩谷舟真・長谷川明紀・村本由紀子・正木郁太郎・今城志保、「企業サイズとその関係流動性が評判低下予測に与える影響」、日本心理学会第 83 回大会、立命館大学、2019.9.13

国内、鈴木啓太・吉川元・村本由紀子、「教師のフィードバックが生徒の新規課題へのモチベーションに与える影響」、日本心理学会第 83 回大会、立命館大学、2019.9.13

国内、村本由紀子、「"ネット民"という集団のダイナミクスを探る（指定討論）」、日本グループ・ダイナミックス学会第 65 回大会・大会準備委員会企画シンポジウム、富山大学、2019.10.19

国内、Keita Suzuki & Yukiko Muramoto, 「You will never know unless you try hard: When entity theorists value effort」、日本グループ・ダイナミックス学会第 66 回大会、富山大学、2019.10.19

国内、岩谷舟真・長谷川明紀・村本由紀子・正木郁太郎・今城志保、「いかなる場合に規範逸脱の発覚可能性は高く見積られるか：集団サイズと社会の流動性に注目して」、日本グループ・ダイナミックス学会第 66 回大会、富山大学、2019.10.20

国内、岩谷舟真・長谷川明紀・村本由紀子・正木郁太郎・今城志保、「「不人気な規範」の維持メカニズムについての検討：流動性に着目して」、日本社会心理学会第 60 回大会、立正大学、2019.11.9

国内、鈴木啓太・村本由紀子、「暗黙理論の形成に影響を与える教育環境的諸要因の検討」、日本社会心理学会第60回大会、立正大学、2019.11.9

(4) 会議主催(チェア他)

国内、「日本心理学会第82回大会・大会準備委員会シンポジウム」、地域コミュニティ研究のこれから、仙台国際センター、2018.9.25

(5) 受賞

国内、今瀧夢・相田直樹・村本由紀子、日本社会心理学会賞(優秀論文賞)、「リーダーの暗黙理論がチーム差配に及ぼす影響：失敗した成員に対する評価に着目して」、日本社会心理学会、2018.8.28

国内、岩谷舟真・村本由紀子、日本社会心理学会賞(奨励論文賞)、「規範遵守行動を導く2つの評判：居住地の流動性と個人の関係構築力に応じた評判の効果」、日本社会心理学会、2018.8.28

国内、岩谷舟真・村本由紀子、日本グループ・ダイナミクス学会賞(優秀論文賞)、「多元的無知の先行因についての検討：他者の選好推測に注目して」、日本グループ・ダイナミクス学会、2018.9.8

(6) 翻訳

P・ブラサド(著)、箕浦康子・町恵理子・浅井亜紀子・山下美樹・伊佐雅子・時津倫子・村本由紀子・藤田ラウンド幸世・岸磨貴子・灘光洋子・岩田祐子・谷口明子・小高さほみ・柴山真琴(訳)、『質的研究のための理論入門：ポスト実証主義の諸系譜』、ナカニシヤ出版、2018.11

(7) 共同研究・受託研究

共同研究、村本由紀子・岩谷舟真・今城志保、株式会社リクルートマネジメントソリューションズ、「多元的無知の維持メカニズムの調整要因の検討」、2019～

(8) 研究テーマ

文部科学省科学研究費補助金、基盤研究(C)、村本由紀子、研究代表者、「集団規範の形成・維持に関わる自他の相互作用過程の探究」、2019～

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

セミナー、筑波大学附属高等学校、「進路説明会(社会学系分科会)」、2018.7

非常勤講師、放送大学神奈川学習センター、「木を見る西洋人 森を見る東洋人」、2018.10～2019.3

セミナー、NTTデータ経営研究所 応用脳科学コンソーシアム、「Japan Branding Workshop：外国人にとっての『日本らしさ』とは」、2018.10

セミナー、筑波大学附属高等学校、「進路説明会(社会学系分科会)」、2019.7

非常勤講師、放送大学神奈川学習センター、「木を見る西洋人 森を見る東洋人」、2019.10～2020.3

(2) 学会

国際、Asian Association of Social Psychology、Editorial Board Members、2018.1～

国内、日本社会心理学会、常任理事、学術雑誌編集委員長、2019.4～

国内、日本グループ・ダイナミクス学会、理事、編集委員、2015.4～2019.3

27 文化資源学

《文化資源学専門分野》

教授 木下 直之 KINOSHITA, Naoyuki

1. 略歴

1979年3月	東京芸術大学美術学部芸術学科卒業
1981年3月	東京芸術大学大学院美術研究科芸術学専攻修士課程中途退学
1981年4月	兵庫県立近代美術館学芸員
1995年4月	同美術館学芸課長
1997年4月	東京大学総合研究博物館助教授
2000年4月	東京大学大学院人文社会系研究科助教授
2001年4月	国立民族学博物館助教授併任（～2003年4月）
2004年4月	東京大学大学院人文社会系研究科教授
2017年4月	静岡県立美術館館長（兼務）
2019年3月	定年退職
2019年	東京大学名誉教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

文化資源学

b 研究課題

幕末・明治期（19世紀）の造形表現の形成と変容と展開を、従来の美術史学の枠組みを離れて追跡している。既存領域である美術に隣接する写真、芸能、祭礼、開帳、見世物、民衆娯楽の領域に目を向けるとともに、それらの表現活動と社会の関係の解明にも取り組んでいる。とりわけ、明治期の戦争（台湾出兵と日清戦争）に注目することで、両者の関係を領域横断的に明らかにしたいと考えている。

文化財保護体制のような評価の仕組みに対して、評価されないものの実態と、それを評価しない仕組みの双方をも明らかにしたい。後者は当時の文化政策の研究へと展開するはずだ。とりわけ、幕末明治期の排仏運動・廃仏毀釈を、この考察を解明する手掛かりにしたいと考えている。開設時より関わった文化資源学専攻における新たな研究領域の開拓と構築に対し、こうした歴史学的・民俗学的視点の導入を積極的に進めてきた。

また、2017年度より静岡県立美術館館長を兼務したことで、大学での研究成果を公立美術館の現場に活かすという文化経営学的な課題も大きくなった。逆に、現場で生じている文化施設の課題を学生たちに積極的に伝え、ともに考える時間を設けてきた。

c 概要と自己評価

近年の研究には、以下の三本の柱を立てている。第1に「展示」、第2に「文化財」、第3に「近代の文化政策」である。

第1の展示研究は、狭義の博物館学にとらわれず、また博物館に限らずに広く何らかの物品や問題が展示されている環境を対象とする。主に、戦争の記憶（戦意昂揚や慰霊）を伝える展示、彫刻の屋外展示、動物展示（見世物や動物園の歴史と課題）を重点的に研究している。とりわけ動物展示に関しては、展示状況のみならず、経営実態を含めて現場をよく調査するとともに、2011年より公益社団法人日本動物園水族館協会の広報戦略会議のメンバーとして、さらに環境省が2013-2015年度に設置した動植物園等公的機能推進方策のあり方検討会の委員として、また2017年度は東京都の葛西臨海水族園の在り方検討会の委員として、動物園・水族館の将来像を考える実践的な活動も展開しつつある。日本動物園水族館協会が7回にわたって開催した公開シンポジウム「いのちの博物館の実現にむけて—消えていのか、日本の動物園と水族館」のすべての回でコーディネーターを務めた。さらに2015年度より同協会の顧問に就任し今日に至っている。

人文学の研究者が動物園問題に関わることは、社会的にきわめて有意義な活動と認識している。一方で、公的な協会に関わるだけでは見えない現実、協会非加盟の動物園・水族館の実態とそれらが歩んだ歴史にも目を向ける必要を痛感している。それらについては東京大学出版会の雑誌『UP』に「動物園巡礼」と題して連載し、広く問題提起してき

た。文学部に開設されている博物館学芸員課程講座においては「博物館展示論」を担当しているが、そこでもその視野に動物園と水族館をとらえて講義し、受講者の関心を高めてきた。この実践的な研究成果は、2018年度に同名の単行本として東京大学出版会から出版した。

第2の文化財研究は、文化領域における価値評価を問題にし、これを歴史的な視野の中でとらえてきた。宝物・国宝・文化財・文化遺産・文化資源をキーワードに、文化財や芸術作品を相対化し、たとえばかつての寺社の開帳と現代の博物館の展覧会を対等に研究対象とすることで、文化資源学の展望を示したいと考えている。

とりわけ、講義「東京大学探索—埋蔵文化財と文化資源学」を毎年開講し、「埋蔵文化財」の概念を広げてきた。すなわち、「埋蔵」とはかならずしも地中に埋もれているものに限らず、地上にあってその姿が見えているにもかかわらず、意識されないもの、評価されないものを、東京大学本郷キャンパスをフィールドにして徹底的に解明してきた。東京大学における戦争体験の記憶にも言及したこの成果の一部は、2016年度に上梓した拙著『近くても遠い場所—1850年から2000年のニッポンへ』晶文社に含まれ、また2018年度早々に上梓した共著『東京大学本郷キャンパス—140年の歴史をたどる』東京大学出版会というかたちで公表できた。

第3の文化政策研究に関しては、2013年秋にロンドンの大英博物館で開催された「春画展」に協力・関与し、その後同展の日本開催が難航したことを受けて、日本社会と春画展示を考える春画展示研究会を文化資源学会に開設した。2014-2015年度に7回の研究会を開催し、最終回は公開フォーラムとした。その成果は『文化資源学』第12号（2014年）、第13号（2015年）で公表した。

問題を春画展にとどめず、社会が性表現をどのように管理してきたのかを問う文化政策研究とした。したがって、2014年に発生した猥褻物頒布をめぐる「ろくでなしこ事件」の裁判にも参考人として関与し、積極的に発言した。これらの成果を、2017年度に拙著『せいきの大問題—新股間若衆』新潮社として公表した。さらに、2017年度からは地方自治体が設置した公立美術館の運営に携わったことで、日本社会における性表現の管理に関する研究をより実践的に進め、それを東京大学の講義にも反映させてきた。2018年度は東京大学において教鞭を執る最終年度であったため、最終集中講義として「猥褻論」を開講し、この問題を歴史的に整理し概観した。

以上の三本の柱を研究軸とし、学内での教育と学外への発信を重視し、それに学外（とりわけ美術館）における発信を噛み合わせてきた。これまた東京大学退任を記念して、竹中工務店が開設するギャラリーエークウッドで、展覧会「木下直之が全ぶ集った」を開催した。そこではこれまでの研究を集大成し、19世紀の日本文化の知られざる一面を明らかにできたと考えている。

d 主要業績

(1) 著書

『動物園巡礼』、東京大学出版会、2018

『木下直之が全ぶ集った』、ギャラリーエークウッド、2018

『木下直之を全ぶ集めた』、晶文社、2019

『東京大学本郷キャンパス—140年の歴史をたどる』、東京大学出版会、2018（共著）

(2) 論考

「1898年の普段着のふたり—西郷どん像とバルザック像の奇縁にまつわる一考察」『芸術新潮』、2018.8

3. 主な社会活動

(1) 学外組織（学協会、省庁を除く）委員・役員

武蔵野美術大学非常勤講師、2018.4～2020.3

立教大学非常勤講師、2018.4～2020.3

独立行政法人文化財機構運営委員、2018.4～2020.3

公益財団法人京都服飾文化研究財団評議員、2018.4～2020.3

公益財団法人アサヒビール芸術文化財団理事、2018.4～2020.3

益社団法人日本動物園水族館協会顧問、2018.4～2020.3

静岡県博物館協会会長、2018.4～2020.3

1. 略歴

1980年4月	東京大学教養学部理科I類、入学
1982年4月	同学部教養学科第一文化人類学学科、進学
1984年3月	同学科、卒業
1984年4月	東京大学大学院社会学研究科修士課程文化人類学専攻、入学
1986年3月	同修士課程、修了
1986年4月	同研究科文化人類学専攻博士課程、進学
1988年4月	社会学研究科より総合文化研究科へ移管
1990年8月	東京大学大学院総合文化研究科博士課程文化人類学専攻、中途退学
1995年11月	東京大学大学院総合文化研究科、博士号(学術)取得
1994年4月	東京大学教養学部専任講師(～1997年3月)
1996年4月	大学院総合文化研究科超域文化科学専攻専任講師に配置換
1997年4月	東京大学大学院総合文化研究科超域文化科学専攻助教授(～2004年9月)
2004年10月	東京大学大学院人文社会系研究科基礎文化研究専攻助教授
2005年4月	国立民族学博物館文化動態研究部門客員研究員(～2009年3月)
2009年4月	東京大学大学院人文社会系研究科文化資源学研究専攻准教授
2014年9月	東京大学大学院人文社会系研究科文化資源学研究専攻教授

2. 主な研究活動

多様な状況における文書・読み書き、その人間・社会との関係の研究

a 専門分野 b 研究課題

文化資源学(文書文化論)

主に発展途上国を念頭に置きつつ、広く文書・読み書きと人間・社会の関係について研究している。また、調査研究方法の検討、改善にも強い関心を持っている。様々なフィールド調査で得られるデータや知見を、言語能力、数的能力、道具使用等に関する認知科学や、文書をはじめとする認知的人工物(cognitive artifacts)の変化に関する歴史学的研究と有機的に接合することを目指して、隣接諸分野の研究者との共同研究にも積極的に取り組んでいる。

c 概要と自己評価

以下の3つの課題を意識しつつ、相互に関連しあう複数の研究を並行して進めた。

- ・文化資源としての文書文化の考察
- ・デジタル技術と文書文化の関係の考察
- ・文書・読み書きに関する多様な領域の専門家との共同作業の推進

(1) 2014.4より国際協力機構(JICA)中米・カリブ地域生活改善広域アドバイザーとして現地調査、協力を行ってきたコスタリカ共和国における生活改善プロジェクト情報システム構築に関する共著論文「JICA Institute Working Paper No.146」をアップデートとした同タイトルの論文が公開された(査読論文)。また、コスタリカ共和国農業牧畜省普及総局において、生活改善プロジェクト情報システムSIMEVIの活用に関する講演を行った。

(2) 共同研究者として参加した国立民族学博物館・共同研究プロジェクト「近代ヒスパニック世界における文書ネットワーク・システムの成立と展開」(2013.10-2017.3、代表:吉江貴文)の成果を踏まえた論集に寄稿した(査読論文)。また、真鍋陸太郎とともに地理情報システム学会第28回学術研究発表大会において成果報告を行った。これらの成果を踏まえ、現在、16世紀スペイン会計文書を対象として人文情報学のアプローチを用いた研究を進めている。

(3) 2017年5月より幹事を務める東京文化資源会議(伊藤滋会長、吉見俊哉幹事長)において、地域の文化資源の調査、活用にも積極的に取り組んでいる。活動成果の一部は、2020年の公開を予定している。

(4) この他、依頼を受けて文化資源の調査と活用に関する講義を行った。

以上のように、歴史学、情報学、国際協力、地域開発・まちづくりなど多様な分野の専門家との共同作業を積極的に行い、成果を発信するという基本方針に沿った活動を継続している。この二年間は、調査研究だけでなく、これま

で蓄積されたデジタルデータの活用、さらには今後も蓄積されることを考慮に入れた制度設計の重要性をより強く認識するようになっている。引き続き、学際性、社会連携、情報技術の積極的活用を重視した文化資源の分析を進めていく。

d 主要業績

(1) 著書

共著、中村雄祐、『近代ヒスパニック世界と文書ネットワーク』、悠書館、2019.4

(2) 論文

Tomomi Kozaki, Yusuke Nakamura, 「The Evolving Life Improvement Approach: From Home Taylorism to JICA Tsukuba, and Beyond」、『Psychosociological Issues in Human Resource Management 』、VOLUME 6(1)、2018.5

(3) 学会発表

国内、真鍋陸太郎・中村雄祐、「スペイン植民地帝国の文書流通の地理情報の可視化」、地理情報システム学会第28回学術研究発表大会、徳島大学常三島キャンパス、2019.10.20

(4) マスコミ

「教員の振り返る東大生活」、『東大新聞』、2018.8.28

「文化資源」から新たな可能性を見出し、社会につなぐ—文学部・中村雄祐教授」、2018.11.2

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

特別講演、コスタリカ共和国農業牧畜省普及総局、「Presentación del SIMEVI (Sistema de Información de Mejoramiento de Vida y MIMASearch)」、2019.2

特別講演、コスタリカ共和国農業牧畜省普及総局、「Operaciones Básicas de MIMASearch para SIMEVI (Sistema de Información de Mejoramiento de Vida)」、2019.3

特別講演、SAP、「文化資源学と社会連携」、2019.7

特別講演、文化遺産国際協力コンソーシアム、シンポジウム「文化遺産の意図的な破壊—人はなぜ本を焼くのか—」、2019.12

(2) 学会

国内、文化資源学会、理事、2014.7～2020.6

国際、Japanese Association of Digital Humanities、学術雑誌編集委員、2014.10～

(3) 学外組織(学協会、省庁を除く)委員・役員

任意団体、文化遺産国際協力コンソーシアム、企画分科会委員、2018.4～

東京文化資源会議・幹事、2017.5～：地図ファブ、神田まちづくり、崖東夜話、文化資源プロデュース塾

東京大学消費生活協同組合・副理事長、2019.5～

教授 **小林 真理** KOBAYASHI, Mari

27 文化資源学《文化経営学専門分野》 参照

准教授 **松田 陽** MATSUDA, Akira

27 文化資源学《文化経営学専門分野》 参照

教授 **大西 克也** ONISHI, Katsuya

11 中国語中国文学 参照

教授 **佐藤 健二** SATO, Kenji

25 社会学 参照

教授 **渡辺 裕** WATANABE, Hiroshi

07 美学芸術学 参照

教授 **長島 弘明** NAGASHIMA, Hiroaki

09b 日本語日本文学（国文学） 参照

教授 **鈴木 淳** SUZUKI, Jun

10 日本史学 参照

教授 **ミュラー アルバート・チャールズ** MULLER, Albert Charles

29 次世代人文学開発センター《 人文情報学部門 》 参照

准教授 **高岸 輝** TAKAGISHI, Akira

03 美術史学 参照

准教授 **西村 明** NISHIMURA, Akira

06 宗教学宗教史学 参照

《 文化経営学専門分野 》

教授 **小林 真理** KOBAYASHI, Mari

1. 略歴

- 1987年3月 早稲田大学教育学部社会科社会科学専修卒業
- 1987年4月 早稲田大学大学院政治学研究科修士課程政治学専攻入学
- 1990年3月 早稲田大学大学院政治学研究科修士課程政治学専攻修了（政治学）
- 1990年4月 早稲田大学大学院政治学研究科博士後期課程政治学専攻入学
- 1993年5月 早稲田大学人間科学部助手（～1996年3月）
- 1996年3月 早稲田大学大学院政治学研究科博士後期課程政治学専攻単位取得満期退学
- 1998年4月 昭和音楽大学音楽学部助手
- 2000年4月 静岡文化芸術大学文化政策学部講師
- 2001年1月 博士（人間科学）
- 2004年4月 東京大学大学院人文社会系研究科助教授
- 2007年4月 東京大学大学院人文社会系研究科准教授（職名変更）
- 2016年4月 東京大学大学院人文社会系研究科教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

文化資源学、文化経営学、文化政策学

b 研究課題

文化を支える諸制度、それと反対のベクトルである文化の発展を阻害する制度について関心をもってきた。研究の中心を法制度においてきたが、最近では国や自治体の文化政策の動向に対応して、文化にとってよりよい政策の企画、立案、執行のあり方について考えている。とくに行政改革が現実に行われ、市町村合併の推進及び2003年に地方自治法改定で施行された指定管理者制度が導入される状況の中で、公立文化施設（美術館、文化ホール等）の望ましい運営方法とそれを管理する文化政策のあり方を研究の対象としてきた。

近年では、文化政策の制度化によって計画化が進み、それらの評価のあり方が課題となってきた。文化政策に関する独自の評価というのが可能なかという点が目下の研究課題と考えている。

c 概要と自己評価

これまでに自治体文化政策の現場において、条例制定、計画策定、そして事業展開の基盤づくりに携わってきたが、それらを検証し、記述する作業に入っている。その参照枠として、イギリスにおける文化政策の展開の状況を振り返るロバート・ヒューイソンの"Cultural Capital -The Rise and Fall of Creative Britain"の翻訳を行った。日本の文化政策を振り返ったときに、イギリスからの影響は多大であり、あたかも順調に進んでいるように紹介されているものが、実態としてどのような課題をもっていたかということを知る上で大変参考になる書物だった。日本の文化政策が拡大を続けていく中で、それをどのように行っていくか、またどのような制度を整えていくかを改めて考える上で重要な示唆を与えると考える。さらに、文化芸術、アート・プロジェクト、フェスティバル、創造都市、おもてなし、クール・ジャパン、観光立国、文化外交、知的財産立国、オリンピックの文化プログラム等々、直接的に文化という名称を冠していなくとも文化的事象に関する政策、施策、そして事業が様々なレベルで展開されるようになっている。これらの問題を研究対象として考察していく上での基礎的な知識を提供するという意味で、東京大学出版会から『文化政策の現在』シリーズ3巻を刊行できた。このような潮流を捉えつつ、もう一度個別の具体的な文化事業、文化施設の持続可能性について考察を深めていきたいと考えている。

d 主要業績

(1) 著書

編著、小林真理他、『文化政策の現在3巻 文化政策の展望』、2018.4

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

非常勤講師、お茶の水女子大学、「博物館経営論」、2017.4～

非常勤講師、早稲田大学、「文化政策」、「法学」

非常勤講師、東京芸術大学、「文化政策」

(2) 行政

武蔵野市第6期長期計画策定委員（委員長）、2017～2018

武蔵野市文化施設のあり方検討委員会委員（委員長）、2019～

大田区文化芸術振興計画策定委員（委員長）、2018

小金井市第二次芸術文化振興計画策定委員会委員、2019～

小金井市民交流センター運営協議会委員（委員長）、2012～

奈良県国際芸術村検討委員会委員

奈良県文化財保護体系推進会議委員

高知県文化芸術振興ビジョン評価委員会委員

三重県文化政策評価推進会議委員

文化審議会文化政策部会臨時委員、2018～

文化審議会博物館部会委員、2019～

文化施設を中心とした文化観光のあり方に関する検討会議委員、2019～

日本ユネスコ国内委員会委員

1. 略歴

- 1997年3月 東京大学文学部歴史文化学科西洋史学専修課程卒業
2002年11月 ロンドン大学UCL 考古学研究所修士課程修了 学位取得 修士（文化遺産研究）
2003年3月 東京大学大学院人文社会系研究科文化資源学研究専攻修士課程修了 学位取得 修士（文化経営学）
2004年5月 国連教育科学文化機関（ユネスコ）パリ本部文化セクター文化遺産部コンサルタント（～同年7月）
2005年6月 国連教育科学文化機関（ユネスコ）パリ本部文化セクター文化遺産部コンサルタント（～同年8月）
2009年10月 ロンドン大学UCL 考古学研究所博士課程修了 学位取得 博士（パブリックアーケオロジー）
2010年9月 ロンドン大学UCL 考古学研究所名誉講師（Honorary Lecturer）
2011年9月 セインズベリー日本藝術研究所学術アソシエイト（Academic Associate）
2011年9月 イーストアングリア大学（University of East Anglia）世界美術・博物館学科（School of World Art Studies and Museology）准教授（Lecturer）
2014年8月 イーストアングリア大学（University of East Anglia）芸術・メディア・アメリカ研究学科（School of Art, Media and American Studies）准教授（Lecturer）（組織再編）
2015年1月 イーストアングリア大学高等教育実践準修士課程修了 学位取得 準修士（高等教育実践）
2015年10月 東京大学大学院人文社会系研究科 准教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

文化資源学、文化遺産研究、パブリックアーケオロジー、博物館研究

b 研究課題

私の研究の根底にあるのは、人々にとって過去が何を意味するのかという問いにある。いかにも大仰な問いだが、この関心に導かれるかたちで、これまで人々が社会においてどのように過去をイメージし、理解し、使う（そして場合によっては「消費する」）のかをさまざまな角度から考察してきた。直接関連する分野としては、文化資源学、文化遺産研究、博物館研究、物質文化研究、人文地理学などがあげられるが、おそらくあらゆる学問分野に何らかのかたちで関わりがあり、分野横断的に展開できるテーマではないかと思っている。これまでは考古学に関連する文化遺産を事例研究にすることが多く、その中でパブリックアーケオロジーという領域に強い関心をもってきた。現在は、古墳と地域住民の関係史、そして自然災害に対する社会の記憶というテーマにとりわけ注力している。東京大学本郷キャンパスという文化資源を魅力的にプレゼンテーションする方策にも興味をもっている。

c 概要と自己評価

2018～2019年度は主に、（1）日本の文化財政策、（2）パブリックアーケオロジーの理論構築、（3）博物館研究の理論構築、（4）東京大学本郷キャンパスという文化資源、（5）上野公園という文化資源、という5つのテーマに絞って研究を遂行した。

（1）「日本の文化財政策」については、国ならびに地方公共団体の文化財政策に委員として関わりながら、関連資料や情報を渉猟・精査した。その成果は「保存と活用の二元論を超えて—文化財の価値の体系を考える」と「文化財の活用」の曖昧さと柔軟さの論考として出版した。

（2）「パブリックアーケオロジーの理論構築」については、これまで蓄積してきた知見を整理し、「A Consideration of Public Archaeology Theories」と「考古学と市民をつなぐ地域の記憶」の論考にまとめた。

（3）「博物館研究の理論構築」に関しては、ICOM（国際博物館会議）における博物館定義の改正が博物館研究（museum studies）における世界的な関心事となっていたことに着目し、「ICOM 博物館定義の再考」の論考を記した。また、寺社における物品の収集行為を日本における博物館の源流の一つと捉えるべきだという趣旨をまとめた「不思議なモノの収蔵地としての寺社」を記した。

（4）「東京大学本郷キャンパスという文化資源」については、長期的な研究を念頭に置きながら資料の蓄積を継続した。その成果の一部は、2019年3月に開催された研究会「学術資産としての東京大学」において述べ、同研究会の報告書にも記した。本テーマについては、「東京大学の歴史資産—埋蔵文化財と文化資源」の授業を通して情報発信を行った。

(5)の「上野公園という文化資源」に関しては、2015年度から資料とデータを集積してきたが、2018～2019年度はとりわけ希少性の高い歴史資料を入手することができた。そのこともあって、本テーマの研究成果は公開できる段階に入りつつある。

d 主要業績

(1) 論文・論考

松田陽、「文化財の活用」の曖昧さと柔軟さ、『文化財の活用とは何か』、六一書房（國學院大學研究開発推進機構 学術資料センター編）、115-125 頁、2020

松田陽、「不思議なモノの収蔵地としての寺社」、『この世のキワ <自然>の内と外』、勉誠出版（山中由里子・山田仁史編）、280-291 頁、2019

Matsuda, A、「A Consideration of Public Archaeology Theories」、『Public Archaeology: Theoretical Approaches and Current Practices, London: British Institute at Ankara』、13-19 頁、2019

松田陽、「保存と活用の二元論を超えて—文化財の価値の体系を考える」、『文化政策の展望（文化政策の現在3）』、25-49 頁、2018

(2) その他の論考

松田陽、「ICOM 博物館定義の再考」、『別冊博物館研 ICOM 京都大会 2019 特集』、22-26 頁、2020

松田陽、「考古学と文化財」、『季刊考古学』第 150 号、34-37 頁、2020

松田陽、「パブリックアーケオロジーと公共性」、『資料と公共性：2019 年度研究成果年次報告書』、九州大学大学院 人文科学研究科、30-39 頁、2020

松田陽、「コメント」、『企画研究「学術資産としての東京大学」講演録 2：第 4 回「古くて新しい学術資産—東京大学の埋蔵文化財—』、東京大学ヒューマニティーズセンター、22-32 頁、2019

松田陽、「考古学と市民をつなぐ地域の記憶」、『七隈史学』第 21 号、3-14 頁、2019

3. 主な社会活動

(1) 行政

文化庁、文化審議会委員（分属は 2018 年度：文化政策部会、世界文化遺産部会、無形文化遺産部会、2019 年度：文化政策部会、世界文化遺産部会、無形文化遺産部会）、2017.4～

文部科学省、日本ユネスコ国内委員会文化活動小委員会調査委員、2016.4～

文化遺産国際協力コンソーシアム、文化遺産国際協力コンソーシアム欧州分科会委員、2017.4～

日本学術会議（分属は「博物館・美術館等の組織運営に関する分科会」と「文化財の保護と活用に関する分科会」）、連携会員、2017.10～

川崎市、橘樹官衙遺跡群調査整備委員会 委員、2016.4～

市川市、市川市博物館協議会 委員、2017.7～

富岡市、富岡製糸場インタープリテーション検討委員会 委員、2019.4～

鹿児島市、鹿児島市火山防災アドバイザー委員、2019.6～

鹿児島市、鹿児島市火山防災トップシティ構想検討委員会、2018.4～2019.3

(2) 学会

文化資源学会、事務局長、2018.7～

学術雑誌『文化資源学会』編集委員

学術雑誌『Antiquity』編集諮問委員

学術雑誌『Public Archaeology』編集諮問委員

学術雑誌『World Art』諮問委員

- 教授 **木下 直之** KINOSHITA, Naoyuki
27 文化資源学 《文化資源学専門分野》 参照
- 教授 **中村 雄祐** NAKAMURA, Yusuke
27 文化資源学 《文化資源学専門分野》 参照
- 教授 **大西 克也** ONISHI, Katsuya
11 中国語中国文学 参照
- 教授 **佐藤 健二** SATO, Kenji
25 社会学 参照
- 教授 **渡辺 裕** WATANABE, Hiroshi
07 美学芸術学 参照
- 教授 **鈴木 淳** SUZUKI, Jun
10 日本史学 参照
- 准教授 **小林 正人** KOBAYASHI, Masato
01 言語学 参照
- 准教授 **高岸 輝** TAKAGISHI, Akira
03 美術史学 参照

28 韓国朝鮮文化

教授 福井 玲

FUKUI, Rei

<http://www.lu-tokyo.ac.jp/~fkr/>

1. 略歴

1980年3月	東京大学文学部言語学科卒業（文学士）
1982年3月	東京大学大学院人文科学研究科言語学専攻修士課程修了（文学修士）
1984年9月	韓国ソウル大学校人文大学国語国文学科に留学（～1986年10月）
1987年3月	東京大学大学院人文科学研究科言語学専攻博士課程単位取得退学
1987年4月	東京大学文学部助手（言語学研究室）（～1989年3月）
1989年4月	明海大学外国語学部講師（日本語学科）（～1992年9月）
1992年10月	東京大学教養学部助教授（～1997年3月）
1994年10月	東京大学文学部附属文化交流研究施設助教授（併任）
1997年4月	東京大学文学部附属文化交流研究施設に配置換
1998年4月	東京大学大学院人文社会系研究科附属文化交流研究施設に配置換
2002年4月	東京大学大学院人文社会系研究科に配置換
2007年4月	東京大学大学院人文社会系研究科准教授
2013年3月	東京大学大学院人文社会系研究科教授

2. 主な研究活動

a 専門分野 b 研究課題 c 概要と自己評価

主な専門分野は韓国語学であり、その中でも中世語の音韻体系に関する研究や古代語、近代語についての研究を行ってきた。また、それらを歴史的につなぐ通時的な研究も行なっている。現代語についても主として音声や方言に関する研究を行ってきた。さらに、中世語から近代語にかけての韓国語学の資料研究をも行っている。2013年1月にはこれまでにやってきた韓国語の音韻史にかかわる研究をまとめて単行本として出版している。その他に、音声学・音韻論を中心とする言語学一般、方言研究を中心とする日本語学にも関心をもっている。2017年度には日本語と韓国語のアクセントの史的変化に関わる比較研究を行なったほか、2018年度には日本語の方言のアクセントに関する研究を行なって日本音声学会、および筑波大学で開かれたThe 3rd EAJS Conference で発表した。また、2019年度には日本語と韓国語の間の古代の借用語について論じ、その成果は2020年に三省堂から出版された『日本語「起源」論の歴史と展望 日本語の起源はどのように論じられてきたか』の中にまとめられている。

これ以外に、2013年から現在に至るまで継続して行っている研究課題として、韓国語の語彙史の研究があげられる。過去に行なわれた方言調査（小倉進平、崔鶴根、韓国精神文化研究院）の資料に基づいて、項目を選定して言語地図を作製し、そこに見られる語彙の歴史を再構成することを目指している。2015年度からはこのテーマで科研費を受け、福嶋映子・福嶋祐介氏原作の言語地図作製プログラム（Seal）の改良を行ない、朝鮮半島の言語地図を描くことができるシステムを構築した。そして、それをを用いて、2016年度と2017年度に、『小倉進平『朝鮮語方言の研究』所載資料による言語地図とその解釈』の第1集と第2集を完成した。それぞれ30余りの項目を選び、それについての考察を筆者及び大学院生諸君で分担して執筆した。2019年には、中国の中央民族大学と韓国の慶北大学でその成果の発表を行ったほか、言語地図集の第3集に向けての作業を行い、今後報告書を刊行する予定である。

d 主要業績

(1) 著書

- 編著、福井玲、『小倉進平『朝鮮語方言の研究』所載資料による言語地図とその解釈 第2集』、2018.3
共編、福井玲、国外所在文化財財団・高麗大学校民族文化研究院海外韓国学資料センター、『日本 東京大学所蔵 小倉文庫 韓国典籍』、国外所在文化財財団、2018.10

(2) 論文

- Fukui Rei, 「Palatalization and hypercorrection in the history of Korean.」、『Papers from the Fourth International Conference on Asian Geolinguistics, Studies in Asian Geolinguistics, Monograph Series No. 4』、52-73 頁、2018.11
福井玲、「借用語を中心とした古代の日韓の音韻の対応について」、『日本語「起源」論の歴史と展望: 日本語の起源はどのように論じられてきたか』、9-31 頁、三省堂、2020.3

(3) 学会発表

- 国際、Fukui Rei、「Palatalization and hypercorrection in the history of Korean」、The 4th International Conference on Asian Geolinguistics、Universitas Indonesia、2018.5.5
- 国際、福井玲、「小倉進平所做朝鮮語調査資料語言地圖化工程簡介」、中央民族大学 2019 民族地理語言學論壇、中央民族大学、北京、2019.4.6
- 国際、Fukui Rei、「Seal 8.0: a system for drawing linguistic maps」、The 2nd International Conference on Artificial Intelligence HUmanities、ソウル：中央大学校、2019.8.14
- 国際、Fukui Rei、「Compound accentuation and the historical accent classes: the case of Hida Hagiwara dialect」、The 3rd EAJS Conference in Japan、筑波大学、2019.9.15
- 国内、福井玲、「岐阜県旧益田郡方言のアクセントにおける 2 拍名詞(0)型と(2)型の区別 —明治生まれ話者の録音資料から—」、第 33 回日本音声学会全国大会、清泉女子大学、2019.9.29
- 国際、福井玲、「일본의 한국어 연구 현황과 전망: 小倉進平의 한국어 연구의 원점을 찾아서 (日本の韓国語研究の現況と展望: 小倉進平の韓国語研究の原点を求めて)」、국어학회 60주년 기념 국제학술대회 (国語学会 60 周年記念大会)、ソウル大学、ソウル、2019.12.14
- 国際、Fukui Rei、「Sound correspondences between Japanese and Korean: viewed as a result of borrowing」、Yaponesian genome project (linguistic group, B02)、千葉大学、2020.1.12

3. 主な社会活動

(1) 学会

- 国内、日本歴史言語学会、理事、2016.4～、編集委員長、2020.4～
- 国内、日本音声学会、編集委員、2018.4～
- 国内、朝鮮語研究会、幹事、2004.4～

教授 **六反田 豊** ROKUTANDA, Yutaka

1. 略歴

- 1985 年 3 月 九州大学文学部史学科朝鮮史学専攻卒業
- 1987 年 3 月 九州大学大学院文学研究科 (史学専攻) 修士課程修了
- 1989 年 3 月 九州大学大学院文学研究科 (史学専攻) 博士後期課程中途退学
- 1989 年 4 月 九州大学文学部助手 (～1992 年 3 月)
- 1992 年 4 月 久留米大学文学部専任講師 (～1995 年 3 月)
- 1995 年 4 月 久留米大学文学部助教授 (～1996 年 3 月)
- 1996 年 4 月 九州大学文学部助教授 (～2000 年 3 月)
- 2000 年 4 月 九州大学大学院人文科学研究院助教授 (～2002 年 3 月)
- 2002 年 4 月 東京大学大学院人文社会系研究科助教授 (～2007 年 3 月)
- 2007 年 4 月 東京大学大学院人文社会系研究科准教授 (～2015 年 3 月)
- 2015 年 4 月 東京大学大学院人文社会系研究科教授 (現在に至る)

2. 主な研究活動

a 専門分野

朝鮮中世・近世史

b 研究課題

朝鮮王朝 (1392-1910) 時代の水運史や財政史・経済史などを中心に研究している。現在の主たる研究課題は、(1) 朝鮮前期漕運制研究、(2) 朝鮮中世・近世海事史研究、(3) 朝鮮中世・近世「水環境」研究、(4) 朝鮮時代財政史研究、(5) 朝鮮時代古文書研究などである。(1)の漕運制とは朝鮮時代における官営の税穀船運機構であり、朝鮮初期における

その整備・変遷過程や運営実態等を明らかにする作業に取り組んでいる。(2)は(1)から派生したもので、朝鮮の前近代史を「海」とのかかわりで再構成するという問題意識から、済州島民の海難関係記録の分析を通じて彼らの海上活動の実態や異国への漂流・漂着をめぐる諸問題、朝鮮時代の海防体制や「水賊」などについて研究している。(3)は(2)をさらに発展させ、広く人と「水」とのかかわりを明らかにしようとするもので、当面は漢江をはじめとする河川の管理・利用という側面を主たる対象として、水運だけでなく、渡船や漁撈、さらには治水・水利といった点も含めて「水環境」史の構築をめざしている。(4)は、朝鮮後期に施行された新税制である大同法を、その運用実態を地方財政との関連に注目しながら研究しているほか、朝鮮初期の財政制度の性格や、朝鮮時代全般にわたる地方財政の運用方式なども研究の対象としている。(5)は日本各地の諸機関に所蔵される朝鮮古文書の調査である。2018年度から2019年度にかけては、これらのうちとくに(2)(3)(4)の課題を中心に研究を進めた。

c 概要と自己評価

まず上記研究課題の(2)については、これまでの研究成果に依拠しつつ、済州島民の海上活動に関する概説「倭寇と済州島」『出島禁止と漂流民』を梁聖宗・金良淑・伊地知紀子(編)、『済州島を知るための55章』に寄稿した。次に(3)については、2010年度から2013年度にかけて「朝鮮半島の「水環境」をめぐる社会・経済・文化の歴史的諸相—漢江を中心として」というテーマで日本学術振興会から科学研究費補助金の支給を受けていたが、2016年度からは、これをさらに発展させた研究課題「朝鮮環境史の創成にむけた河川の管理・利用に関する総合的研究」(基板研究(B):課題番号16H03486)が科学研究費補助金の交付対象に採択された。2016年4月から2020年3月まで4年間にわたる研究課題であり、その活動として2018年度は洛東江流域および榮山江・蟾津江流域、2019年度は嶺東地方(襄陽、江陵、三陟、蔚珍、寧海、盈徳、浦項、蔚山など)の中小河川流域で現地調査を実施するとともに関連資料の収集などをおこなった。さらに2019年度については上記科学研究費補助金の最終年度に当たるため、研究のまとめとして他の研究分担者4人とともに2020年3月に朝鮮史研究会との共催でシンポジウム(報告:森平雅彦「朝鮮中期の洛東江上流域における「淡水魚生活」」;長森美信「17世紀朝鮮土人(ソンビ)と河川空間—潤松趙任道と洛東江—」;六反田豊「環境史からみた朝鮮時代の水利施設—堤堰と川防を中心として—」;石川亮太「近代の開港場貿易と河川輸送」;広瀬貞三「植民地期朝鮮における大同江改修工事と地域社会」/コメンテーター:伊藤亜人氏)を計画したが、新型コロナウイルス感染症流行の影響で中止を余儀なくされた(2020年度中にあらためて開催予定)。(4)については、14世紀末の朝鮮建国の功労者で、新王朝の設計図を描いた鄭道伝が朝鮮初期の財政制度に及ぼした影響についてまとめた論文「朝鮮初期の財政制度と鄭道伝」を『韓国朝鮮の文化と社会』17に寄稿した。その他、朝鮮王朝初代国王の太祖とその第5子であり第3代国王となった太宗について、関連記録を整理して人物伝を執筆し、上田信(編)、『悪の歴史 東アジア編下・東南アジア編』に寄稿した。

d 主要業績

(1) 著書

- (共著) 上田信(編)、『悪の歴史 東アジア編下・東南アジア編』、清水書院、2018.8
- (共著) 梁聖宗・金良淑・伊地知紀子(編)、『済州島を知るための55章』、明石書店、2018.9

(2) 論文

- 六反田豊、「朝鮮初期の財政制度と鄭道伝」、『韓国朝鮮の文化と社会』、17、102-121頁、2018.10

(3) 学会発表

- (国際) 六反田豊、「文化財関連日韓学術交流の現況—韓国古典籍を中心として」、シンポジウム「〈日韓共同宣言20周年〉文化財でつなぐ日韓の未来」、東京大学駒場キャンパス、2018.10.21
- (国際) 六反田豊、「河世鳳「最近10年来の韓国学界における海洋史研究」に対する討論」、第19回日韓歴史家会議「海洋/海域と歴史」、西江大学校(韓国ソウル市)、2019.11.9

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

- (非常勤講師) 学習院大学、「東洋史特殊講義」、2018.4~2020.3
- (非常勤講師) 国際基督教大学、「韓国史」、2018.4~2018.6、2019.4~2019.6
- (非常勤講師) 成蹊大学、「地域研究A」、2018.4~2020.3

(2) 学会

- (国際) 韓国中世史学会、地域理事、2018.3~
- (国内) 朝鮮史研究会、編集委員長、幹事、2018.10~
- (国内) 朝鮮学会、常任幹事、編集委員、2018.4~
- (国内) 韓国・朝鮮文化研究会、運営委員、編集委員長、2018.10~

(3) 学外組織（学協会、省庁を除く）委員・役員

（教育機関）釜山大学校民族文化研究所、『韓国民族文化』編集委員、2018.3～2020.2

（その他）公益財団法人東洋文庫、研究員（兼任）、2018.4～2020.3

（その他）NHK 教育テレビ「高校講座世界史」、講師、2018.4～2020.3

教授 **ミュラー アルバート・チャールズ** MULLER, Albert Charles

29 次世代人文学開発センター《人文情報学部門》 参照

教授 **本田 洋** HONDA, Hiroshi

<http://www.l.u-tokyo.ac.jp/~hhonda/>

1. 略歴

- 1986年3月 東京大学教養学部教養学科第一文化人類学分科卒業
- 1986年4月 東京大学大学院社会学研究科文化人類学専修課程修士課程入学
- 1988年3月 同上 大学院社会学研究科修士課程修了
- 1988年4月 同上 大学院総合文化研究科文化人類学専攻博士課程進学
- 1988年8月 文部省アジア諸国等派遣留学生として韓国ソウル大学校に留学（～1991年5月）
- 1993年3月 東京大学大学院総合文化研究科文化人類学専攻博士課程単位取得満期退学
- 1993年4月 日本学術振興会特別研究員（PD）（～1994年3月）
- 1994年4月 東京大学教養学部助手（～1996年3月）
- 1996年4月 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所助手（～2000年3月）
- 1999年8月 韓国ソウル大学校社会科学研究院比較文化研究所常勤研究員（～2000年8月）
- 2000年4月 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所助教授（～2002年3月）
- 2000年9月 英国オックスフォード大学訪問研究者（～2001年3月）
- 2002年4月 東京大学大学院人文社会系研究科助教授
- 2016年4月 東京大学大学院人文社会系研究科教授（現在に至る）
- 2019年3月 韓国全北大学校人文学訪問研究者（～2019年10月）

2. 主な研究活動

a 専門分野

社会・文化人類学

b 研究課題

韓国朝鮮社会を主たる対象として、社会・文化人類学的な観点から調査研究を進めている。博士課程在籍時より30年余りのあいだ、韓国全羅北道南原地域でフィールドワークを続けており、他の地域でも短期の調査を重ねている。近年の研究課題は、(1) 産業化後の韓国社会における農村移住（都市居住者の農村地域への移住。韓国では「帰農」・「帰村」と呼ばれる）、(2) 韓国の「マウルづくり」活動／支援事業とローカル・コミュニティの再編成、(3) ポストモダン状況におけるローカル・コミュニティの再編成に関する理論的研究、(4) 1990年代以降の韓国社会における墓と死者の祭祀・追慕の変化（東アジア諸社会における少子化と父系理念の再構築についての比較研究の一環として）、(5) 日本の人類学における韓国社会研究の回顧・展望と方法論の再検討、等である。

c 概要と自己評価

研究課題(1)については、2007年3月に予備調査を開始し、2010年8月から韓国全羅北道南原市山内面と近隣地域で、移住者とコミュニティ運動の指導者・活動家を対象としたインタビュー調査と参与観察を断続的に行ってきた。当該年度においては、民族誌的調査研究を継続するとともに、農村移住者の生き方の再構築とコミュニティ形成の過程にみられる「農村」の資源化と農村性(rurality)の再構築に着目して資料の一部を分析しなおし、研究論文「農村移住を契機とする生き方の転換——現代韓国社会における農村の資源化に関する試論」(2019年)として公開した。研究課題(2)については、全羅北道南原市を対象として2018年8月に予備的調査を実施し、2019年5月～10月の韓国滞在中に全羅北道南原市、全州市、完州郡、長水郡等で現地調査を実施した。その成果の一部は学会発表等を通じて公開した。研究課題(1)・(2)の民族誌的研究を基盤として、研究課題(3)のローカル・コミュニティの理論的再検討にも取り組みつつあり、その成果の一部を「課題としての対照——韓国の「共同体」(コンドンチュエ)に関する民族誌的考察」(2019年)として公開した。研究課題(4)については、台湾・中国・沖縄研究者等との共同研究(科研費基盤(A))の一環として取り組んでおり、2018年8月と2019年12月に現地調査を実施した。これについては共同研究会での発表等を通じて成果を取りまとめつつある。最後に研究課題(5)については、2018年11月の公開シンポジウムでの招聘発表と、その成果に基づいて書き下ろした研究論文「1970年代以降の日本の人類学における韓国社会研究」(2020年)等の形で研究の深化を試みた。総括すれば、従来の研究課題をさらに進展させる一方で、「マウルづくり」や墓・祭祀の変化などの新たな課題にも着手し、また、民族誌的研究だけでなく、理論的視角の深化・洗練においても着実な進展を示していると自己評価できる。以上の研究成果の達成が、相当程度において、2019年4月～2020年3月の特別研究期間の取得によって可能になったことについても付言しておきたい。

d 主要業績

(1) 論文

本田洋、「共同体(コンドンチュエ)を考える——二編の民族誌から」、『韓国朝鮮の文化と社会』、17、154-165頁、2018.10

本田洋、「農村移住を契機とする生き方の転換——現代韓国社会における農村の資源化に関する試論」、『朝鮮学報』、249・250合併号、1-33頁、2019.1

本田洋、「課題としての対照——韓国の「共同体」(コンドンチュエ)に関する民族誌的考察」、『韓国朝鮮文化研究』、19、25-48頁、2019.9

本田洋、「1970年代以降の日本の人類学における韓国社会研究」、『年報人類学研究』、10、30-49頁、2020.3

(2) 学会発表

国際、本田洋、「農村移住を契機とする生の転換：韓国農村民族誌を超えて」(韓国語)、韓国文化人類学会60周年記念学術大会「韓国を超えて、人類学を超えて」、ソウル大学校グローバルコンベンションプラザ、2018.6.8

国内、本田洋、「研究構想」、「少子化に揺れる東アジアの父系理念——祖先祭祀実践と世界観の再創造に関する比較研究」2018年度第1回研究会、慶應義塾大学三田キャンパス、2018.7.8

国内、本田洋、「1970年代以降の日本の人類学における韓国社会研究」、南山大学人類学研究所2018年度第2回公開シンポジウム「日本と韓国の人類学ネットワーク」、南山大学、2018.11.18

国内、本田洋、「2018年度研究報告」、「少子化に揺れる東アジアの父系理念——祖先祭祀実践と世界観の再創造に関する比較研究」2018年度第3回研究会、静岡大学静岡キャンパス、2019.2.26

国際、本田洋、「韓国の共同体作りに関する社会人類学的試論：全北南原地域の事例を中心に」(韓国語)、成均館大学校東アジアフォーラム、韓国成均館大学校、2019.9.20

国際、本田洋、「共同体の発見：全北南原の共同体作り」(韓国語)、2019年度韓国文化人類学会秋季研究大会、韓国安東大学校、2019.11.1

国内、本田洋、「家族を交渉する家族：現代韓国における祭祀実践」、第6回「少子化に揺れる東アジアの父系理念」科学研究会、立教大学池袋キャンパス、2020.2.27

(3) 会議主催(チェア他)

国際、日本文化人類学会・韓国文化人類学会共催連続セッション「自分の言語で人類学すること」弘前ラウンドテーブル、タスクフォース、日本文化人類学会第52回研究大会、弘前大学、2018.6.2

国際、日本文化人類学会・韓国文化人類学会共催連続セッション「自分の言語で人類学すること」ソウルラウンドテーブル、タスクフォース、韓国文化人類学会60周年記念学術大会「韓国を超えて、人類学を超えて」、ソウル大学校グローバルコンベンションプラザ、2018.6.9

(4) 教科書

『社会学概論2018』、赤川学他、執筆、東京大学文学部社会学研究室、2018

『社会学概論2019』、赤川学他、執筆、東京大学文学部社会学研究室、2019

(5) 研究テーマ

文部科学省科学研究費補助金、基盤研究（A）、研究分担者（代表者は東大外）、「少子化に揺れる東アジアの父系理念——祖先祭祀実践と世界観の再創造に関する比較研究」、2018～

日韓文化交流基金派遣フェローシップ、「現代韓国の地方社会における共同的活動の創出と生活の場の再編成に関する社会人類学的研究」、2019.5～7

3. 主な社会活動

(1) 学会

国内、朝鮮学会、幹事・編輯委員、2018.4～2020.3

国内、韓国・朝鮮文化研究会、運営委員・庶務責任者、2018.4～2020.3

国際、『比較文化研究』（韓国ソウル大学校社会科学大学比較文化研究所・韓国語）、編集委員、2018.4～2020.3

国際、*Korean Anthropology Review* (Seoul National University)、Editorial Board、2018.4～2020.3

准教授 **金 成垣** KIM, Sung-won

1. 略歴

1992年3月 延世大学校社会科学大学社会福祉学科入学（韓国ソウル特別市）
1999年8月 延世大学校社会科学大学社会福祉学科卒業
2000年4月 東京大学大学院人文社会系研究科修士課程（社会学専門分野）入学
2002年3月 東京大学大学院人文社会系研究科修士課程（社会学専門分野）修了
2002年4月 東京大学大学院人文社会系研究科博士課程（社会学専門分野）進学
2003年5月 日本福祉大学 21世紀COEプログラム奨励研究員（～2005年3月）
2004年4月 日本学術振興会特別研究員（DC2）（～2005年3月）
2005年3月 東京大学大学院人文社会系研究科博士課程（社会学専門分野）単位取得満期退学
2005年4月 日本学術振興会特別研究員（PD）（～2006年3月）
2006年4月 東京大学社会科学研究所客員研究員（～2007年3月）
2007年3月 博士（社会学）学位取得
2007年4月 東京大学社会科学研究所 助教
2007年12月 同志社大学社会福祉教育・研究支援センター委託研究員（現在に至る）
2008年10月 北京大学社会学系客員研究員（～2009年1月）
2010年4月 東京経済大学経済学部 専任講師
2012年4月 東京経済大学経済学部 准教授
2016年4月 明治学院大学社会学部 准教授
2018年4月 東京大学大学院人文社会系研究科 准教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

福祉社会学, アジア社会論

b 研究課題

社会学を専門とし、失業・貧困問題や少子高齢化問題などの社会問題、そしてそれに対応するための雇用・社会保障政策および家族政策などの社会政策＝福祉国家政策について研究している。日本や韓国および中国を中心としたアジア諸国・地域を主な対象とし、歴史比較分析を通じて今日の状況を明らかにし、国際比較分析を通じて各国の特徴とその位置づけについて分析を行っている。近年の研究課題は大きく分けて次の2つである。(1) 理論研究として、福祉国家とフォーダイズムの歴史的関係性に着目して、従来の福祉国家研究を批判的に検討し、福祉国家を捉える新しい視点を構築すること、(2) 歴史・現状分析として、理論研究を通してえられた新しい視点にもとづいて、韓国およびアジア社会の歴史と現状を分析すること、である。

c 概要と自己評価

理論研究の課題(1)は、10年ほど前から取り組んできた(金成垣編、『現代の比較福祉国家論——東アジア発の新しい理論構築に向けて』、ミネルヴァ書房、2010)。最近では、「福祉国家とフォーディズム」(『生活経済政策』、No.264、2019)と「後発福祉国家論の再検討——これまでのアジア研究と今後の課題」(上村泰裕・菊池英明・金成垣・米澤旦編、『福祉社会学のフロンティア』、ミネルヴァ書房、近刊予定)などの論文を通して、理論的な洗練化を図っている。従来の福祉国家研究は、主に資本主義との関連、とくに資本主義の本質的な矛盾をもたらす失業・貧困問題や資本主義主義の成熟をもたらす少子高齢化問題への対応として、福祉国家の歴史過程を捉える傾向が強い。しかし、その視点からすると、韓国を含むアジア諸国・地域における「福祉国家の未発達」しか説明できない。それに対して、資本主義に発展をもたらした「フォーディズム」に着目することで、福祉国家の歴史過程についての新しい視点を確保することができ、それによって、アジア諸国・地域に関して、「福祉国家の未発達」ではなく、「非フォーディズム」的な資本主義の展開にみる「福祉国家の新しい途」を浮き彫りにすることができる。その新しい途は単にアジア諸国・地域に限らず、他の先進諸国に対しても、「ポスト・フォーディズム時代」における福祉国家の新しいあり方を示すものと考えられる。このような問題関心から、歴史・現状分析の課題(2)にも取り組み、「格差問題と福祉国家——アジアにみるポスト福祉国家の可能性」(『韓国朝鮮文化研究』、18、2019)と「韓国の社会保障にみるアジアの共通課題——21世紀の新しい途を探る」(『社会学評論』、70(3)、2019)などの研究成果を発表している。

以上の理論研究と歴史・現状分析に関連して、国内および国際学会で、「アジアにみるポスト福祉国家の可能性と限界」(社会学系コンソーシアム・日本学術会議第11回シンポジウム「アジアがひらく日本」、2019)と「人口動態と社会保障——日韓の経験とその政策的含意」(第11回東アジア社会福祉モデルシンポジウム、2019)という研究発表を行い、大きな反響を呼んだ。なお、以上の研究はこれまで、2018年度から2020年度にかけての科学研究費補助金を受けて行っており(「後発福祉国家・韓国のベーシックインカムに政策論的研究」(基盤研究(C):課題番号18K02123, 研究代表者)),それをより発展させるための現地調査を主な目的とした研究課題が科学研究費補助金の交付対象が新しく採択され(「インフォーマル化するアジア——グローバル化時代のメガ都市のダイナミクスとジレンマ」(基盤研究(A):課題番号19H00553, 研究分担者),「アジアにおけるデジタル化の国際比較——利活用水準、政策体系、電子認証制度に注目して」(基盤研究(C):課題番号20K12367, 研究分担者)),現在、アジア各国・地域の現地調査をより活発に進めている。

d 主要業績

(1) 著書

- 共著、田多英範編、『厚生(労働)白書を読む——社会問題の変遷をどう捉えたか』、ミネルヴァ書房、2018.6
共著、金成垣ほか著、『중장기사회보장계획의 선진국 사례 및 시사점 [中長期社会保障計画の先進国事例とその示唆点]』、서강대학교산학협력단 [西江大学校産学協力団]、2018.11
共著、金成垣ほか著、『생계급여제도 국제비교연구 [生計給付制度の国際比較研究]』、한국보건사회연구원 [韓国保健社会研究院]、2018.12
共著、김태완 [キム・テワン]ほか著、『포용성장의 비전과 전략 [包容成長のビジョンと戦略]』 한국보건사회연구원 [韓国保健社会研究院]、2019.3
共著、양재진 [ヤン・ジェジン]ほか著、『사회보장재원구성에 관한 기초연구 [社会保障財源構成に関する基礎研究]』 보건복지부·복지국가연구센터 [保健福祉部・福祉国家研究センター]、2019.11

(2) 論文

- 単著、金成垣、「韓国における社会保障制度の行き詰まりと新たな試み」、『東亜』、2018.11月号、84-93頁、2018.11
単著、金成垣、「足踏みする韓国の社会保障制度」、『週刊社会保障』、No.3014、48-53頁、2019.3
共著、米澤旦・金成垣「韓国における外国からの移住者への支援組織の現状——ヒアリング調査をもとにして」、『明治学院大学社会学部附属研究所年報』、49、219-230頁、2019.3
単著、金成垣、「格差問題と福祉国家——アジアにみるポスト福祉国家の可能性」、『韓国朝鮮文化研究』、18、43-59頁、2019.3
共著、Powell, Martin, Ki-tae Kim & Sung-won Kim, “The puzzle of Japan’s welfare capitalism: a review of the welfare regimes approach”, *Journal of International and Comparative Social Policy*, 35, 92-110, 2019.7
単著、金成垣、「韓国の社会保障にみるアジアの共通課題——21世紀の新しい途を探る」、『社会学評論』、70(3)、224-240頁、2019.12

(3) コラム・エッセー

- 単著、金成垣、「福祉国家とフォーディズム」、『生活経済政策』、No.264、2019.1
単著、金成垣、「20世紀のアジアとその後」、『生活経済政策』、No.268、2019.5

単著, 金成垣, 「21 世紀のアジアとその後」, 『生活経済政策』, No.272, 2019.9

単著, 金成垣, 「広がる『福祉国家的ではないもの』」, 『生活経済政策』, No.276, 2020.1

(4) 学会発表・講演

国内, 金成垣, 「アジアにみるポスト福祉国家の可能性と限界」, 社会学系コンソーシアム・日本学術会議第 11 回シンポジウム「アジアがひらく日本」, 日本学術会議講堂, 2019.1

国際, 金成垣, 「Aging in Japan and Korea」, シンポジウム「未来への対話——デジタルエイジングとアクティブエイジング」, タイ・バンコク, 2019.3.11

国際, 金成垣, 「人口動態と社会保障——日韓の経験とその政策的含意」, 第 11 回東アジア社会福祉モデルシンポジウム, 広東金融学院, 中国・広州, 2019.5.4

国内, 金成垣, 「東アジアの高齢化と福祉政策」第 6 回学習院大学ブランディング・シンポジウム (第 25 回生命科学シンポジウム), 学習院大学, 2019.6.29

国際, 金成垣, 「アジアの高齢化をどう捉えるか——『キャッチアップするアジア』から『学び合うアジア』へ」第 10 回東アジア市民社会フォーラム「長寿社会と市民社会組織——市民社会が主体的に実現する持続可能な福祉」JICA 地球ひろば国際会議場, 2019.10.28

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

(非常勤講師) 明治学院大学, 「社会政策」, 2018.4~2019.3

(非常勤講師) 明治学院大学, 「フィールドワーク」, 2018.4~2019.3

(非常勤講師) 明治学院大学, 「演習 1」, 2018.4~2020.3

(非常勤講師) 明治学院大学, 「演習 2」, 2018.4~

(2) 学会

(国際) 社会保障国際論壇, 事務局, 2010.9~

(国内) 社会政策学会, 日本・東アジア専門部会事務局, 2010.9~2020.5

(国内) 社会政策学会, 幹事, 2019.5~2020.5

(国内) 福祉社会学会, 庶務理事, 2020.6~

(国内) 社会福祉学会, 国際学術交流促進委員, 2018.6~

(国際) 韓国社会政策学会, 国際協力委員, 2012.6~

(3) 学外組織(学協会、省庁を除く)委員・役員

(研究機関) アジア研究所, 機関誌『アジア経済』編集委員, 2020.4~

29 次世代人文学開発センター

《文化交流学部門》

教授 小島 毅 KOJIMA, Tsuyoshi

1. 略歴

1985年3月	東京大学文学部中国哲学専修課程卒業（文学士）
1987年3月	同 大学院人文科学研究科修士課程修了（中国哲学）
1987年4月	東京大学東洋文化研究所助手（東アジア第一部門）
1992年4月	徳島大学総合科学部講師（総合科学科）
1994年4月	同 助教授（人間社会学科）
1996年4月	東京大学大学院人文社会系研究科助教授（中国思想文化学）
2007年4月	同 准教授（中国思想文化学）
2013年4月	同 教授（中国思想文化学）

2. 主な研究活動

a 専門分野

中国思想文化史、王権理論の展開および儒教の教化論

b 研究課題

- (1) 中国における朱子学・陽明学の思想的形成と社会的展開。
- (2) 中国皇帝制秩序を支える王権儀礼とその理論。
- (3) 日本における儒教思想の流入とその社会的効果。
- (4) 東アジアの伝統思想における尊厳概念。

c 概要と自己評価

概要：中国思想文化史研究として、宋代の儒教において生じた新たな思想潮流と、それが朱子学に集約していく様相を中心に研究してきた。また、その延長線上にいわゆる中世以降の日本における朱子学を受容と独自の展開についても扱い、特に王権論の観点から天皇制に関わる思想的・儀礼的事象を探究している。また、尊厳概念の比較思想的研究を課題とする科研の共同研究プロジェクトに加入して東アジアの伝統思想について考察を進めている。

自己評価：2018～2019年度は上記4つの研究課題のうち、(3)と(4)について研究成果を公表できた。特に2019年5月の天皇代替わりと改元にもなってこれに関する知識への社会的需要が高まり、出版・執筆・取材・講演などの形で知見を提供して社会貢献ができた。

2019年度は副研究科長としての業務におわれて自身の研究が計画どおりには進展しなかった。

d 主要業績

(1) 著書

- 単著、小島毅、『天皇と儒教思想』、光文社、2018.5
編著、小島毅、『知の古典は誘惑する』、岩波書店、2018.6
単著、小島毅、『志士から英霊へ——尊王攘夷と中華思想』、晶文社、2018.6
単著、小島毅、『父が子に語る日本史』、筑摩書房、2019.10
単著、小島毅、『父が子に語る近現代史』、筑摩書房、2019.11
編著、加藤泰史・小島毅（共編）、『尊厳と社会（上）』、法政大学出版会、2020.3
編著、加藤泰史・小島毅（共編）、『尊厳と社会（下）』、法政大学出版会、2020.3

(2) 論文

- 小島毅、「明治後半期の陽明学発掘作業」、『日本儒教会会報』、2、55-70頁、2018.1
Kojima Tsuyoshi、「The Establishment of the Study of Chinese Philosophy in Japan」、『Acta Asiatica』、117、21-29頁、2019
小島毅、「靖国神社のついで語り——明治維新百五十年で変わりうるか」、堀江宗正（編）『宗教と社会の戦後史』、pp.151-173、2019.4
小島毅、「士大夫たちの思念を求めて」、渡邊義浩編『学際化する中国学』、2019.6

小島毅、「近代における朱子学・陽明学」、『講座 近代日本と漢学 第4巻 漢学と学芸』、戎光祥出版、pp.132-145、2020.3

陳健成・小島毅、「伝統中国における梅の表象」、『尊厳と社会（上）』、pp.211-231、2020.3

(3) 啓蒙

小島毅、「江戸に寄寓した士大夫（難者問邪1）」、『UP』、553、pp.12-17、2018.11

小島毅、「湊川で神になった悪党（難者問邪2）」、『UP』、556、pp.27-33、2019.2

小島毅、「孟子か荀子か——人間観の二類型」、『研究東洋』、第9号、pp.10-11、2019.2

小島毅、「吉野に拉致された天皇（難者問邪3）」、『UP』、559、pp.40-45、2019.5

小島毅、「応天府で即位した皇帝（難者問邪4）」、『UP』、562、pp.14-20、2019.8

小島毅、「ソウルで論争したソンビたち（難者問邪5）」、『UP』、565、pp.36-41、2019.11

小島毅、「マラトンから走った伝令（難者問邪6）」、『UP』、568、pp.41-45、2020.2

(4) 研究報告書

小島毅、「東京大学草創期とその周辺 「東大教授中村正直——漢学者は洋学もこなす」」、pp.113-119、2019.3

(5) 監修

小島毅、『世界史大図鑑』、三省堂、2019.2

(6) マスコミ

「同級生交歓」、『文藝春秋 96 巻 12 号』、2018

「儒教」、『J-WAVE : JAM THE WORLD の UP-CLOSE コーナー』、2018.3.13

「「新しい時代区分」が必要だ 保立道久／加藤陽子／小島 毅」、『文藝春秋 96 巻 6 号』、2018.5.21

「五・二六 小島毅氏講演会「靖国神社の源流」」、『政教分離』、政教分離の侵害を監視する全国会議、2018.6.25

「58 年かけ全 120 巻「新釈漢文大系」完結」、『朝日新聞』、2018.7.11

『志士から英霊へ』を書いた小島毅氏に聞く、『週刊東洋経済』、2018.7.28

「不可解な” 禅譲 ” 非民主的」、『朝日新聞』、2018.9.21

「薩長のための靖国神社」、『月刊日本』 22 巻 11 号、pp.55-59、2018.10.22

「備前で古典フォーラム——すぐ役立たないから必要」、『山陽新聞』、2018.11

「元号 1300 年超の歴史」、『朝日新聞』、2019.3.11

「元号 1300 年超の歴史」、『朝日新聞』、2019.4.1

「東アジアの元号」、『朝日新聞』号外 3 面および夕刊 3 面、2019.4.1

「新元号決定」、『新潟日報、愛媛新聞、北日本新聞、東奥日報、信濃毎日、岩手日報、長崎新聞、静岡新聞、福井新聞、北海道新聞、神奈川新聞、山形新聞、中国新聞、山陰中央日報』など、2019.4.2

「「令」「和」次代への思い映す」、『朝日新聞』 3 面、2019.4.2

「「令和」典拠の万葉集序文」、『北海道新聞』 32 面、2019.4.5

「「令和」ぬぐえぬ違和感」、『朝日新聞』 28 面、2019.4.10

3. 主な社会活動

(1) 学会

国内、日本中国学会、副理事長、2015.4～

国内、日本儒教学会、理事（常務委員）、2016.5～

国内、中国社会文化学会、理事長、2017.7～2019.7、理事、2019.7～

1. 略歴

- 1991年3月 東京大学文学部第二類（史学）美術史学専修課程卒業
- 1991年4月 東京大学大学院人文科学研究科美術史学専攻修士課程入学
- 1994年3月 同 修了
- 1994年4月 東京大学大学院人文社会系研究科美術史学専攻博士課程進学
- 1994年10月 ローマ第2大学トール・ヴェルガータ文学部単科生（イタリア政府給費留学生、～1995年3月）
- 1995年4月 在アテネ イタリア国立考古学研究所大学院専門課程入学（イタリア政府給費生、～1998年3月）
- 1998年12月 同 修了、ディプロマ取得
- 2000年3月 東京大学大学院人文社会系研究科美術史学専攻博士課程単位取得満期退学
- 2001年4月 日本学術振興会特別研究員（PD）（～2004年3月）
- 2002年5月 博士（文学）取得（東京大学）
- 2005年9月 国立西洋美術館学芸課リサーチフェロー
- 2006年8月 東北大学大学院文学研究科助教授
- 2007年4月 同 准教授
- 2017年4月 同 教授
- 2018年4月 東京大学大学院人文社会系研究科准教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

古代ギリシア・ローマ美術史

b 研究課題

- (1) 古代ギリシア・ローマにおける造像と信仰
- (2) 帝政前期のローマ美術の中央から周縁への伝播と地域性
- (3) 3D形状比較を用いた古代彫刻工房の実態の解明
- (4) 美術展覧会のVRアーカイブとVR美術鑑賞

c 概要と自己評価

古代ギリシア・ローマ美術における神像や肖像の造像活動を、宗教的・社会的背景のなかで研究している。2018～19年度は特に肖像について、その宗教的・社会的側面を考察し、著書を執筆中であるが、書き上げるには至らなかった。また上記の(1)と(2)を連動させる形で、地中海世界における知の伝達に関する科研プロジェクトに参加し、ローマ帝政前期における皇帝肖像の伝播や地方工房の形成について、発表や論文執筆を行った。(3)に関しては、以前計測した古代彫刻のサンプルの問題点を明らかにするために、新たにウフィツィ美術館で大理石彫像を3D計測し、現在解析を進めている。またVR東京大学バーチャルリアリティ教育研究センターのプロジェクトメンバーとなり、情報理工学系研究科と朝日新聞社との共同プロジェクトとして、院生たちとともに「ムンク展」「コートールド展」のVR撮影を行い、今後の研究に利用可能なコンテンツを制作することができた。

研究成果が論文や著書の出版にまで至っていないものが多いので、今後公表に力を入れていく必要がある。

d 主要業績

(1) 論文

- 芳賀京子、「古代ギリシア彫刻の地域流派」、『美術フォーラム21』、37、108-113頁、2018.5
- 芳賀京子、「ギリシア・ローマ美術における創造と複製—3D技術と古代彫刻—」、『文化交流研究』、2019.3
- Kyoko Sengoku-Haga, “Rinvenimenti scultorei dalla ‘Villa di Augusto’ (2004-2014),” *Amoenitas*, 8, pp. 95-103, 2019

(2) 学会発表

- 国内、芳賀京子、「古代ギリシア・ローマ美術における〈古典〉」、シンポジウム「西洋美術史における〈古典〉と〈古典主義〉」、名古屋大学、2018.7.14
- 国際、Kyoko Sengoku-Haga, “Diffusion of Imperial Portraits in the Roman Empire,” Fourth Euro-Japanese Colloquium on the Ancient Mediterranean World, 名古屋大学、2018.9.5
- 国内、芳賀京子、「VR技術と美術鑑賞・美術教育・美術研究」、東京大学が挑戦するVRの未来、東京大学、2018.11.1

国際、Kyoko Sengoku-Haga, “Before Aphrodisias: Sculptors in Asia Minor in the Late Hellenistic Period,” Aphrodisias Workshop:

War and Peace in Roman Aphrodisias, 50 BC - AD 250、関西学院 東京丸の内キャンパス、2019.6.5

国内、芳賀京子、「VR と美術館・VR で美術館」、第24回日本バーチャルリアリティ学会、東京大学、2019.9.13

国内、芳賀京子、「古代ギリシア・ローマ美術——神々と人の姿」、日独文化研究所 第29回公開シンポジウム「文明と芸術/美術 古代ギリシア・ローマ世界とイスラーム世界」、京都大学、2019.10.20

国内、芳賀京子、「火山の噴火と古代美術」、イタリア学会 第67回大会 シンポジウム「火山の記憶——ナポリと鹿児島」、鹿児島大学、2019.10.26

国内、芳賀京子、「古代ギリシア神域の記述と信仰の記憶」、東大人文・熊野フォーラム「聖地の記述/記憶——熊野を中心に」、東京大学、2020.1.12

(3) 啓蒙

芳賀京子、「VR 技術が明らかにする古代ギリシア・ローマ彫刻のリアル」、『淡青』、28、23 頁、2019.3

(4) 予稿・会議録

国内会議、芳賀京子、「人文学の最前線」、シンポジウム「人文学の最前線」、東京大学、2018.10.20

『人文学の最前線』、49-56, 62-63 頁、2019.1

(5) 会議主催(チェア他)

国内、「第71回 美術史学会全国大会」、チェア、シンポジウム「聖地巡礼」、東北大学、2018.5.18～2018.5.20

(6) 研究テーマ

文部科学省科学研究費補助金、基盤研究 (C)、芳賀京子、研究代表者、「古代ギリシアにおける英雄崇拜と造像に関する研究」、2016～2019

文部科学省科学研究費補助金、基盤研究 (A)、芳賀京子、分担者 (代表者は東大外)、「古代地中海世界における知の動態と文化的記憶」、2018～

共同研究、芳賀京子、研究代表者、「展覧会 VR アーカイブの構築と美術・歴史教育への利活用」、2019～

(7) 授業開発・教育プログラム

「MOOC「男と女の文化史」(東北大学)」、高橋章則、嶋崎啓、芳賀京子、横溝博、2018

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

セミナー、知求アカデミー講座、「エトルリア美術の旅」、2018.11

特別講演、立教大学、「ギリシア・ローマ彫刻の研究—過去と未来—」、2019.1

非常勤講師、東北大学、「ジェンダーと人間社会」、2019.6.13、2019.11.20

非常勤講師、東北大学美学・西洋美術史、「古代ギリシアのヘレニズム美術」、2019.7

(2) 学会

国内、美術史学会、常任委員、2014.5～2018.5

国内、西洋古典学会、委員、2019.6～

《 国際人文学部門 》

教授 向井 留実子 MUKAI, Rumiko

1. 略歴

1978年3月	青山学院大学文学部フランス文学科卒業
1994年4月	広島大学大学院教育学研究科（日本語教育）博士課程前期入学
1996年3月	広島大学大学院教育学研究科（日本語教育）博士課程前期修了（教育学修士）
1996年4月	愛媛大学教育学部、松山東雲女子大学人文学部非常勤講師
1998年4月	松山東雲女子大学人文学部専任講師
2000年4月	松山東雲女子大学人文学部助教授
2003年10月	愛媛大学留学生センター助教授
2011年9月	東京大学日本語教育センター教授
2014年7月	東京大学大学院人文社会系研究科教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

日本語教育

b 研究課題

- 1) アカデミックな日本語の教育方法および教材の開発
- 2) 大学および地域における日本語教育・支援の体制づくりのための調査・研究
- 3) 日本語非母語話者の学習ニーズの多様化に対応しうる漢字教育のための調査・研究

c 概要と自己評価

教育面では、指導を強化すべき古典関係科目の追加開講を実現するとともに、集中講座を留学生から要望の多いアカデミック・ライティングや文法指導に重点を置くことで、より留学生のニーズに応えられるコース改編を行った。また、日本人院生が担当する留学生のための特別講座のさらなる充実化を図り、2018年度と2019年度で新しく9講座を追加し、11講座の開講を可能にした。運営面では、特別講座を担当する日本人院生にLecture Assistantという名称を与える体制を整え、院生のキャリア支援に貢献できるようにした。さらに、留学生の研究支援ために日本人院生による学習サポートのシステムを2018年度に立ち上げ、2019年には軌道に乗せることができた。研究面では、アカデミック・ライティング教育の中で重要な指導項目とされる引用についての調査・研究を進め、2019年度に科学研究費補助金に採択されたことを契機に新たな展開を模索している。以前より継続中の「定住外国人のリテラシー」の調査・実践を進め、その結実として、日本語教室空白地域の自治体と協力した教室立ち上げへの道を開くことができた。

d 主要業績

(1) 著書

共著、徳田剛他編著、高橋志野・新矢麻紀子・向井留実子・棚田洋平、『地域発外国人住民との地域づくり』、晃洋書房、2019.2

(2) 論文

向井留実子・金山泰子、「日本語で学位取得を目指す大学院留学生を対象とした学業・研究活動を支える日本語教育の試み」、『文化交流研究』、第32号、139-152頁、2019.3

(3) 学会発表

国内、近藤裕子、中村かおり、向井留実子、「初年次アカデミック・ライティングに求められる『説得力』の指導に向けて」、大学教育学会第40回大会、2018.6.10

国際、高橋志野・向井留実子、「大学のグローバル化に向けた日本語教育の役割と課題」、2018年日本語教育国際研究大会、ヴェネツィア・カフォスカリ大学、2018.8.3

国際、向井留実子、中村かおり、近藤裕子、「論理的な文章作成のための効果的な学習活動」、2018年日本語教育国際研究大会、ヴェネツィア・カフォスカリ大学、2018.8.3

国内、中村かおり、近藤裕子、向井留実子、「アカデミック・ライティングにおける間接引用で求められる要約とは」、第51回日本語教育方法研究会、2018.9.8

国内、中村かおり、向井留実子、近藤裕子、「ライティング・スキルとしての間接引用につなげる要約指導の実践」、
大学教育学会 2018 年度課題研究集会、2018.12.2

国内、中村かおり、向井留実子、近藤裕子、「専門分野に即した引用方法の理解を促す試み」、第 52 回日本語教育方法研究会、2019.3.23

国内、向井留実子、「日本人院生による日本語教育と専門教育をつなぐ留学生向け講座の試み」、日本教育工学会研究会、愛媛大学、2019.7.27

国内、中村かおり、向井留実子、近藤裕子、「読解力の高い日本語学習者はエッセイの論理性をどのように再構築するか」、第 53 回日本語教育方法研究会、2019.9.14

国内、中村かおり、近藤裕子、向井留実子、「読解学習を論理的な文章作成につなぐための一考察」、第 54 回日本語教育方法研究会、2020.3.14

国内、近藤裕子、中村かおり、向井留実子、「発話思考法による大学生の読解課程に関する調査」、第 26 回大学教育研究フォーラム、2020.3.18

(4) 会議主催 (チェア他)

国内、「第 8 回 東京大学文学部日本語教育研究会」、主催、2019.2.9

国内、「第 9 回 東京大学文学部日本語教育研究会」、主催、2019.3.9

国内、「第 10 回 東京大学文学部日本語教育研究会」、主催、2019.3.16

国内、「第 11 回 東京大学文学部日本語教育研究会」、主催、2019.7.13

国内、「第 12 回 東京大学文学部日本語教育研究会」、主催、2020.2.2

(5) 研究テーマ

文部科学省科学研究費補助金、基盤研究 (C)、研究代表者、「アカデミック・ライティングにおける適切な間接引用指導のための調査・研究」、2019～2021

文部科学省科学研究費補助金、基盤研究 (C)、研究分担者、「移住女性のリテラシー保障に向けた学習支援体制と地域コミュニティの構築に関する研究」、2016～2020

(6) 授業開発・教育プログラム

留学生のための特別講座

3. 主な社会活動

(1) 学会

国内、日本語教育学会、一般会員、1986～

国内、専門日本語教育学会、一般会員、2005～

国内、日本語教育方法研究会、1997～、運営委員、2009～

国内、留学生教育学会、一般会員、2011～

国内、大学教育学会、一般会員、2018～

《 人文情報学部門 》

教授 下田 正弘 SHIMODA, Masahiro

1. 略歴

1981年3月	東京大学文学部印度哲学印度文学専修課程卒業
1981年4月	東京大学大学院人文科学研究科修士課程（印度哲学）入学
1984年3月	東京大学大学院人文科学研究科修士課程（印度哲学）修了
1984年4月	東京大学大学院人文科学研究科博士課程（印度哲学）進学（～1989年3月）
1985年7月	インド・デリー大学大学院留学（文部省国際交流計画）（～1986年5月）
1988年4月	日本学術振興会特別研究員（～1990年3月）
1994年6月	博士（文学）（東京大学）
1994年10月	東京大学文学部（インド哲学仏教学）助教授
1995年4月	東京大学大学院人文社会系研究科（インド哲学仏教学）助教授
2006年1月	School of Oriental and African Studies (University College of London) 教授（～2006年3月）
2006年4月	東京大学大学院人文社会系研究科（インド哲学仏教学）教授
2007年4月	東京大学大学院人文社会系研究科（次世代人文学開発センター兼担）教授
2011年3月	Stanford University 客員教授（～2011年4月）
2012年2月	University of Virginia 客員研究員（～2012年5月）
2013年6月	東京大学大学院人文社会系研究科（次世代人文学開発センター配置換、インド哲学仏教学兼担）教授
2017年3月	University of Vienna (Faculty of Philology and Cultures) 教授（～2017年5月）

2. 主な研究活動

a 専門分野 b 研究課題

専門はインド仏教聖典形成史、および人文情報学 (Digital Humanities)。前者については、経 sūtra と律 vinaya を中心とするテキストの形成過程の解明を通し、初期仏教から大乘仏教にいたる思想史の構築を図る。研究テーマの詳細は、(1)大乘経典の形成過程と思想的特徴の解明、(2)近代仏教学における仏教研究方法の問いなおし、(3)仏教思想の現代的意義の考究、という3点に集約される。西洋近代に生まれ、200年の歴史を有する仏教学の方法論について、人文学の方法論全体のなかで再検証し、同時に現代の倫理として機能する可能性を考慮に入れつつ解明を進めている。後者の課題、人文情報学については、大蔵経という歴大な漢語仏教文献コーパスを中心として仏教学の国際的デジタル知識基盤形成を進め、デジタル媒体における人文学研究の方法論構築をめざしている。

c 概要と自己評価

仏教史最大のなぞとされる大乘仏教成立問題について、テキストから想定される当時の社会背景に成立要因を還元するという、これまで主流をなしてきた研究のもつ問題点を洗いなおし、テキスト研究として的大乗仏教研究の方法を追究してきた。1960年代以降、歴史学における言語論的転回を経た人文学において課題化されたテキスト論は、古代インド仏教における諸文献、ことに初期大乘経典を解明するさいに重要な主題となる。ここ10年のあいだに、ポスト構造主義以降のテキスト研究批判を踏まえ、大乘経典の特性の解明を進めるなかで、大乘仏教運動は、外部の制度的変化に反映することのない経典制作運動として既存の仏教制度内部で進められ、その成立には口伝から書写へという伝承の媒体の変化が大きく関与していた、という新たな仮説を提示しえた。同時に、近代仏教学方法論全般を問いなおし、イデオロギーに先導されがちな欧米起源のオリエンタリズム論の影響下に留まる仏教学批判を超え、資料の特性と仏教伝説の形成方法とに照させつつ批判をする方法の樹立をめざし、一定の成果を挙げつつある。

人文情報学にかんしては、ことにこの10年に蓄積した成果を国際学界において積極的に検証したことによって、Digital Humanities という人文学新領域の構築と推進において仏教研究が果たすべき役割を顕在化させた。文字レベルにおける Unicode への登録と ISO 漢字委員会 (IRG) への参加、テキストレベルにおける TEI (Text Encoding Initiative) コンソーシアムでの東アジア日本研究会の設置、画像レベルにおける IIIF (International Image Interoperability Framework) への参画は、日本の日本の人文学全体に資する企図である。これらの成果を総合し科学研究費基盤 S 「仏教学術新知識基盤の構築」の成果として出版した『デジタル学術空間の作り方』においては、デジタル媒体における人文学のありようについて、その原理的次元から具体的適用例までを提示した。

d 主要業績

(1) 著書

- 下田正弘 (単著) 「井筒俊彦が開顕する仏教思想——比較宗教的地平から如来蔵思想をみる」、澤井義次・鎌田繁編『井筒俊彦の東洋哲学』、慶応大学出版会、207-230 頁、2018.9
- 下田正弘・永崎研宣 (共編著) 『デジタル学術空間の作り方——仏教学から提起する次世代人文学のモデル』、文学通信、2019.12
- 下田正弘 (単著) 「変貌する学問の地平と宗学の可能性」、『日本仏教を問う: 宗学のこれから』、207-241 頁、2018.9
- 下田正弘 (単著) 「大乘仏教の成立」伊藤邦武、山内志朗、中島隆博、納富信留 (責任編集) 『世界哲学史 2——古代 II 世界哲学の成立と展開』(ちくま新書)、筑摩書房、pp. 87-111、2020.3

(2) 論文

- 下田正弘 (単著) 「仏教学のフロンティアと比較思想——言語論的転回からの照射」、『比較思想研究』、45、58-63 頁、2019.3
- 下田正弘 (単著) 「エクリチュール論から照らす仏教研究——大乘経典研究準拠枠構築のこころみ」、『インド哲学仏教学研究』27、1-51 頁、2020.3
- 下田正弘 (単著) 「デジタル化時代の人文学と中国研究——学術インフラの整備と国際学術ネットワークへの貢献に向けて—」、『中国—社会と文化—』34、5-19 頁、2019.7
- 下田正弘 (単著) 「『正典概念とインド仏教史』を再考する」、『印度学仏教学研究』68-2、1043-1035 頁、2020.3
- 王一凡・下田正弘 (共著) 「中国の書籍デジタル化コンソーシアム CADAL の動き」、『中国 21 デジタル資料の学術と未来』Vol.51、167-184 頁、2019.12
- Shimoda, Masahiro. (単著) “The Structure of the Soteriology of Tathāgatagarbha Thought as Seen from the Perspective of Different Modes of Discourse: A Response to Critical Buddhism,” *Acta Asiatica*, 118, 79-97, 2019
- 永崎研宣・下田正弘 (共著) 「オープン化が拓くデジタルアーカイブの高度利活用: IIIF Manifests for Buddhist Studies の運用を通じて」、『じんもんこん論文集』(2018)、389-394 頁、2018.11

(3) 解説・その他

- Shimoda, Masahiro (単著) . “Foreward.” John White and Kmmyo Taira Satō, 5-7-5 Tha Haiku of Basho, London: The Buddhist Society Trust, pp. 8-10, 2019
- 下田正弘 (単著) 「文庫版解説: 仏教思想における言説様式の差異について」、高崎直道『仏性とは何か』法蔵館、2019.11、313-318
- 下田正弘 (単著) 「現代思想から照らす称名念仏の意義」、『ともしび』801、2019.7、1-9
- 下田正弘 (単著) 「二十一世紀の日本仏教・仏教学と社会貢献 パネル主旨のまとめ」、『宗教研究』92. 別冊、42 頁、2018.12
- 下田正弘 (単著) 「デジタル学術空間と宗教研究—AAR Guideline への応答—」、『宗教研究』別冊、2018.12
- 下田正弘 (単著) 「仏教思想のエッセンス①」、『浅草寺』669、24-32 頁、2019.4
- 下田正弘 (単著) 「仏教思想のエッセンス②」、『浅草寺』670、42-49 頁、2019.5
- 下田正弘 (単著) 「学問の対象としての法然浄土学」、『浄土学』55、29-57 頁、2018.6
- 藤田宏達・今西順吉・藤井教公・斎藤明・下田正弘・細田典明「学問の思い出・藤田宏達先生を囲んで」、『東方学』137、99-140 頁、2019.3
- 下田正弘 (単著) 「デジタル学術空間と宗教研究—AAR Guideline への応答—」、『宗教研究』別冊、2019.12

(4) 主な学会等発表

- 国際、下田正弘、「言説の様相の差異からみた如来蔵思想の救済論的構造——批判仏教に込めて——」、国際東方学者会議、東京: 教育会館、2018.5.19
- 国内、下田正弘、「仏教学のフロンティアと比較思想」、比較思想学会、東京: 日本大学、2018.6.16
- 国内、下田正弘、「デジタル化時代の人文学と日本における中国研究」、中国社会文化学会、東京: 東京大学、2018.7.8
- 国際、Shimoda Masahiro、「Building a Digital Infrastructure for the Humanities and the Role of Buddhist Studies」、Triptaka for the Future: Envisioning the Buddhist Canon in the Digital Age (The 4th International Conference on the Chinese Buddhist Canon)、The University of Arizona, USA、2018.11.3
- 国内、下田正弘、「仏教学とデジタル—本プロジェクトの位置づけと人文情報学の将来像」、デジタル時代における仏教学のあり方、東京: 東京大学、2019.2.9
- 国内、下田正弘、「浄土宗と大蔵経——増上寺三大蔵のデジタルアーカイブの意義——」、公開講座「仏教の智慧を開く——浄土宗大本山増上寺所蔵未版大蔵経デジタルアーカイブ化——」、東京: 浄土宗大本山増上寺、2019.3.18

国際、Shimoda, Masahiro. “A Linguistic Domain as a Field of Consciousness: Appearance of a New Mode of Discourse in Mahāyāna Sūtras and the Germination of the Soteriology of Tathāgatagarbha Doctrine.” International Workshop: New Perspectives on the Idea of Buddha-Nature in Indian Buddhism University of Hamburg (Germany). 2019.7

国内、下田正弘、「正典概念とインド仏教史を再考する—直線的史観からの解放—」、日本印度学仏教学会第70回学術大会、京都：仏教大学、2019.9.7

国内、下田正弘、「デジタル学術空間と宗教研究——AAR Guideline への応答——」、日本宗教学会第78回学術大会、東京：帝京科学大学、2019.9.14

国際、Shimoda, Masahiro. “Buddhism and Digital Humanities,” King’s College London Buddhist Studies Research Seminars 2020, 2020.1.31. King’s College London, London (UK).

(5) 予稿・会議録

国内会議、一色大悟・荻部直・下田正弘・山口輝臣・鈴木淳、「東大仏教学への新たな視座」、東京：東京大学、2018.7.20 『Humanities Center Booklet Vol.1 企画研究「学術資産としての東京大学」講演録1』、3-54頁、2019.8

国際会議、Shimoda, Masahiro. “The Significance of Buddhist Studies in the Diversity of Digital Humanities,” Digital Humanities and Buddhism: Focussing on Data Mining and Visualization, Seoul, Dongkuk University, 2018.6, pp. 24-27

国内会議、永崎研宣・下田正弘他「横断型デジタル学術基盤を目指して—SAT2018 の構築を通じて—」、『情報処理学会研究報告(Web)』 Vol. 2018 - CH - 117, No.8, 1 - 6, 2018.5、<http://jglobal.jst.go.jp/public/201802267617877224>

国内会議、王一凡・永崎研宣・下田正弘「グラフデータベースによる文書リポジトリ統合管理システムの設計」、『情報処理学会研究報告(Web)』 Vol.2018 - CH - 117, No.8, 1 - 6, 2018.5、<http://jglobal.jst.go.jp/public/201802277512962828>

(6) 会議主催(チェア他)

国際、「デジタルアーカイブ時代の人文学の構築に向けて——仏教学のための次世代知識基盤の構築——」、主催、2018.1.6～2018.1.7

国際、「Dialogue on Digital Philology West and East: Perseus Digital Library and SAT Daizokyo Text DB」、主催、Hitotsubashi-kaikan, Tokyo, 2018.7.6

国際、「Text Encoding Initiative Conference」、主催、東京：一橋講堂、2018.9.9

国内、「シンポジウム デジタル時代における仏教学のあり方」、主催、東京：東京大学、2019.2.9～2019.2.10

国内、「シンポジウム デジタル知識基盤におけるパブリックドメイン資料の利用条件をめぐって」、主催(科学研究費基盤 A「仏教学デジタル知識基盤の継承と発展」)、2020.1.17、東京：都市センターホテル

(7) 受賞

国内、SAT 大蔵経データベース研究会代表・下田正弘「デジタルアーカイブ学会学会賞(実践賞)」、デジタルアーカイブ学会、2019.3.15

国内、SAT 大蔵経データベース研究会代表・下田正弘「第8回ゲスナー賞金賞」、株式会社丸善雄松堂、2019.11

(8) 研究テーマ

日本学術振興会科学研究費補助金、基盤研究 A、下田正弘、分担者(代表者は東大外)、「バウッダコーシャの新展開—仏教用語の日英基準訳語集の構築—」、2018～2016

日本学術振興会科学研究費補助金、基盤研究 S、下田正弘、研究代表者、「仏教学新知識基盤の構築——次世代人文学の先進的モデルの提示」、2015～2018

文部科学省科学研究費補助金、基盤研究 A、下田正弘、研究代表者、「仏教学デジタル知識基盤の継承と発展」、2019～現在

文部科学省科学研究費補助金、基盤研究 A、下田正弘、分担者(代表者は東大外)、「バウッダコーシャの総括的研究—仏教用語の日英基準訳語集の次世代モデル構築に向けて」、2019～

文部科学省科学研究費補助金、基盤研究 C、下田正弘、分担者(代表者は東大外)、「仏教生死観を用いた生涯発達心理学の再考—ターミナルケアと死生観教育への応用」、2019～

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

British Columbia University, DILA, Taiwan、「Some Reflections on the History of Thoughts of Mahāyāna Buddhism」、2018.1

東国大学・特別講義(Korea, ソウル)、「大乘仏教研究の現在」、2018.6

京都大学大学院文学研究科(集中講義)、2018.9

(2) 学会

国際、Alliance for Digital Humanities Organizations、理事、2011～2018

国際、International Association for Buddhist Studies、理事、2015～2018
 国際、The Eastern Buddhist Society, Board Member、編集顧問、2005～現在
 国際、Japanese Association for Digital Humanities (日本デジタル・ヒューマニティーズ学会)、会長、2011～2017、理事、
 2011～現在
 国内、日本印度学仏教学会、理事長、2017～現在
 国内、日本宗教学会、常務理事、評議員
 国内、一般財団法人東方学会、理事
 国内、仏教思想学会、理事
 国内、パーリ学仏教文化学会、常務理事
 国内、比較思想学会、理事
 国内、日本学術会議連携会員、2011～現在
 国内、日本西藏学会運営委員

(3) 学外組織（学協会、省庁を除く）委員・役員

大蔵経テキストデータベース研究会(SAT)、代表委員、1995～現在
 一般財団法人人文情報学研究所、評議員、上席連携研究員
 大蔵経研究推進会議、常任議員、議長
 公益財団法人仏教伝道協会、英訳大蔵経編集委員会委員
 一般財団法人石原奨学育英会、評議員
 一般財団法人仏教学術振興会、理事、選考委員
 公益財団法人国際宗教研究所、顧問
 一般財団法人東京大学仏教青年会、理事
 宗教教育研究センター連携委員

教授 **ミュラー アルバート・チャールズ** MULLER, Albert Charles

1. 略歴

1981年9月	ニューヨーク州立大学（ストーニブルック校）宗教学部専攻課程入学
1985年5月	同 上 卒業
1984年9月	関西外国語大学入学
1985年5月	同 上 修了
1986年9月	バージニア大学大学院博士課程入学（アジア宗教学専攻）
1987年5月	同 上 ニューヨーク州立大学大学院転学のため退学
1987年9月	ニューヨーク州立大学大学院（ストーニブルック校）比較文学科博士課程入学
1993年8月	同 上 修了（文学博士）
1994年4月	東洋学園大学助教授（～1997年3月）
1997年4月	同 上 教授（～2008年8月）
2005年4月	東京大学教養学部・英語科・非常勤講師（～2007年3月）
2008年10月	東京大学人文社会系研究科・特任教授（～2013年9月）
2013年11月	東京大学人文社会系研究科・教授
2019年3月	定年退職
2019年4月	東京大学人文社会系研究科・名誉教授、武蔵野大学経営学部（教養教育）・教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

東アジア仏教 韓国朝鮮仏教・儒教 唯識仏教 禅仏教 デジタル・ヒューマニティーズ

b 研究課題

- ① 韓国新羅時代の仏教、特に影響力を持った学僧：元曉（617-686）、太賢（8c）などの思想と経典注釈。
- ② 韓国朝鮮前期の禅仏教、特に禅僧：己和（1376-1433）の思想、活動、著作。
- ③ 中国唐・宋・明時代と韓国高麗・朝鮮時代における仏教・儒教・道教（いわゆる「三教」）の関係。
- ④ 東アジアの仏教・儒教・道教における「体用」（essence-function）の哲学的パラダイムの意味と役割。
- ⑤ 西洋的認識論、行動心理学、および仏教の見解に関する faith（信仰）、belief（信念）、viewpoint（見方）、opinion（意見）概念の多文化的比較。
- ⑥ 仏教専門語の漢・英インターネット辞典の編集。（www.buddhism-dict.net/ddb）
- ⑦ 儒教・道教・東アジア史の専門語の漢・英インターネット辞典の編集。（www.buddhism-dict.net/dealt）
- ⑧ 東アジア思想・歴史・言語に関する研究、電子化テキスト、論文、著書、翻訳、索引などのリソースウェブ・サイトの編集、管理。（www.acmuller.net）

c 概要と自己評価

My basic training in graduate school was in the study of Korean Buddhism, classical, medieval and premodern, which means that I have been throughout, reading texts written in kanbun. Since Korean Buddhism is a vastly understudied area (there are only a handful of specialists of Korean Buddhism Japan and the West), I have sought to make available for other scholars the works of Korean scholar monks who were influential in Korea, as well as East Asia. I began my career by studying the works of the Goryeo-Joseon monk Gihwa 己和 (1376-1433), but for the past 15 years, have focused mainly on the writings of the hugely influential scholar-monk Wonhyo 元曉 (617-686), along with the works of some of his influential contemporaries.

From the beginning of my career, I have also been deeply interested in the work of translating classical Buddhist works (as well as Confucian and Daoist works) into modern English, and so translation has become one of the major components of my career. Also, since I discovered early in my career that there were no good dictionaries available for this kind of translation work, I began to compile my own dictionaries, which I developed using the Internet. Nowadays, with the help of scores of collaborators, I maintain two large dictionaries on the web (www.buddhism-dict.net) which are used by scholars and students throughout universities in the West. In turn, this work in development of web resources has led me into the field of Digital Humanities.

d 主要業績

(1) 論文

- Muller, A. Charles. 2018. "An Inquiry into Views, Beliefs and Faith: Lessons from Buddhism, Behavioural Psychology and Constructivist Epistemology." *Contemporary Buddhism*. : 1–20. DOI: <https://doi.org/10.1080/14639947.2018.1442134>
- Muller, A. Charles. 2018. "The SAT Taishō Text Database: A Brief History," *Reinventing the Tripitaka: Transformation of the Buddhist Canon in Modern East Asia* : 175-185
- Muller, A. Charles. 2018. "インド仏教の中国化における体用論の出現—その概要を論ず—." *東アジア仏教学術論集* 5 : 125-199.
- Muller, A. Charles. 2019. "Philosophical Bases of the Goryeo-Joseon Confucian-Buddhist Confrontation: The Works of Jeong Dojeon (Sambong) and Hamheo Deuktong (Gihwa)." In Ro, Young-chan, ed. *Dao Companion to Korean Confucian Philosophy*. Dordrecht: Springer. 285–309
- Muller, A. Charles. 2019. "The Digital Dictionary of Buddhism and CJKV-English Dictionary: A Brief History." In Veidlinger, Daniel, ed. *Digital Humanities and Buddhism: An Introduction*. Berlin, Boston: De Gruyter. 143–156 DOI: <https://doi.org/10.1515/9783110519082-009>

(2) 学会発表

- "Buddhist Translation in the 21st Century: Experiences, Obstacles, and Solutions." Symposium: *Translating Buddhist Texts: The Making of an English Buddhist Canon*; May 3, 2018, Berkeley CA.
- "Using XML Technologies for East Asian Lexicographical Projects." 2nd Digital Humanities Workshop in Hanoi; May 27, 2018, Hanoi, Vietnam
- "Translating the Buddhist Canon in the 21st Century: Experiences from the Perspective of Editing and Managing Large Translations Projects." *International Lotus Sutra Seminar*; June 16, 2018, Nakano, Tokyo
- "The DDB/CJKV-E Dictionaries after 32 Years: Actualizing the Promises of XML-TEI." 2018 conference of the Text Encoding Initiative, September 13, Tokyo
- "Buddhist Translation in the 21st Century: Obstacles and Solutions." *Translation Forum 2019: Humanistic Buddhist Texts in Translation: Standards, Theory and Practice*; January 12, 2019; Fo Guang Shan, Kaohsiung, Taiwan

“Permutations of the Essence-Function 體用 Paradigm in East Asian Thought.” Final Lecture, University of Tokyo, January 26, 2019

“Crowdsourcing Bibliographies: Establishing Practices with the H-Buddhism Zotero Bibliography.” SAT Kakenhi Project Symposium; February 9-10, 2019, University of Tokyo

3. 主な社会活動

(1) Web Resource Development

Charles Muller 編集 Digital Dictionary of Buddhism (電子佛教辞典 www.buddhism-dict.net/ddb) 範囲の拡大: 2014/5 に 62,553 語彙→2020/8: 74,517 語彙

Charles Muller 編集 CJKV-E Dictionary (漢日韓越-英辞典 www.buddhism-dict.net/dealt) 範囲の拡大: 2014/5 に 37,814 語彙→2020/8: 62,916 語彙

准教授 大向 一輝 OHMUKAI, Ikki

1. 略歴

1996年4月	同志社大学工学部知識工学科入学
2000年3月	同 卒業
2000年4月	同志社大学大学院工学研究科知識工学専攻博士前期課程入学
2002年3月	同 修了
2002年4月	総合研究大学院大学複合科学研究科情報学専攻博士後期課程入学
2005年3月	同 修了
2005年3月	博士(情報学) (総合研究大学院大学)
2005年4月	国立情報学研究所 助手 (～2007年3月)
2006年4月	総合研究大学院大学 助手(併任) (～2007年3月)
2007年4月	国立情報学研究所 助教 (～2009年10月)
2007年4月	総合研究大学院大学 助教(併任) (～2010年3月)
2009年11月	国立情報学研究所 准教授 (～2019年8月)
2010年4月	総合研究大学院大学 准教授(併任) (～2019年8月)
2019年9月	東京大学大学院人文社会系研究科 准教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

人文情報学、ウェブ情報学、学術情報流通

b 研究課題

- (1) 人文学における知識表現ならびにデータ構造化の検討
- (2) 史資料を対象とした情報流通システムの設計
- (3) 日本のインターネットにおける技術的・社会的展開

c 概要と自己評価

2019年度はインターネットと人文学の関わりを主題として研究教育と社会貢献活動を行った。(1)では、史資料に関する情報をインターネット上に公開する際に、利用者が内容を容易に理解するためのメタデータの要件を整理し、文化庁ならびに東京大学史料編纂所が保有する情報に適用した。また、各専門分野の持つ詳細な情報を対象として、概念や人物の時系列的変遷を明示的に記述する手法の検討を行った。(2)については、各種データを社会へと効果的に流通させるための情報システムの設計を行い、文化庁メディア芸術データベース版に反映させた。また、複数の機関によって提供された異なるデータベース間での情報の連携手法について提案を行った。(3)については、日本のインター

ネットの展開を把握するための基礎資料の整備を進めるとともに、分析の一例としてソーシャルメディアの経緯に関する論考を執筆した。この他にも、人文情報学分野の普及を目的とした講演やコミュニティ形成を行っている。

d 主要業績

(1) 著書

共著、下田正弘・永崎研宣編、大向一輝他、『デジタル学術空間の作り方：仏教学から提起する次世代人文学のモデル』、文学通信、2019.11

(2) 論文

大向一輝、「SNS の進展」、『電子情報通信学会通信ソサイエティマガジン』、13 巻、4 号、2020.3

大向一輝、「人文情報学とは何か」、『文化交流研究』、33 号、2020.3

小林和央・風間一洋・吉田光男・大向一輝・佐藤翔・桂井麻里衣、「学術情報検索における検索語を用いた論文の特性分析」、『第 12 回データ工学と情報マネジメントに関するフォーラム (DEIM2020) 論文集』、2020.3

(3) 学会発表

国内、大向一輝、「システム構成の観点から」、デジタルアーカイブ学会第 7 回定例研究会：ジャパンサーチの課題と展望、東京大学、2019.9.24

(4) 啓蒙

大向一輝、「『ジャパンサーチのシステム・アーキテクチャ』を読む」、『ACADEMIC RESOURCE GUIDE』、764 号、2019.9

(5) 研究テーマ

情報・システム研究機構、未来投資型プロジェクト、大向一輝、研究代表者、「分野融合型研究のための研究データディスカバリープラットフォームに関する研究」、2018～

文部科学省科学研究費補助金、基盤研究 (B)、大向一輝、分担者 (代表者は東大外)、「利用者の研究練度に応じた多様な観点を統合する学術情報システム」、2019～

3. 主な社会活動

(1) 学会

国内、人工知能学会セマンティックウェブとオントロジー研究会、幹事、2012.4～

国内、ARG Web インテリジェンスとインタラクション研究会、幹事、2012.12～

国内、人工知能学会ウェブサイエンス研究会、委員、2015.4～

国内、情報処理学会人文科学とコンピュータ研究会、運営委員、2016.4～

国際、Journal of Japanese Association of Digital Humanities、Editor、2018.9～

(2) 行政

国内、内閣官房 IT 総合戦略本部官民データ活用推進基本計画実行委員会オープンデータワーキンググループ、構成員、2016.9～

(3) 学外組織(学協会、省庁を除く)委員・役員

国内、一般社団法人オープン&ビッグデータ活用・地方創生推進機構利活用・普及委員会、委員、2014.10～

教授 **鉄野 昌弘** TETSUNO, Masahiro

09b 日本語日本文学(国文学) 参照

教授 **武川 正吾** TAKEGAWA, Shogo

25 社会学 参照

教授 **中村 雄祐** NAKAMURA, Yusuke
27 文化資源学《文化資源学専門分野》参照

准教授 **小林 正人** KOBAYASHI, Masato
01 言語学 参照

准教授 **高橋 典幸** TAKAHASHI, Noriyuki
10 日本史学 参照

准教授 **高岸 輝** TAKAGISHI, Akira
03 美術史学 参照

30 死生学・応用倫理センター

教授 池澤 優 IKEZAWA, Masaru (センター長)

06 宗教学宗教史学 参照

教授 榊原 哲也 SAKAKIBARA, Tetsuya

04 哲学 参照

教授 小松 美彦 KOMATSU, Yoshihiko

1. 略歴

- 1982年3月 東京大学教養学部基礎科学科卒業
- 1982年4月 東京大学大学院理学系研究科科学史・科学基礎論修士課程入学
- 1985年3月 東京大学大学院理学系研究科科学史・科学基礎論修士課程修了(修士(理学))
- 1985年4月 東京大学大学院理学系研究科科学史・科学基礎論博士課程進学
- 1989年3月 東京大学大学院理学系研究科科学史・科学基礎論博士課程単位取得退学
- 1994年4月 玉川大学文学部 助教授
- 2000年4月 東京水産大学水産学部 助教授
- 2002年3月 東京水産大学水産学部 教授
- 2003年10月 東京海洋大学海洋科学部 教授(東京水産大学と東京商船大学が統合されたことに伴う名称変更)
- 2012年4月 東京海洋大学大学院海洋科学技術研究科 教授(東京海洋大学の大学院化に伴う名称変更)
- 2013年4月 武蔵野大学教養教育部会 教授
- 2015年4月 博士(学術) 東京大学総合文化研究科広域科学専攻
- 2018年5月 東京大学大学院人文社会系研究科 教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

科学史・科学論、生命倫理学、死生学

b 研究課題

- ①西欧の生命観と死生観に関する科学史研究、②現代における死生問題の検討、③医療と科学技術の歴史的考察、④既存の生命倫理学の批判的顕揚

c 概要と自己評価

2018～19年度は、上記の研究課題のうち、主に①と②に取り組んだ。①としては、Marie François Xavier Bichat, *Recherches physiologiques sur la vie et la mort*, 1800. の翻訳(共訳)と解説論文の執筆に努めた心算であるが、作業が予定よりも遅れた(ことと2020年3月からの社会状況のため、出版が2019年度内に間に合わなかった。②としては、『「自己決定権」という畏——ナチスから相模原障害者殺傷事件まで』を著し、特に、安楽死・尊厳死が推進される歴史構造と、相模原障害者殺傷事件について検討した。また、論文「生命倫理を問いなおす——安楽死・尊厳死と生権力」を執筆し、前記単著の核心部分を掘り下げて論じた。以上の他に、故・金森修のフランス語による諸論文を邦訳論文集として、他の2名の編者とともに編集出版し、「まえがき」を寄せた。総じて、仕事の速度を取り戻すべく、鋭意工夫が必須だと考えている。

d 主要業績

(1) 著書

共著、小松美彦、「いのち」はいかに理解されるか——科学的生命観と人生論的生命観 香川知晶・斎藤光・小松美彦ほか『学術会議叢書 24 「いのち」はいかに語りうるか?』、55-115 頁、公益財団法人 日本学術協力財団、2018.3
単著、小松美彦、『「自己決定権」という罨——ナチスから相模原障害者殺傷事件まで』、言視舎、2018.8
共編著、金森修著、小松美彦・坂野徹・隠岐さや香編著、『東洋／西洋を越境する——金森修科学論翻訳集』、読書人、2019.10

(2) 論文

小松美彦、「生命倫理を問いなおす——安楽死・尊厳死と生権力」、『東京大学文学部次世代人文学開発センター研究紀要 文化交流研究』、第 32 号、59-76 頁、2019.3

(3) 書評

松本昭『古代天皇史探訪 天皇家の祖先・息長水依比売を追って』、轟孝夫『ハイデガー『存在と時間』入門』、守屋治代『「看護人間学」を拓く——ナイチンゲール看護論を再考して』、ニコラウス・コペルニクス『完訳 天球回転論——コペルニクス天文学集成』、10・8 山崎博昭プロジェクト編『かつて 10・8 羽田闘争があった』、『みすず』、第 667 号、85 頁、2018.2

山本義隆『近代日本一五〇年——科学技術総力戦体制の破綻』、小泉義之『あたらしい狂気の歴史——精神病理の哲学』、熊野純彦『マルクス 資本論の哲学』、『図書新聞』、2018.7 月 21 日号、6 面

グレゴワール・シャルマユ『人体実験の哲学——「卑しい体」がつくる医学、技術、権力の歴史』、岡田温司『アガンベンの身振り』、笠原和夫『笠原和夫傑作選二——仁義なき戦い 実録映画編』、『週刊読書人』、2018.12 月 14 日号、2 面

山本義隆『近代日本一五〇年——科学技術総力戦体制の破綻』、グレゴワール・シャルマユ『人体実験の哲学——「卑しい体」がつくる医学、技術、権力の歴史』、佐藤泉『一九五〇年代、批評の政治学』、熊野以素『九州大学生体解剖事件——七〇年目の真実』、原雄一『宿命——警察庁長官狙撃事件 捜査一課元刑事の 23 年』、『みすず』、第 678 号、71-72 頁、2019.1

ジュール・スーリィ『中枢神経系——構造と機能 理論と学説の批判的歴史』全二巻、萬年甫・新谷昌宏訳、坂建雄『図説 医学の歴史』、松田純『安楽死・尊厳死の現在——最終段階の医療と自己決定』、『図書新聞』、2019.7 月 20 日号、6 面

坂建雄編『医学教育の歴史——古今と東西』、王寺賢太・立木庸介編『〈6 8 年 5 月〉と私たち——「現代思想と政治」の系譜学』、坂野徹『〈島〉の科学者——パラオ熱帯生物学研究所と帝国日本の南洋研究』、『週刊読書人』、2019.12 月 13 日号、3 面

ジュール・スーリィ『中枢神経系——構造と機能 理論と学説の批判的歴史』全二巻、坂建雄『図説 医学の歴史』、谷口雄太『中世足利氏の血統と権威』、児玉真美『殺す親 殺させられる親』、和田英二『東大闘争——50 年目のメモランダム』、『みすず』第 689 号、80-81 頁、2020.1

(4) 解説（小論）

小松美彦、「巻頭言 失われたものは何か」、『科哲』、第 19 号、2-7 頁、2018.1

小松美彦、「「トリアージ」という命の遠別」、『同朋』、第 70 巻第 12 号、17 頁、2018.12

(5) 学会発表

国内、小松美彦、「長戸光「オーギュスト・コントにおける生理学と社会学の接合」への特定コメント」、日本科学史学会生物学史分科会、東京大学教養学部、2018.6.16

(6) 会議主催

国内、シンポジウム「安楽死・尊厳死問題を考える——公立福生病院事件と反延命主義」、東京大学教養学部、2019.12（主催団体名は「現代の死生問題を考えるネットワーク」、共催は障害学会、日本生命倫理学会基礎理論部会）

(7) 総説・総合報告

小松美彦、「今年の執筆予定」、『出版ニュース』、2469 号、27-28 頁、2018.1

小松美彦、「今年の執筆予定」、『出版ニュース』、2503 号、40 頁、2019.1

小松美彦、「和田移植とその歴史的構造」、臓器移植法を問う市民ネットワーク編「和田移植から 50 年——加速されるいのちの切り捨て」、1-11、37-43 頁、2019.2

(8) マスコミ

「Der Streit um den Himtod: Organspende auf dem Prüfstand」、ARTE、2018.3.25

鼎談、島藺進・香川知晶・小松美彦、「人文知は科学技術の暴走を止められるか」、『週刊読書人』、1～2面、4面、2018.5.11
「古市×落合対談、重大な4つの事実誤」、『Business Journal』、https://biz-journal.jp/2019/02/post_26860.html、2019.2
「和田移植から50年」、『ふえみん婦人民主新聞』No.3213 2面、2019.2.25
「【安楽死】批判続出の古市憲寿氏・落合陽一氏対談への違和感の正体」、『Business Journal』、https://biz-journal.jp/2019/03/post_26862.ht、2019.3
「人工透析問題——自分の死は自分のものか」、『NHK ラジオ第1 マイあさラジオ 社会の見方・私の視点』、NHK、2019.3.29
「「どうせ死ぬなら臓器提供してから」世界で進む安楽死議論の怖さ」、『DIAMOND online』、<https://diamond.jp/articles/-/198502>、2019.4.2
「本人の意思に潜む畏——「尊厳死」を再考する」、『東京大学新聞』、3面、2019.7.16
「「自己決定権」が優生思想の選別装置に」、『ふえみん婦人民主新聞』3227号、5面、2019.7.25
「死ぬのが怖い人に読んでほしい大特集」、『週刊現代』第61巻35号、176-185頁（小松は179頁）、2019.11.23

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

非常勤講師、東京大学前期課程、「科学史」、2018.4～2018.8
ポストパフォーマンストーク、糸あやつり人形糸座・ホモフィクタス、「カスパー」、2018.5
特別講演、河合文化教育研究所、「なぜ、脳死臓器移植と安楽死・尊厳死は推進されるのか——生資本主義・生権力・人間の尊厳」、2018.9
セミナー、東京大学文学部第49回文化交流茶話会、「生命倫理を問いなおす——生資本主義と生権力の視座」、2018.10
特別講演、まちだ市民大学、「生権力の現在——優生思想・先端医療・人間の死生をめぐって」、2018.10
特別講演、日本消費者連盟など、「和田移植とその歴史的構造」、2018.11
特別講演、かわさき市民アカデミー、「科学的生命観と人生論的生命観」、2018.12
特別講演・シンポジウム、地域医療研究会、「ナチスによる安楽死とは何だったのか——「今」を考えるために」、2019.3
特別講演、ヒース・ケア、「私たちの生と死のゆくえ——安楽死・尊厳死・終末期医療を考える」、2019.3
非常勤講師、東京大学大学院農学生命科学研究科・農学部、2019.4～2019.6
特別講演、一橋哲学フォーラム、「「人間の尊厳」概念の歴史的現在——生命倫理問題をめぐって」、2019.7
特別講師、東京理科大学教養教育センター、「人間にとって死生とはなにか——科学知と人文知の視座」、2019.9
特別講演、まちだ市民大学、「「人生の最終段階における医療」とは何か——ナチス安楽死思想と現在」、2019.9
特別講演、東京保険医協会、「「人生の最終段階における医療・ケアの決定プロセスに関するガイドライン」をどう見るか」、2019.10
特別講演・シンポジウム、現代医療研究会、「脳死・臓器移植と安楽死・尊厳死をめぐる日本の推進構造」、2019.10
特別講演、最首塾、「日本における死の推進構造——脳死・臓器移植、安楽死・尊厳死、自己決定権」、2019.11

(2) 学会

日本生命倫理学会、評議員

(3) 学外組織

公益財団法人俱進会、評議員

1. 略歴

1992年3月	東京大学文学部心理学専修課程卒業
1992年4月	東京大学文学部研究生（～1993年3月）
1993年4月	東京大学大学院人文科学研究科宗教学宗教史学専攻修士課程入学
1995年3月	同修了（修士（文学）取得）
1995年4月	東京大学大学院人文社会系研究科基礎文化研究専攻宗教学宗教史学専門分野博士課程進学
2000年3月	同単位取得退学
2001年4月	聖心女子大学文学部専任講師
2003年4月	聖心女子大学大学院文学研究科専任講師兼任
2007年4月	聖心女子大学文学部准教授、聖心女子大学大学院文学研究科准教授兼任
2008年9月	博士（文学）取得（東京大学大学院人文社会系研究科）
2013年4月	東京大学大学院人文社会系研究科准教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

死生学、宗教学、スピリチュアリティ研究、環境思想

b 研究課題

日本人の死生観、宗教研究、現代日本人の個人主義的スピリチュアリティ、サステナビリティと人文知

c 概要と自己評価

研究と教育の方向性は大きく二つに分けられる。一つは死生学・宗教学方面で、もう一つはサステナビリティ学方面である。この二つは、死生学・応用倫理センターの、「死生学」と「応用倫理」に対応する。

死生学方面では、日韓同時の死生観調査をおこなった。これは、現在の死生学で議論されている主要な論点を全てデータで検証しようという試みで、今後の死生学を刷新する潜在力を持っている。韓国の死生学研究所の研究者とともにパース大学で開催された死生学ではもっとも大きい国際会議で発表した。また、これらのデータにもとづいて、日本人が求める「良い死」の内容を類型化し、分析した。

この死生学方面の研究と関連するのが、スピリチュアリティ研究・宗教研究である。この2年間は、戦後から現代へとつながる日本の宗教史を政治面と社会構造的な面から俯瞰するような論集をそれぞれ2冊、単独の編者としてまとめている。また、現代人の個人主義的スピリチュアリティの従来からの研究の集大成とも言える単著を公刊し、反響を呼んでいる。以上の刊行物ともあいまって、社会的発信の機会が増えつつある。

一方、サステナビリティ学方面は、本研究科の教員が中心となって推進している総長裁量経費による「Sustainabilityと人文知」プロジェクトの実施責任者となり、研究交流を促進している。また、このプロジェクトの学内公開研究会を多分野交流演習として院生にも開いた。現在、東京大学はSDGs（持続可能な開発目標）達成に研究面から積極的に関与しているが、サステナビリティやSDGsへの学生・院生の関心は必ずしも高くない。とくに、文学部の学生の環境への関心が低いことが問題として見えている。コロナ禍という困難な状況ではあるが、学生の関心を高めるためにどのような方策が有効なのかを本学全体にも関わる教育課題として模索していきたい。いずれにせよ、この2年間でサステナビリティを人文社会系研究科の教員として研究と教育の両輪で進めるという道筋がはっきりとし、関係する教員の間で共有されたことが、今後につながる大きな成果と言える。

今後は、死生観の量的調査を続行し、死生観に関する基礎的なデータを提供することを当センターの社会的責務と位置づけ、着実に実行していきたい。とくにコロナ禍の死生観、倫理への影響を調査し、後世に残す責務があると言える。同時に既に終了している調査の成果を著書の形でまとめて世に聞きたい。東日本大震災から10年という節目の年を迎えるため、被災地でおこなった霊的体験に関する調査を、東北大学の高橋原教授との共著で1冊の書籍にまとめる予定である。また、島薮進名誉教授とおこなった川崎市におけるケア提供者の死生観、スピリチュアリティについての質的調査は、都市型社会における人々の苦しみの中核性、その中から立ち上がるケア提供者の来歴を丹念にたどった調査で、膨大な資料が蓄積された。これをまとめてゆきたい。また、サステナビリティ学方面では、多分野交流演習という形でサステナビリティと人文知に関心を持つ教員間の交流を続行すると同時に、海外の「サステナブルな人文学」の動きとも連携し、学問的な体系化の方向を模索したい。理論面では従来からの未来倫理に関する探究をすすめ、感染症のみならず様々な想定外の危機に対応するリスク社会のエートスを明確化したい。

d 主要業績

(1) 著書

- 堀江宗正 (編著)、『いま宗教に向きあう 国内編1 現代日本の宗教事情』(岩波書店、2018.9)、「序論」1-22 頁、「争点1」25-34 頁、「争点2」75-85 頁、「第3章」86-105 頁(福嶋信吉との共著)、「争点3」127-167 頁、「第5章」203-214 頁(278 頁中、116 頁執筆)
- 堀江宗正 (編著)『宗教と社会の戦後史』(東京大学出版会、2019.4)、「はじめに」i-xv 頁、「序章」1-29 頁、「終章」295-348 頁(島菌進・黒住真との共著)、「年表」巻末i-xxiii 頁(396 頁中、121 頁を執筆)
- 堀江宗正『ポップ・スピリチュアリティ——メディア化された宗教性』(岩波書店、2019.11)

(2) 論文

- 堀江宗正「多分野交流演習「サステナビリティと人文知」開講に寄せて」、『多分野交流演習ニューズレター』第79号(2019.5)、頁番号なし(全5頁)
- 堀江宗正「日本における死と生の教育の通説を検証する— 一般的死生観調査に基づいて」、『死生学・応用倫理研究』25号(2020.3)、41-55 頁
- 堀江宗正「死生観(生死観)調査 SoVoLad(Survey on Views of Life and Death)」、『死生学・応用倫理研究』25号(2020.3)、56-93 頁
- 白岩祐子・堀江宗正「日本人の死後観——その類型と性差・年代差の検討」、『死生学・応用倫理研究』25号(2020.3)、119-141 頁
- 堀江宗正「人文知はサステナビリティにどう関わるのか——「サステナビリティと人文知」初年度を終えて」、『多分野交流演習ニューズレター』第80号(2020.3)、頁番号なし(全5頁)

(3) 啓蒙

- 堀江宗正「ハロウィーン——祝祭か暴動か 日常・非日常の境界の消失」、『中外日報』(2018.11.23)、8 頁
- 堀江宗正「池江選手ツイートへの反響——ドナー登録に向かう人々」、『中外日報』(2019.2.22)、8 頁
- 堀江宗正「米国で「無宗教」がトップに——宗教の政治的影響力、逆に増す?」、『中外日報』(2019.4.26)、8 頁
- 堀江宗正「代替わりと政教分離クライシス——論点は公費支出以外にも」、『中外日報』(2019.7.26)、8 頁
- 堀江宗正「武力象徴の「三種の神器」の剣 敬称宣言、象徴天皇制の危機」、『中外日報』(2019.9.27)、8 頁
- 堀江宗正「大嘗祭の核心は秘儀に 公的行事にふさわしくない」、『中外日報』(2019.11.22)、8 頁
- 堀江宗正「新型肺炎、陰謀論と差別感情——恐れるべきは精神的感染症」、『中外日報』(2020.2.28)、8 頁

(4) 学会発表

- 堀江宗正「ケア提供者の死生観・人生観・スピリチュアリティ」、上廣死生学・応用倫理講座『医療・介護従事者のための死生学——2018年度夏季セミナー』(東京大学、2018.8.19)
- 堀江宗正「ケアとスピリチュアリティ——川崎市のケア提供者の調査から」、日本宗教学会(大谷大学、2018.9.8)
- 堀江宗正「死を前にして生きる——良い死はあるか」、浅草寺仏教文化講座(丸の内マイプラザ、2019.7.19)
- 堀江宗正「死のタブーと「良い死」について考える——死生観調査から」、上廣死生学・応用倫理講座『医療・介護従事者のための死生学——2019年度夏季セミナー』(東京大学、2019.8.4)
- 堀江宗正「Sources of Influence on the Taboo of Death and a Good Death: The Relationship between Social Construction and Education among Japanese People」、The 14th International Conference on the Social Context of Death, Dying and Disposal (University of Bath、2019.9.7)
- 堀江宗正「Spirituality and the Meaning of Life: From the Viewpoints of Religion and Psychology」、Life, death and meaning: Eastern and Western perspectives (University of Birmingham、2019.9.9)
- 堀江宗正「日本人の死生観」、早稲田大学エクステンションセンター八丁堀校(2019.10.19-26)

3. 主な社会活動

(1) 学会

- 日本宗教学会、「宗教と社会」学会、日本社会学会、日本生命倫理学会

3 1 北海文化研究常呂実習施設

教授 熊木 俊朗 KUMAKI, Toshiaki

1. 略歴

1990年3月	北海道大学文学部文学科言語学専攻課程卒業
1990年4月	旭化成工業株式会社入社
1994年3月	明治大学文学部史学地理学科考古学専攻卒業
1996年3月	東京大学大学院人文社会系研究科考古学専門分野修士課程修了
1996年4月	東京大学文学部助手（附属常呂実習施設勤務）
2004年4月	北海道常呂町教育委員会社会教育課ところ遺跡の森主幹
2005年2月	博士（文学）学位取得 東京大学大学院人文社会系研究科
2006年4月	東京大学大学院人文社会系研究科 准教授
2018年11月	東京大学大学院人文社会系研究科 教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

北東アジア考古学

b 研究課題

北東アジア地域の考古学的研究を専門としており、特に近年は以下の3点を主要な課題として、北海道でのフィールドワークを中心とした調査研究を行っている。

- (1) アイヌ文化成立過程の考古学的研究
- (2) 日本列島とアジア大陸の「北回りの交流」に関する研究
- (3) 東北アジアにおける「窪みで残る堅穴群遺跡」に関する研究

c 概要と自己評価

上記研究課題について、2018年度～2019年度には以下の研究をおこなった。

1) 北見市大島遺跡群の発掘調査

北見市大島遺跡群は、擦文文化の堅穴住居等からなる集落遺跡である。アイヌ文化の直接の母体になったと考えられる擦文文化の終末過程や、擦文文化とオホーツク文化の関係について解明するため、北見市大島遺跡群（大島2遺跡・大島1遺跡）の発掘調査を実施した。この調査は2010年度から継続して実施しており、2013年度までの調査成果についてはすでに報告書を刊行している。2018年度から2019年度にかけては、大島2遺跡で堅穴住居跡2軒の発掘調査、大島1遺跡で地形測量調査と試掘調査を実施し、堅穴住居跡の分布や内部の構造、出土遺物、住居の廃絶儀礼、オホーツク文化との関連等について知見を得た。本遺跡群については、2019年度以降も調査を継続する予定である。

2) 北見市トコロチャシ跡遺跡オホーツク地点の研究

北見市トコロチャシ跡遺跡オホーツク地点において、1998年度～2005年度に行われた発掘調査で出土した遺物のうち、これまで未報告であった資料について、報告書を刊行して調査成果を公開した。報告した資料の主体は、この地点で発掘されたオホーツク文化期の堅穴住居跡と関連するもので、それらの資料の分析によって本遺跡の時期や集落の構造について新たな知見を得ることが出来た。

3) 続縄文土器とオホーツク土器の型式編年に関する研究

熊木がこれまで行ってきた研究のうち、続縄文土器とオホーツク土器の型式編年にかかる成果を、単著『オホーツク海南岸地域古代土器の研究』として総括し、刊行した。

d 主要業績

(1) 著書

単著、熊木俊朗、『オホーツク海南岸地域古代土器の研究』、北海道出版企画センター、2018.7

共著、北見市史編集委員会編、『新北見市史 上巻』、北見市、2019.9

共著、熊木俊朗編、『トコロチャシ跡遺跡オホーツク地点 (2) 一出土遺物の追加報告一』、東京大学大学院人文社会系研究科附属北海文化研究常呂実習施設、2020.3

(2) 学会発表

- 国内、福田正宏・M. Gablirchuk・國木田大・田尻義之・M. Gorshukov・江田真毅・木山克彦・A. Malyavin・夏木大吾・足立達朗・張恩恵・太田圭・田邊えり・熊木俊朗、「ロシア・ユダヤ自治州における考古学的調査 (2017・2018 年度)」、第 20 回北アジア調査研究報告会、2019.2.23
- 国内、夏木大吾・太田圭・西村広経・山田貴博・渡邊怜・佐藤宏之・熊木俊朗、「北海道北見市吉井沢遺跡の調査成果 (第 12 次)」、第 20 回北アジア調査研究報告会、2019.2.23
- 国内、熊木俊朗・夏木大吾・市川岳朗、「2018 年度北海道北見市大島遺跡群発掘調査報告」、第 20 回北アジア調査研究報告会、2019.2.23
- 国内、萩野はな・福田正宏・熊木俊朗・齋藤謙一・夏木大吾・張恩恵・西村広経・太田圭・國木田大・佐藤宏之、「北海道宗谷地方における縄文遺跡群の実態調査 (2019 年度)」、第 21 回北アジア調査研究報告会、2020.2.15
- 国内、熊木俊朗・夏木大吾・中村雄紀、「2019 年度北海道北見市大島遺跡群発掘調査報告」、第 21 回北アジア調査研究報告会、2020.2.15
- 国内、千原鴻志・佐野雄三・熊木俊朗、「北見市大島 2 遺跡 3 号・4 号竪穴住居址出土炭化材にみる擦文文化における径級・加工法による樹種の選択利用」、第 70 回日本木材学会大会研究発表、2020.3.16

(3) 展示

- 「常呂資料陳列館第 8 回企画展 トコロ貝塚 ―発掘から 60 年後の再評価―」、夏木大吾、2018.11.5～2018.12.24
- 「常呂資料陳列館第 9 回企画展 常呂実習施設コレクション ―市外の遺跡から―」、夏木大吾、2019.11.6～2019.12.23

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

- 非常勤講師、北見工業大学、「オホーツク地域と環境」、2018.6
- 特別講演、北海道女性農業者ネットワークきたひとネット、「『食』からみた北海道の先史文化」、2018.7
- 特別講演、網走市教育委員会、「オホーツク文化 調査の今昔」、2018.10
- 特別講演、斜里町立知床博物館、「オホーツク土器の編年から何が見えるか」、2019.2
- 非常勤講師、北見工業大学、「オホーツク地域と環境」、2019.6
- 特別講演 (第 27 回環オホーツク海文化のつどい)、北の文化シンポジウム実行委員会・紋別市立博物館・紋別市立図書館、「竪穴群遺跡と擦文文化」、2019.8
- 特別講演 (利尻学講座 2019 「古代・利尻島を取りまく交流史」)、利尻富士町教育委員会、「オホーツク文化のはじまりとスサヤ式土器」、2019.10
- 特別講演 (地域の文化財普及啓発フォーラム 北海道の古代遺跡)、北海道文化遺産活用活性化実行委員会、「オホーツク文化の集落遺跡」、2019.12

(2) 学会

- 国内、日本考古学協会、埋蔵文化財保護対策委員、2018.4～

(3) 行政

- 自治体、北海道教育庁、北海道東部の竪穴住居跡群調査懇談会構成員、2018.10～
- 自治体、北見市教育委員会、教育政策、文化財審議委員会委員、2018.4～、史跡常呂遺跡整備専門委員、2018.12～、史跡常呂遺跡整備基本設計プロポーザル選定委員、2019.9～
- 自治体、斜里町教育委員会、斜里町遺跡調査活用検討委員、2020.2～

(4) 学外組織(学協会、省庁を除く)委員・役員

- 教育機関、北海道立北方民族博物館、研究協力員、2018.8～
- 教育機関、北海道立青少年体験活動支援施設ネイバル北見、施設運営協力委員会委員、2018.6～
- 任意団体、一般財団法人北方文化振興協会、理事、2019.5～

(5) Web サイト編集・制作

- 「史跡モヨロ貝塚ガラス乾板写真デジタルアーカイブ」<http://www.lu-tokyo.ac.jp/moyoro/> (2019.2.4 公開)
- 「トコロチャシ跡遺跡群発掘調査写真デジタルアーカイブ」http://www.lu-tokyo.ac.jp/t_chashi/ (2020.3.4 公開)
- 「常呂川下流域の考古資料コレクション」http://www.lu-tokyo.ac.jp/t_collection/ (2020.3.4 公開)

3 2 上廣倫理財団死生学・応用倫理寄付講座

特任教授 **会田 薫子** AITA, Kaoruko

1. 略歴

1984年3月	成蹊大学文学部英米文学科 卒業
1987年6月	Contemporary British Society Course, School of Oriental and African Studies, University of London 修了
1988年4月	株式会社メディカル・トリビューン 記者
1992年9月	The Japan Times 記者
2000年6月	Medical Ethics Fellowship Program, Harvard Medical School, Harvard University 修了 (フルブライト留学)
2005年3月	東京大学大学院医学系研究科健康科学・看護学専攻修士課程修了
2008年3月	東京大学大学院医学系研究科健康科学・看護学専攻博士課程修了 博士(保健学)取得 (東京大学大学院医学系研究科)
2008年4月	東京大学大学院人文社会系研究科グローバルCOE「死生学の展開と組織化」特任研究員
2012年4月	東京大学大学院人文社会系研究科死生学・応用倫理センター上廣死生学・応用倫理講座 特任准教授
2017年4月	同 特任教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

臨床倫理学、臨床死生学、医療社会学

b 研究課題

エンドオブライフ・ケアの改善

医療技術が進展するなか、超高齢社会となった現代の日本におけるエンドオブライフ・ケア（人生の最終段階における医療とケア）のあるべき姿を模索し、研究知見をうみだし、社会還元し、現状の改善・充実を目指す。

臨床倫理の普及と啓発

日本社会における家族関係や意思決定に関わるコミュニケーションのあり方などの社会的文化的な特徴および法・制度と国・医学会のガイドライン等を踏まえ、臨床現場における一人ひとりの患者/利用者に関わる倫理的諸問題に対し、よりよく応答することが可能な方法論を探り、臨床現場の医療・介護従事者との協働・対話によって、現実の症例の倫理的問題について幅広く検討を深め、現場における実践の知へつなぐ。

臨床死生学の試み

死生学の重要な一領域である臨床死生学を、「一人ひとりが最期までより良く生きることを社会のなかで考える学問」と捉え、臨床現場における死生をめぐる諸課題の理解・考察を深め、一般への浸透を図る。

c 概要と自己評価

エンドオブライフ・ケアの改善について

超高齢社会におけるエンドオブライフ・ケアに関して最も一般的かつ依然として深刻な問題は、人生の最終段階に至り摂食嚥下困難となった高齢者に対する人工的水分・栄養補給法（AHN: artificial hydration and nutrition）の導入・差し控え・終了に関する諸問題である。これは日本の高齢者医療およびケアにおける長年の懸案であった。先行研究が非常に希少であったこの分野において、会田は数々の実証研究を実施した。その成果は日本老年医学会「高齢者ケアの意思決定プロセスに関するガイドライン—人工的水分・栄養補給の導入を中心として」の策定につながった。これが同学会ガイドラインとして公表された後は、学会内外において、その趣旨の普及とそれを踏まえた現場での臨床実践の拡大に努めた。数多くの学術集会および講演等において、医療・介護従事者だけでなく一般市民への浸透を目指して継続的に活動した。

また、この課題を本人と家族の側から捉え、本人と家族が医療・介護従事者の助言を得ながら最善の選択に至ることを支援するため作成した『高齢者ケアと人工栄養を考える—本人・家族のための意思決定プロセスノート』の普及に努めた。

さらに、この成果を踏まえて、慢性腎臓病の専門医療者との協働によって、『高齢者ケアと透析療法を考える—本人・家族の意思決定プロセスノート』を開発し、刊行後は現場の医療者とともに、日本腎不全看護学会学術集会などで普及啓発のための活動を行った。

会田らの研究班は同ノートに保存的腎臓療法（CKM:conservative kidney management）を盛り込んでいる。近年、CKMは、西洋諸国からの研究報告では、超高齢社会の療法選択において医学的に標準的な選択肢となるべきとされているが、日本で作成された意思決定支援ツールやガイドにおいてCKMが選択肢として明示されたのは非常に稀なことである。近未来の日本において、CKMは標準的な選択肢となるとみられているが、現状の改革を要するため、徐々に理解者を増やすためにも一層の研究活動を要する。

いずれの意思決定支援ノートも、本人と家族と医療・介護従事者が本人のために一緒に考え共同意思決定（SDM:shared decision-making）に至ることを支援するためのツールであり、日本の医療界で、現代、注目度の高い課題であるACP（advance care planning）に直接関係する研究開発である。

関連して、平成30～令和元年度は、ACPの一層の文献研究とそれをもとに学術集会での報告を重ね、本学大学院人文社会系研究科死生学・応用倫理センターが主催する《医療・介護従事者のための死生学》セミナーや日本各地での講演活動を通して、研究知見を社会還元した。

また、ACPの普及啓発に関して、日本老年医学会は令和元年度に「ACP推進に関する提言」を発表したが、会田はその取りまとめを行った。同時に、ACPの実践法に関して医療・介護関係者により良く理解して頂くために、同学会が計画した「ACP事例集」および解説編の作成もすすめた。

さらに、10年余の研究課題の1つであるfrailtyに関する研究知見の整理と発信にも務め、高齢者の人生の最終段階における過少医療および過剰医療への対策としての考え方を示した。frailtyに関しては、国内の老年学関係者はフレイルという名称にておもに介護予防に注目しているが、会田はfrailtyが進行した高齢者における適切な医療のあり方について、医療関係者を対象とするセミナーや学術集会等で問題提起した。会田の講演を契機に、救急・集中治療の現場で実証研究を進める研究グループもみられた。また、上述のACPのプロセスにfrailtyの評価を組み込むことの重要性に関して医療・介護従事者の理解を求める論文や講演活動も行い、これも臨床現場での実証研究につながっている。

これらの研究成果は、総務省消防庁「救急業務のあり方に関する検討会」に参画した際にも活かされた。令和元年度に発表された同検討会の報告書では、老化が進んだ高齢者が心肺停止した際の救急搬送の適正化に関して、frailty評価の重要性が言及された。

また、ACPを含め意思決定支援に関連した課題が令和元年度に採択されたAMED（日本医療研究開発機構：Japan Agency for Medical Research and Development）長寿科研の「非がん疾患の緩和ケア」の2課題（腎不全と呼吸不全）において、会田の分担課題とされている。これらの課題の研究知見は数年後に政策に活かされる見込みである。

上述の研究課題は、日本老年医学会の5か年計画（平成30年度～令和4年度）にも活かされている。会田はこの5か年計画策定委員の一人として、非がん疾患の緩和ケアとACPの推進および死生学教育の推進を盛り込んだ。近未来に同学会の範囲に限らず、日本の医学界の方針および国の政策につながることを目指して、今後も研究および実践活動を行っていく。

また、高齢者に限らない研究課題として、実証研究をもとに脳死に関する理解を日本の文化的側面も踏まえて深めた。脳死に関する諸問題への対応について専門医療者とともに検討し、社会的に構成される死の概念について日本の臨床現場の実態に基づいて考察し、救急・集中治療現場での患者・家族対応に関する実践知につなぐ。特に、日本小児救急医学会が実践家としての医療者を対象に行う脳死セミナーで、継続してこの課題に関する教育講演の機会を得ることによって、研究知見の臨床現場での活用を実現化した。

これらの研究・実践活動によって、進展した医療技術が汎用される現代の日本において、本人らしい人生の集大成を支援するためのエンドオブライフ・ケアの研究と、その知見にもとづく教育啓発活動を実施することができたと考える。

臨床倫理の普及と啓発について

臨床倫理プロジェクトの活動の一環として、全国各地で医療・ケア従事者のための臨床倫理セミナーを開催し、講義を行い事例検討を支援した。セミナー参加者はこの2か年で延べ約5,000名を数えた。

会田はすべてのセミナーにおいて、中核となる講義（「臨床倫理入門編」、「事例検討法」など）や事例検討のファシリテーションに関わる支援を行い、また、繰り返しセミナーを行っている地域においては、アドバンスト・コースにおいて、「frailty」、「ACP」、「エンドオブライフ・ケア」のトピック講義を行った。

また、平成30年度および令和元年度にもファシリテーター養成講座を大阪と札幌で開催した。また、新たな臨床倫理検討シート3点セットの使用法を含む新たな講義科目も開発した。今後も、臨床倫理を一般の医療・介護従事

者や市民が理解可能な言葉で表現し、個別症例の倫理問題に多職種協働で具体的に取り組み、現場の実践知をともに高めることを目指している。

臨床死生学の試みについて

当講座の《医療・介護従事者のための死生学》基礎コースにおいて、セミナーの企画・運営と臨床死生学関連の講義を担当し、臨床現場で働く人たちが死生についてどのように理解し、どのようにケアに活かしていくかの研鑽を支援する活動を展開した。

また、年間に10回開催している「臨床死生学・倫理学研究会」を企画・運営し、この分野において研究・実践活動に取り組む研究者や実践家との意見交換の機会を医療・介護従事者および一般市民に広く提供した。同研究会には毎回、80～150名程度が参加し、臨床現場の実態を踏まえて死生の問題に関して議論した。

今後も、現場で生きる臨床死生学の取り組みを継続し、社会のなかで活かす知の集積・活用を目指したい。

d 主要業績

(1) 著書

単著、会田薫子、『長寿時代の医療・ケア — エンドオブライフの論理と倫理』、筑摩書房、2019.7

(2) 論文

Ouchi Y, Shimizu T, Aita K, et al., 「Guidelines from the Japan Geriatrics Society for the decision-making processes in medical and long-term care for the elderly: Focusing on the use of artificial hydration and nutrition.」、『Geriatrics and Gerontology International』、Vol.18, pp.823-827, 2018.7

会田薫子、「ケアマネジャーのための死生学入門1 本人の意思を尊重した最期の支え方」、『ケアマネジャー』、2018.8月号、pp.70-77、2018.8

会田薫子、「認知症高齢者が食べられなくなったら」、『Medical Rehabilitation』、No226, pp69-74、2018.8

会田薫子、「ケアマネジャーのための死生学入門2 共同の意思決定とアドバンス・ケア・プランニング」、『ケアマネジャー』、2018.9月号、pp.72-79、2018.9

会田薫子、「臨床倫理学と死生学」、『老年社会科学』、Vol.40, No.3, pp.292-300、2018.10

会田薫子、「アドバンス・ケア・プランニング」、『Aging & Health』、2018年秋号、pp.18-21、2018.10

会田薫子、「死生学と歯科専門職」、『歯界展望』、2018.11月号、pp.1074-1075、2018.11

会田薫子、「アルツハイマー型認知症のエンドオブライフ・ケア—人工的水分・栄養補給法の問題を中心に」、『Dementia Japan (日本認知症学会誌)』、33、137-144頁、2019.4

会田薫子、「超高齢社会の医療選択に関わる意思決定支援」、『人間と医療』、9、49-62頁、2019.9

会田薫子、「実践！在宅救急 高齢者医療の考え方の変遷とアドバンス・ケア・プランニング」、『Modern Physician』、vol.39, no10、980-984頁、2019.10

会田薫子、「その人らしい生き方を支えるための倫理的視点」、『臨床透析』、vol.35, no.11、1329-1336頁、2019.11

会田薫子、「ACPの倫理的側面に関する質疑応答—遠方の家族をもつ独居者を支える医療・介護現場から」、『Geriatric Medicine』、vol.57, no12、1205-1208頁、2019.12

会田薫子、「人生100年 いつまで医師にかかるべきか」、『腎臓』、vol.42、38-41頁、2020.3

会田薫子、「Shared Decision Making の意義」、『臨床透析』、vol.36, no.3、7-13頁、2020.3

(3) 解説

田代志門、会田薫子、清水哲郎、「倫理的検討」、『がん患者の治療抵抗性の苦痛と鎮静に関する基本的な考え方の手引き』、2018.9

会田薫子、「患者の意思決定支援に向けてACPをどのように普及・推進すべきか」、『医療白書2018年版』、pp.135-139、2018.9

会田薫子、「胃ろうの疾患別適応を考える その5：生命倫理編 医療者の職業倫理に基づき患者と真摯に向き合う勇気をもつ」、『栄養経営エキスパート』、2018.9/10月号、pp.79-81、2018.9

会田薫子、「さあ始めよう、人生会議」、『DVD』、2018.12

会田薫子、「アドバンス・ケア・プランニングへの取り組み方」、『日本慢性期医療協会誌』、No.121、pp.40-46、2019.2

会田薫子、「治療の選択にフレイルの知見を活かす—臨床倫理の視点から」、『認知症の緩和ケア』、189-196頁、2019.6

会田薫子、「高齢者の治療選択：フレイルの知見を臨床に活かす」、『絶対成功する 腎不全・PD診療 TRC 第二版』、127-131頁、2019.11

会田薫子、『ACP推進に関する提言「事例集」の問題点』への回答、『日本老年医学会雑誌』、vol.57, no.1、90頁、2020.1

(4) 学会発表

- 国内、招聘講演、会田薫子、「長寿時代のエンドオブライフ・ケア」、第23回日本口腔衛生学会学術集会認定医研修会、札幌市教育文化会館、2018.5.18
- 国内、招聘講演、会田薫子、「救急医療の死生学—脳死の二重基準の意味と意義」、第32回日本小児救急医学会学術集会第8回脳死患者への対応セミナー、つくば国際会議場、2018.6.3
- 国際、Kaoruko Aita、「End-of-life care for the aged in Japan: withholding and withdrawal of artificial hydration and nutrition」、The 60th annual meeting of the Japan Geriatrics Society, Japan-Korea-Taiwan Joint Symposium on End-of-life care、国立京都国際会館、2018.6.14
- 国内、招聘講演、会田薫子、「透析医学における臨床研究倫理」、第63回日本透析医学会学術集会、神戸ポートピアホテル、2018.6.30
- 国内、招聘講演、会田薫子、「認知症者の終末期医療をどう考えるか」、第37回日本認知症学会学術集会、札幌市(ロイトン札幌)、2018.10.14
- 国内、招聘講演、会田薫子、「ACPとフレイル—本人らしく生きて、生き終わることをサポートするために」、第21回日本在宅ホスピス協会全国大会 in 金沢、石川県音楽堂コンサートホール、2018.11.4
- 国際、招聘講演、AITA Kaoruko、「End-of-life care for the aged in Japan: withholding and withdrawal of artificial hydration and nutrition.」、The 62nd Congress of The Korean Geriatrics Society、Healthcare Innovation Park, Seoul National University Bundang Hospital, Bundang, Gyeonggi-do, South Korea、2018.11.11
- 国内、会田薫子、「フレイルとACP—不要なCPRを避けるための臨床倫理」、第46回日本救急医学会学術集会、パシフィコ横浜、2018.11.21
- 国内、招聘講演、会田薫子、「高齢者医療とエンドオブライフ・ケアの倫理」、第31回日本総合病院精神医学会総会、2018.11.30
- 国内、招聘講演、会田薫子、「フレイル評価を組み込んだACPによって不要なCPRを回避する」、第22回日本臨床救急医学会学術集会、和歌山(アバローム紀ノ国)、2019.6.1
- 国内、招聘講演、会田薫子、「延命医療への対応—本人らしさを支える意思決定支援」、第27回東京都臨床工学会学術集会、東京(ベルサール新宿グランドコンファレンスセンター)、2019.6.2
- 国内、会田薫子、「ACP推進に関する提言」の目標と定義について」、第61回日本老年医学会学術集会、仙台(仙台国際センター会議棟)、2019.6.6
- 国内、招聘講演、会田薫子、「長寿時代のエンドオブライフ・ケア」、第104回岡山透析懇話会、独立行政法人国立病院機構岡山医療センター、2019.6.15
- 国内、招聘講演、会田薫子、「救急医療の死生学—脳死の二重基準の意味と意義」、日本小児救急医学会「第9回小児患者における脳死患者の対応セミナー」、大宮(大宮ソニックシティ市民ホール)、2019.6.21
- 国内、招聘講演、会田薫子、「小児の脳死下臓器提供：臨床倫理の視点から」、パネルディスカッション3「小児の脳死下臓器提供を考える」、第33回日本小児救急医学会学術集会、大宮(大宮ソニックシティ小ホール)、2019.6.22
- 国内、招聘講演、会田薫子、「透析療法におけるエンドオブライフ・ケア—臨床倫理の視点から」、第64回日本透析医学会学術集会、パシフィコ横浜国立大ホール、2019.6.29
- 国内、招聘講演、会田薫子、「医療者が理解すべき死生観—臨床死生学の役割」、第27回日本乳癌学会総会、新宿NSビル、2019.7.11
- 国内、会田薫子、「在宅で生き終わるということ」、第3回日本在宅救急医学会学術集会、日本医科大学武蔵境校舎講堂、2019.9.7
- 国内、招聘講演、会田薫子、「医療倫理」、第47回日本救急医学会学術集会、東京国際フォーラム、2019.10.3
- 国内、招聘講演、会田薫子、「人生の最終段階における医療とケア—ACPにフレイルの知見を活かす」、第38回日本認知症学会学術集会、京王プラザホテル、2019.11.9
- 国内、招聘講演、会田薫子、「ACP—患者さんの意思を尊重するために」、第22回日本腎不全看護学会学術集会、ロイトン札幌、2019.11.10
- 国内、会田薫子、「事例検討法」、第31回日本生命倫理学会年次大会、東北大学川内キャンパス、2019.12.7
- 国内、会田薫子、「高齢患者の透析療法におけるフレイル評価の重要性—臨床倫理的に適切な意思決定支援のために」、第31回日本生命倫理学会年次大会、東北大学川内キャンパス、2019.12.8

(5) 啓蒙

- 会田薫子、「東大教師が新入生にすすめる本」、『UP』、2019.4月号、pp.2-3、2019.4

(6) 研究報告書

会田薫子、「『周死期』の倫理的課題等に関する探索的研究第二報」、2019.10

(7) 予稿・会議録

国際会議、会田薫子、「コメント」、国際シンポジウム 東アジアの死生学、東京大学文学部三番大教室、2019.11.24
『死生学・応用倫理研究』、Vol.24、pp.106-110

(8) 監修

清水哲郎・会田薫子、『子宮内膜症で悩んでいるあなたへ 意思決定プロセスノート』、医学と看護社、2018.4

会田薫子、『エンドオブライフ・ケア』、一般社団法人日本老年医学会発行、メジカルビュー社発売、2019.6

(9) 会議主催（チェア他）

国内、「医療・介護従事者のための死生学 2018 夏季セミナー」、チェア、東京大学法文 2 号館一番・二番大教室、2018.8.19

国内、「第30回日本生命倫理学会大会」、公募シンポジウムVI「人生の最終段階における医療とケアの意思決定支援」、京都府立医科大学京都学・歴史館ホール、2018.12.9

国内、「非がん疾患の緩和ケアと ACP の役割—よりよい高齢者医療とケアを目指して」、チェア、東京大学伊藤謝恩ホール、2019.3.24

(10) 総説・総合報告

会田薫子、日本老年医学会「ACP 推進に関する提言」、『日本老年医学会誌』、56(4)、411-416 頁、2019.10

会田薫子、「長寿時代の医療・ケア」、『シノドス』、カテゴリ「社会」、2020.2

(11) マスコミ

「救急拠点 延命中止 7 割 終末期の患者」、『毎日新聞』朝刊 1 面、2018.5.31

「親の看取り方特集：「何でもしてくれ」は愛情ではない」、『東洋経済』、2018.8.4

「最期は蘇生望まないが・・・119 番」、『朝日新聞』朝刊 34 面、2018.9.6

「死に近づいた人生を生き切るのに必要な医療とは?」、東京大学広報誌『淡青』、2018.9.10

「親の看取り」、「ニュースしぼ 5 時」、NHK、2018.9.27

「NHK スペシャル 人生 100 年時代を生きる 第 2 回『命の終わりと向き合うとき』」、NHK、2018.11.18

「公立福生病院における透析中止について」、『News7』、NHK、2019.3.8

「透析中止 学会が調査委」、『読売新聞』朝刊 38 面、2019.3.8

「透析中止提示 患者死亡」、『静岡新聞』朝刊 31 面、2019.3.8

「『透析しない選択肢』も意思決定支援に必要」、『日経メディカル』、2019.3.12

「透析中止 手続き軽視 「患者と考える治療」主流」、『毎日新聞』朝刊、2019.3.18

「老年医学会「適切な ACP 推進」を提言」、『医療維新 m3.com』、2019.6.10

「日本老年医学会「ACP 推進に関する提言」を発表」、『日経メディカル』、2019.6.19

「問答有用 750 終末期医療を支える会田薫子」、『週間エコノミスト』、p44-47、毎日新聞社、2019.7.9

「人工透析に新たな提言—終末期を迎える前に考えるべき時代」、NHK ラジオ「三宅民夫のマイあさ!」、2020.2.4

(12) 教科書

『老年医学 上』、会田薫子、共著、執筆、日本臨牀社、2018

『生涯教育シリーズ 95 認知症トータルケア』、会田薫子、共著、執筆、日本医師会、2018

『現代家族を読み解く 12 章』、会田薫子、共著、執筆、丸善出版、2018

『標準理学療法学・作業療法学 専門基礎分野 老年学第 5 版』、会田薫子、共著、執筆、医学書院、2019

『生命倫理と医療倫理 第 4 版』、会田薫子、共著、執筆、金芳堂、2019

(13) 共同研究・受託研究

共同研究、会田薫子、日本学術振興会科学研究費 基盤研究 (A)、研究代表者：岩手保健医療大学 清水哲郎、「臨床倫理システムの哲学的展開と超高齢社会への貢献および医療者養成課程への組み込み」、平成 30 年度～令和 3 年度

共同研究、会田薫子、日本学術振興会科学研究費 基盤研究 (B)、研究代表者：北海道医療大学 山田律子、「認知症高齢者の摂食嚥下障害に対する原因疾患別予防プログラムの多職種共同開発」、平成 30 年度～令和 2 年度

共同研究、会田薫子、日本学術振興会科学研究費 基盤研究 (C)、研究代表者：東京慈恵会医科大学 高橋衣、「小児看護：子どもの権利擁護実践能力に関する教育プログラムの開発と検証」、平成 30 年度～令和 2 年度

受託研究、会田薫子、AMED (国立研究開発法人 日本医療研究開発機構)、研究代表者：川崎医科大学 柏原直樹、研究課題名：長寿・障害総合研究事業 長寿科学研究開発事業「高齢腎不全患者に対する腎代替療法の開始/見合わせの意思決定プロセスと最適な緩和医療・ケアの構築」、令和元年度～令和 3 年度

受託研究、会田薫子、AMED（国立研究開発法人 日本医療研究開発機構）、研究代表者：国立長寿医療研究センター
三浦久幸、研究課題名：長寿・障害総合研究事業 長寿科学研究開発事業「呼吸不全に対する在宅緩和医療の指針
に関する研究」、令和元年度～令和3年度

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義

特別講演、菊池養生園健保組合、「長寿時代の医療とケア—自分らしい生き残り方のために」、2018.4
その他、自由民主党政務調査会「終末期医療に関する検討プロジェクト・チーム」、「高齢者ケアの意思決定プロセス
に関するガイドライン」、2018.4
非常勤講師、東京大学高齢社会総合研究機構、「科目名「高齢社会総合研究学特論Ⅲ」における「長寿時代のエンド
オブライフ・ケア：臨床倫理の視点から」、2018.4
特別講演、岡崎市民病院、「高齢者医療における意思決定プロセスのあり方」、2018.5
特別講演、東京慈恵会医科大学、「臨床倫理」、2018.5
非常勤講師、長崎大学大学院医歯薬学総合研究科、「長寿時代の臨床死生学」、2018.5
セミナー、北海道臨床倫理研究会、「簡易版臨床倫理検討シートとカンファレンス用ワークシートの使い方」、2018.5
セミナー、北海道臨床倫理研究会、「臨床倫理エッセンシャルズ 入門編、カンファレンス用ワークシートの具体的
な検討」、2018.5
特別講演、独立行政法人地域医療推進機構(JCHO)東京高輪病院、「臨床倫理 理論と事例検討法」、2018.5
特別講演、埼玉県医療社会事業協会、「アドバンス・ケア・プランニング—高齢者の意思決定を支援する」、2018.6
特別講演、あけぼの会、「人生の最終段階の医療について考える」、2018.6
特別講演、医療法人浩仁会南堺病院、「人生の最終段階における医療とケアの意思決定支援」、2018.6
特別講演、戸田中央リハビリテーション病院、「人生の最終段階における医療とケア：高齢者が自分らしく生き抜く
ことを支える」、2018.6
セミナー、大阪府看護協会、「看護倫理」、2018.6
特別講演、一般財団法人 日本尊厳死協会、「鎮静の倫理」、2018.6
特別講演、関西医科大学香里病院、「高齢者のためのよりよい意思決定支援—フレイルの知見を活かす」、2018.6
特別講演、日本老年医学会・公益社団法人全国老人保健施設協会、「老人保健施設における終末期医療」、2018.7
非常勤講師、東京大学高齢社会総合研究機構、科目名「高齢社会総合研究学概論Ⅰ」における「人生の最終段階のケ
ア」、2018.7
非常勤講師、慶応義塾大学 GIC Center、「“Dying and Death: End-of-life care for elderly adults in Japan”」、2018.7
セミナー、東北大学医学部、「臨床倫理エッセンシャルズ」、「簡易版臨床倫理検討シートとカンファレンス用ワーク
シートの使い方」、2018.7
特別講演、老人の専門医療を考える会、「Advance Care Planning—高齢者の意思決定を支援する」、2018.7
特別講演、公益財団法人東京都保健医療公社多摩南部地域病院、「高齢者医療における意思決定支援—フレイルの知
見を臨床に活かす」、2018.7
セミナー、岩手臨床倫理研究会、「臨床倫理エッセンシャルズ 入門編」、2018.7
特別講演、公益社団法人 神奈川県看護協会、「エンドオブライフ・ケアを考える」、2018.7
特別講演、埼玉県、「人生の最終段階における医療とケア」、2018.7
セミナー、関西臨床倫理研究会、「臨床倫理入門」、2018.7
特別講演、医療法人社団五色会 こころの医療センター五色台、「高齢者のエンドオブライフ・ケアを考える—人工
的水分・栄養補給の問題を中心に」、2018.7
特別講演、公益財団法人 脳血管研究所付属美原記念病院、「終末期医療—アドバンス・ケア・プランニングから考え
る」、2018.7
セミナー、公益社団法人 日本医療社会福祉協会、「臨床倫理の基礎：臨床倫理にもとづく相談支援、「臨床倫理検討
シート」による要点の整理と考え方」、2018.7
特別講演、岐阜県総合医療センター、「現場で活かす臨床倫理—患者中心の医療のために」、2018.8
セミナー、日本老年医学会、「高齢者のエンドオブライフ・ケア」、2018.8
セミナー、北・北海道臨床倫理研究会、「臨床倫理エッセンシャルズ 事例検討の進め方」、2018.8
セミナー、東京大学高齢社会総合研究機構、「フレイルについて考えましょう！」、2018.8

非常勤講師、岡山大学歯学部、「高齢者の意思決定支援—フレイルの知見を臨床に活かす」、「高齢者のエンドオブライフ・ケア — 人工的水分・栄養補給法の問題を中心に」、2018.8

セミナー、国立病院機構中国四国グループ、「臨床倫理の基礎—看護倫理を現場で生かすために」、「事例検討の進め方」、2018.8

セミナー、諏訪中央病院および諏訪赤十字病院、「臨床倫理エッセンシャルズ 入門編」、「臨床倫理：事例検討の進め方」、2018.9

セミナー、金沢大学医学部附属病院、「臨床倫理エッセンシャルズ 入門編」、「臨床倫理：事例検討の進め方」、2018.9

セミナー、愛媛地区臨床倫理研究会、「臨床倫理エッセンシャルズ 入門編」、「臨床倫理：新ワークシートの使い方」、2018.9

セミナー、関西臨床倫理研究会、「ACP—自二世の最終段階における意思決定を支援する」、「事例検討の進め方—改訂版ワークシートの使い方」、2018.10

特別講演、小樽終末期医療を考える会、「私の人生の集大成を考える—エンディングノートを超えて」、2018.10

セミナー、岩手県看護協会、「看護倫理」、2018.10

特別講演、埼玉医科大学病院、「エンドオブライフ・ケアをどう考えるか」、2018.10

非常勤講師、岩手医科大学、「長寿時代のエンドオブライフ・ケア」、2018.10

特別講演、山口県介護支援専門員協会、「看取りについて考える—チームアプローチでのケアマネの役割」、2018.10

特別講演、公益社団法人 日本医療社会福祉協会、「アドバンス・ケア・プランニング—意思決定の支援」、2018.10

セミナー、佐久総合病院佐久医療センター、「臨床倫理 入門編」、2018.11

特別講演、松江看護キャリア支援センター、「臨床倫理、アドバンス・ケア・プランニング—人生の最終段階における意思決定支援、食べられなくなったときの意思決定支援」、2018.11

特別講演、金沢医科大学病院、「救急医療における死生学」、2018.11

特別講演、栃木県保健福祉部、「高齢者のエンドオブライフ・ケア—人工的水分・栄養補給法の問題を中心に」、2018.11

特別講演、公益社団法人 日本医療社会福祉協会、「アドバンス・ケア・プランニング—意思決定の支援」、2018.11

特別講演、石川県介護支援専門員協会河北支部、「高齢者のための意思決定支援」、2018.11

特別講演、川口医療福祉多職種連携勉強会、「延命医療の意思決定」、2018.11

特別講演、塩野義製薬株式会社、「ACP—人生の最終段階における意思決定支援」、2018.11

特別講演、関西メディカル病院、「超高齢社会を生きる アドバンス・ケア・プランニング」、2018.12

特別講演、日本財団在宅看護センター、「アドバンス・ケア・プランニング—人生の最終段階における意思決定支援、高齢者のエンドオブライフ・ケア—人工的水分・栄養補給法の問題を中心に」、2018.12

非常勤講師、東京大学朝日講座、「臨床現場の未来：人生の物語りに沿ったエンドオブライフ・ケアの意思決定」、2018.12

セミナー、関西臨床倫理セミナー実行委員会、「臨床倫理 事例検討の進め方」、2018.12

特別講演、愛知県看護管理研究会、「人生の最終段階における医療・ケアの在り方—看護師の意思決定支援」、2018.12

セミナー、関西臨床倫理研究会、「グループワークにおけるファシリテーション」、2019.1

セミナー、関西臨床倫理研究会、「臨床倫理エッセンシャルズ入門編」、2019.1

特別講演、東京保険医協会、「人生の最終段階の医療とケア—ガイドラインの意味」、2019.1

セミナー、大阪府看護協会、「看護倫理」、2019.1

特別講演、千葉県四街道市地域包括支援センター・市立公民館、「延命医療—その時あなたはどうか考えますか?」、2019.1

特別講演、大阪府公立病院協議会看護部長会、「臨床における倫理課題とアドバンス・ケア・プランニング」、2019.1

セミナー、諏訪中央病院、「アドバンス・ケア・プランニング—意思決定を支援する」、2019.1

その他、埼玉県医師会・埼玉県、「さあ始めよう、人生会議」、2019.1

特別講演、山口県訪問看護ステーション協議会、「長寿時代の意思決定支援—フレイルの知見をACPに組み込む」、2019.1

セミナー、大阪府看護協会、「看護倫理」、2019.1

特別講演、南和歌山医療センター、「エンドオブライフ・ケアの意思決定のあり方」、2019.2

特別講演、横浜市金沢区、「エンドオブライフ・ケアを考える—人生の最終段階における医療とケアの意思決定支援」、2019.2

特別講演、埼玉県大宮医師会、「人生の最終段階における医療とケア—アドバンス・ケア・プランニングとは何か」、2019.2

特別講演、川崎市看護協会、「エンドオブライフ・ケアを考える」、2019.2

その他、岡山大学医歯薬総合研究科、「臨床死生学と歯科医学」、2019.2
 特別講演、獨協医科大学、「人生の最終段階における医療とケア—倫理的な意思決定支援のあり方」、2019.2
 特別講演、公立昭和病院、「長寿時代の医療とケアを考える—ACPにフレイルの知見を活かす」、2019.2
 特別講演、函南町地域包括支援センター、「「人生の最終段階」を自分らしく暮らす」、2019.3
 特別講演、社会医療法人石川記念会、「アドバンス・ケア・プランニング—長寿時代の意思決定支援」、2019.3
 特別講演、社会福祉法人聖隷福祉事業団、「人生の最終段階における医療・ケアの意思決定支援」、2019.3
 特別講演、尼崎市医師会、「人生の最終段階において、自分の意思を周りにどのように伝えますか?」、2019.3
 特別講演、東京女子医科大学看護学部認定看護師教育センター透析看護分野、「透析療法を受ける高齢者の治療選択と意思決定」、2019.3
 セミナー、久留米大学病院、「アドバンス・ケア・プランニング、臨床倫理：事例検討法」、2019.3
 特別講演、栃木県西健康福祉センター、「人生の最終段階における意思決定支援—医療・介護者のためのACP」、2019.3
 特別講演、大和ケアマネージャー連絡協議会、「アドバンス・ケア・プランニングとは何か」、2019.3
 特別講演、山形県村山総合支庁保健福祉環境部、「超高齢社会の医療選択に関わる意思決定支援」、2019.3
 特別講演、一般社団法人 山口県病院協会、「長寿時代のエンドオブライフ・ケア—延命医療について考える」、2019.3
 特別講演、秋田県医師会、「臨床倫理とは何か—共同意思決定とACP」、2019.4
 特別講演、山梨県・山梨県看護協会、「ACPについて—本人らしく生きて生き終わることをサポートするために看護職に求められているもの」、2019.5
 特別講演、東京慈恵会医科大学、「臨床倫理 入門編」、2019.5
 非常勤講師、長崎大学歯学部、「長寿時代の臨床死生学」、2019.5
 セミナー、北海道臨床倫理研究会、「臨床倫理：改訂版事例検討法」、2019.5
 非常勤講師、東京大学高齢社会総合研究機構、科目名「高齢社会総合研究学特論Ⅲ」における「長寿時代のエンドオブライフ・ケア：臨床倫理の視点から」、2019.5
 特別講演、島根県高齢者ケア施設看護責任者連絡協議会、「食べられなくなったときの意思決定支援」、2019.5
 特別講演、一般財団法人竹田健康財団竹田総合病院、「多職種で行う意思決定支援—延命医療について考える」、2019.5
 セミナー、独立行政法人地域医療機能推進機構東京高輪病院、「臨床倫理：事例検討法」、2019.6
 特別講演、神奈川県看護協会川崎支部、「エンドオブライフ・ケアを考える」、2019.6
 特別講演、NPO 法人 高齢社会をよくする女性の会、「人生の最終段階における医療とケア—ACPとは何か」、2019.7
 特別講演、NPO 法人 かわさき市民アカデミー、「人生の最終段階の医療について考える」、2019.7
 セミナー、関西臨床倫理研究会、「臨床倫理入門編」、2019.7
 セミナー、仙台臨床倫理セミナー実行委員会、「臨床倫理 事例検討の進め方」、2019.7
 セミナー、岩手臨床倫理研究会、「臨床倫理 事例検討の進め方、ACPの最近の動向—臨床倫理的意義」、2019.7
 セミナー、大阪府看護協会、「看護倫理」、2019.7
 特別講演、大阪ベイエリア緩和ケア研究会、「人生の最終段階における医療とケアの意思決定支援—ACPにフレイルの知見を活かす」、2019.7
 セミナー、北・北海道臨床倫理研究会、「臨床倫理 入門編」、2019.7
 特別講演、公立陶生病院、「今から学ぶ エンドオブライフ・ケア」、2019.7
 特別講演、公益財団法人 集団力学研究所、「人生の最終段階における医療とケア—高齢者が最期まで本人らしく生きることを支援するために」、2019.7
 セミナー、公益社団法人 日本医療社会福祉協会、「アドバンス・ケア・プランニング—臨床倫理にもとづく意思決定支援」「臨床倫理検討シートによる事例の要点の整理と考え方」、2019.7
 特別講演、千葉大学病院、「ACP—エンドオブライフの意思決定支援」、2019.8
 セミナー、日本老年医学会・国立長寿医療研究センター、「高齢者のエンドオブライフ・ケア」、2019.8
 特別講演、公益財団法人 杉浦記念財団、「非がん疾患を含めた包括的なエンドオブライフについて」、2019.8
 セミナー、秋田臨床倫理セミナー実行委員会、「臨床倫理エッセンシャルズ 事例検討の進め方」、2019.8
 特別講演、大阪府看護協会、「人生の最終段階における医療とケアのあり方—ACPとは何か」、2019.8
 特別講演、市立豊中病院、「臨床倫理 入門編」、2019.8
 非常勤講師、岡山大学歯学部、「アドバンス・ケア・プランニングにフレイルの知見を活かす—よりよい意思決定支援のために、高齢者のエンドオブライフ・ケア—人工的水分・栄養補給法の問題を中心に」、2019.8
 特別講演、宮崎大学医学部、「超高齢社会の医療選択に関わる意思決定支援」、2019.9

セミナー、大阪府看護協会、「看護倫理」、2019.9

特別講演、第27回福島県高齢者大集会実行委員会、「人生の最終段階における医療について考える」、2019.9

セミナー、独立行政法人国立病院機構中国四国グループ、「臨床倫理の基礎—看護倫理を現場で活かすために、事例検討の進め方」、2019.9

特別講演、愛媛大学大学院医学系研究科、「人生の最終段階における医療とケア—アドバンス・ケア・プランニングとは何か」、2019.9

セミナー、北陸地区臨床倫理事例研究会、「臨床倫理：事例検討の進め方、ACPの最近の動向—臨床倫理的意義」、2019.9

特別講演、小山市近郊地域医療連携協議会、「人生の最終段階における医療とケア—意思決定を支援する」、2019.9

特別講演、ウェル・リビングを考える会、「心肺蘇生法—人工呼吸器つけますか?」、2019.9

特別講演、福島県医療ソーシャルワーカー協会、「意思決定支援を考える」、2019.9

特別講演、まち・ひと・くらし研究会、「人生の最終段階の医療とケア—人生会議（ACP）とフレイルについて考える」、2019.9

非常勤講師、早稲田大学政治経済学術院、「医療とメディア」、2019.9～2020.3

セミナー、諏訪赤十字病院、「ACP—エンドオブライフの意思決定支援、臨床倫理エッセンシャルズ：事例検討の進め方」、2019.10

セミナー、全国老人保健施設協会、「老人保健施設における終末期医療—エンドオブライフの考え方」、2019.10

セミナー、大阪府看護協会、「看護倫理」、2019.10

非常勤講師、岩手医科大学、「長寿時代のエンドオブライフ・ケア」、2019.10

セミナー、国際医療リスクマネジメント学会、「臨床死生学と臨床倫理の基本」、2019.10

セミナー、公益社団法人日本医療社会福祉協会、「アドバンス・ケア・プランニング—意思決定の支援」、2019.10

特別講演、済生会川口総合病院、「アドバンス・ケア・プランニング—高齢者の意思決定を支援する」、2019.10

セミナー、公益社団法人福島県看護協会、「臨床倫理—意思決定支援とは、アドバンス・ケア・プランニングとエンドオブライフ・ケア」、2019.10

セミナー、関西臨床倫理研究会、「臨床現場で活かす死生学、事例検討の進め方—改訂版ワークシートの使い方」、2019.10

特別講演、宇部市地域緩和ケア研究会、「アドバンス・ケア・プランニングにフレイルの知見を活かす—高齢者への意思決定支援」、2019.11

特別講演、足柄上地区在宅医療・介護連携支援センター、足柄上医師会、「家族とともに自ら考える最期のとき—食べられなくなったら、どうしますか?」、2019.11

特別講演、MSD株式会社、「人生の最終段階における医療とケア」、2019.11

セミナー、愛媛地区臨床倫理研究会、「臨床倫理エッセンシャルズ入門編、「カンファレンス用ワークシート」と「選択肢の益と害のアセスメント・サポート・ツール」を使用した事例検討」、2019.11

特別講演、島根県医師会、「人生の最終段階における医療とケア—ACP推進に関する提言」、2019.11

セミナー、佐久総合病院、「臨床倫理 事例検討の進め方」、2019.11

セミナー、公益社団法人日本医療社会福祉協会、「アドバンス・ケア・プランニング—意思決定の支援」、2019.11

セミナー、NTT 東日本関東病院、「臨床倫理、事例検討法、グループ・ワーク指導」、2019.11

特別講演、茅ヶ崎市、「自立した長寿社会をめざし、明るく生きるために—人生の最終段階における医療とケアを考える」、2019.11

特別講演、済生会滋賀県病院、「人生の最終段階における医療とケア—フレイルの知見を臨床に活かす」、2019.12

セミナー、関西臨床倫理研究会、「事例検討の進め方」、2019.12

特別講演、公益財団法人 笹川保健財団、「ACP—人生の最終段階における意思決定支援、高齢者のエンドオブライフ・ケア —人工的水分・栄養補給法の問題を中心に」、2019.12

特別講演、山梨県立中央病院、「臨床倫理—人生の最終段階における意思決定支援」、2019.12

特別講演、横浜市立みなと赤十字病院、「延命医療を終了するということ—臨床倫理的に適切な意思決定支援とは」、2019.12

セミナー、関西臨床倫理研究会、「事例検討法アドバンスト編」、2020.1

セミナー、関西臨床倫理研究会、「臨床倫理 事例検討の進め方」、2020.1

特別講演、小松市役所、「高齢者ケアと意思決定—人生の最終段階を支える文化の創成」、2020.1

特別講演、組合立諏訪中央病院、「ACPの考え方と実践」、2020.1

特別講演、朝霞地区医師会、「人生の最終段階における医療・ケア意思決定プロセス・ガイドラインの意義」、2020.1
 特別講演、高知県中芸広域連合、「人生の最終段階を本人らしく生きることを支援する—ACP と意思決定支援」、
 2020.2
 特別講演、土浦三師会（土浦市医師会・歯科医師会・薬剤師会）合同研究会、「ACP—人生の最終段階における意思
 決定支援」、2020.2
 特別講演、さいたま市与野医師会・中央区地域包括支援センター、「ACP—意思決定支援に関わる課題」、2020.2
 特別講演、NPO あがつま医療アカデミー、「ACP—人生の最終段階における意思決定支援」、2020.2
 セミナー、愛知県看護管理研究会、「臨床倫理：事例検討の進め方」、2020.2
 セミナー、学校法人聖路加国際大学・聖路加国際病院、「臨床倫理 入門編、事例検討の進め方」、2020.2
 非常勤講師、獨協医科大学地域共創看護教育センター、「人生の最終段階の医療とケア—倫理的な意思決定支援のあ
 り方」、2020.2

(2) 学会

国内、日本生命倫理学会、理事、2014～現在
 国内、日本医学哲学・倫理学会、理事、2018～現在
 国内、日本在宅救急医学会、理事、2018～現在
 国内、日本脳死・脳蘇生学会、理事、2017～現在
 国内、日本老年医学会、監事、2017～現在
 国内、日本救急医学会、臨床研究倫理・審査委員会、2019～現在、高齢者救急特別委員会、2019～現在
 国内、日本透析医学会、倫理委員会、外部委員、2018～現在
 国内、日本緩和医療学会、鎮静ガイドライン改定ワーキンググループ、2018～2019
 国内、PEG・在宅医療学会、学術評議員、2017～現在

(3) 学外組織(学協会、省庁を除く)委員・役員

一般社団法人 日本専門医機構、外部評価委員会委員、2019、編集会議委員、2019～現在
 公益社団法人 日本臓器移植ネットワーク、あっせん事例評価委員会委員、2018～2019
 公益社団法人 日本看護協会、「看護者の倫理綱領」検討委員会委員、2018～現在
 静岡県立静岡がんセンター、治験倫理審査委員会委員、2010～現在
 特定非営利活動法人 生活介護ネットワーク、理事、2010～現在
 特定非営利活動法人 Patients Doctors Network、理事、2007～現在

特任准教授 **早川 正祐** HAYAKAWA, Seisuke

1. 略歴

1997年4月 上智大学文学部英文学科 入学
 2001年3月 同 卒業
 2001年4月 上智大学文学部哲学科 入学（3年次学士入学）
 2003年3月 同 卒業
 2003年4月 東京大学大学院人文社会系研究科基礎文化研究専攻哲学専門分野修士課程 入学
 2005年3月 同 修了（修士（文学）取得）
 2005年4月 東京大学大学院人文社会系研究科基礎文化研究専攻哲学専門分野博士課程 進学
 2006年6月 東京大学大学院人文社会系研究科21世紀COE「死生学の構築」リサーチアシスタント
 （～2007年3月）
 2007年10月 東京大学大学院人文社会系研究科グローバルCOE「死生学の展開と組織化」リサーチ
 アシスタント（～2008年3月）

2010年3月	東京大学大学院人文社会系研究科基礎文化研究専攻哲学専門分野博士課程 単位取得退学
2010年4月	上智大学大学院哲学研究科 特別研究員（～2013年3月）
2013年5月	東京大学大学院人文社会系研究科死生学・応用倫理センター（上廣死生学・応用倫理講座） 特任研究員
2013年9月	博士（文学）取得（東京大学大学院人文社会系研究科）
2014年4月	三重県立看護大学看護学部看護学科 准教授
2017年4月	東京大学大学院人文社会系研究科 特任准教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

行為論、ケアの倫理、臨床死生学

b 研究課題

(1) ケアの倫理における「共感」と「認識をめぐる責任」についての哲学的分析とその臨床的展開

ケアの倫理における中心概念である「共感」に関して、その身体的・情動的側面を踏まえつつも、（これまで見落とされがちであった）その認知的・知性的側面を主題的に分析する。そのことを通して「共感」とそれに伴う「認識上の責任」を、臨床の場に即した複雑さと深みを備えたものとして理論化する。

ケアの倫理によれば、従来の功利主義的な生命倫理は、患者（患者家族）の置かれている具体的な状況に関する「認識上の責任」（責任をもって認識すること）を果たしていない点で不十分だとされる。このような具体的な状況の認知において、共感が重要な働きをすることは疑いえない。しかし他方、共感には認知的なバイアスが働くことが指摘されている。そこで、共感（共苦）の危うさや困難さを踏まえつつ、医療従事者—患者（患者家族）関係における望ましい共感のあり方と、それに伴う認識上の責任を明らかにする。

(2) 関係的な自律論の構築とその臨床的展開

ケアの倫理の立場から関係的な自律論を構築すると同時にその臨床的応用を試みる。生命倫理における個人主義的な自律論は、個人の独立性と他者からの不干渉を基調とする自己決定を核としてきた。それに対してケアの倫理は、人間の相互依存性と傷つきやすさに着目する。そして一定の依存関係や社会的環境の中で育まれるものとして自律を捉える。しかしながら、依存性と自律性は緊張関係にもあるため、個人主義的な自律論はなお根強い。そこで、自律性と依存性の諸相および自律性と依存性の結びつきについて徹底的に検討することを通して、関係的な自律論をより十全なものにする。そのうえで、医療従事者・患者・患者家族、それを取り巻く社会的／文化的環境という要素を考慮しつつ、関係的な自律の概念を、臨床における共同的意思決定プロセスに適うものへと鍛え上げたい。

c 概要と自己評価

患者の病いの体験を理解するうえで、共感が重要な役割を果たすことは疑いえない。しかしながら、共感の役割は、常に肯定的なわけではない。とりわけ病いをめぐる「復帰の語り」に対する過剰な共感、病いに関する「混沌の語り」を、周縁化し排除する。その結果、ミランダ・フリッカーが「認識をめぐる不正義」と呼んだ問題が引き起こされる。病いによって打ちめられる体験をした患者の証言は、極めて重要であるにもかかわらず、病いの文脈における認識上の不正義のうちには、そういった証言の根本的重要性を否定するということが、中心的なものとして含まれている。そして、この不正義によって、患者の自尊心や主体性は深く傷つけられてしまう。

ここでの問題は、次の点にある。私たちは、前向きで未来志向的な患者に激しく共感してしまう。それによって、混沌とした苦しみの只中にある患者——絶望に打ちひしがれている患者——に対して共感的に配慮することが極めて困難になってしまう。この意味で、認識をめぐる不正義は「共感による不正義」として捉えることができる。

混沌の苦しみの只中にある患者は、「私の話に耳を傾けてほしい」という切迫したニーズをおそらく抱えている。にもかかわらず、共感による不正義によって、苦しみの体験について沈黙することを強いられる。また希望など到底もてない状況であるにもかかわらず、前向きであるかのように振舞うことを余儀なくされる。もしくは、病いによって生じた過酷な現実について語るものの、その過酷さは、周囲の者によって些細なものに見なされてしまう。おおよそこういった仕方、前向きな復帰の語りに対する、私たちの行き過ぎた共感、混沌の只中にある患者が人として尊重されることを阻むのである。

以上の点を踏まえ、認識／共感をめぐる不正義を是正するには、共感はどのように機能しうなのか、また機能しななければならないのかを考察した。とりわけ、「共感が認識上の責任を引き受けるものであるとき、その共感、病いに関する認識上の不正義に抗うメカニズムを、どのような形で備えていなければならないのか」を明らかにした。とりわけ、共感についての評価は、個人々の相互作用のレベルで評価するミクロな視点のみならず、社会的構造のレベルで評価するマクロな視点を含んでいなければならないことを指摘した。その成果を国際学会で発表した。

d 主要業績

(1) 書評

小西真理子、『共依存の倫理—必要とされることを渴望する 人々』、『社会と倫理』、第33号、2018.12

(2) 学会発表

国内、早川正祐、ワークショップ『身体知とケア』、「摩擦と試練を通じて身をもって知る—ケアにおける身体知の—側面」、第5回日本ソマティック心理学協会大会、2018.10.7

国内、早川正祐、「脆弱性をめぐる倫理の—側面」、哲学会第57回研究発表大会、2018.11.3

国外、Seisuke Hayakawa, “Rethinking Empathy as Shared Epistemic Responsibility in the Context of illness”, 5th East West Philosophers Forum: Extended cognition: how re-thinking cognition helps enlarge epistemology, The University of New South Wales, Sydney, 2019.5.1=Seisuke Hayakawa “Illness, Empathy, and Epistemic Responsibility,” Uehiro-Carnegie-Oxford Annual Conference 2019: Rethinking Bioethics in the 21st Century, The University of Oxford, 2019.5

国内、Seisuke Hayakawa, Katunori Miyahara (University of Wollongong), “Empathy and Epistemic Humility: A Receptivity-Based Approach” Keiai University, 2019.10.30

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

特別講演、心不全チーム医療研究会、「臨床倫理の基礎—臨床倫理プロジェクトの考え方から」、2018.4

セミナー、第15回北海道臨床倫理検討会、「ケアの倫理—臨床における共感」、2018.5

セミナー、第6回臨床倫理セミナー in せんだい、「ケアの倫理—臨床における共感」、2018.7

セミナー、第7回北陸地区臨床倫理事例研究会、「ケアの倫理—脆弱性をめぐる倫理」、2018.9

セミナー、第7回愛媛地区臨床倫理事例研究会、「ケアの倫理—脆弱性をめぐる倫理」、2018.9

セミナー、第3回関西臨床倫理セミナー、「ケアの倫理—病いの語り」と共感」、2018.12

セミナー、第4回臨床倫理セミナー in ちくご、「ケアの倫理—病いの語り」と共感」、2019.3

セミナー、第7回臨床倫理セミナー in せんだい、「ケアの倫理—共苦から考える」、2019.7

セミナー、第2回北・北海道臨床倫理検討会「臨床倫理エッセンシャルズ：事例検討の進め方」2019.7

セミナー、第8回北陸地区臨床倫理事例研究会、「病いをめぐる語り—語りの身体的次元から」、2019.9

セミナー、第8回愛媛地区臨床倫理事例研究会、「ケアの倫理—語りの身体的次元」、2019.11

セミナー、第4回関西臨床倫理セミナー、「脆弱性をめぐる倫理」、2019.12

(2) 学会

哲学会、2003.4～現在

上智大学哲学会、2003.4～現在、同委員および編集委員、2010.4～2013.3

日本倫理学会、2005.8～現在

日本科学哲学会、2006.12～現在

日本哲学会、2006.12～現在

第25回日本生命倫理学会大会実行委員、2013.5～12

ケアの哲学学会、2016.9～現在